岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 162

服部遺跡
北溝手遺跡
窪木遺跡
高松田中遺跡

岡山自動車道４車線化に伴う発掘調査

２００２

日本道路公団中国支社津山工事事務所
岡　山　県　教　育　委　員　会

1．服部遺跡河道１出土縄文晩期土器

2．高松田中遺跡舟形土壙群（北西から）

序

岡山自動車道は、岡山市を起点とし、北房町に至る延長約44㎞の高速自動車道であり、平成９年３月に暫定２車線として供用されました。この岡山自動車道は、太平洋・瀬戸内海・日本海の三海をつなぎ、また、山陽自動車道と中国縦貫自動車道を結ぶ幹線道路として活用されています。

このたび、岡山ジャンクションから賀陽インターチェンジまでを暫定２車線から４車線にすることによって、渋滞を緩和するとともに事故や工事に伴う交通規制による一時停止の軽減により定時制の向上が図られます。さらには、今回の整備によって中国地方の高速道路ネットワークの機能向上と円滑な交通の確保を図れるものと期待しています。

この岡山自動車道４車線化工事に伴い、日本道路公団は予定路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、岡山県教育委員会と度重なる協議を行い、記録保存のための発掘調査を岡山県教育委員会に委託して実施しました。

本書は、岡山市ならびに総社市に所在する服部遺跡、北溝手遺跡、窪木遺跡、高松田中遺跡の発掘調査の記録であります。この調査記録が現代を生きる我々にとって未来を写す鏡となることとともに、広く埋蔵文化財への理解を深め、また、今後の教育・学術研究の礎となることを望んでやみません。

最後に、発掘調査の実施や本書の編集にあたってご尽力を頂いた岡山県教育委員会ならびに岡山県古代吉備文化財センターをはじめとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成14年２月

日本道路公団中国支社津山工事事務所

所長　藤　間　秀　之

序

岡山自動車道は、太平洋・瀬戸内海・日本海を連結させる動脈として平成９年の供用から、現代を生きる私たちの生活の中に息づいています。一方、この自動車道の４車線化工事に伴い、この場所で過去に生きた人々の生活が記録として残されることとなりました。

岡山県古代吉備文化財センターでは、県内各地で公共工事などでやむなく現地で保存できない遺跡を事前に発掘調査を行い、様々な記録による遺跡の保存を図っています。また、これらの記録が現代および未来に生きる人々に過去を伝え、今後の一つの道しるべとなるように望みます。

本書は、岡山自動車道４車線化工事に伴って平成11年から平成12年にかけて発掘調査が行われた服部遺跡、北溝手遺跡、窪木遺跡、高松田中遺跡の発掘調査の記録であります。服部遺跡では弥生時代の人々が土器を作るための粘土を採取した箇所が見つかり、北溝手遺跡では弥生時代前期の稲作の痕跡の一端を明らかにできました。また、窪木遺跡では弥生時代から古墳時代の河の流れと洪水の様子を窺い知ることができ、高松田中遺跡では備中地域における弥生時代前期の集落と稲作の関係の初端を垣間見ることができました。いずれの遺跡もこの地の歴史解明にとって貴重な資料のひとつとなりました。これらの資料が、本書を紐解く人々によってさらに理解が深められ、より大きな成果を結ぶようなものになることを願います。また、今後の文化財保存の一助として活用されれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、岡山自動車道４車線化に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の各委員の方々から数々の御教示と御指導を得、また日本道路公団中国支社津山工事事務所をはじめ関係各位から多大な御協力、御援助を賜りました。記して厚くお礼申し上げます。

平成14年２月

岡山県古代吉備文化財センター

所長　正岡睦夫

例　　言

1．本書は、岡山自動車道４車線化に伴い、日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会が契約を結び、岡山県古代吉備文化財センターが平成11年10月から平成12年９月まで発掘調査を実施した服部遺跡（総社市黒尾・北溝手）、北溝手遺跡（総社市北溝手）、窪木遺跡（総社市窪木字中道）、高松田中遺跡（岡山市高松田中）の発掘調査報告書である。

2．上記の各遺跡は、平成５～６年度において中国横断自動車道（現在は「岡山自動車道」）建設の際に本線２車線部分、側道敷部分の発掘調査を実施し、その成果は平成９年３月に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　中国横断自動車道建設に伴う発掘調査４　1997』として報告している。本書は４車線化に伴う調査報告であり、残り２車線橋脚部分の調査成果を掲載している。このため各遺跡全体を把握するため、先の成果の一部も全体図として掲載している。なお、文中では先の報告を「県報告121」と略す。

3．発掘調査は、平成11年10月から平成12年３月まで服部遺跡・北溝手遺跡を実施し、大森充宏、尾上元規、下垣豪が担当した。平成12年４月から９月まで北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡を実施し、山磨康平、大橋雅也、奥野光廣、梶藤智之が担当した。

4．発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、『岡山自動車道４車線化に伴う埋蔵文化財保護対策委員会』を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益な指導と助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

水内　昌康（元岡山県文化財保護審議会委員）　　間壁　忠彦（倉敷考古館館長）
中田　啓司（元県立矢掛高校教諭）　　松木　武彦（岡山大学助教授）

さらに、多数の県内外の研究者の方々から様々な助言、教示を得た。記して感謝の意を表す次第である。

5．自然科学分野における鑑定、同定等については、下記の方々、機関に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただいた。記して感謝の意を表す。

・動物遺存体　　富岡　直人（岡山理科大学）
・石材　　妹尾　護　（倉敷芸術科学大学）
・プラントオパール　　パリノサーヴェイ株式会社

6．　報告書の作成は平成12年10月から平成13年３月まで岡山県古代吉備文化財センターにおいて大橋、奥野が担当した。

7．本文の執筆は第１・５・６・８章は大橋が行い、第３章は尾上が行った。この他については文末に文責を記した。

8．遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

9．本書の編集は大橋が担当した。

10．本報告書に関係する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）に保管している。

凡　　例

1．本報告書に用いた高度は海抜高であり、方位については遺跡調査区位置図、遺構全体図は国土座標系の座標北を示し、その他個々の遺構は磁北を示す。

2．本報告書に掲載した遺構・遺物の縮尺は個々に明記した。

3．本報告書に掲載した遺構・遺物の番号は、遺跡ごとの連番である。また、挿図番号、写真図版番号は、本書を通しての連番である。

4．遺物番号については、材質を表現するため、土器以外のものについては、番号の前に次の略号を附した。

　石器：S　　木製品：W　　金属器：M　　骨格器：B

5．報告書に用いた時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀を併用している。

6．本報告書に掲載した第７図は国土地理院発行1/25,000地形図「総社西部」「総社東部」「箭田」「倉敷」を複製し、加筆したものである。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
第１章　発掘調査および報告書作成の経緯 …… 1
　第１節　発掘調査の契機と経過 …… 1
　第２節　報告書作成の経緯 …… 2
　第３節　発掘調査および報告書作成の体制 …… 7
第２章　遺跡をめぐる環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 10
第３章　服部遺跡 …… 13
　第１節　概要 …… 13
　第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
　　（１）河道 …… 13
　第３節　弥生時代から古墳時代の遺構と遺物 …… 21
　　（１）粘土採掘坑 …… 21
　　（２）溝 …… 29
　　（３）くぼみ …… 33
　　（４）遺構に伴わない遺物 …… 33
　第４節　古代以降の遺構と遺物 …… 34
　　（１）土壙 …… 34
　　（２）水田 …… 36
　　（３）溝 …… 36
　　（４）河道 …… 40
第４章　北溝手遺跡 …… 41
　第１節　概要 …… 41
　第２節　縄文時代から古墳時代の遺構と遺物 …… 46
　　（１）水田 …… 46
　　（２）溝 …… 46
　　（３）遺構に伴わない遺物 …… 47
　第３節　古代以降の遺構と遺物 …… 48
　　（１）土壙 …… 48
　　（２）水田 …… 49
　　（３）溝 …… 50
　　（４）遺構に伴わない遺物 …… 53

第５章　窪木遺跡 …… 54
第１節　概要 …… 54
第２節　遺構と遺物 …… 54
（１）河道 …… 54
第６章　高松田中遺跡 …… 57
第１節　概要 …… 57
第２節　縄文時代から古墳時代の遺構と遺物 …… 57
（１）舟形土壙 …… 57
（２）土壙 …… 68
（３）水田 …… 69
（４）溝 …… 72
（５）河道 …… 74
（６）遺構に伴わない遺物 …… 78
第３節　古代以降の遺構と遺物 …… 79
（１）柱列 …… 79
（２）土壙 …… 79
（３）水田 …… 83
（４）溝 …… 83
（５）遺構に伴わない遺物 …… 86
第７章　自然科学的分野の分析
高松田中遺跡出土動物遺存体の分析　富岡直人 …… 87
第８章　結語 …… 94
第１節　各遺跡の概要 …… 94
第２節　弥生時代前期の稲作跡について …… 95
第３節　舟形土壙について …… 95
第４節　粘土採掘坑について …… 96
附表　遺構対照表 …… 98
遺物観察表 …… 99

写真図版
報告書抄録

図　目　次

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯
第１図　遺跡位置図（1/150,000）…… 1
第２図　服部遺跡調査区配置図（1/4,000）…… 3
第３図　北溝手遺跡調査区配置図(1/4,000) …… 4
第４図　窪木遺跡調査区配置図（1/4,000）…… 5
第５図　高松田中遺跡調査区配置図（1/4,000）…… 6
第６図　服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・
高松田中遺跡調査担当一覧 …… 8
第２章　遺跡をめぐる環境
第７図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 10
第３章　服部遺跡
第８図　遺構配置図①（1/500）…… 14～15
第９図　遺構配置図②（1/500）…… 16～17
第10図　遺構配置図③（1/500）…… 18
第11図　河道１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 19
第12図　河道２（1/60）…… 20
第13図　河道３（1/60）・周辺出土遺物（1/2）…… 20
第14図　Ｐ１区粘土採掘坑（1/150）…… 21
第15図　Ｐ２区粘土採掘坑（1/150）…… 21
第16図　Ｐ３区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 22
第17図　Ｐ４区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 22
第18図　Ｐ５区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 23
第19図　Ｐ６区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 23
第20図　Ｐ７区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 24
第21図　Ｐ８区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 24
第22図　Ｐ９区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 25
第23図　Ｐ10区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 26
第24図　Ｐ11区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 27
第25図　Ｐ12区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4･1/2）…… 27
第26図　Ｐ13区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 28
第27図　Ｐ14区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 28
第28図　Ｐ15区粘土採掘坑（1/150）・
出土遺物（1/4）…… 28
第29図　溝１（1/60）…… 29
第30図　溝２（1/40）・出土遺物（1/4）…… 30
第31図　溝３（1/40）…… 30
第32図　溝４（1/60）…… 30
第33図　溝４出土遺物（1/4）…… 31
第34図　溝５（1/60）・溝６（1/30）…… 32
第35図　溝７（1/30）・出土遺物（1/4）…… 32
第36図　溝８～13（1/30）…… 32
第37図　くぼみ（1/80）・出土遺物（1/4）…… 33
第38図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）…… 33
第39図　土壙１～３（1/40）…… 34
第40図　土壙４（1/40）…… 35
第41図　土壙５～７（1/40）…… 35
第42図　水田１（1/500）…… 36
第43図　溝14・15（1/40）…… 37
第44図　溝16～26（1/40）…… 38
第45図　溝27～38（1/40）…… 39
第46図　溝39（1/60）・出土遺物（1/4）…… 40
第47図　溝40・41（1/30）…… 40
第48図　河道４（1/40）…… 40
第４章　北溝手遺跡
第49図　土層柱状模式図 …… 41
第50図　遺構配置図①（1/500）…… 42～43
第51図　遺構配置図②（1/500）…… 44～45
第52図　水田１土層断面（1/40）・
出土遺物（1/4・1/3）…… 46
第53図　溝１～３（1/30）…… 47
第54図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）…… 47
第55図　土壙１～３（1/30）…… 48
第56図　水田２・３土層断面（1/60）…… 49
第57図　溝４～10（1/30）…… 51
第58図　溝11・12（1/30）・溝11出土遺物（1/4）… 52
第59図　溝13（1/30）…… 52
第60図　遺構に伴わない遺物（1/4）…… 53
第５章　窪木遺跡
第61図　遺構配置図（1/500）…… 55
第62図　河道１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 56
第63図　河道２（1/60）・出土遺物（1/4）…… 56
第64図　河道３（1/60）…… 56
第６章　高松田中遺跡
第65図　遺構全体図（1/800）・土層柱状模式図
…… 58～59
第66図　弥生時代遺構配置図①（1/500）…… 60
第67図　Ｐ14区弥生時代遺構配置図（1/80）…… 61
第68図　舟形土壙１（1/40）…… 61
第69図　舟形土壙２（1/40）・
出土遺物（1/4・1/2）…… 62
第70図　舟形土壙３・４（1/40）・
出土遺物（1/4・1/2）…… 63
第71図　Ｐ15区弥生時代遺構配置図（1/80）…… 64
第72図　舟形土壙５（1/40）…… 64
第73図　舟形土壙６（1/40）・
出土遺物（1/4･1/2）…… 65
第74図　舟形土壙７（1/40）…… 66
第75図　舟形土壙８（1/40）・
出土遺物（1/4・1/2）…… 66
第76図　舟形土壙９（1/40）・
出土遺物（1/4・1/2・1/1）…… 67

第77図　舟形土壙10（1/40）・
　　出土遺物（1/4） …… 68
第78図　土壙１（1/30） …… 68
第79図　土壙２・３（1/30）・
　　出土遺物（1/4・1/2） …… 68
第80図　土壙４（1/30） …… 69
第81図　水田１・２（Ｐ19区）土層断面（1/60） … 69
第82図　弥生時代遺構配置図②（1/300） …… 70
第83図　古墳時代遺構配置図（1/300） …… 71
第84図　弥生時代遺構配置図③（1/500） …… 72
第85図　溝１～３（1/30）・溝２出土遺物（1/4） … 72
第86図　溝４～７（1/30） …… 73
第87図　溝８（1/30）・出土遺物（1/4） …… 73
第88図　溝９・10（1/30） …… 73
第89図　弥生時代遺構配置図④（1/500） …… 74
第90図　河道１（1/60） …… 74
第91図　弥生時代遺構配置図⑤（1/500） …… 75
第92図　河道２（1/40） …… 75
第93図　河道３（1/60） …… 76
第94図　河道３出土遺物（1/4） …… 77
第95図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2） …… 78
第96図　柱列１（1/80） …… 79
第97図　土壙５（1/30） …… 79
第98図　古代以降遺構配置図①（1/500） …… 80～81
第99図　古代以降遺構配置図②（1/500） …… 82
第100図　土壙６～８（1/40） …… 82
第101図　水田３（1/200・1/80・1/40） …… 83
第102図　古代以降遺構配置図③（1/500） …… 84
第103図　溝11～22（1/40） …… 85
第104図　溝23～27（1/40） …… 86
第105図　遺構に伴わない遺物（1/4） …… 86

写真図版目次

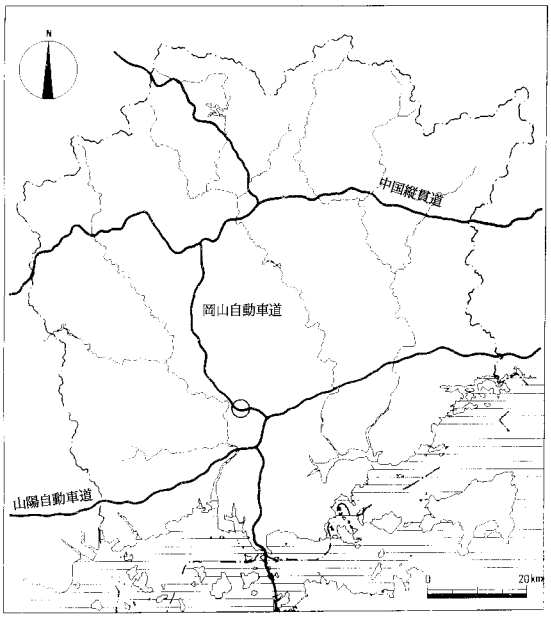
巻頭カラー写真図版
１．服部遺跡河道１出土縄文晩期土器
２．高松田中遺跡舟形土壙群（北西から）
　服　部　遺　跡
写真図版１
　１．調査前の状況（東から）
　２．河道１（南から）－Ｐ17区－
　３．河道２（南から）－Ｐ24区－
写真図版２
　１．溝１・粘土採掘坑（南から）－Ｐ１区－
　２．粘土採掘坑（南西から）－Ｐ５区－
　３．粘土採掘坑内土器出土状況（北から）－Ｐ15区－
写真図版３
　１．溝４（南東から）－Ｐ21区－
　２．溝４土層断面（南東から）－Ｐ21区－
　３．土壙１・２（南東から）－Ｐ９区－
　北　溝　手　遺　跡
写真図版４
　１．水田１（東から）－Ｐ10区－
　２．水田１畦畔断面（南東から）－Ｐ12区－
　３．水田２（南から）－Ｐ６区－
写真図版５
　１．溝５・６（南西から）－Ｐ２区－
　２．溝11（南西から）－Ｐ10区－
　３．土壙１（北東から）－Ｐ10区－
　窪　木　遺　跡
写真図版６
　１．河道１（北西から）－Ｐ１区－
　２．河道２（南西から）－Ｐ２区－
　３．河道２　土器出土状況（西から）－Ｐ２区－
　高　松　田　中　遺　跡
写真図版７
　１．調査前の状況（南東から）
　２．舟形土壙群（南西から）－Ｐ14区－
　３．舟形土壙群（南東から）－Ｐ15区－
写真図版８
　１．舟形土壙３・４（南東から）－Ｐ14区－
　２．舟形土壙６（南から）－Ｐ15区－
　３．舟形土壙６　土層断面（南西から）－Ｐ15区－
写真図版９
　１．水田１（南東から）－Ｐ19区－
　２．水田１（東から）－Ｐ19区－
　３．水田２（南から）－Ｐ17区－
写真図版10
　１．河道２（南から）－Ｐ６区－
　２．河道２　土層断面（南から）－Ｐ６区－
　３．河道３（南西から）－Ｐ12区－
写真図版11
　１．土壙５（南から）－Ｐ９区－
　２．土壙５～８、溝21・22（南東から）－Ｐ９区－
　３．溝25　土層断面（北東から）－Ｐ11区－
　服　部　遺　跡
写真図版12
　１．服部遺跡出土遺物１
写真図版13
　１．服部遺跡出土遺物２
　北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡
写真図版14
　１．北溝手遺跡出土土器
　２．北溝手遺跡出土石器
　３．窪木遺跡出土土器
　４．高松田中遺跡出土土器１
　高　松　田　中　遺　跡
写真図版15
　１．高松田中遺跡出土土器２
写真図版16
　１．高松田中遺跡出土土器３
　２．高松田中遺跡出土石器・木製品・骨製品

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯

第１節　発掘調査の契機と経過

岡山自動車道は、山陽自動車道から中国縦貫自動車道落合ジャンクションまでを連結するものであり、太平洋・瀬戸内海・日本海の三海を結び、４車線のうち暫定２車線として平成９年３月に供用が開始されている。計画当時、この自動車道は中国横断自動車道と呼称されており、この建設に先立って平成５～６年度に９カ所において発掘調査が行われ、既にこの調査成果については平成８年度に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　中国横断自動車道建設に伴う発掘調査４』として報告している。この時点の調査は、平野部における服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡の４遺跡については暫定２車線部分と側道敷部分に限定されたものであり、残りの２車線の橋脚部分については、建設自体の計画が未定であったため、工事計画と調査工程との関係から後年次対応としてきた。

平成10年に政府の景気浮揚対策として公共事業の前倒しがなされ、その一環で本自動車道も４車線化の建設計画が具体化された。この計画をもって、日本道路公団中国支社津山工事事務所と岡山県教育委員会は平成11年１月に自動車道の４車線化による埋蔵文化財への影響と対応の協議を開始した。日本道路公団の要望としては、平成12年夏までに調査を終了しないと予定期間での工事完了が見込めないことから、即刻平成10年度中にも発掘調査を開始して、この期日までに終了させてほしいとのことであった。しかし、当然の事ながら平成10年度内の調査開始は見込めず、さらにすでに翌平成11年度の古代吉備文化財センター全体の発掘調査計画がほぼ決定し予算化された時期でもあり、平成11年度の対応さえ県教育委員会においては困難な状況にあった。この後、度重なる協議と予算の組み直しを検討し、さらには前回の調査成果から遺構の拡がることが予想される橋脚部分のみを調査対象とすることとし４遺跡の調査面積を4,900㎡へと絞り込みを行った。こうして、平成11年10月から調査に着手し１年間の調査期間で平成12年９月に調査終了とする計画が立てられた。なお、調査員は平成11年度は３名、平成12年度は４名の調査員で当たることとした。



第１図　遺跡位置図（1/150,000）

調査箇所は、既存の橋脚の北側に新設される橋脚部分にあたり、約８～10m四方の区画が４遺跡合計78箇所とされた。この部分は周囲の田面から約１～２m以上の厚さで暫定２車線部分の工事の際に盛土が行われており、調査に当たっては表土および調査排土置き場の確保の点からこの盛土の除去持ち出しが必要不可欠であった。なお、既存橋脚間について

はその保護のためこの盛土の除去は行えず、その結果、既存橋脚部と隣接する今回の調査区との高低差は２ｍをゆうに越えた。計78箇所もの調査区すべてに矢板鋼を巡らすことは不可能であり、このため調査の安全面からやむなく実際の調査面積を減少させた箇所も多い。さらには、既存橋脚の工事の際に計画より拡大され掘削されている箇所も多く、残念ながら今回の調査対象地でありながら既に掘削削平されている箇所も多く見られた。

発掘調査は、４遺跡中最も西側に位置する服部遺跡から北溝手遺跡、窪木遺跡、高松田中遺跡の順に進めた。平成11年度には、服部遺跡と北溝手遺跡の西半部の調査を行い、服部遺跡からは弥生時代の粘土採掘坑が大きな範囲で再認された。平成12年度には北溝手遺跡の東半、窪木遺跡、高松田中遺跡の調査を終了させた。北溝手遺跡と高松田中遺跡では、弥生時代前期と考えられる稲作跡が検出され、この足守川流域における稲作開始を考える上での良好な資料となった。

なお、本調査関係における法的手続書類は、日本道路公団側から文化財保護法第57条の３に基づく「発掘の通知」として各４遺跡分が平成11年７月に提出され、これに基づき岡山県教育委員会としては平成11年７月28日付教文埋第617号（服部遺跡）、同第618号（北溝手遺跡）、同第619号（窪木遺跡）、同620号（高松田中遺跡）の各文書で発掘調査の指示を行った。また、法第98条の２（現法第58条の３）に基づき平成11年10月20日付教文埋第1012号（服部遺跡）、平成12年３月７日付教文埋第1654号（北溝手遺跡）、平成12年４月10日付岡吉調第20号（窪木遺跡・高松田中遺跡）において「発掘調査の報告」を行っている。「埋蔵文化財発見通知」は、服部遺跡では平成12年２月29日付教文埋第1620号、北溝手遺跡では平成12年３月27日付教文埋第1767号及び平成12年５月26日付教文埋第315号、窪木遺跡では平成12年６月９日付教文埋第381号、高松田中遺跡では平成12年10月２日付教文埋第924号において処理した。

日誌抄

平成11年度

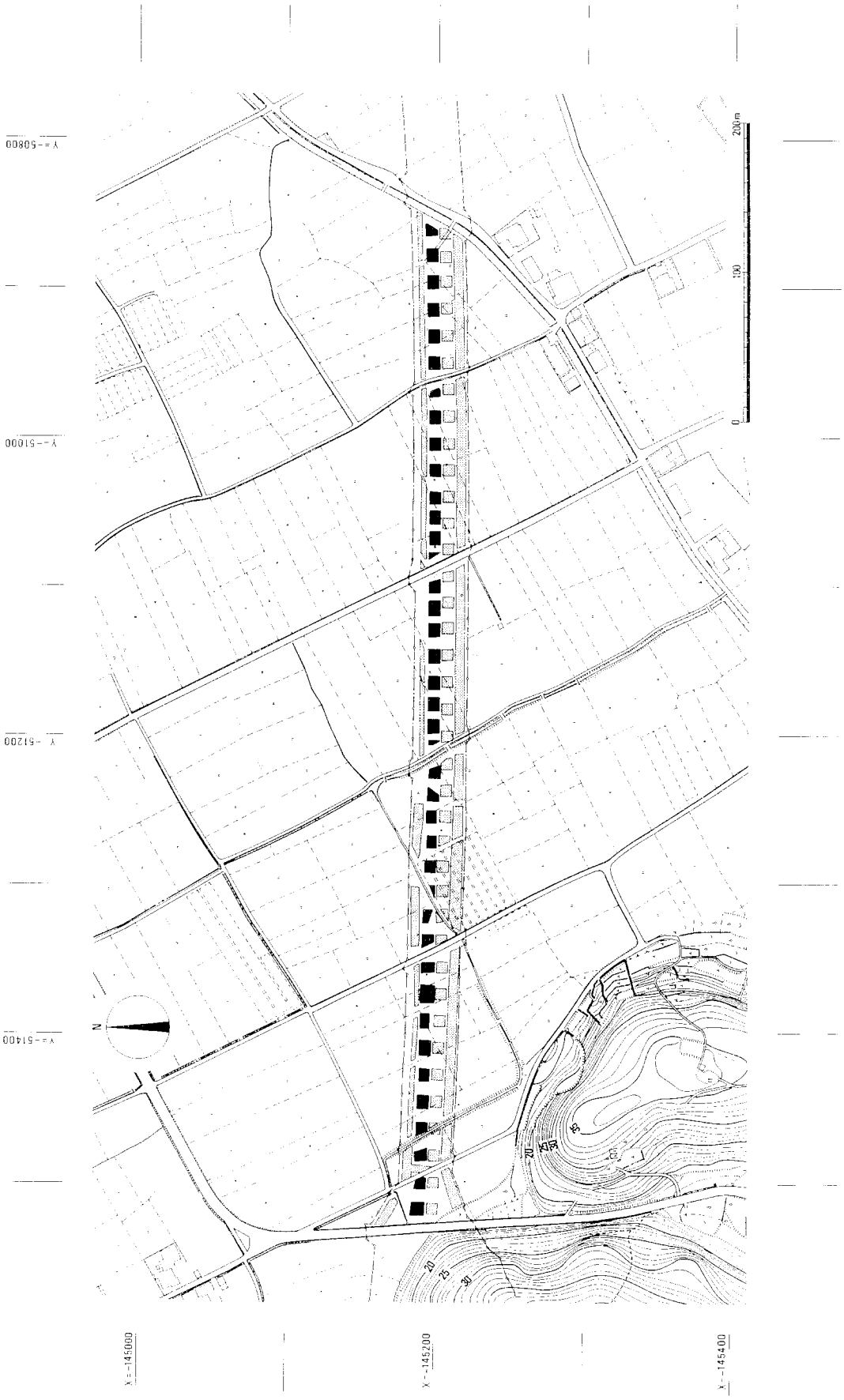
平成11年10月１日　服部遺跡調査着手
平成12年１月25日　埋蔵文化財保護対策委員会開催
平成12年２月17日　北溝手遺跡調査着手
平成12年２月25日　服部遺跡調査終了
平成12年３月31日　平成11年度調査事業終了

平成12年度

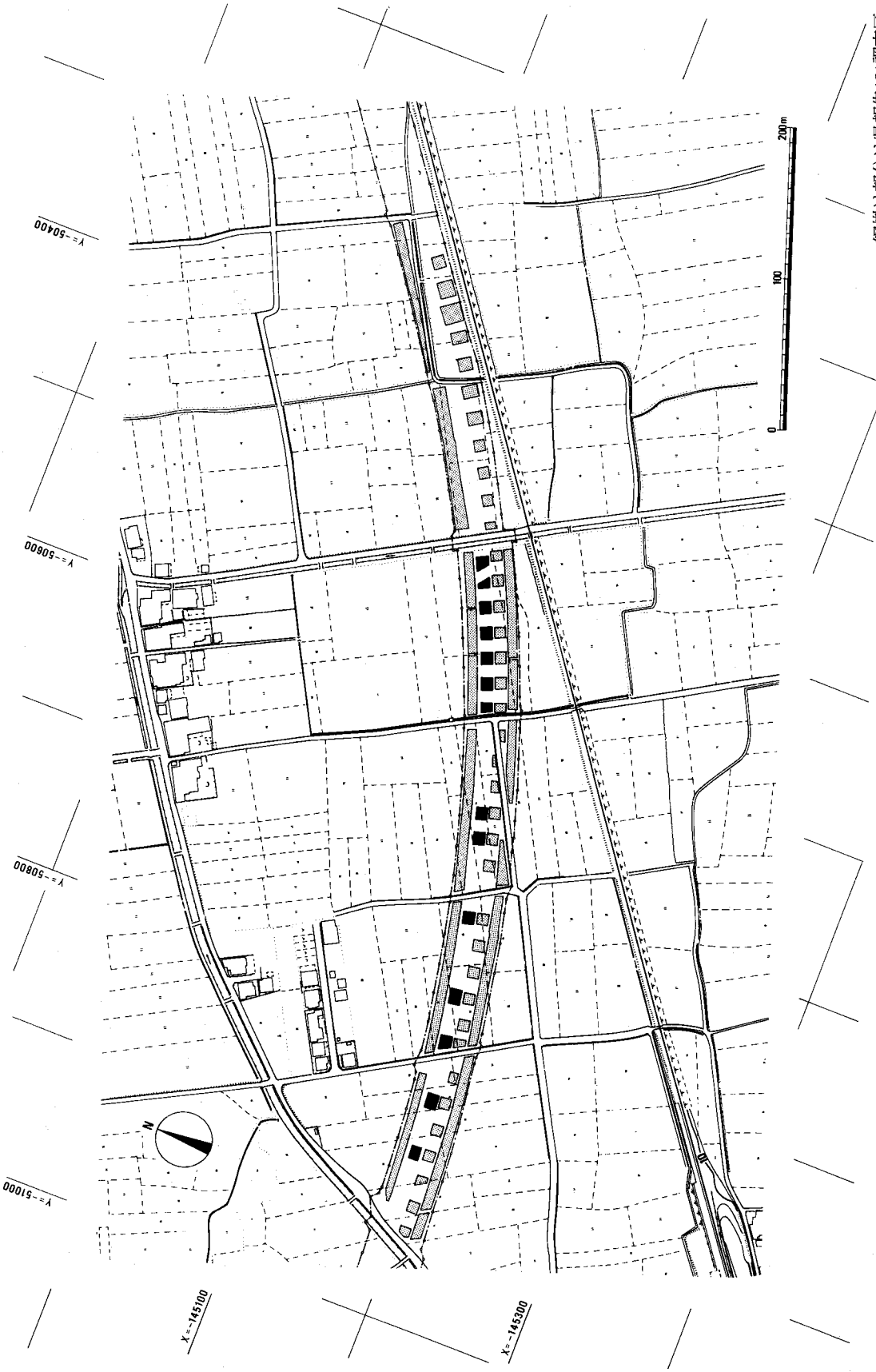
平成12年４月１日　平成12年度調査事業開始
平成12年５月22日　窪木遺跡調査着手
平成12年５月23日　北溝手遺跡調査終了
平成12年６月５日　高松田中遺跡調査着手
平成12年６月６日　窪木遺跡調査終了
平成12年７月25日　埋蔵文化財保護対策委員会開催
平成12年９月25日　高松田中遺跡調査終了
平成12年９月30日　平成12年度調査事業終了
平成12年10月１日　報告書作成事業開始
平成13年２月26日　埋蔵文化財保護対策委員会開催
平成13年３月31日　報告書作成事業終了

第２節　報告書作成の経緯

本報告書作成は、調査事業終了後平成12年10月１日から平成13年３月31日にかけて行った。報告書作成担当は調査員２名で当たり、遺物復元、遺物実測、トレース作業については補助作業員の支援を受けた。原稿の執筆については、調査担当者があたった。

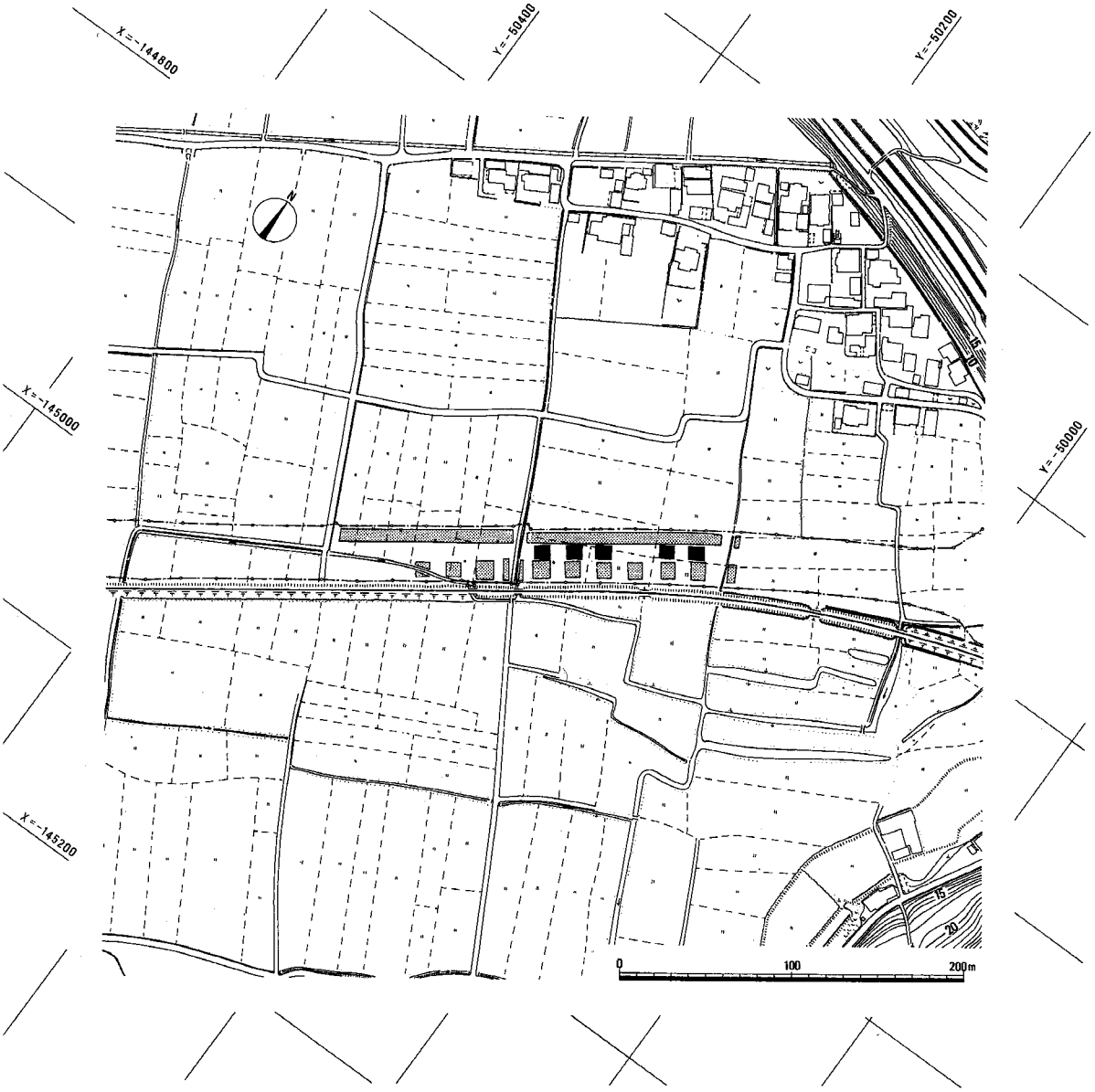


第２図　服部遺跡調査区配置図（1/4,000）



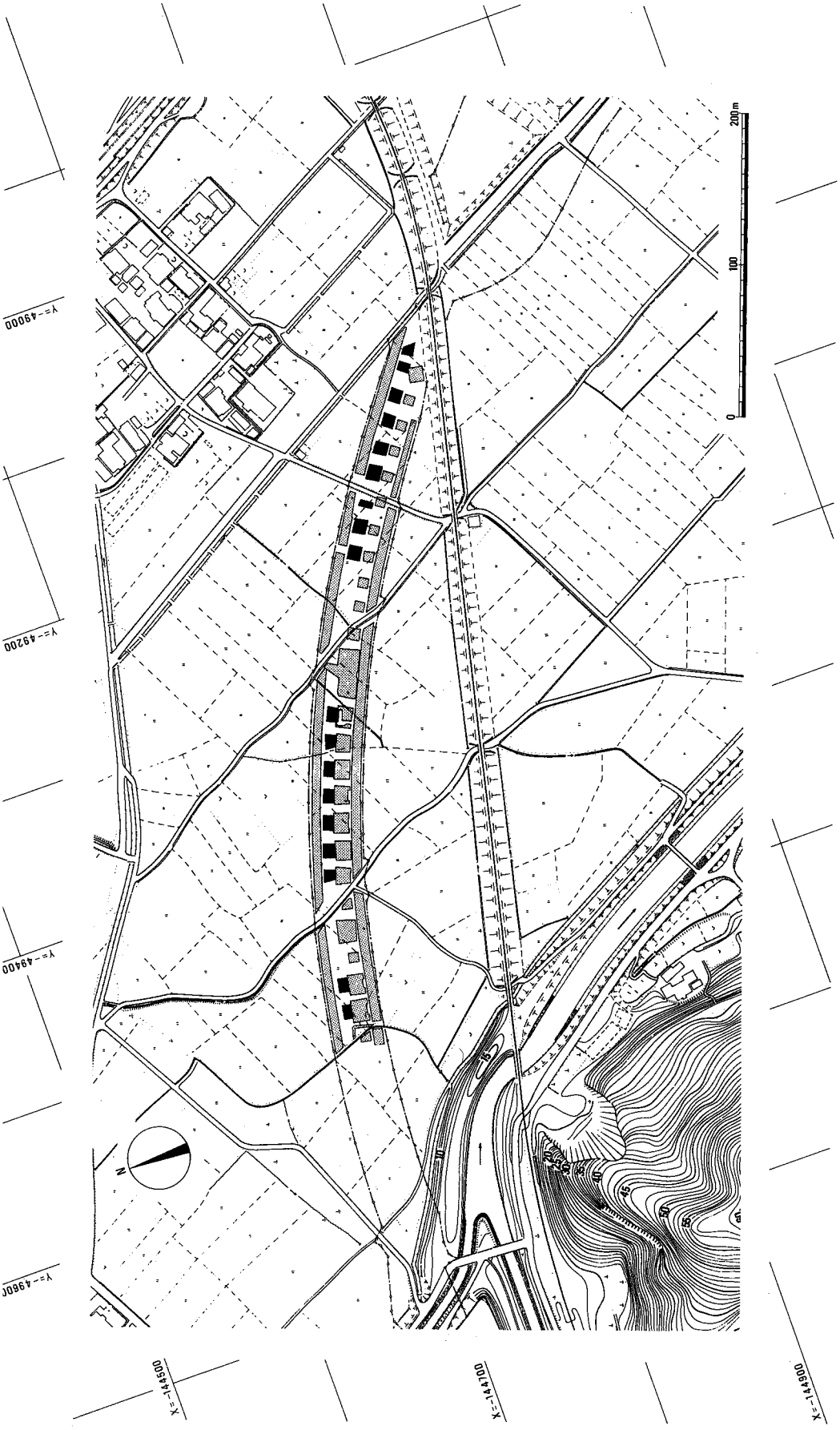
第３図　北溝手遺跡調査区配置図（1/4,000）

本書に掲載した各遺跡は、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　中国横断自動車道建設に伴う発掘調査４　1997』（以下、県報告121と略す。）において、南側橋脚部と南北側道部分の調査成果を報告している。今回の調査は、この成果を基礎にして調査区を設定している。本報告書は、遺跡の内容から本来ならばこの「中国横断自動車道建設に伴う発掘調査」のシリーズ連番として刊行されるべきものであるが、原因となる事業名が異なり、同一のシリーズ番号を付加できなかった。また、遺構番号・遺物番号についてもシリーズ連番を付加しなかったことから県報告121からの連番とはせず、本書における遺跡ごとの連番とした。このため、各遺構・遺物の連続性が不鮮明になったことは否めず、すべて編集者の責である。なお、各遺跡の全容を把握するため遺構全体図として県報告121の成果を収めるよう編集を行い、遺構対応表を巻末に掲載した。



網掛け部分は県報告121調査区
黒塗り部分が本報告調査区

第４図　窪木遺跡調査区配置図（**1/4,000**）



第５図　高松田中遺跡調査区配置図（1/4,000）

第３節　発掘調査および報告書作成の体制

調査・報告書作成の体制

平成11年度

岡山県教育委員会

教育長　黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長　宮野　正司

文化課

課長　松井　英治

課長代理　佐々部和生

参事　正岡　睦夫

課長補佐　松本　和男
(埋蔵文化財係長)

主任　奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長　葛原　克人

次長　大村　俊臣

（総務課）

総務課長　小倉　昇

課長補佐(総務係長)　安西　正則

主査　山本　恭輔

（調査第三課）

調査第三課長　柳瀬　昭彦

課長補佐(第一係長)　山磨　康平

文化財保護主査　大森　充宏(調査担当)

文化財保護主事　尾上　元規(調査担当)

主事　下垣　豪(調査担当)

平成12年度

岡山県教育委員会

教育長　黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長　宮野　正司

文化課

課長　松井　英治

課長代理　佐々部和生

課長代理　松本　和男
(埋蔵文化財係長)

文化財保護主査　福本　明

主任　奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長　正岡　睦夫

次長　能登原　巧

（総務課）

総務課長　小倉　昇

課長補佐(総務係長)　安西　正則

主査　山本　恭輔

（調査第一課）

調査第一課長　高畑　知功

課長補佐(第一係長)　中野　雅美

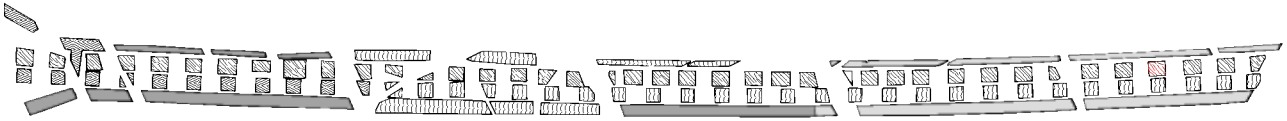
文化財保護主幹　山磨　康平(調査担当)

文化財保護主査　大橋　雅也
(調査・報告書担当)

文化財保護主事　奥野　光廣
(調査・報告書担当)

主事　梶藤　智之(調査担当)

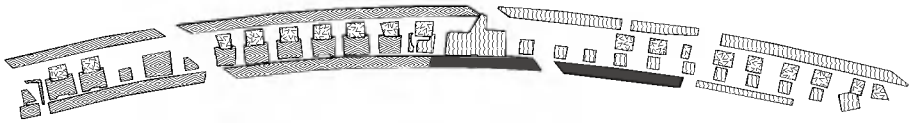
〈服部遺跡〉



〈北溝手遺跡〉

〈窪木遺跡〉

〈高松田中遺跡〉



	調査年度	担　当	県報告書
	平成５年度	田原・東呂木・柴田	県報告121
	平成５年度	倉・三上・小林	県報告121
	平成５年度	椿・竹井・長門	県報告121
	平成６年度	伊藤・三上・山本・蛯原	県報告121
	平成６年度	中野・大村・高見	県報告121
	平成６年度	平井マ・東呂木・小延	県報告121
	平成11年度	大森・尾上・下垣	本書
	平成12年度	山磨・大橋・奥野・梶藤	本書

第６図　服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡調査担当一覧

第２章　遺跡をめぐる環境

第１節　地理的環境

本書で報告する服部遺跡(第７図６、以下同)、北溝手遺跡(７)、窪木遺跡(８)、高松田中遺跡(９)の存在する総社平野は、岡山県の南西部に位置する。西に高梁川、東に足守川、北に吉備高原南端部、南に都窪丘陵に囲まれ、東西約7.5㎞、南北約2.5㎞の狭長な範囲をもち、高梁川以西は小田川下流域に拡がる狭隘な平野に、足守川以東は岡山平野の北西部にあたる高松平野にそれぞれ続く。少なくとも古代以前には高梁川の一部が東流し足守川に合流していた蓋然性が高いことは、先学の指摘や総社市教育委員会による調査等で明らかである。岡山県下の三大河川の下流域に形成された平野での沖積の過程は、とくに大差はないと思われるが、それぞれ中国山地の山懐に源を発し瀬戸内海に至る傾斜角度でいうと、明らかに高梁川が急であり、それだけに排出される土砂の量や堆積の速度も他を凌駕していたことは想像にかたくない。また、足守川の流路傾斜を参考にすれば、中流域の血吸川と砂川が合流する岡山市高塚付近は河岸段丘面と沖積面の境にあたり、それぞれの川が大雨ごとに短い距離を一気に排出した結果、高梁川分流は東流の道が分断され、一部現前川あるいは赤浜付近にクリークが拡がる景観を残しながら沖積化が徐々に進行し、今日に至ったと思われる。

第２節　歴史的環境

総社平野の沖積化に伴い、本格的に人々の進出が始まったのは、いまのところ縄文時代後期に求められる。それ以前、旧石器時代の周辺部の足跡は、高梁川本流東岸の低い台地上の宝福寺裏山遺跡や浅尾遺跡、あるいは長良山の南の沖積微高地上に位置する窪木薬師遺跡(16)出土のナイフ形石器などからわずかに捉えられる程度である。その後縄文時代早期では、平野のほぼ中央の真壁遺跡(47)や東寄りの独立丘陵西斜面の長良山遺跡などの断片的な資料に限られている。縄文時代後期は、南溝手遺跡＜県立大学＞(29)で旧河道が２～３条確認されており、また、晩期にかけての遺物が比較的多く出土している。さらに、微高地の一部には後期中葉から後葉にかけての土壙や土器溜り、火処などの遺構とそれに伴う土器・石器類も多く確認されるなど、沖積平野が後期中葉には確実に生活の場であったことがうかがえる。なかでも、後期中葉の土器の胎土中からイネのプラント・オパールが検出され、後期後葉の土器片に籾痕が残存すること、モロコシやキビのプラント・オパールも検出されていること、50点を越える打製石鍬の出土が知られることなどは、縄文時代後期のこの地における稲作の導入及び他の植物を含めた栽培の可能性を示唆している。

弥生時代前・中期中葉の遺跡は、今のところ真壁遺跡や南溝手遺跡、山津田遺跡など数少ないが、調査面積の広い南溝手遺跡＜県立大学＞では中央穴の脇に２本の柱穴をもついわゆる「松菊里型」の竪穴住居を含む比較的多くの遺構が見つかっている。また、これらの竪穴住居の一つからは、サヌカイト製石器や剥片とともに管玉の未製品や玉砥石、メノウ製錐を含む多くの剥片が出土し、玉作りを

1．藪田古墳群
2．金黒池東遺跡
3．奥ケ谷窯跡
4．中山遺跡・中山古墳群
5．西山遺跡・西山古墳群
6．服部遺跡
7．北溝手遺跡
8．窪木遺跡
9．高松田中遺跡
10．高塚遺跡
11．鬼ノ城
12．新山廃寺
13．千引かなくろ谷遺跡
14．足守庄関連遺跡
15．生石神社弥生墳丘墓
16．窪木薬師遺跡
17．造山古墳
18．榊山古墳
19．千足古墳
20．末の奥窯跡
21．角力取山古墳
22．宿寺山古墳
23．備中国分寺跡
24．備中国分尼寺跡
25．こうもり塚古墳
26．江崎古墳
27．作山古墳
28．緑山古墳群
29．南溝手遺跡
30．窪木遺跡
31．窪木宮後遺跡
32．深町遺跡
33．稲寺廃寺
34．備中国府推定地
35．金井戸新田遺跡
36．井手天原遺跡
37．金井戸天原遺跡
38．金井戸鴻崎遺跡
39．井手見延遺跡
40．三須畠田遺跡
41．三須河原遺跡
42．美濃田遺跡
43．天満遺跡
44．三須廃寺
45．井手村後遺跡
46．清水角遺跡
47．真壁遺跡
48．三輪廃寺
49．宮山墳墓群
50．天望台古墳
51．三笠山古墳
52．前山墳墓群
53．鎌戸原遺跡

第７図　周辺遺跡分布図（**1/50,000**）

兼ねた石器製作場の存在も明らかにされている。本書に掲載した北溝手遺跡（７）では、南溝手遺跡〈県立大学〉において確認されたこれら居住域の北側に広がると思われる生産域＝稲作経営様相の一端を明らかにした。これら前期から中期前葉の集落は、狭小な微高地に点在するものと思われ、本書で報告する高松田中遺跡（９）でも、その微高地端部の一角の様相であると考えられる。

弥生時代中期後葉～弥生時代後期になると、前記の遺跡の拡大とそれらの遺跡に加えて平野部の微高地上あるいは丘陵裾部に点々と集落が確認され、さらに周辺の低丘陵上には中期から後期の小集落がいくつか確認されるなど、集落規模の拡大とともに人口増による集落の分散化が看取される。特に近年調査された井手天原遺跡(36)・井手見延遺跡(39)・三須畠田遺跡(40)・三須河原遺跡(41)ではこの後古墳時代以降に至るまでの集落展開の様相を伺い知れる。一方、これら居住域の拡大・展開とともに前山墳墓群(52)をはじめとした集団墓の造営が丘陵上に認められる。なお、吉備特有の特殊壺・特殊器台を伴う後期後半の弥生墳丘墓の分布の中枢の一つは足守川中・下流域にあり、総社平野を望む丘陵上には総社市柳坪遺跡・宮山墳墓群(49)などが知られる。

古墳時代の集落は弥生時代からの集落が継続していたと思われるが、いくらか発掘例もふえつつある。平野部を西および南に望む低丘陵上には、古墳時代を通じて数基から数十基の古墳群が形成されており、前半期には南坂２号墳、尾崎２号墳、久米10号墳、井山古墳などの全長約30～50m級の前方後円墳や、全長約40mの帆立貝式で竪穴式石室をもつ隨庵古墳などが存在する。なかでも隨庵古墳は、棺内に鏡・刀剣・刀子などの金属製品や多量の玉類・滑石製有孔円板など、棺内に槍・鉾などの武器、短甲・冑などの武具、鉇・鋸・斧・鎌などの工具類、ヤスなどの漁具、鐙・轡・鞍などの馬具、さらに鉄鉗・鉄鎚・鉄床などの鍛造鍛冶具一式と砥石などが副葬され、５世紀後半段階でのこの地域の強力な首長権の一端を垣間見ることができる。ただ、総社平野南側の下林・上林・三須の丘陵の南側に所在する全国第４位の規模を誇る造山古墳(17)、同９位の作山古墳(27)に葬られた大首長との間には遠い隔たりがあることも確かであろう。また、平野部を北に望む丘陵上の前半期古墳は、三輪の天望台古墳(50)・三笠山古墳(51)など全長約50mを超える前方後円墳が認められるが、断片的である。大形の前方後円墳である小造山古墳や宿寺山古墳(22)も近隣に存在するが、総社平野そのものを望む位置にはない。また、奥ヶ谷窯跡（３）のように吉備における最古の初期須恵器窯も知られるようになり、そのいち早い導入は当時の吉備と朝鮮半島との密接な関係を如実に示しているといえよう。

後半期の横穴式石室導入以降の古墳は、平野を取り巻く丘陵のほとんどの尾根ごとに群集しているといっても過言ではない。三須丘陵一帯には、大形石室墳だけでもこうもり塚古墳(25)を筆頭に江崎古墳(26)、緑山４・７・８号墳(28)、亀山塚古墳、鳶尾塚古墳など９基にのぼる古墳の存在が知られている。これらの古墳を含めて、横穴式石室墳の大半は盗掘に遭っており、副葬品からの追究を困難にしているが、断片的な資料とはいえ千引古墳群・すりばち池古墳群などに鉄滓の出土も知られ、６世紀後半から７世紀前半にかけての時期の千引かなぐろ谷製鉄遺跡(13)あるいは鍛冶集団が居住した窪木薬師遺跡などの存在は、吉備の中枢部における鉄の掌握の一端を示すものであろう。

総社平野の飛鳥時代の遺構はほとんどわかっていない。周辺では山手村の末の奥窯跡群(20)、高梁川西岸の秦原廃寺が知られるに過ぎない。白鳳時代になると、加夜評で大崎廃寺・栢寺廃寺(33)、窪屋評で三須廃寺(44)、津宇評で惣爪廃寺・日畑廃寺などが建立され、高梁川以西の下道評の岡田廃寺・箭田廃寺・八高廃寺などとともに、外区を鋸歯文で飾る重弁のいわゆる備中式軒丸瓦が盛興する。また、この時期には総社平野はいうに及ばず、児島や讃岐の山々も一望できる標高400mの山頂に古代

山城の鬼ノ城(11)が造営され、律令前夜の政治および国際関係が想像される。鬼ノ城については、総社市教育委員会による遺跡整備を目途とした精力的な発掘調査が行われており、多大な成果を挙げつつある。

奈良時代には平野のほぼ中央に方６～８町の備中国府(34)が想定されており試掘確認調査も行われているが、確定的な資料は得られておらず、いまだその箇所の限定に至っていない。なお、近年の調査で三須河原遺跡(41)から「郡殿」の墨書土器が出土し、窪屋郡衙に擬する意見も提出されている。また、津峴駅に比定される矢部遺跡を経て三須丘陵の南裾を東西に通じると推定されている古代山陽道に面して、備中国分寺(23)・同尼寺(24)があり、律令体制のなかにあっても備中の中枢とされる地域であったと思われる。

平安時代になると福山山塊に福山寺などの山岳寺院が建立されている。なお、南北朝時代には、いわゆる福山合戦の争乱によりこの山塊の山岳寺院も焼失しているが、この一端は近年山手村教委によって状況が明らかとなりつつある。中世以降、発掘調査では南溝手遺跡などで確認されている畝状遺構(畑)などもあるが、平野部における集落の実態はさほど明らかではない。鎌倉時代末期に写された「備中国賀夜郡服部郷図」には、条里で整然と区画された水田域が拡がり、自動車道が開通する今日に至るまで、この景観が連綿と受け継がれていったものと思われる。　　(江見・大橋)

本稿は、県報告121に掲載した「第２章　歴史的地理的環境」を一部加筆改変したものであり、全体の文責は大橋にある。

主要参考文献

『岡山県史』考古資料　岡山県　1986
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34　岡山県教育委員会　1979
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35　岡山県教育委員会　1979
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65　岡山県教育委員会　1987
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　岡山県教育委員会　1983
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100　岡山県教育委員会　1995
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107　岡山県教育委員会　1996
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121　岡山県教育委員会　1997
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156　岡山県教育委員会　2001
『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会　1987
『総社市隨庵古墳』総社市教育委員会　1965
『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1　総社市教育委員会　1984
『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』７　総社市教育委員会 1989
『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』13　総社市教育委員会　1993
『総社市埋蔵文化財調査年報』1 ～10 総社市教育委員会 1991～2001
『足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会　1994
『三須丘陵遺跡分布調査報告』岡山大学考古学研究部　1976
『飛鳥白鳳の古瓦』　奈良国立博物館　1982　縮刷版
『鬼ノ城』　鬼ノ城学術調査委員会　1980
『備中湛井十二箇郷用水史』湛井十二箇郷組合　1976
永山卯三郎編『吉備郡史』上巻　名著出版　1971
葛原克人「古墳時代前期―備中地域の古墳―」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987

第３章　服部遺跡

第１節　概　要

服部遺跡は、今回報告する遺跡の中では最も西に位置する。東西長約650ｍの範囲であり、西端は西山遺跡・西山古墳群の所在する丘陵にぶつかる。東側は、遺跡としては北溝手遺跡と本来連続するものであるが、十二箇郷用水を境に呼び分けている。なお、遺跡名となった服部の地名は、旧村名（賀陽郡服部村）であり、現在はＪＲ吉備線の駅名などに残っているに過ぎない。

調査は、路線の北側橋脚部分計40ヵ所について行った。西側から順にＰ１～Ｐ40区と呼称している。自動車道建設以前は一帯が水田域として利用されており、その区画には服部条里遺構として知られる条里地割が明瞭に認められる。地形は西端部が最も高く、東に向かって徐々に下がり、東隣の北溝手遺跡につながる。

服部遺跡で検出された遺構は、縄文時代の河道、弥生時代の粘土採掘坑、溝、古代の水田、中世の溝、土壙などである。

地形の高い西半部には、現耕作土直下に淡黄褐色粘質土の基盤層が存在し、そのほぼ全面に粘土採掘坑が認められる。低位部にあたる東半にはその基盤層が存在せず、粘土採掘坑も認められない。この粘土採掘坑の範囲は、南北方向は不明であるが、東西方向には約300ｍの広がりをもっており、大規模な採掘が行われたことが分かる。

東半部では中世の溝や古代の水田跡などが確認された。特にＰ38区～Ｐ40区で検出された古代と考えられる水田は、現代の水田面から約50㎝下位にあるにも関わらず、現代の水田と区画がよく一致しており、条里地割を考える上で興味深い成果が得られた。

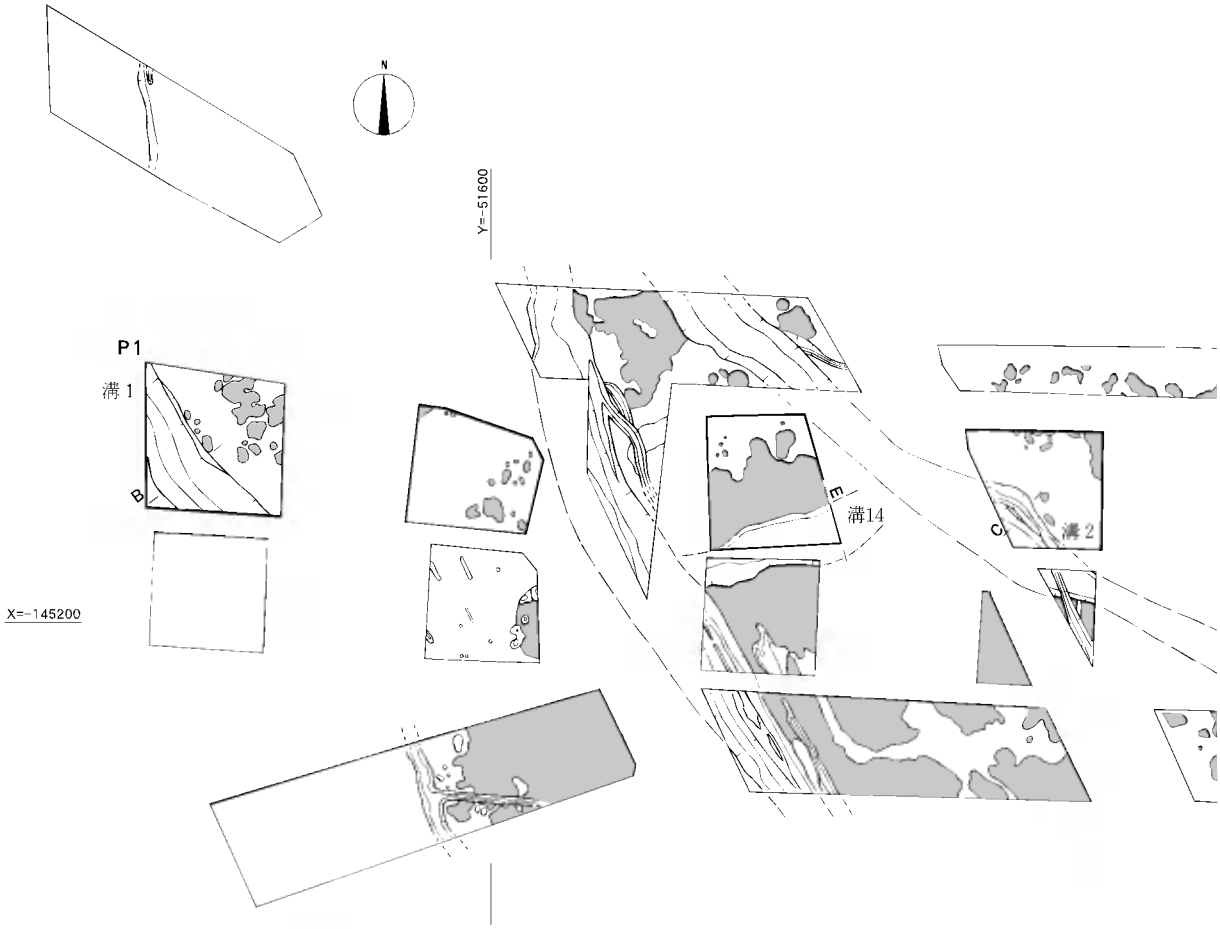
第２節　縄文時代の遺構と遺物

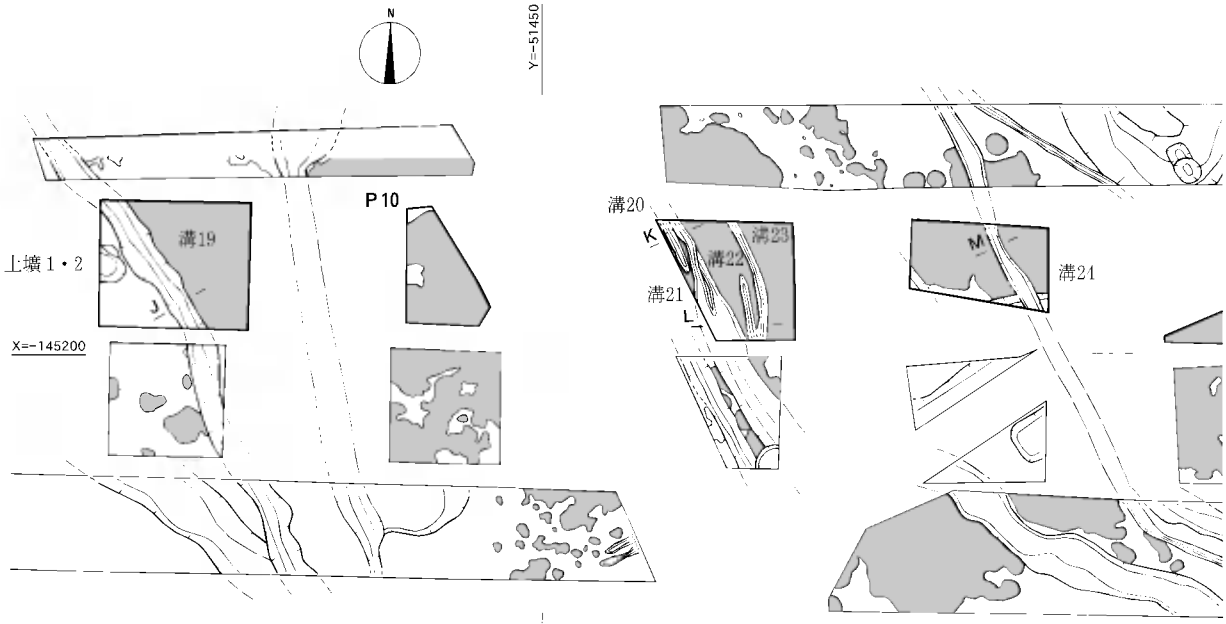
（１）河道

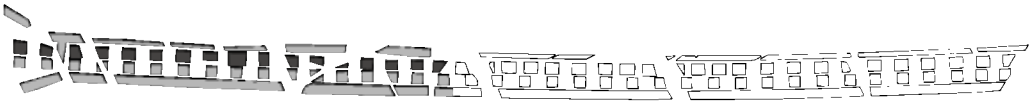
縄文時代の明確な遺構は検出されなかったが、調査範囲の中央付近、Ｐ16区～Ｐ34区の間において複数の河道を検出した。これらの検出面は弥生時代の遺構と同一面であるが、河道内より縄文時代晩期の土器が出土していることから、その時代のものと判断している。ただし、遺物を全く含まない河道もあり、ここに挙げるすべての河道が縄文時代に属するかどうか断定はできない。

河道１（第８・９・11図、写真図版１）

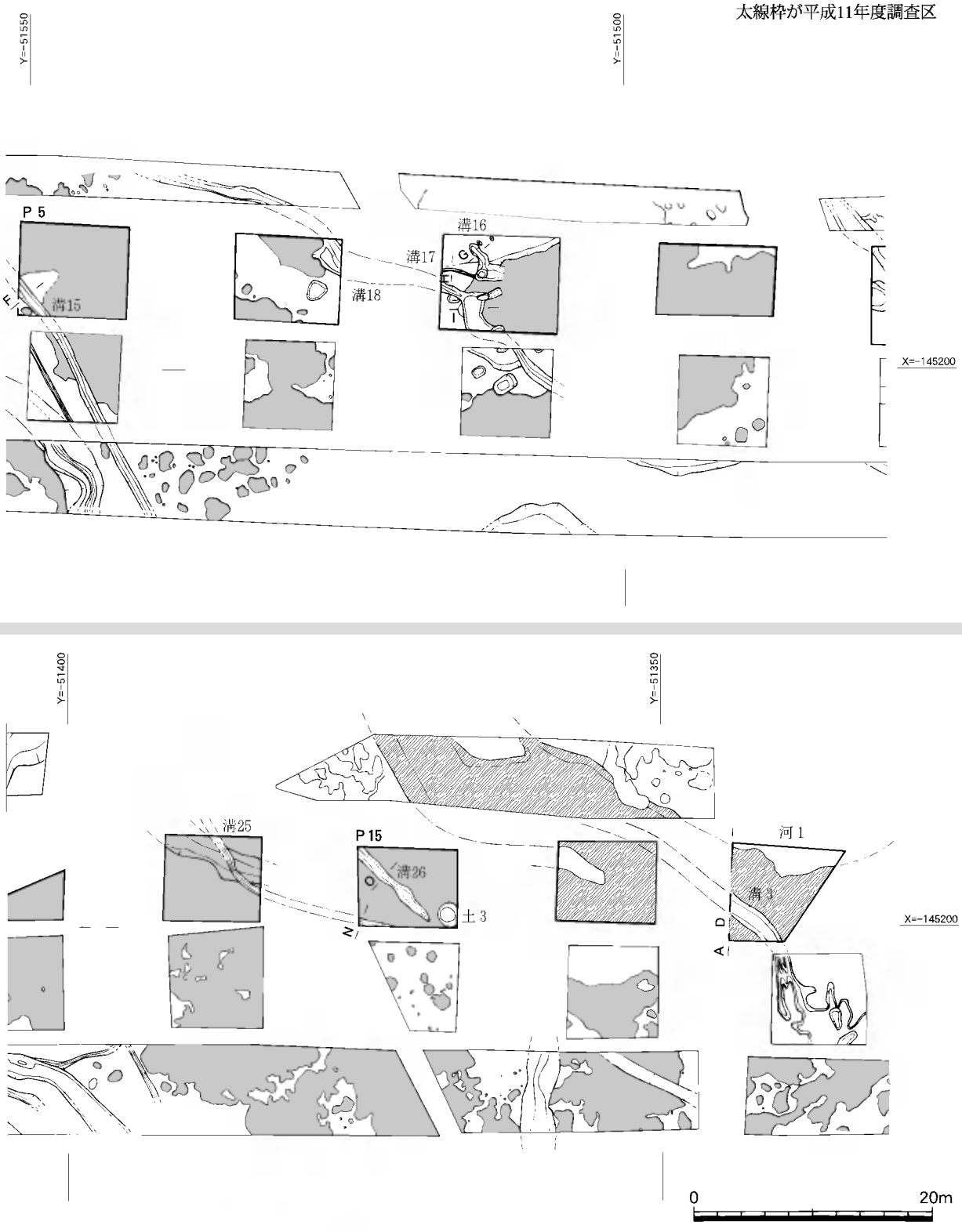
Ｐ16区からＰ21区にかけて検出された。河道の流れは必ずしも明確でないが、東へ向かうほど深くなるようである。Ｐ16区では河道が２本に分岐する状況が認められるが、西隣のＰ15区ではこの河道は検出されていないことから、本流は北西方向へつながると考えられる。Ｐ17区では河道北岸の肩を検出した。Ｐ18区～Ｐ20区では調査区全域が砂層に覆われ、河道１の内部にあたると判断された。ま


N
Y=-51600
P1
溝１
B
X=-145200
溝14
溝２

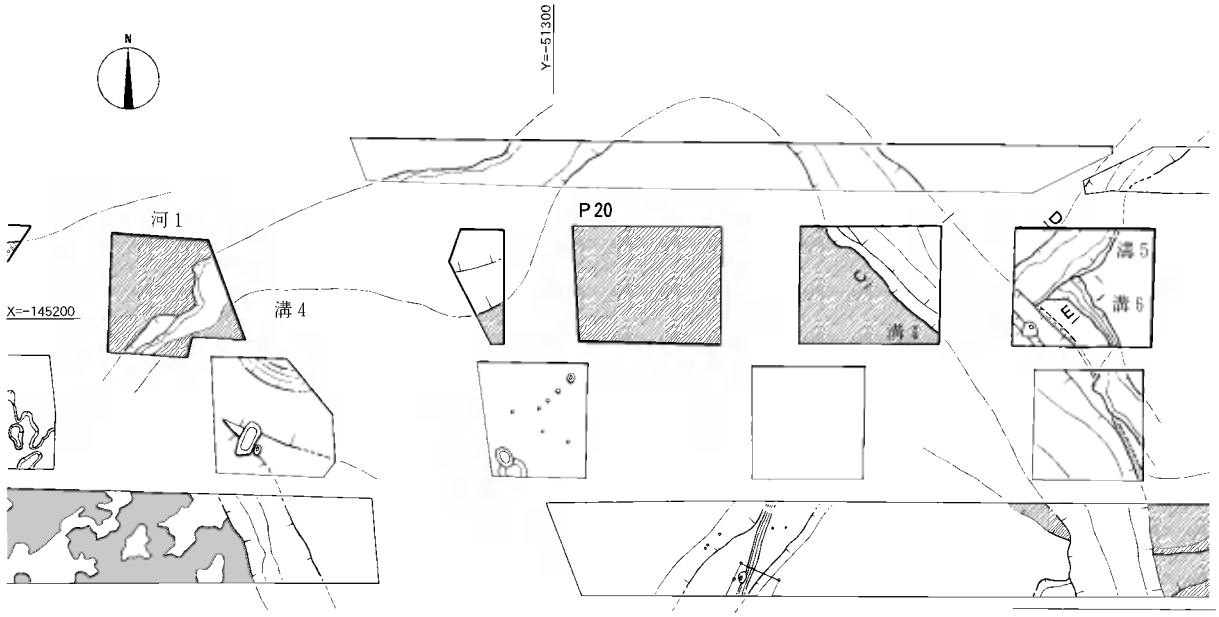

N
Y=-51450
P10
溝19
土壙１・２
X=-145200
溝20
溝23
溝22
溝21
溝21

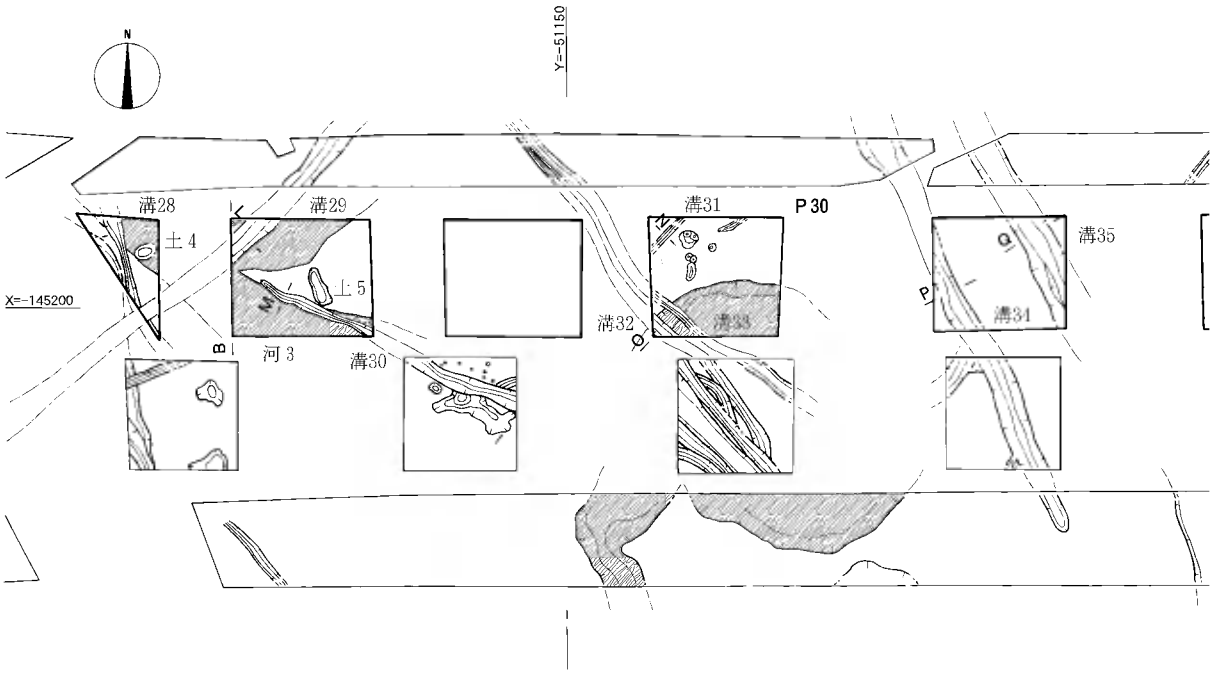


太線枠が平成11年度調査区

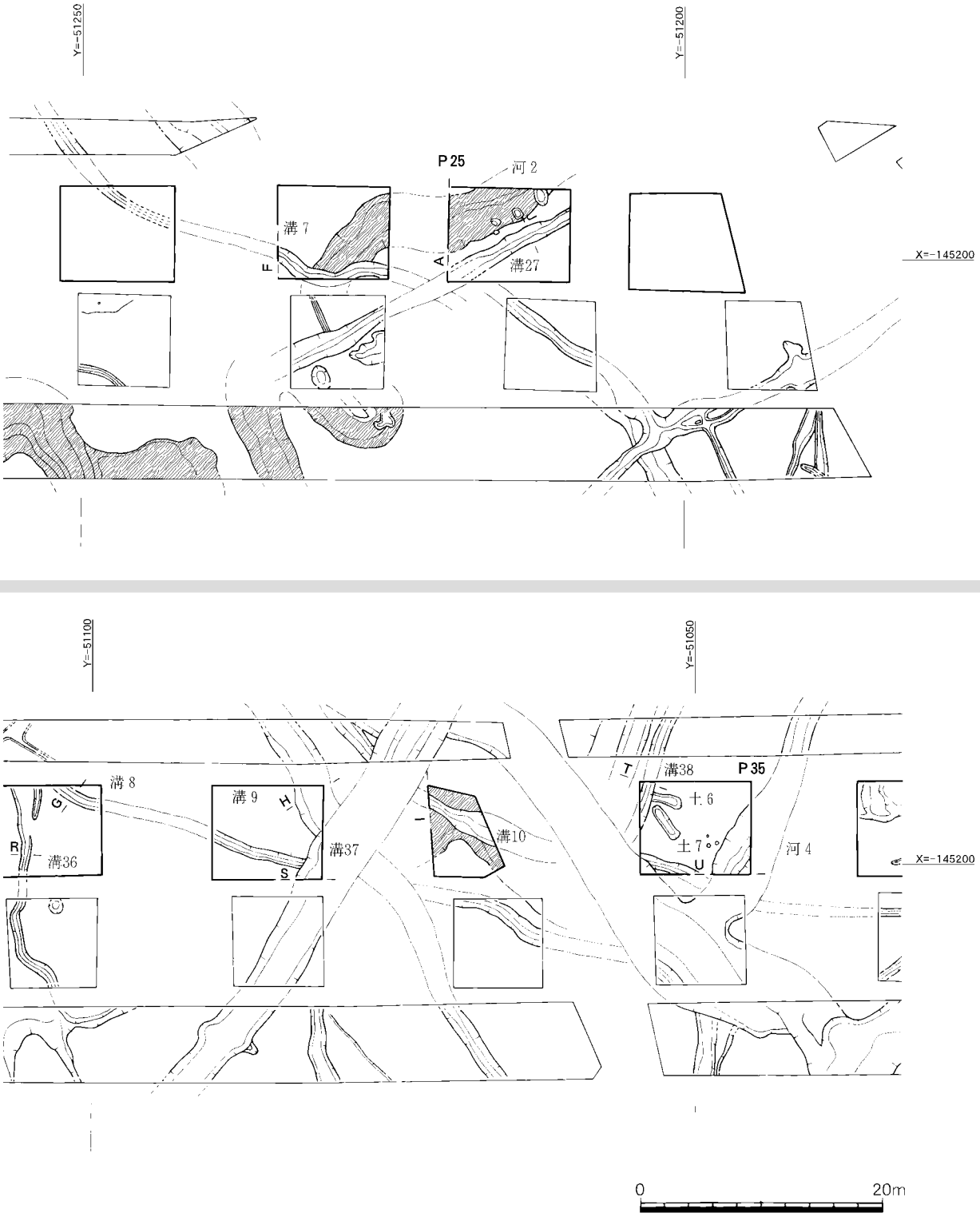


第８図　遺構配置図①（**1/500**）

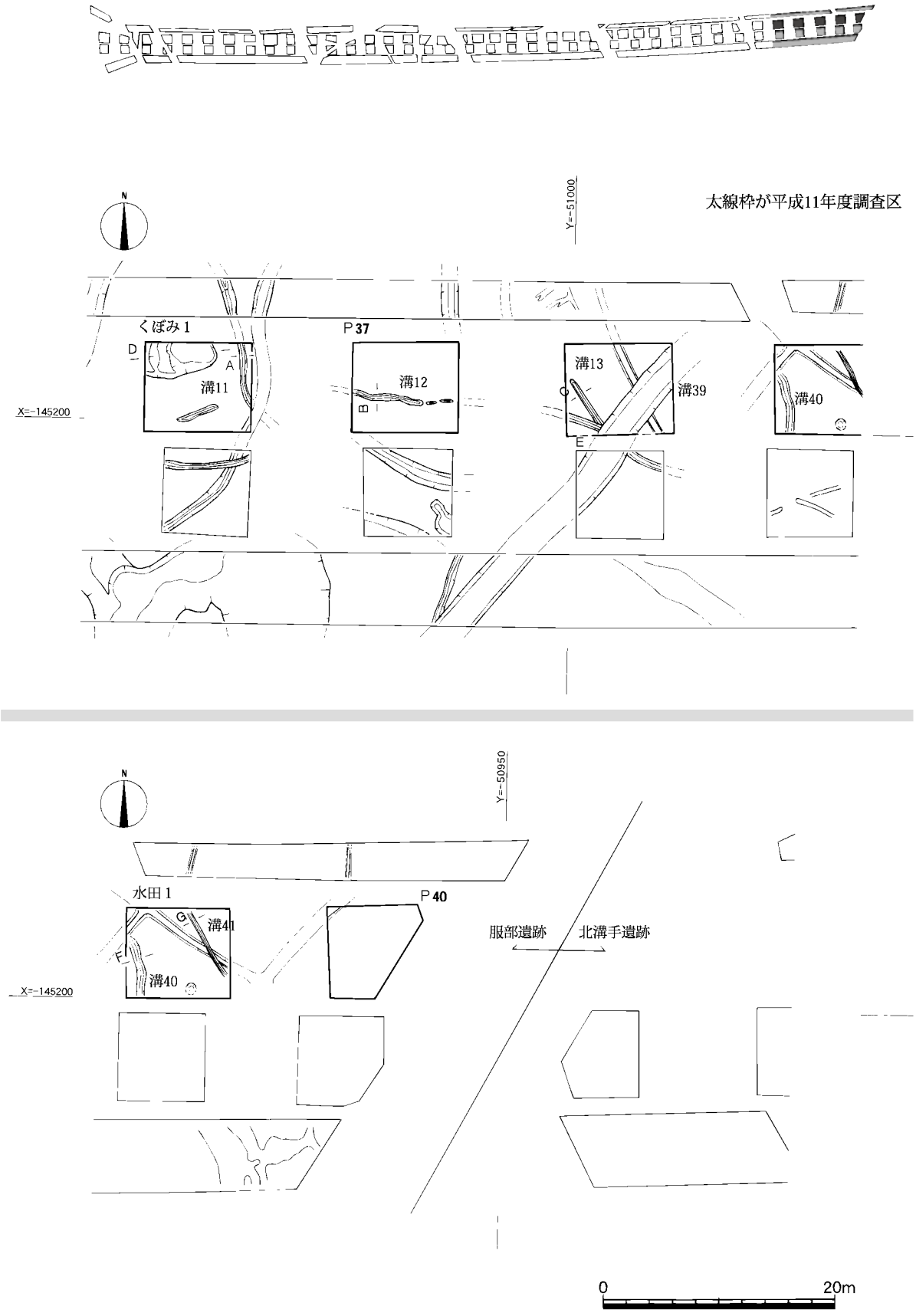

N
Y=-51300
X=-145200
河 1
溝 4
P 20
溝 5
溝 6
C
D
E


N
Y=-51150
X=-145200
溝28
土 4
溝29
土 5
河 3
溝30
溝31
P 30
溝32
溝33
溝34
溝35
B
P
Q

太線枠が平成11年度調査区



第９図　遺構配置図②（**1/500**）

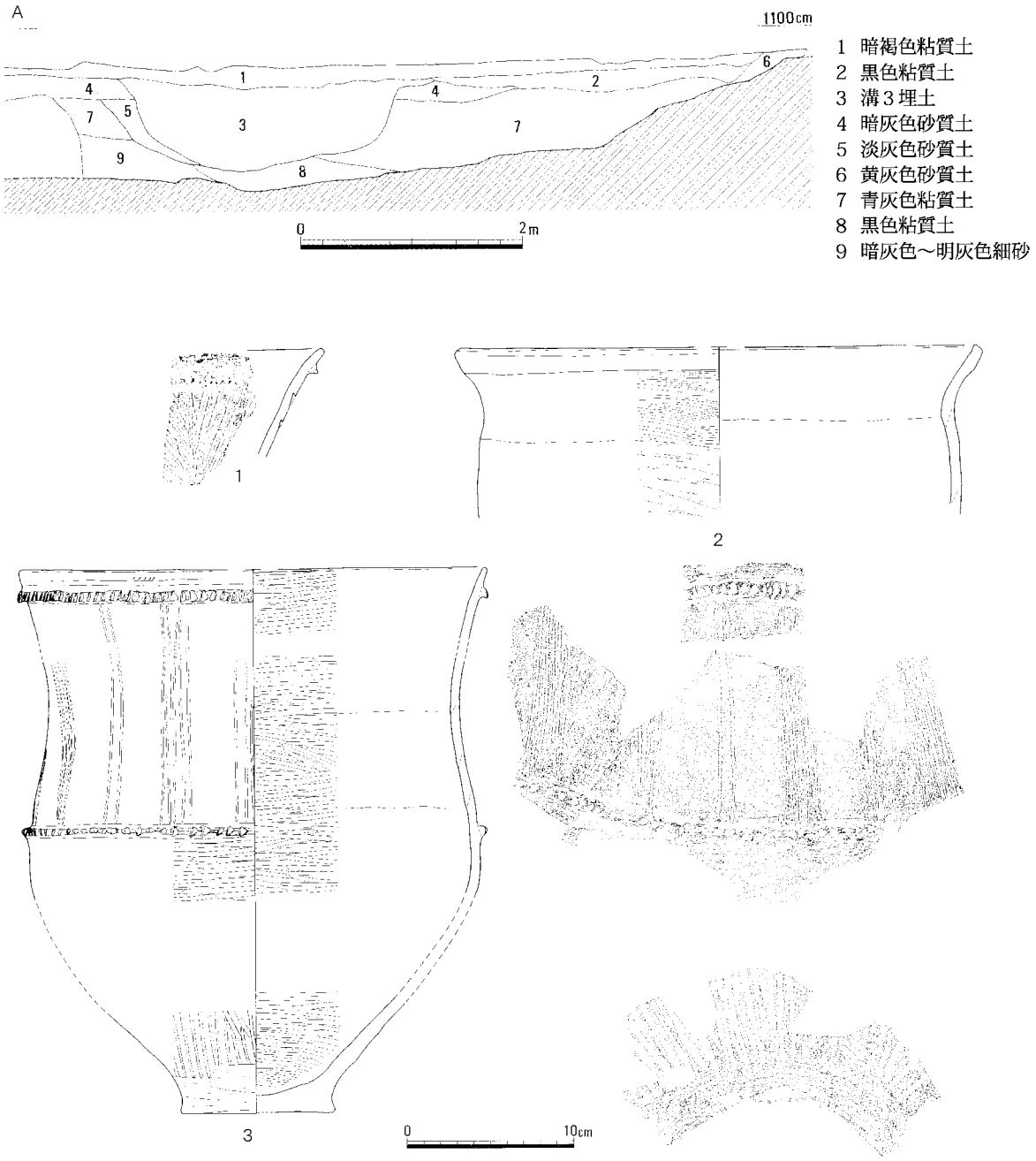


第10図　遺構配置図③（1/500）

たＰ21区では河道の北東肩を溝４と重なる位置で検出している。以上の状況から、河道の幅は推定で10m前後を測り、蛇行しながらおおむね西北西から東南東に流れていたと考えられる。深さは、深いところで1.5m前後である。河道の埋土は灰色系の細砂ないし砂質土がほとんどであるが、最上層（１・２層）は暗褐色～黒色の粘質土であり、この層は弥生時代と考えられる溝３（３層）を覆っていることから、弥生時代においても完全には埋没しておらず、たわみの状況を呈していたものと考えられる。

この河道は、基本的に自然河道であるが、Ｐ17区では北岸斜面に階段状に幅狭い平坦面が認められ、人為的な加工の可能性が考えられる。Ｐ17区南西部の河道底部付近では縄文土器片多数が出土しており、洗い場等の施設が想定できるかも知れない。

遺物は、河道底部付近から縄文土器（第11図）と、種子・葉などの植物遺体が出土した。図示した土



第11図　河道（1/60）・出土遺物（1/4）

器は、１・２がＰ18区からの出土、３がＰ17区からの出土である。１・３は刻目突帯文を有する深鉢、２は貝殻条痕を有する深鉢で、いずれも縄文時代晩期に位置づけられる。そのほか、Ｐ20区・Ｐ21区からも縄文土器の細片が数点出土している。

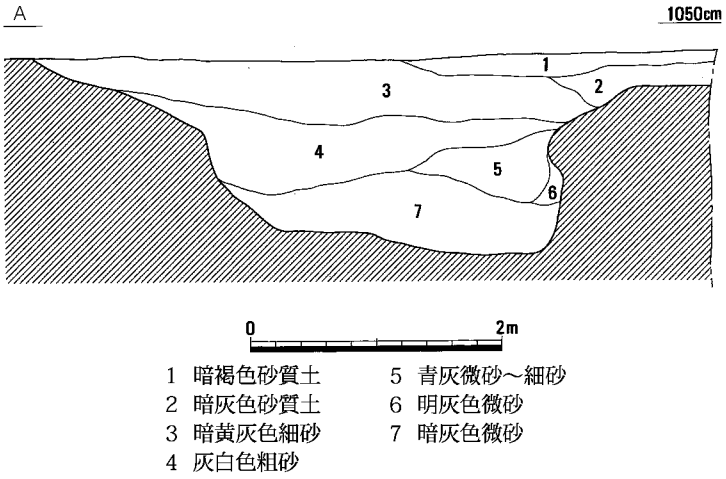
河道２（第９・12図、写真図版１）

Ｐ24区からＰ25区にかけて検出した。幅４～５ｍ、深さ約1.5ｍを測る。河道底面のレベル差から、Ｐ25区からＰ24区の方向へ流れをもつと推定される。また位置関係から、前回の調査で南側道部で検出された河道に続くものと考えられる。出土遺物は皆無であるが、Ｐ24区で弥生時代中期の溝に切られていることや周辺の層位の状況などから、縄文時代に属するものと判断した。

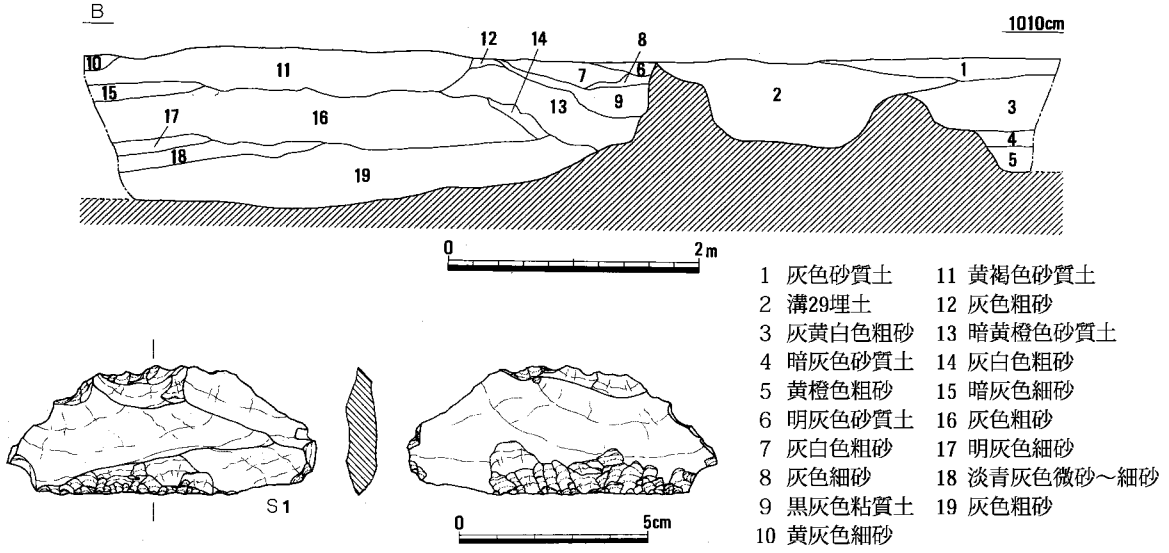
河道３（第９・13図）

Ｐ27区からＰ28区にかけて検出した。Ｐ28区においては２本の河道が交わるような状況が認められるが、両者の先後関係等は確認できていない。そのうち南側の河道の深さは約1.2ｍである。出土遺物は皆無であるが、周辺の状況から河道１、２と同様に縄文時代に属すると推定される。

また、河道３周辺よりサヌカイト製石器Ｓ１が出土した。横長の剥片を素材としたスクレイパーで、刃部には両面から加工を施す。石器の特徴から、縄文時代に属するものと考えられる。



第12図　河道２（1/60）



第13図　河道３（1/60）・周辺出土遺物（1/20）

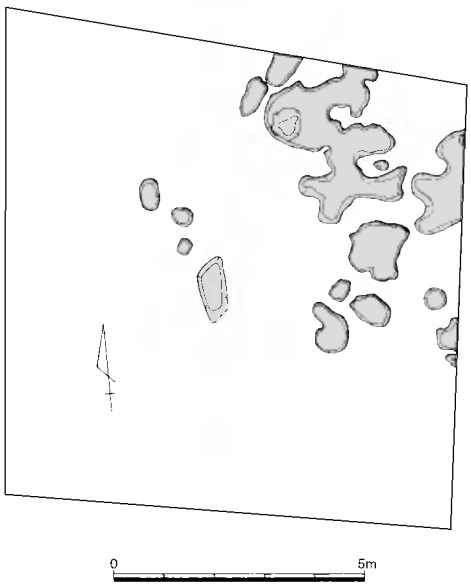
第３節　弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

（１）粘土採掘坑（第14図～第28図、写真図版２）

服部遺跡の西半部、Ｐ１区からＰ15区においては、ほぼ全面に粘土採掘坑が検出された。これは、この地区に存在する淡黄褐色粘質土の基盤層を採掘しているものと考えられる。これより東側は低位部にあたるためこの基盤層の存在が不明確となり、粘土採掘坑も認められない。

粘土採掘坑は、重複、連続しながら掘削されているため、検出時にはアメーバ状の不定形な遺構としてとらえられる。Ｐ11区、Ｐ14区、Ｐ15区では調査区内の全面が粘土採掘坑の埋土に覆われていた。また、それ以前の河道、溝がある場所や、基盤層がやや砂質を帯びるような場所には掘削が及んでいないことから、土質を見ながら良質の粘土を採掘していった様子がうかがえる。

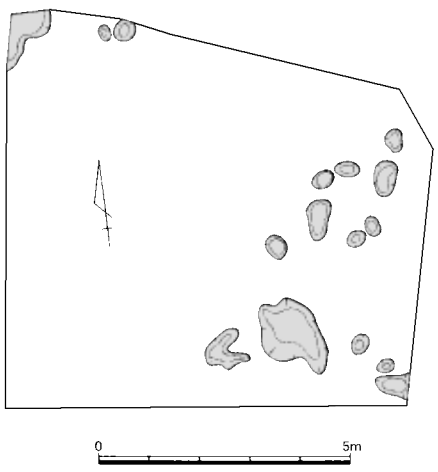
採掘坑の深さは、後世に上面を削平されているため明確でない。特に、地形的に最も高いＰ１区～Ｐ４区では削平が著しく、採掘坑底部の凹凸が残存する程度であるが、残存状況のよいＰ13区～Ｐ15区付近では深さ40㎝前後を測る。採掘坑底面のレベルは、掘削単位を示す凹凸をもちながらも、ある程度一定している。これは、このレベルを過ぎると基盤層が次第に砂質を帯びてくるためと思われる。底面のレベルは、Ｐ３区で標高約12.65m、Ｐ６区で約11.85m、Ｐ11区で約11.30m、Ｐ15区で約11.00ｍと東に向かって次第に下がるが、これは自然地形によるものである。



第14図　Ｐ１区粘土採掘坑（1/150）

採掘坑の掘削は、底部の凹凸により、おおむね１～２ｍの円形ないし不整円形の単位をもつことをある程度知ることができるが、埋土はその単位に関わらずほぼ水平堆積をしているものがほとんどである。すなわち掘削単位ごとの切り合い関係を確認することができず、掘削順序等を知ることは困難である。おそらく粘土採掘後は、埋め戻し等がなされることなくそのまま放置され、主に自然堆積によって埋没したと考えられる。なお、埋土の土質は比較的よくしまった粘質土であり、細かな基盤層のブロックを含んでいる。

遺物は、弥生土器を中心に比較的多く出土した。残存状況の悪いＰ２区を除く各調査区から出土しており、今回の調査で合計コンテナ約６箱分を数える。遺物を図示していないＰ１区は、Ｐ２区と同様の残存状況で、土器細片の出土のみである。また、粘土採掘坑内における土

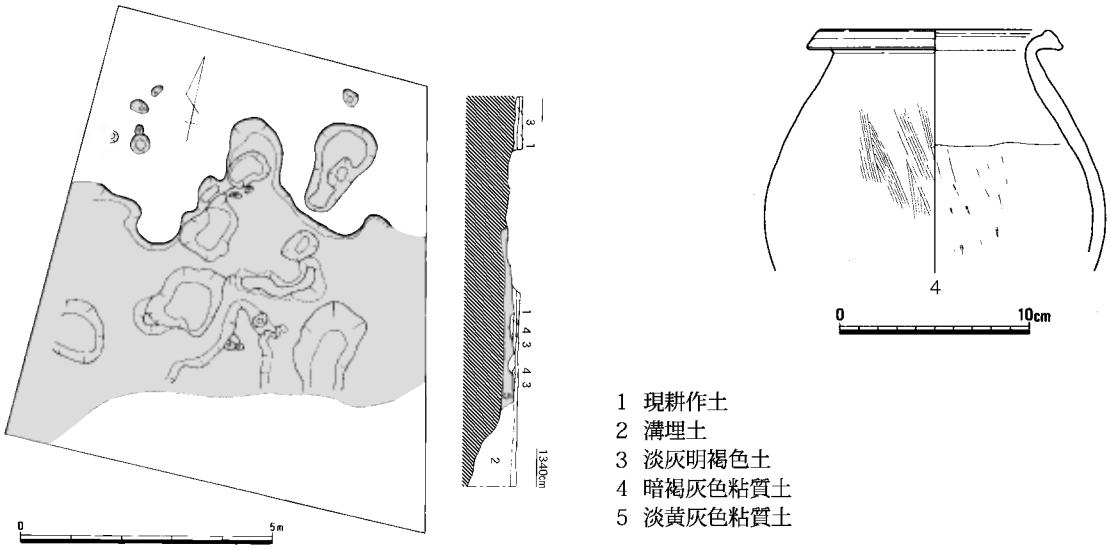


第15図　Ｐ２区粘土採掘坑（1/150）

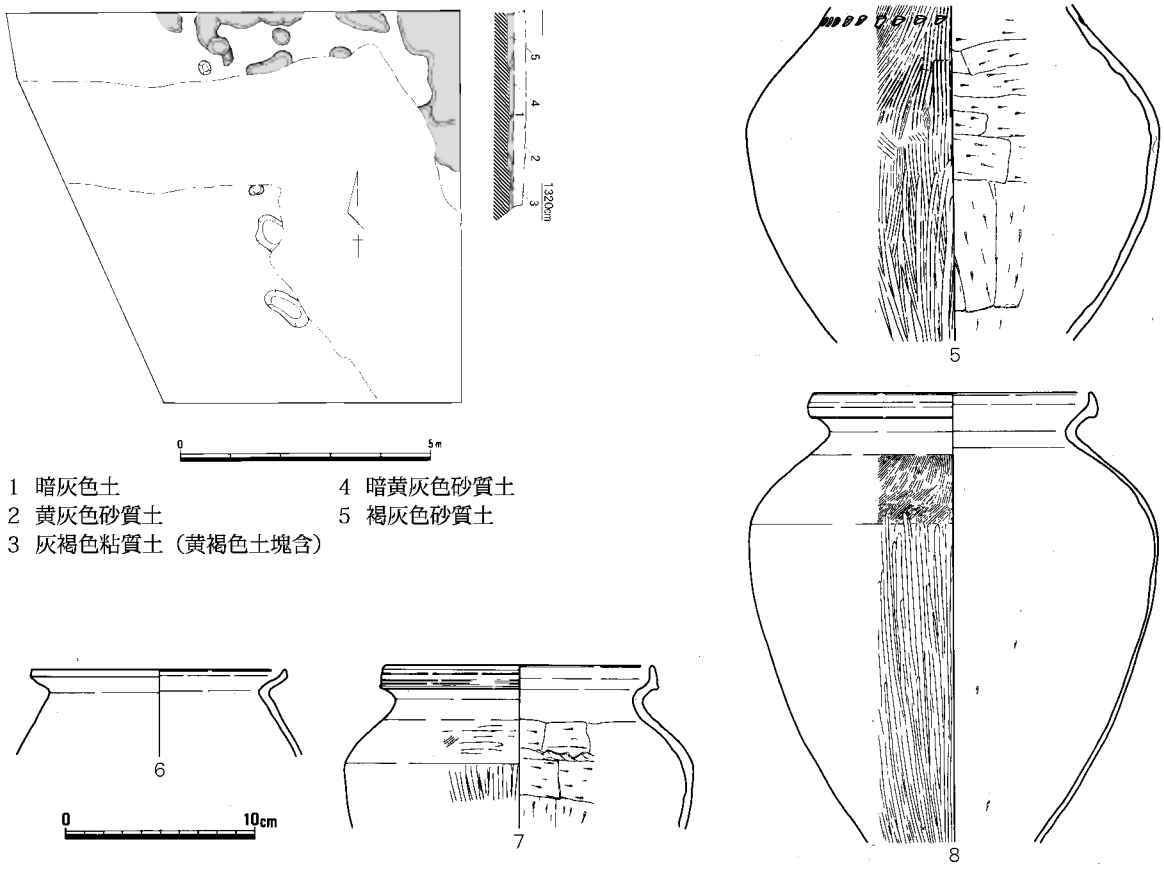
器の出土層位には特に偏りはなく、検出面付近で出土するものもあれば、底部に貼り付くように出土するものもある。

各調査区から出土した弥生土器の器種は、壺・甕・高杯があり、器種構成は通常の集落遺跡と大差ない。中でも甕が最も多く、煤が付着するもの（**13・45・46・52・54**）もある。

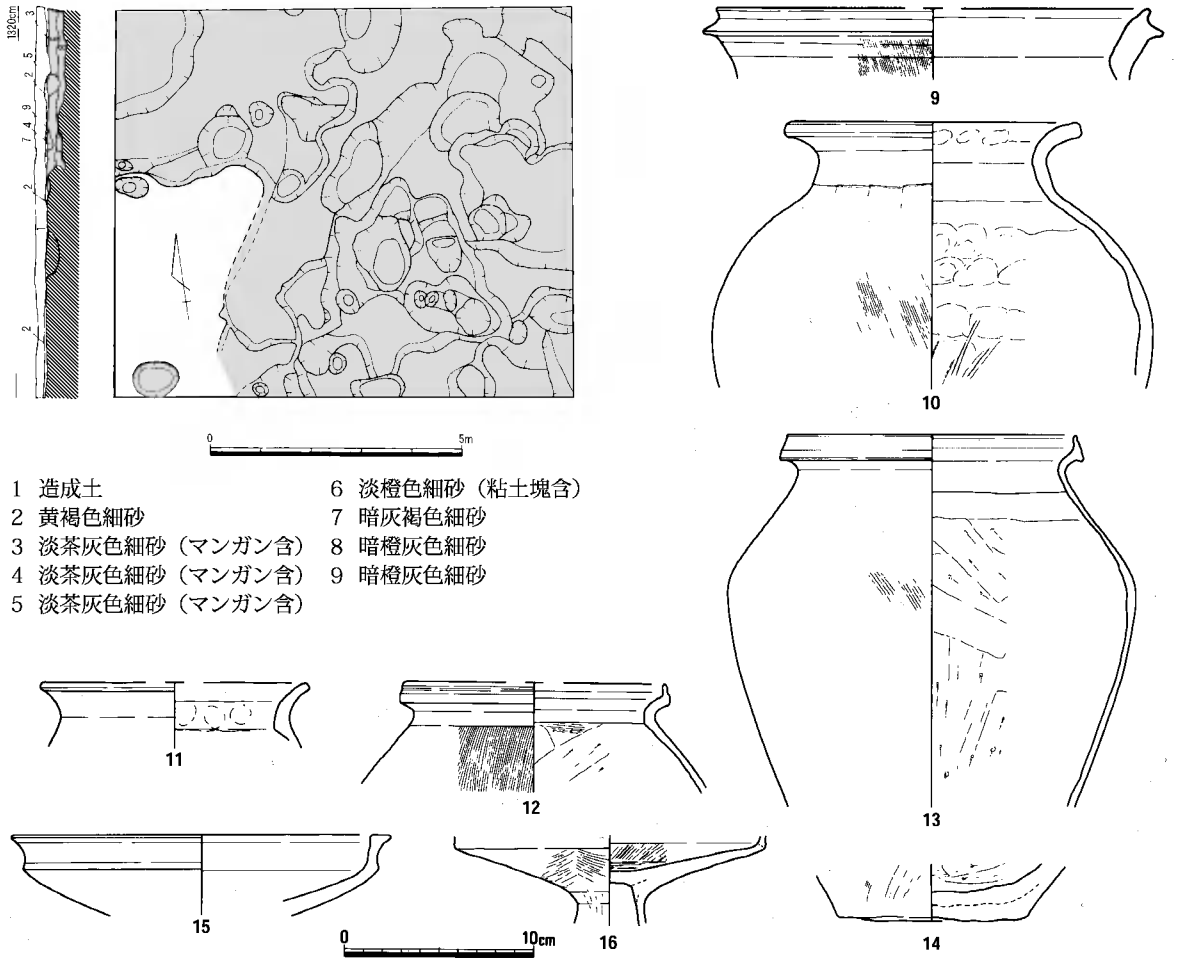
土器の示す時期は、県報告121では弥生時代後期前半から古墳時代初頭とされているが、今回の調



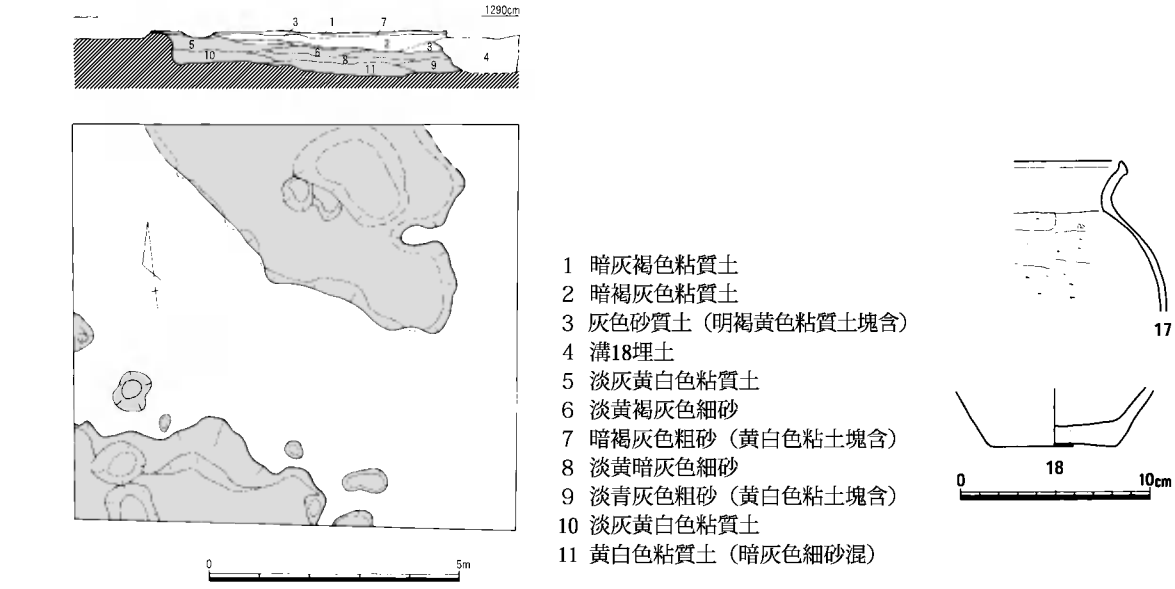
第**16**図　Ｐ３区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）



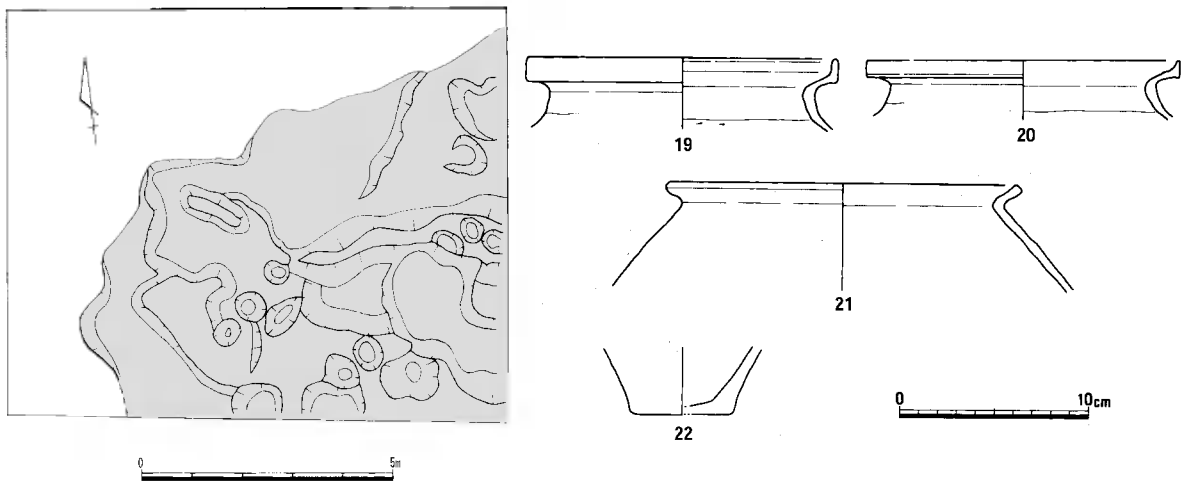
第**17**図　Ｐ４区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/40**）



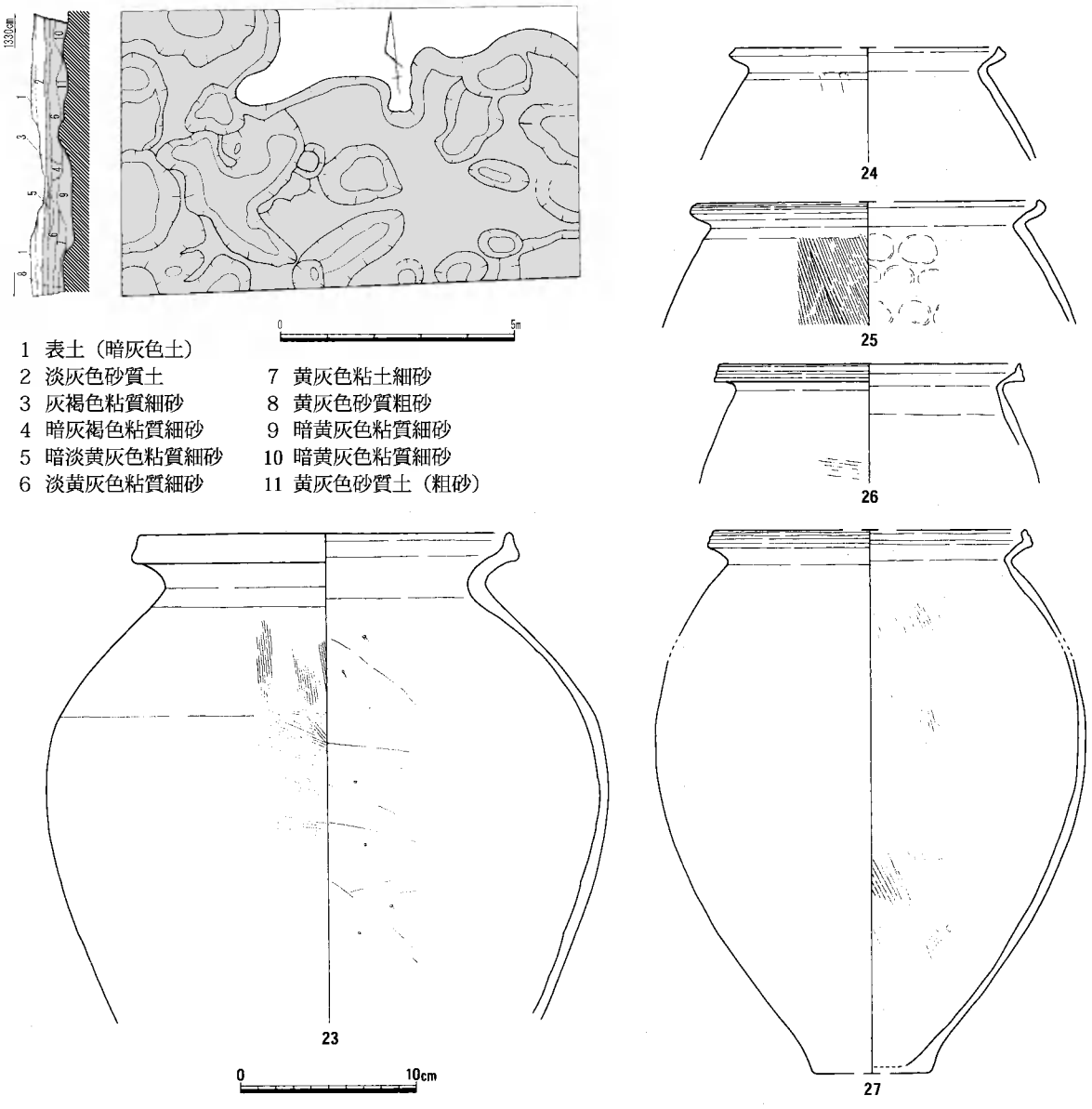
第**18**図　Ｐ５区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）



第**19**図　Ｐ６区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）

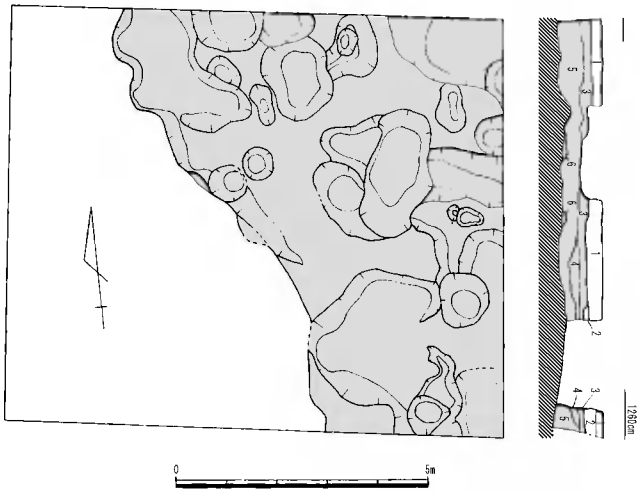


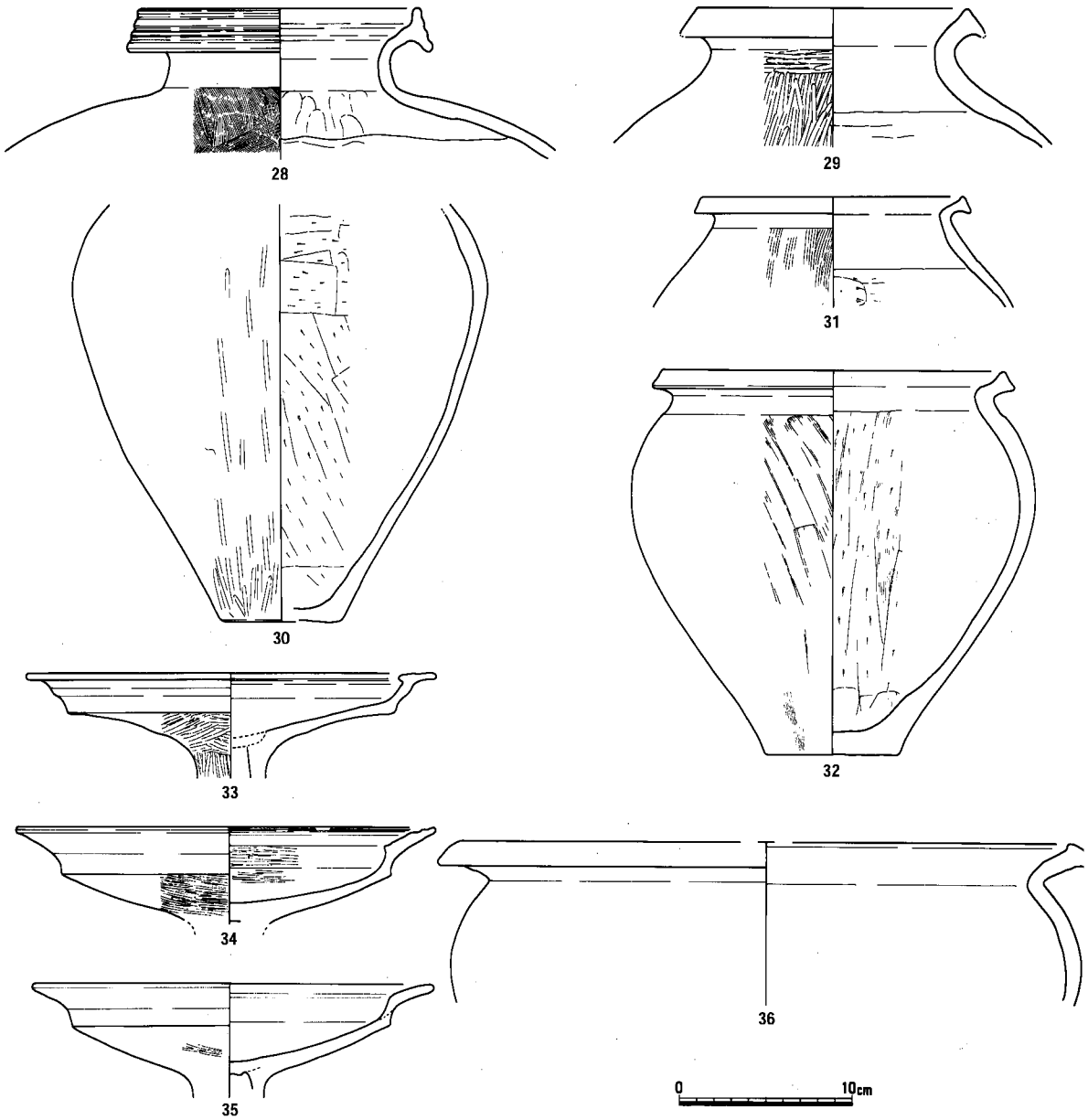
第**20**図　Ｐ７区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）



1　表土（暗灰色土）
2　淡灰色砂質土
3　灰褐色粘質細砂
4　暗灰褐色粘質細砂
5　暗淡黄灰色粘質細砂
6　淡黄灰色粘質細砂
7　黄灰色粘土細砂
8　黄灰色砂質粗砂
9　暗黄灰色粘質細砂
10　暗黄灰色粘質細砂
11　黄灰色砂質土（粗砂）

第**21**図　Ｐ８区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）





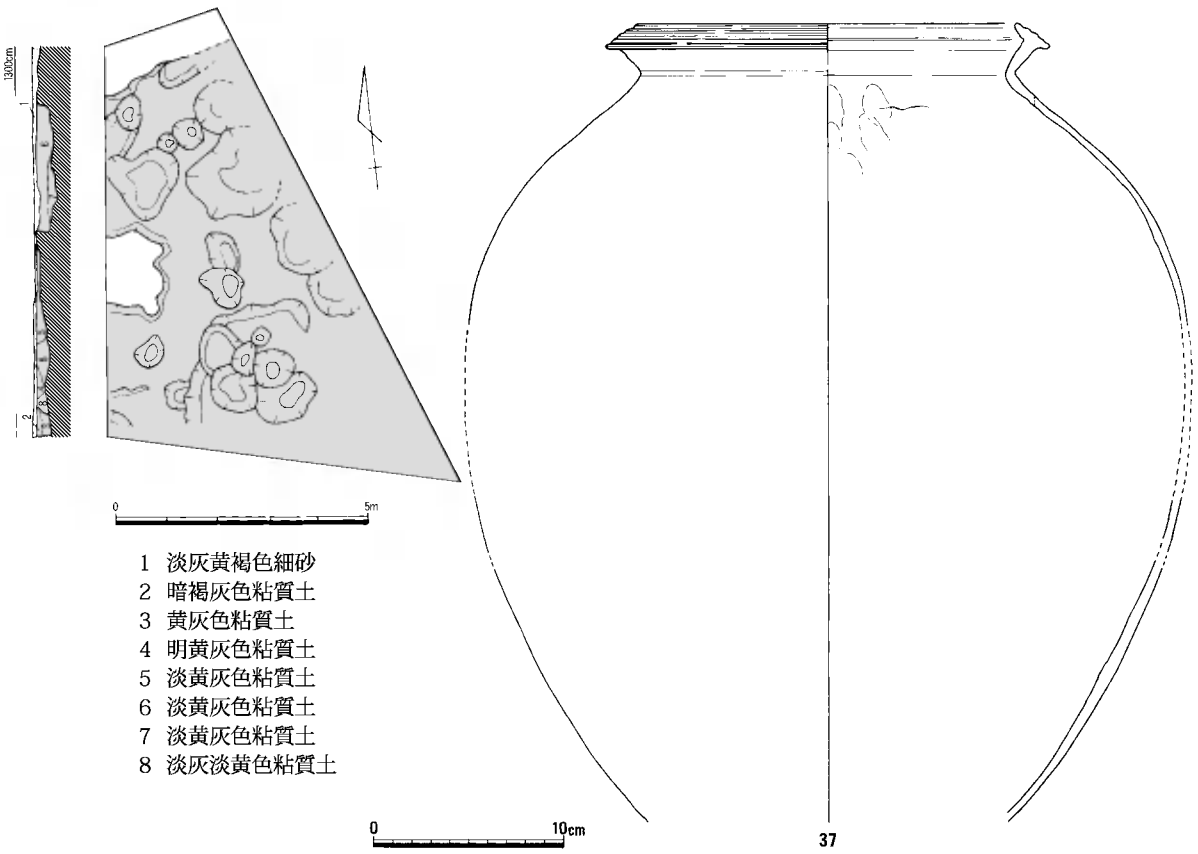
第**22**図　Ｐ９区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）

査ではそれより古い弥生時代中期後葉の土器が出土しており、一方古墳時代まで降ると考えられる土器は確認できなかった。上述した採掘坑の埋没状況から考えると、ある程度時期幅のある遺物が埋土中に混入する可能性があり、出土遺物がそのまま採掘時期を示すとは限らないが、Ｐ８区で中期後葉の土器が比較的まとまって出土しているなど(**24**～**27**)、採掘時期が弥生時代中期までさかのぼる可能性は高い。また、Ｐ15区では完形の甕(**54**)が粘土採掘坑底部に接する状態で出土しており(第28図・写真図版２－３)、採掘時期を示していると考えられる。同じくＰ15区から出土している甕(**52・53**)とともに、弥生時代後期末頃の年代が与えられよう。

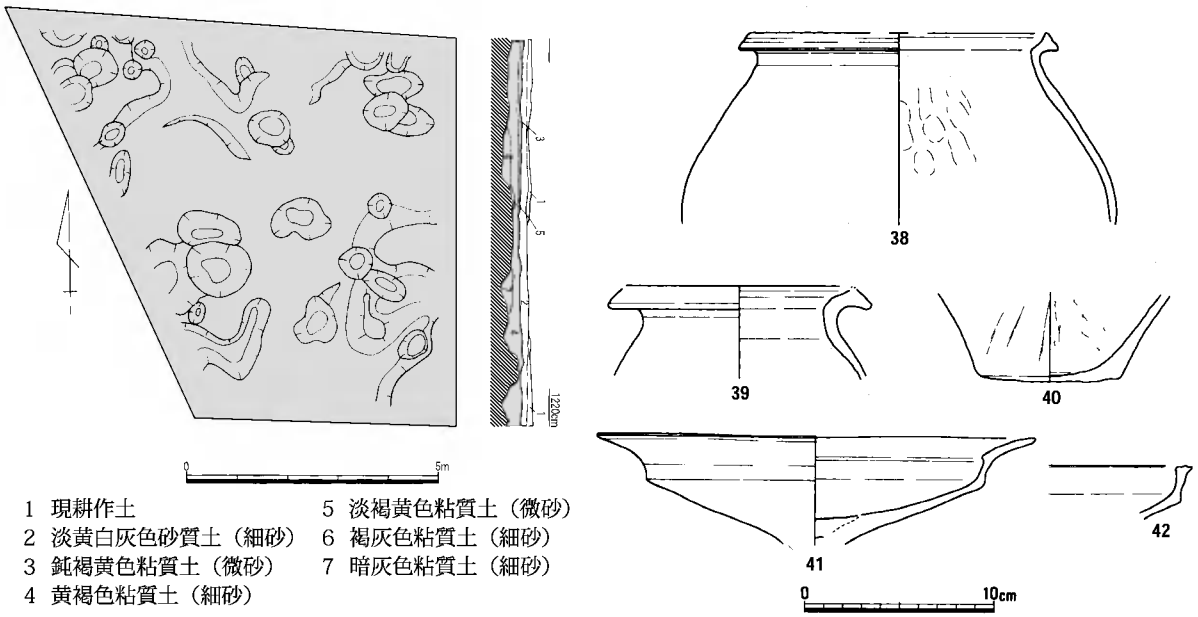
以上のように、出土土器から、粘土採掘坑は弥生時代中期後葉から後期末にわたって掘削されたと考えられ、中でも後期前半頃の遺物が多く認められる。なお、県報告121において、出土土器の示す時期から、採掘範囲がおおむね西から東へ移動したと推定されているが、今回の調査においてもその傾向は大筋においてうかがえるようである。ただし西から東へ順次掘り進めていったといえるほど単純な状況ではない。

このような土器が粘土採掘坑内から多数出土する意味は明らかでない。Ｐ15区において採掘坑底部に接して完形の甕が出土している状況などは、粘土採掘に伴う祭祀行為を示している可能性もあるが、上述のように器種構成などは通常の集落遺跡と変わるものでなく、積極的な根拠がない。

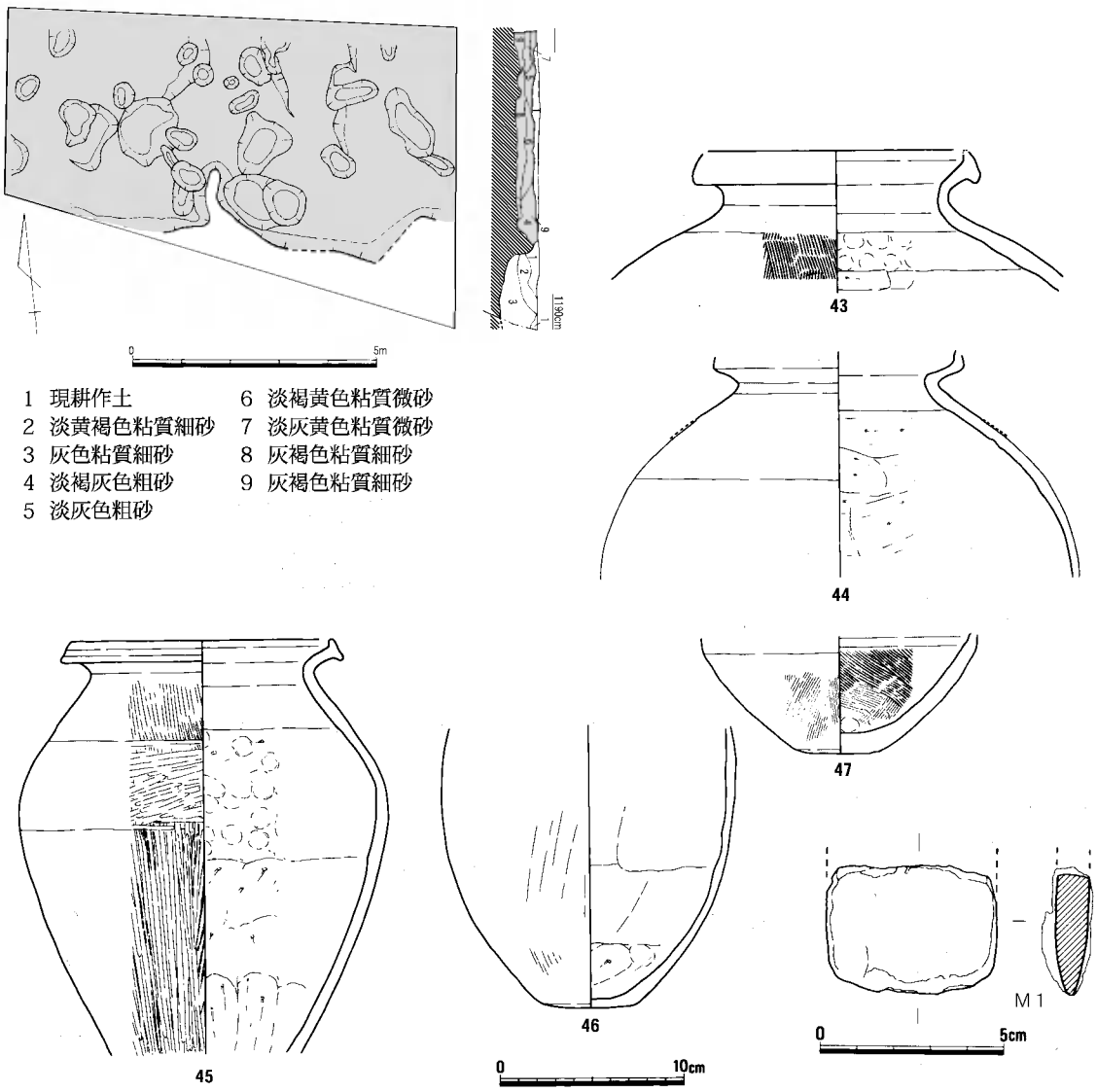
なお、土器以外の出土遺物として、Ｐ12区の粘土採掘坑内から板状鉄斧Ｍ１が出土している。基部を欠損しており、幅46㎜、厚さ約９㎜を測る。粘土採掘に使用されたものかどうかは分からないが、その可能性をもつ重要な資料である。



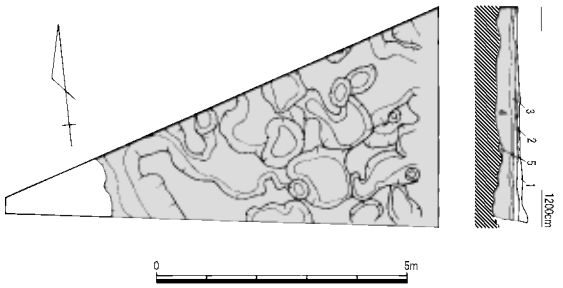
第**23**図　Ｐ**10**区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）



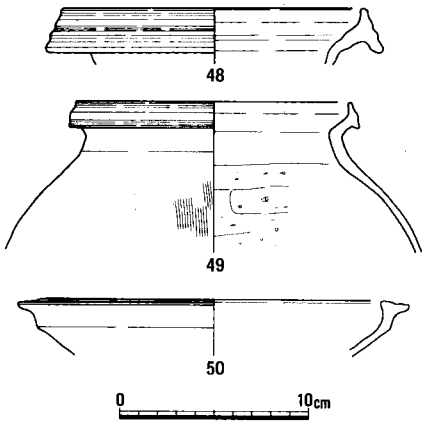
第**24**図　Ｐ**11**区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）



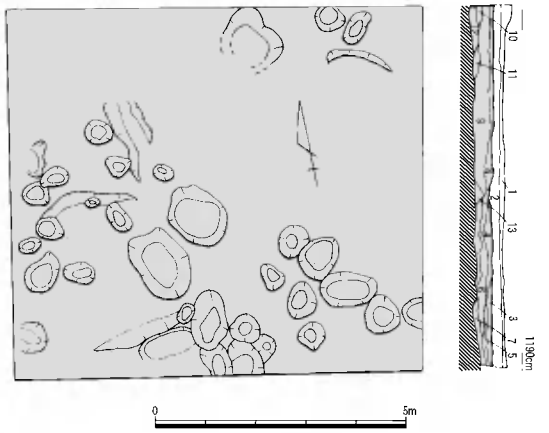
第**25**図　Ｐ**12**区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**・**1/2**）



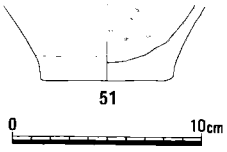
1　現耕作土
2　淡灰淡褐色細砂
3　淡灰褐黄色粘質細砂
4　褐灰色粘質細砂
5　淡灰淡黄色粘質微砂



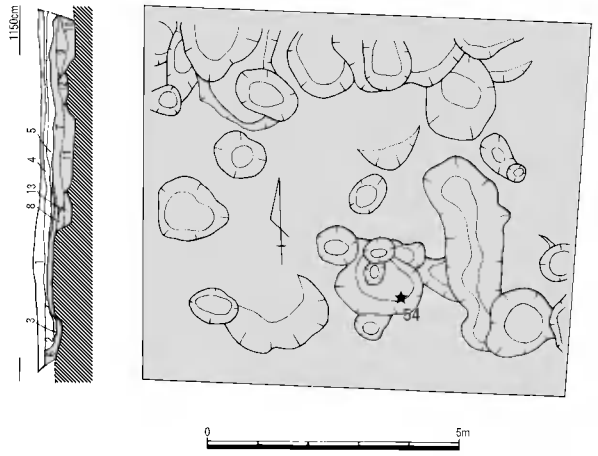
第**26**図　Ｐ**13**区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）



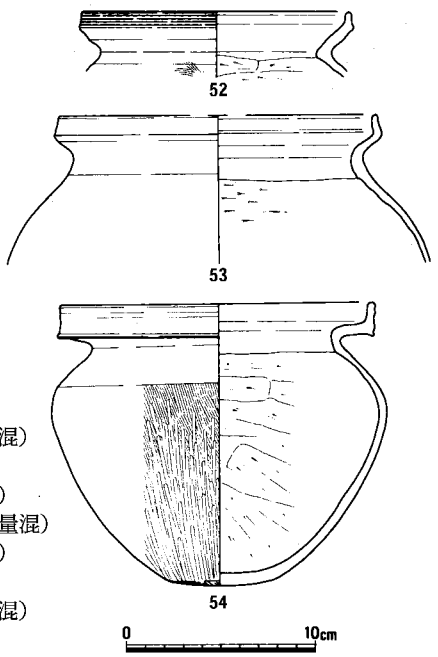
1　現耕作土
2　淡褐淡灰色粘質細砂
3　黄白灰色細砂
4　黄褐色粘質細砂
5　淡灰淡褐色細砂
6　暗灰褐色粘質細砂
7　黄灰色粘質細砂
8　淡褐色粘質細砂
9　暗灰褐色粘質細砂
10　暗褐灰色粘質細砂
11　淡黄灰色粗砂
12　淡灰淡黄色細砂
13　黄褐色粘質細砂



第**27**図　Ｐ**14**区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）



1　現耕作土
2　暗灰色粗砂
3　灰色細砂
4　灰黄色粘質土
5　灰色粗砂
6　灰褐色粘質土（明黄色粘質土塊混）
7　暗灰褐色粘質土（明黄色粘質土塊混）
8　青灰色粘質土
9　青灰色粘質土（明黄色粘質土塊混）
10　青灰色粘質土（明黄色粘質土塊少量混）
11　暗灰色粘質土（明黄色粘質土塊混）
12　灰色粘質土（明黄色粘質土塊混）
13　灰色粘質土（明黄色粘質土塊少量混）



第**28**図　Ｐ**15**区粘土採掘坑（**1/150**）・出土遺物（**1/4**）

（２）溝

ここに挙げる溝は、すべて弥生時代の遺構としているが、遺物を全く伴わず所属時期の判断が難しいものも多い。それらについては埋土の状況や検出層位、周辺の遺構等の状況などから推定した。

溝の方向は北西から南東の方向に流れるものがほとんどで、地形に合わせて溝の掘削を行っているようであり、その配置に計画性は認められない。溝の規模も大小様々であるが、溝４は最も大規模なもので、遺物も多く出土した。

溝１（第８・29図、写真図版２）

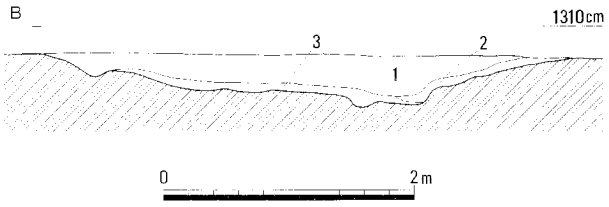
Ｐ１区で検出した溝である。西方に所在する丘陵の裾に沿うように、北西から南東方向の流れをもつ。幅約４ｍ、深さ30～40㎝で、幅に比べて深さの浅い溝であるが、上部を後世に削平されている可能性が高い。溝底面付近は鉄分の沈着が著しく、埋土の粗砂が赤みを帯び強く固まっていた。遺物は出土していないが、埋土の状況や検出面から弥生時代の遺構と推定した。なお、南接する前回の調査区(県報告121)では検出されておらず、急激に東に屈曲するか、あるいは削平を受け消滅しているものと考えられる。

溝２（第８・30図）

Ｐ４区で検出した、北西から南東に向かって流れる溝である。溝１とほぼ平行している。位置関係から県報告121の溝１と同一の溝と考えられる。溝底面の形状は、２条の溝が切り合ったような状況を示すが、埋土の土層断面からは１条の溝と判断される。Ｐ４区における最大の深さは約50㎝である。出土遺物は**55**の長頸壺があり、弥生時代後期前半～中葉の時期を示す。

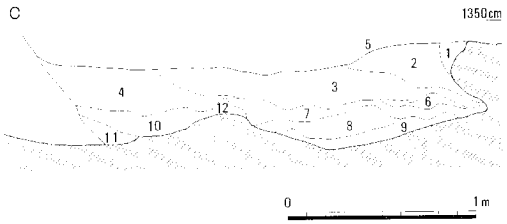
溝３（第８・31図）

Ｐ16区、Ｐ17区で検出した溝であり、縄文時代の河道１と重複している。位置関係から県報告121の溝５・６につながるものと考えられるが、遺構の状況はやや異なる。幅約2.5m、深さ約80㎝を測り、遺物は出土していないが、縄文晩期の河道を切っていることから、弥生時代と推定している。ただし、縄文

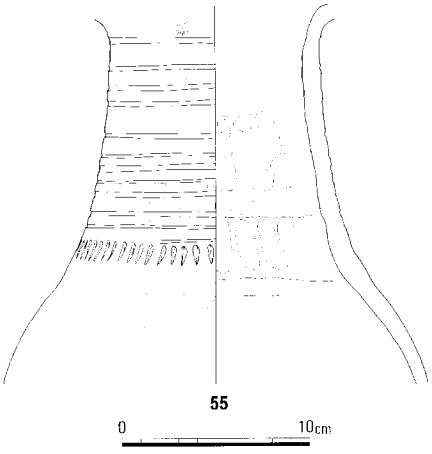


1　灰色粗砂　　3　赤褐色粗砂
2　橙灰色粗砂（鉄分沈着）

第**29**図　溝１（**1/60**）



1　黄灰色砂質土　　7　暗青灰色砂質土（炭混）
2　暗灰色粘質土　　8　黄褐色～灰色粗砂
3　黄褐色～灰色粗砂　9　黄橙色粗砂
4　灰色細砂　　10　灰白色粗砂
5　青灰色粘質土　　11　灰褐色粗砂
6　黄灰色砂質土　　12　橙灰色細砂

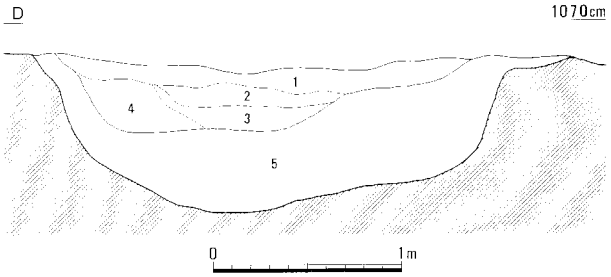


第**30**図　溝２（**1/40**）・出土遺物（**1/4**）

時代の河道１の項で述べたとおり、溝３は河道１の埋土最上層に覆われており、河道埋没の最終過程に形成された自然の小河道の可能性も否定できない。

溝４（第９・32図、写真図版３）

Ｐ18区、Ｐ19区およびＰ21区、Ｐ22区で検出された。埋土の状況や出土遺物の時期の共通性などから同一の溝と推定しており、さらに県報告121の溝８・９とつながるものと考えられる。



1　黒褐色砂質土　　4　灰色微砂
2　黒色砂質土　　5　灰～黒色細砂～粗砂
3　黒灰色砂質土

第31図　溝３（1/40）

Ｐ18区ではやや規模が小さいが、Ｐ21区では推定幅約６ｍ、深さ約1.2ｍを測る大規模な溝となる。Ｐ19区、Ｐ22区では肩部をわずかに検出したのみである。

遺物はＰ21区を中心に多く出土している（第33図）。図示したもののうち**60・63・64**はＰ18区出土、他はＰ21区出土である。**56**は櫛描沈線文、浮文、刺突文等で装飾された壺である。**57・58**は口縁部に貼付突帯文をもつ壺、**60～62**も櫛描沈線文、貼付突帯文等で装飾された壺である。**63**は逆「Ｌ」字状の口縁部と櫛描沈線文をもつ甕である。以上のように溝４出土の土器は、弥生時代中期前葉ないし中葉の時期を示している。

溝５（第９・34図）

Ｐ22区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝10と同一と考えられる。検出面での幅約３ｍ、深さ約30㎝を測り、埋土は黄褐色細砂であった。出土遺物はないが、溝４に切られていることから、弥生時代中期以前の遺構と推定される。

溝６（第９・34図）

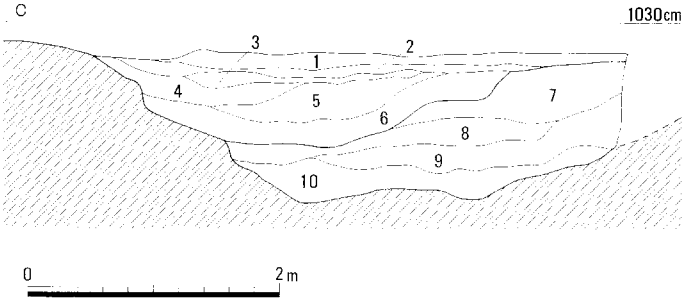
Ｐ22区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝13と同一と考えられる。検出面での幅約60㎝、深さ約15㎝を測り、埋土は黄灰色細砂であった。出土遺物はないが、溝５に切られていることからさらに古い時期のものと考えられる。

溝７（第９・35図）

Ｐ23区、Ｐ24区で検出した溝で、遺構の状況や位置関係から県報告121の溝11と同一と考えられる。検出面での幅約80㎝、深さ約40㎝を測る。出土土器から、弥生時代中期に位置づけられる。

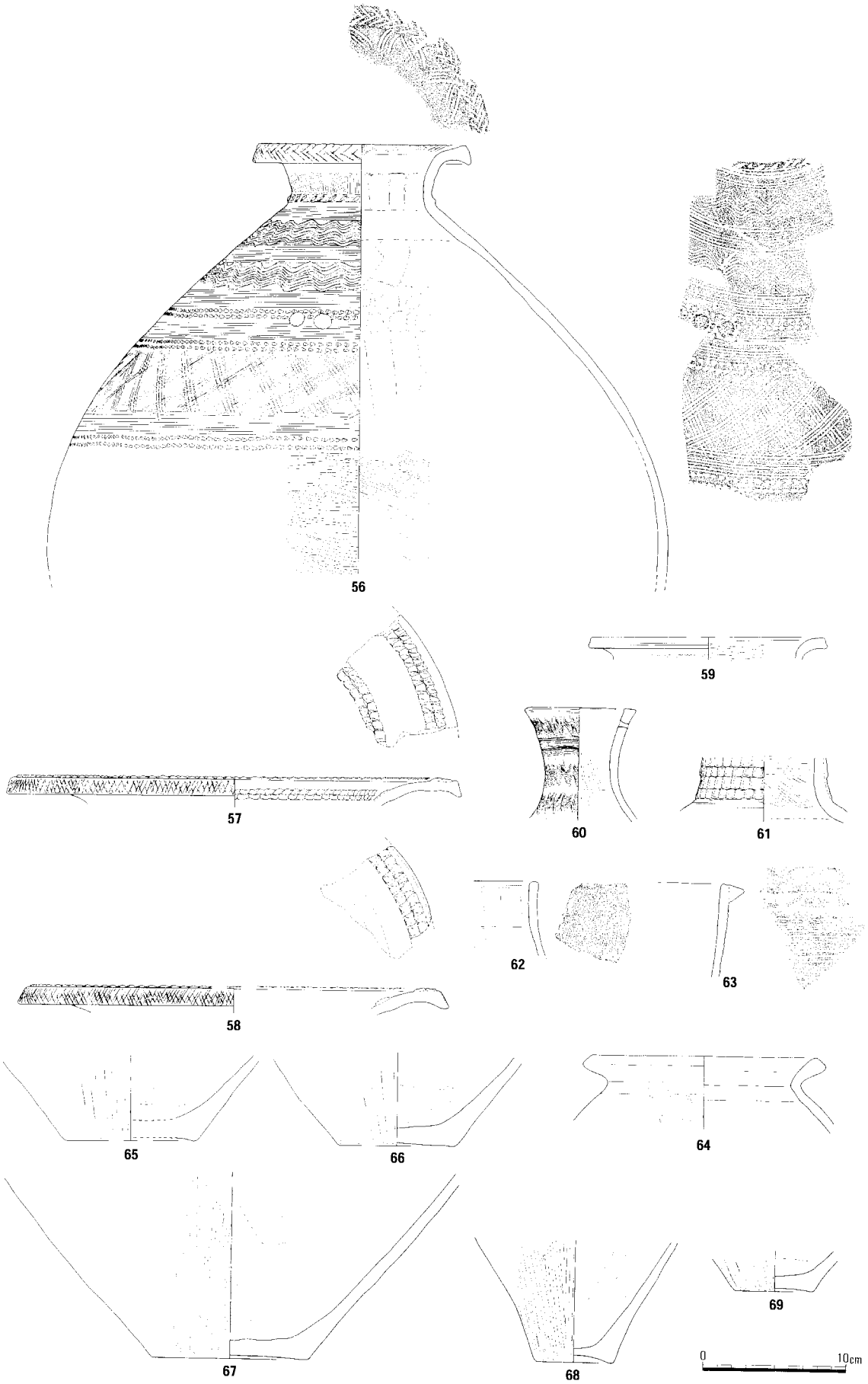
溝８（第９・36図）

Ｐ32区、Ｐ33区で検出した溝で、遺構の状況や位置関係から県報告121の溝21と同一と考えられる。



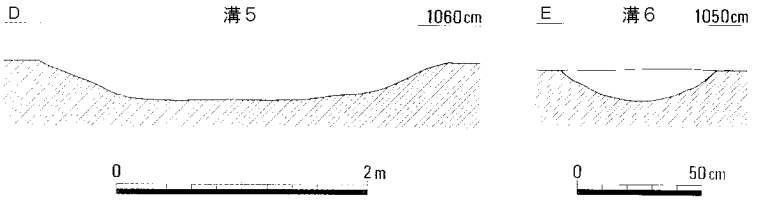
1　橙褐色砂質土
2　灰黒色砂質土
3　灰色粗砂
4　灰黒色砂質土
5　黒灰色微砂（部分的に明灰色粗砂混入）
6　暗灰色微砂（部分的に明灰色粗砂混入）
7　灰黒色微砂（部分的に明灰色粗砂混入）
8　橙色～明灰色粗砂
9　黒灰色細砂（部分的に橙～明灰色粗砂砂混入）
10　黒灰色微砂（植物繊維多く含む）

第32図　溝４（1/60）



第**33**図　溝４出土遺物（**1/4**）

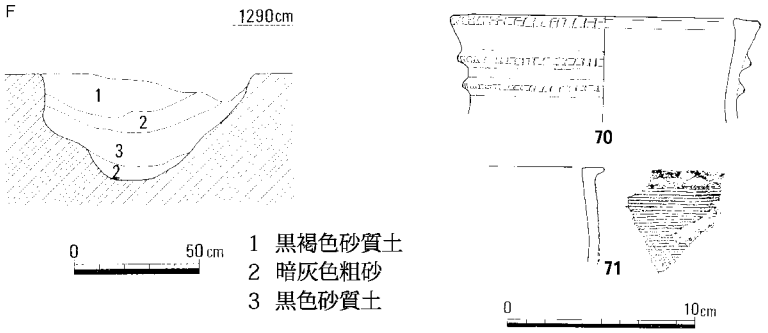
検出面での幅約90cm、深さ約20cmを測り、埋土は灰褐色粗砂である。出土遺物はないが、検出層位は中世よりも古く、弥生時代の可能性が考えられる。



第34図　溝５（1/60）・溝６（1/30）

溝９（第９・36図）

Ｐ33区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝18・23と同一と考えられる。深さ約40cmを測り、埋土は灰色粗砂である。今回の調査区での出土遺物はないが、県報告121の溝18では弥生時代後期前半の土器が出土しており、その時期の遺構と考えられる。



第35図　溝７（1/30）・出土遺物（1/4）

溝10（第９・36図）

Ｐ34区、Ｐ35区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝19・27と同一と考えられる。幅約１m、深さ約50cmを測る。検出層位から弥生時代と考えられる。

溝11（第10・36図）

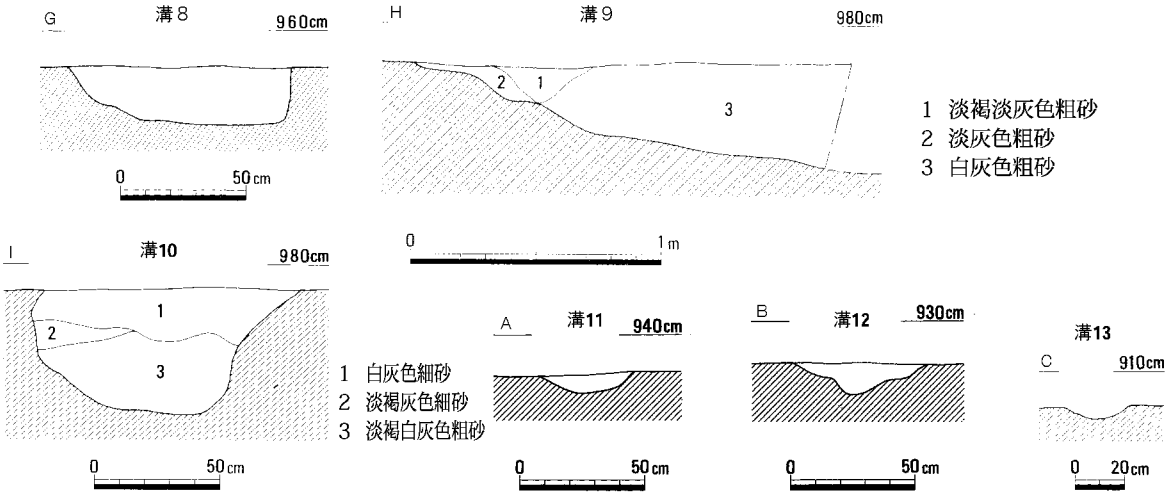
Ｐ36区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝68と同一と考えられる。幅約30cm、深さ約10cmを測り、埋土は灰色粗砂である。検出層位から弥生時代と考えられる。

溝12（第10・36図）

Ｐ37区、Ｐ38区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝74と同一と考えられる。幅約50cm、深さ約10cmを測り、埋土は灰褐色粗砂である。検出層位から弥生時代と考えられる。

溝13（第10・36図）

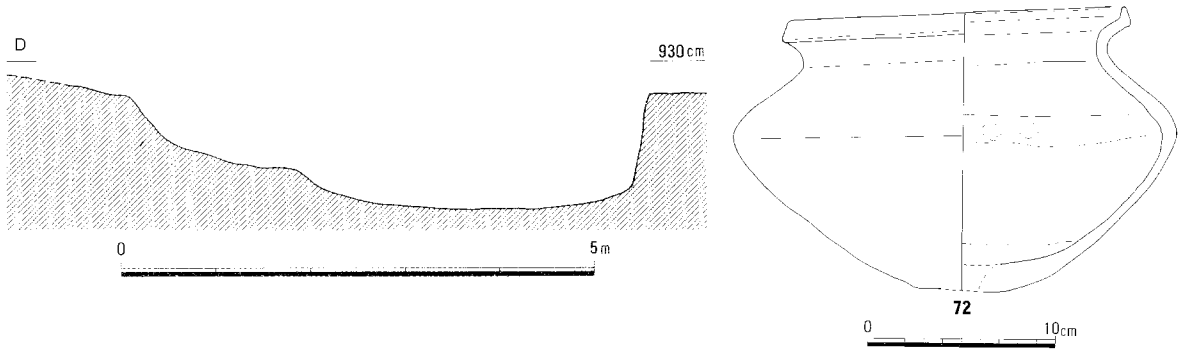
Ｐ38区で検出した溝で、検出面での幅約15cm、深さ約５cmを測る。埋土は灰褐色細砂で、出土遺物はない。周辺の状況等から弥生時代と考えられる。



第36図　溝８～13（1/30）

（３）くぼみ（第10・37図）

Ｐ36区北西部に検出した大きなくぼみで、性格は明らかでない。検出面からの深さは約1.2ｍで、埋土は灰色粗砂である。東端部は水流でえぐられたような状況を示し、人工的な遺構とは考えにくい。上面付近からは弥生土器の鉢(**72**)が伏せられた状況で出土した。摩滅が著しいがほぼ完形である。弥生時代後期後半に位置づけられよう。



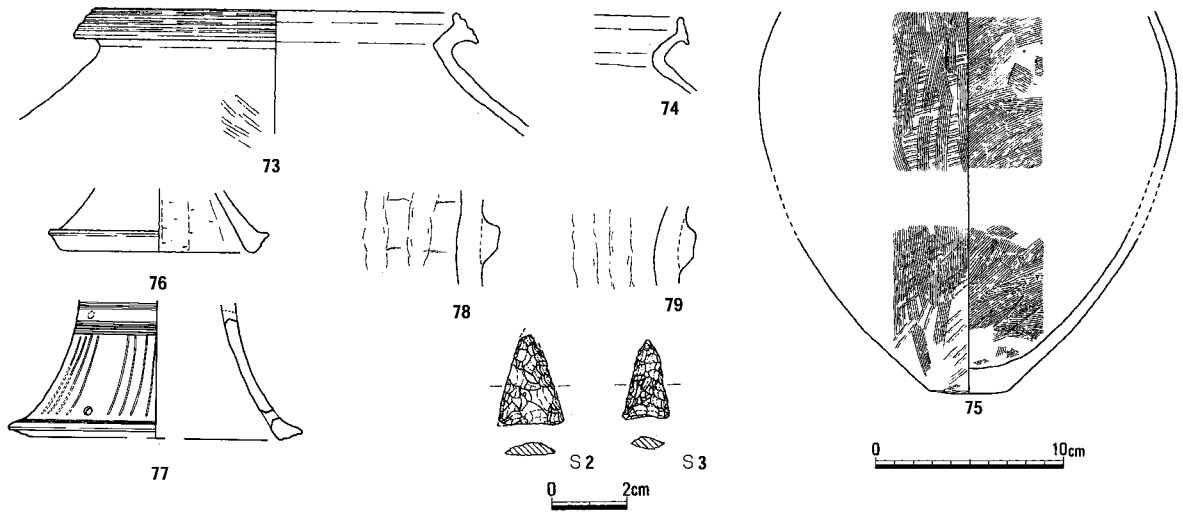
第**37**図　くぼみ（**1/80**）・出土遺物（**1/4**）

（４）遺構に伴わない遺物（第38図）

73～**77**は弥生時代中期～後期の土器である。**73**はＰ６区の粘土採掘坑周辺から、**74**はＰ31区の中世溝35から出土した。**75**はＰ35区の中世の河道４から出土した。外面にはタタキとハケメ、内面にはハケメとヘラケズリが認められ、弥生時代中期の甕と考えられる。内外面に煤が付着している。**76・77**はＰ20区の包含層からの出土で、弥生時代中期末から後期初頭の高杯脚部である。

78・79はＰ18区包含層中より出土した円筒埴輪片である。付近に古墳の存在した形跡はなく、また摩滅した小片であるため、位置を移動していると考えられる。当遺跡の西側丘陵に所在する西山古墳群に伴うものであろうか。

Ｓ２・Ｓ３はサヌカイト製の石鏃で、Ｓ２はＰ35区の河道４から、Ｓ３はＰ７区の包含層から出土している。いずれも弥生時代の資料と考えられる。



第**38**図　遺構に伴わない遺物（**1/4**・**1/2**）

第４節　古代以降の遺構と遺物

（１）土壙

服部遺跡で検出された土壙は、以下に示す計７基である。これら以外にも小規模なくぼみやたわみは多数検出されているが、人工的な遺構と考えられるもののみを取り上げた。これらは検出面や埋土等の状況からすべて中・近世に属するものと考えられ、性格、機能等については不明なものがほとんどである。

土壙１（第８・39図）

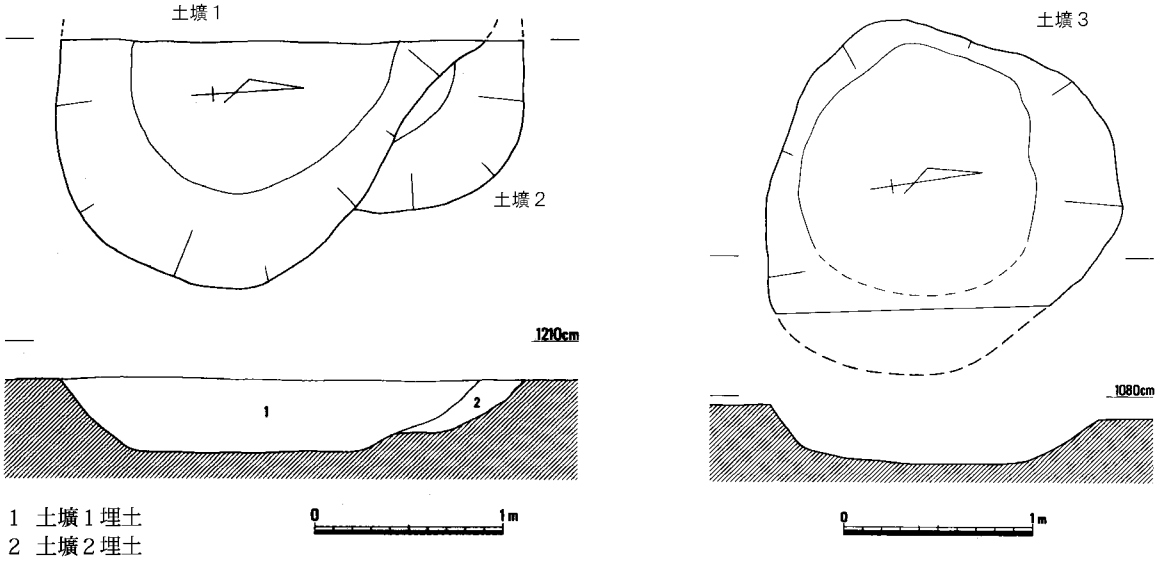
Ｐ９区西端で検出し、土壙２と重複している。約半分は調査区外にあたる。平面形は楕円形と推定され、検出した部分から推定すると、長径３ｍ前後、短径２ｍ前後、深さは約40㎝を測る。土壙の壁の立ち上がりは緩やかで、底部はほぼ平坦である。埋土は明灰色細砂で、分層はできなかった。出土遺物は皆無であるが、埋土の状況から中世と推定している。遺構の性格等は不明である。

土壙２（第８・39図）

Ｐ９区西端で検出した。半分以上を土壙１に切られ、調査区外の部分もあるため、形態は明確でないが、土壙１と同様に楕円形を呈するものと思われる。規模は不明であるが、深さは約30㎝で土壙１よりやや浅い。土壙１と同様、壁の立ち上がりは緩やかで、底部は平坦である。埋土は灰色細砂である。出土遺物は皆無で、切り合い関係から土壙１より古いことが分かるが、これも中世に属する遺構と推定している。遺構の性格等は不明である。

土壙３（第８・39図）

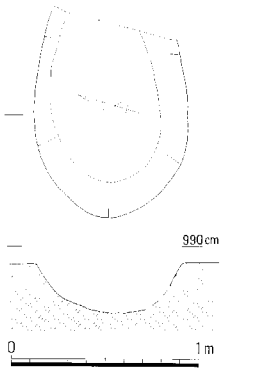
Ｐ15区南東隅付近で検出した。ごく一部が調査区外になるが、径約２ｍ弱の略円形を呈する土壙である。底面はほぼ平坦で、径1.2～1.3ｍの円形を呈する。深さは約30㎝が残存していた。埋土は灰白色細砂で、出土遺物はない。検出面や埋土の状況から、近世以降の野つぼの跡の可能性がある。



第39図　土壙１～３（1/40）

土壙４（第９・40図）

Ｐ27区で検出した。東西約130㎝、南北約80㎝、深さ約30㎝の楕円形を呈する土壙である。埋土は暗灰色微砂で、出土遺物はない。埋土の状況から中世と推定している。遺構の性格等は不明である。



第40図　土壙４（1/40）

土壙５（第９・41図）

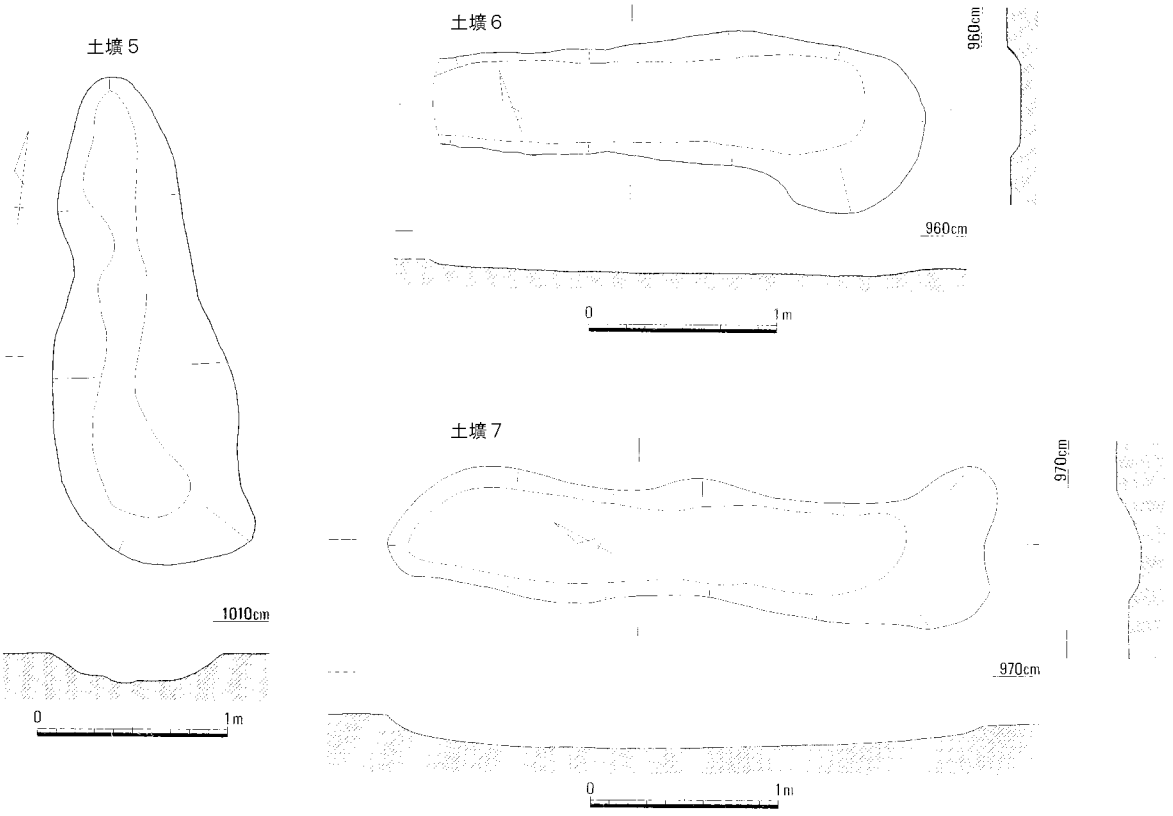
Ｐ28区で検出した。平面形は南北に細長い形状を示し、南北長約2.6m、東西幅約１ｍを測る。深さは約15㎝が残存していた。底面はほぼ平坦で、底面での南北長は2.2ｍである。埋土は灰色細砂であり、出土遺物はない。時期は、埋土の状況等から中世と推定しているが、遺構の性格は不明である。

土壙６（第９・41図）

Ｐ35区で検出した。平面形は東西に細長い形状を示し、検出面では不整形であるが底面は比較的整った隅丸長方形を呈する。検出面での規模は、長さ推定約2.8ｍ、幅約50～70㎝で、深さは５㎝程度が残存していた。底面は平坦で、底面での規模は、長さ推定約2.4ｍ、幅約40㎝である。埋土は灰色細砂であり、出土遺物はない。時期は中世と推定しているが、遺構の性格は不明である。

土壙７（第９・41図）

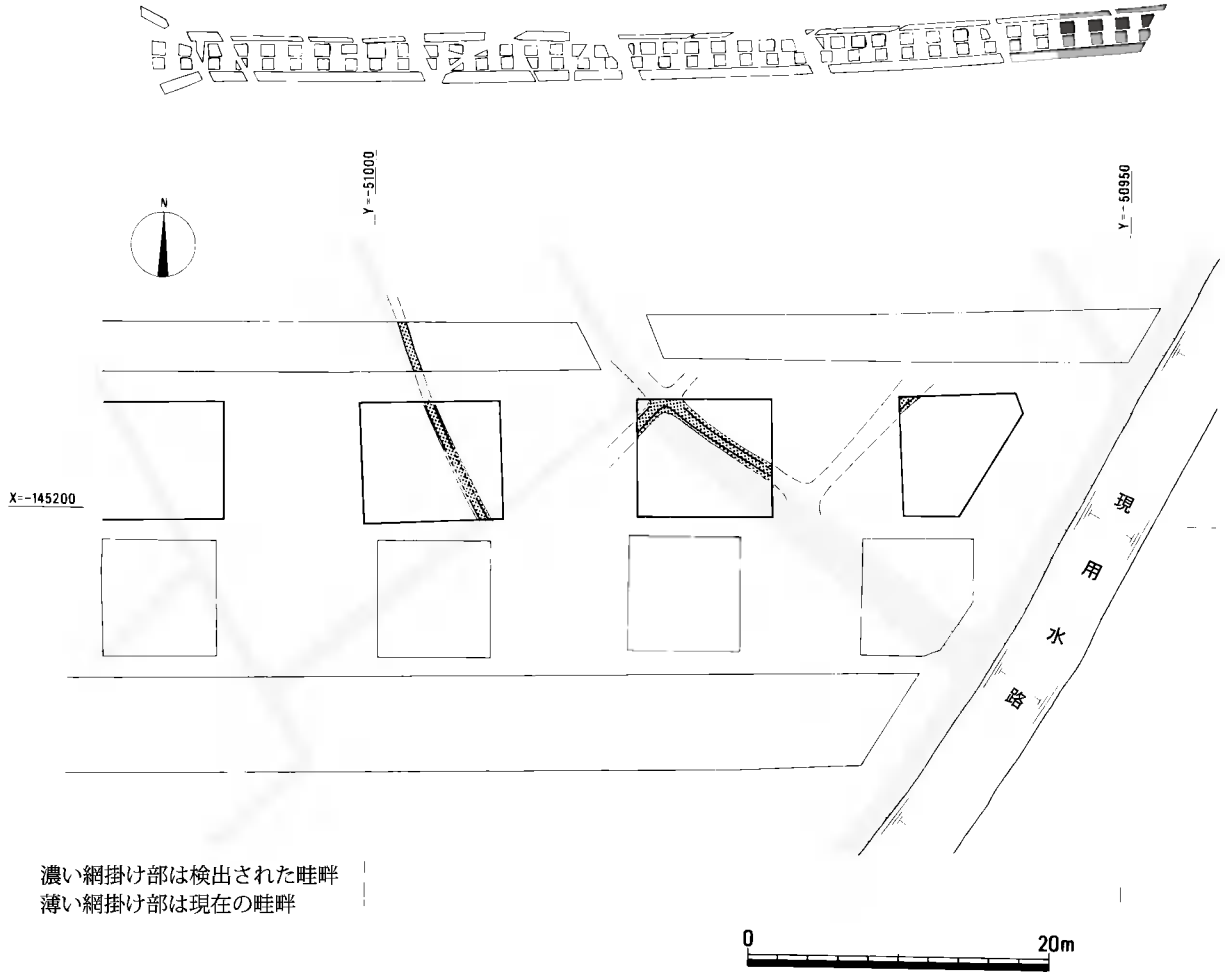
土壙６と同じくＰ35区で検出した。土壙６と形状が類似しているが、主軸は南北に近く方向を異にする。検出面での規模は長さ約3.2ｍ、幅約60～70㎝、深さは10㎝程度が残存していた。底面は平坦で、底面での規模は、長さ約2.6ｍ、幅約40㎝である。埋土は灰色細砂であり、出土遺物はない。土壙６と同様に、埋土の状況等から中世と推定しているが、遺構の性格は不明である。



第41図　土壙５～７（1/40）

（２）水田（第10・42図）

服部遺跡の東端付近、Ｐ38区～Ｐ40区において、水田層とそれに伴う畦畔を検出した。畦畔は幅60～80cm程のもので、Ｐ38区では痕跡が認められたのみであるが、Ｐ39区、Ｐ40区では高さ10cm程度が残存していた。この水田に伴う遺物はないが、水田層は中世の遺構面よりも下位にあり、また水田層中に弥生土器の細片を含むことから、古墳時代ないし古代に位置づけられると推定される。なお、検出された畦畔は現在の水田畦畔とよく一致し(第42図)、現在付近に見られる条里地割りの基礎をなす水田遺構ということができる。そのような状況も考え合わせると、古代の時期を想定するのが妥当と考えられる。



第42図　水田１（1/500）

（３）溝

ここに挙げる溝は、いずれも中・近世に属すると推定されるものである。特に中世のものが多く、この時代の条里地割り等を考える上で重要である。検出された中世を中心とする溝は、北西から南東に流れるものが最も多く、次いでこれに直交する方向のものも目立つ。それらの中には現在の水田区画と平行するものも多く、中世段階にも同様の条里地割りが機能していた可能性がある。西から順に条里地割りと平行するものを挙げると、溝14・15・19・20・21・22・24・27・28・34・35・39の12条である。特に溝19と溝24間の距離は約50mで、およそ半町分に相当する。

以下、個別の溝について概要を述べる。

溝**14**（第８・43図）

Ｐ３区南端部で検出した。位置関係から県報告121の溝31と同一と考えられ、前回調査の成果と合わせて、幅約３ｍ、深さ約90㎝に復元できる。出土遺物はないが、中世と推定している。

溝**15**（第８・43図）

Ｐ５区南西部で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝40と同一と考えられる。幅約90㎝、深さ約35㎝を測り、埋土は暗灰色細砂である。埋土の状況から溝の時期は中世と考えられる。

溝**16**（第８・44図）

Ｐ７区で検出した、不整形なくぼみのような溝状遺構で、深さも一定しない。埋土は灰色粗砂で、埋土の状況等から中世と考えられる。

溝**17**（第８・44図）

Ｐ７区で、溝16につながるように検出された細い溝である。幅約15㎝、深さ約５㎝を測り、埋土は灰色細砂である。出土遺物はないが、中世と推定している。

溝**18**（第８・44図）

Ｐ６区、Ｐ７区で検出された溝で、位置関係から県報告121の溝36・溝41と同一と考えられる。幅、深さとも一定しない。埋土は溝16と類似している。埋土の状況等から中世と考えられる。

溝**19**（第８・44図）

Ｐ９区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝37・溝42と同一と考えられる。幅約1.4～２ｍ、深さ50㎝前後を測り、断面形はＵ字形である。埋土の状況等から中世と考えられる。

溝**20**・溝**21**（第８・44図）

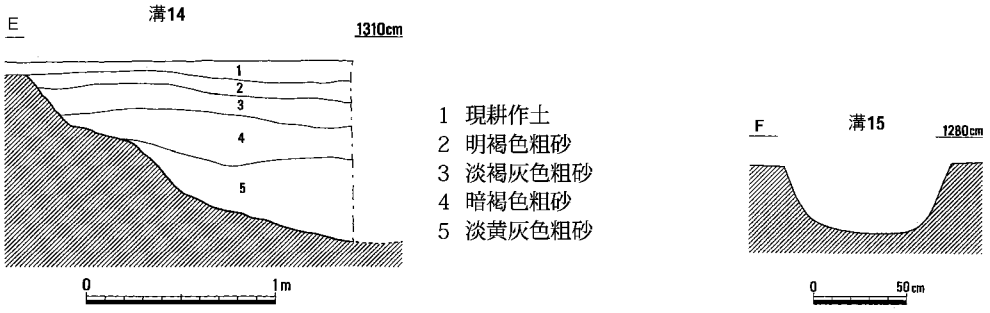
Ｐ11区で検出した溝で、本来一体のものであると考えられる。位置関係から県報告121の溝43につながると考えられる。幅２ｍ以上、深さ15㎝前後を測り、埋土は黄褐色細砂である。埋土の状況等から中・近世と考えられる。

溝**22**・溝**23**（第８・44図）

Ｐ11区で検出した溝で、いずれも幅約50㎝、深さ10㎝前後を測り、埋土は溝20・21と同様、黄褐色細砂である。埋土の状況等から中・近世と考えられる。

溝**24**（第８・44図）

Ｐ12区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝45と同一と考えられる。幅0.9～1.2ｍ、深さ30㎝前後を測り、遺物は出土していないが、埋土の状況等から中世と考えられる。



第**43**図　溝**14**・**15**（**1/40**）

溝**25**（第８・44図）

Ｐ14区、Ｐ15区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝47と同一と考えられる。幅約60㎝、深さ15㎝前後を測る。埋土の状況等から中世と考えられる。

溝**26**（第８・44図）

Ｐ15区で検出した溝で、幅約１ｍ、深さ10㎝前後を測るが、調査区南東部では消滅する。埋土の状況等から中世と考えられる。

溝**27**（第９・45図）

Ｐ25区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝49と同一と考えられる。幅1.2ｍ前後、深さ約25㎝を測り、埋土は明黄灰色細砂である。遺物は、古代かと思われる須恵器片が出土しているが、埋土の状況等から中・近世と考えられる。

溝**28**（第９・45図）

Ｐ27区で検出した溝で、幅20～30㎝、深さ数㎝で、埋土は灰色細砂である。遺物は、早島式土器の破片と須恵器片が出土しており、中世の遺構と考えられる。

溝**29**（第９・45図）

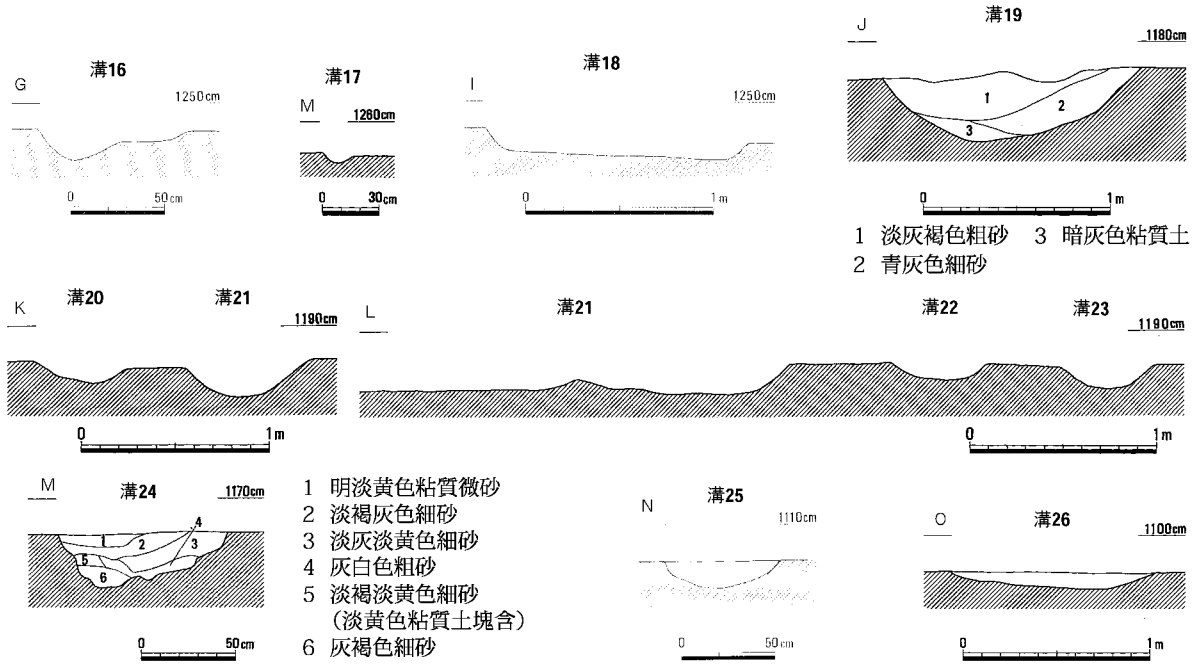
Ｐ28区で検出した。位置関係から県報告121の溝52と同一と考えられる。幅約1.5ｍ、深さ約40㎝で、埋土は暗灰色細砂である。出土遺物はないが、埋土の状況等から中世と考えられる。

溝**30**（第９・45図）

Ｐ28区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝57と同一と考えられる。幅約50㎝、深さ約10㎝で、埋土は灰色細砂である。出土遺物はないが、埋土の状況等から中世と考えられる。

溝**31**（第９・45図）

Ｐ30区で検出した溝で、幅約30㎝、深さ約10㎝で、埋土は黄灰色細砂である。埋土の状況等から中世と考えられる。



第**44**図　溝**16**～**26**（**1**／**40**）

溝**32**・溝**33**（第９・45図）

Ｐ30区南西部で検出した溝で、２条が併走している。位置関係から県報告121の溝53・60及び溝54・59につながると考えられる。溝32は幅１ｍ程度、溝33は幅50㎝程度で、深さはいずれも10～15㎝である。埋土は暗灰色細砂で、遺物は出土していないが中世と推定している。

溝**34**・溝**35**（第９・45図）

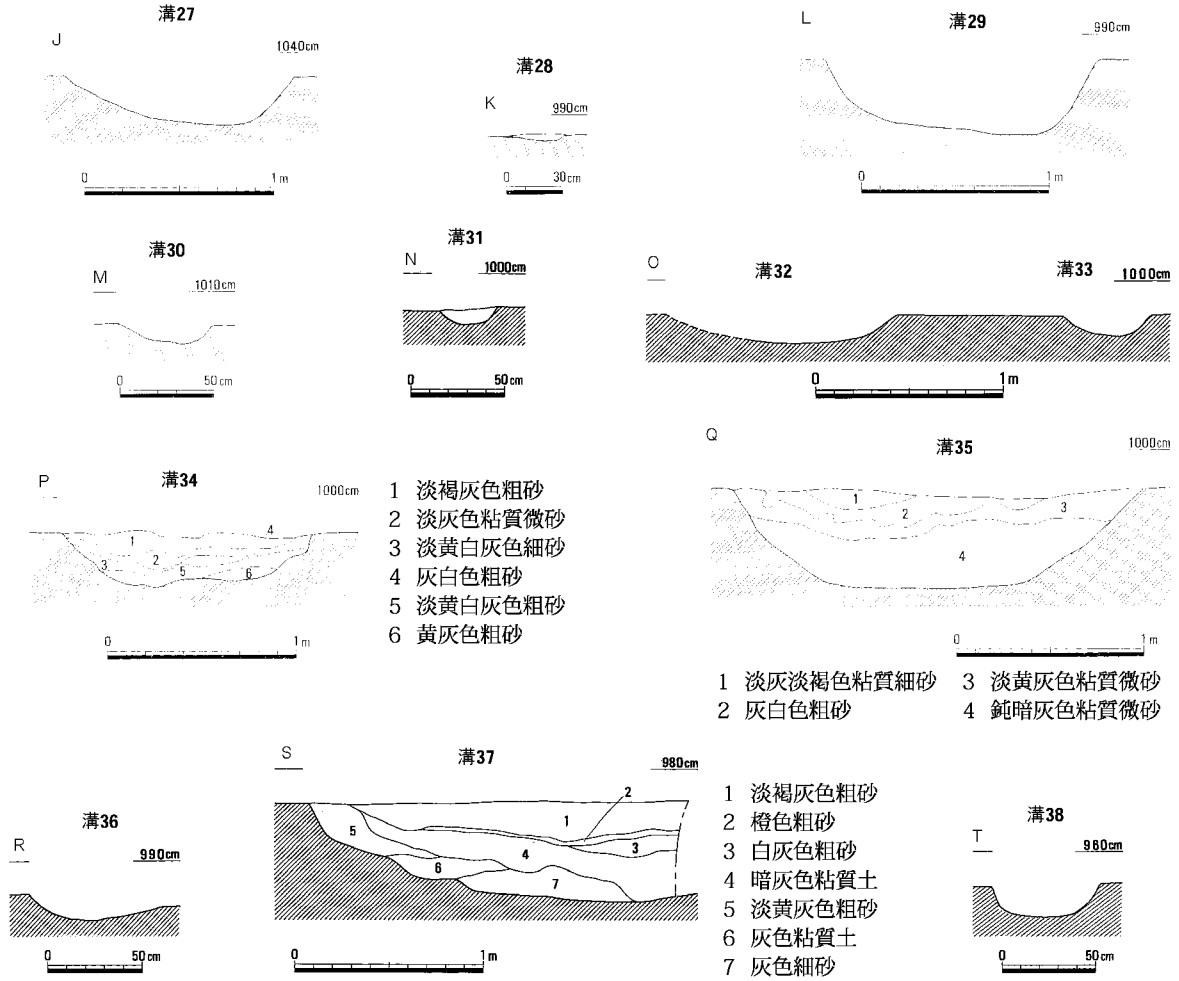
Ｐ31区で検出した溝で、２条が併走している。位置関係から県報告121の溝16・20及び溝17につながると考えられる。規模は、溝34は幅約1.3ｍ、深さ約30㎝、溝35は幅約2.2ｍ、深さ約50㎝である。時期は中世と推定している。

溝**36**（第９・45図）

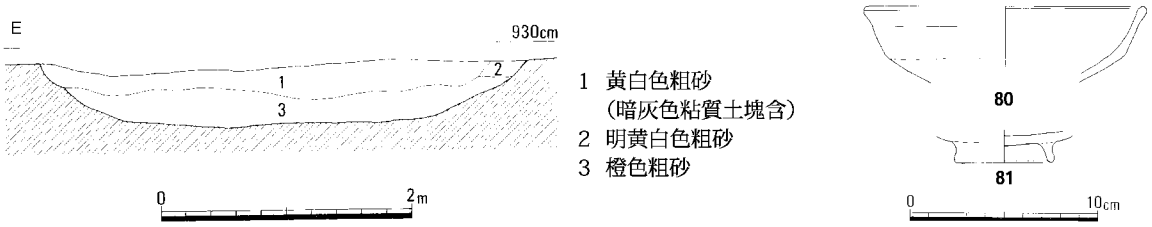
Ｐ32区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝65につながると考えられる。幅約70㎝、深さ約15㎝を測り、埋土は灰色細砂である。なお、溝を挟んで東西で約５㎝の高低差があるため、水田区画を示す可能性もあるが、明確でない。時期は中世と推定している。

溝**37**（第９・45図）

Ｐ33区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝55・66と同一と考えられる。幅約４ｍ、深さ約70㎝と推定される。遺物は出土していないが、埋土の状況等から中世と推定している。



第45図　溝27～38（1/40）



第46図　溝39（1/60）・出土遺物（1/4）

溝38（第９・45図）

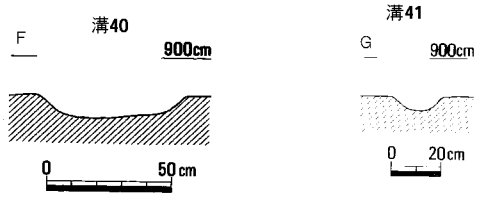
Ｐ35区の北西隅で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝67と同一と考えられる。幅約60㎝、深さ約15㎝を測り、埋土は暗灰色細砂である。遺物は出土していないが、検出層位等から中世と推定している。

溝39（第10・46図）

Ｐ38区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝73と同一と考えられる。幅約2.5ｍ、深さ約30㎝で、底部は平坦である。埋土は１層と２・３層の２段階に分けられ、溝の再掘削(改修)を行っている可能性がある。古代と想定される水田の畦畔を切っており、12世紀頃に位置づけられる早島式土器(80・81)や須恵器高台付椀が出土していることから、古代末から中世の溝と推定される。

溝40・溝41（第10・47図）

Ｐ39区で検出した小規模な溝である。溝40は幅約80㎝、深さ約10㎝、溝41は幅約25㎝、深さ約10㎝を測る。埋土はいずれも灰褐色細砂である。古代の水田１の畦畔を切っているが、検出面は中世の溝39より下位であり、古代から中世の溝と推定される。

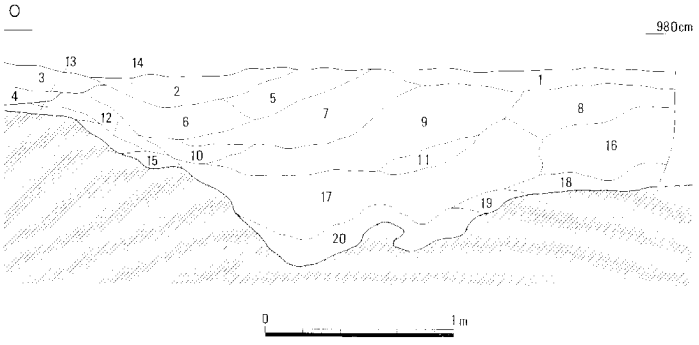


第47図　溝40・41（1/30）

（４）河道

河道４（第９・48図）

Ｐ35区で検出した。位置関係から県報告121の溝26と河道３をつなぐものと考えられる。西岸を検出したのみであるが、幅４～５ｍ、深さ１ｍ前後と推定される。河道西岸の斜面には、直径２～３㎝の細い杭が等間隔で打ち込まれており、護岸等の施設の一部かと思われる。遺物は弥生土器や石鏃が出土しているが、混入の可能性があり、河道の時期は不明確ながら古代以降と推定している。



1 淡褐淡灰色細砂　11 淡灰色細砂
2 淡黄白灰色粗砂　12 灰色細砂
3 淡黄白灰色細砂　13 鈍橙色粘質土
4 淡紫淡灰白細砂　14 明橙色粗砂
5 淡褐淡灰白細砂　15 淡橙淡灰色粗砂
6 淡黄灰色粗砂　16 淡褐淡灰色細砂
7 淡褐白灰色細砂　17 淡灰色粗砂
8 淡灰淡黄色細砂　18 淡灰橙色細砂
9 淡褐白灰色細砂　19 淡橙灰色細砂
10 暗灰色粘質土　20 淡灰橙色粗砂

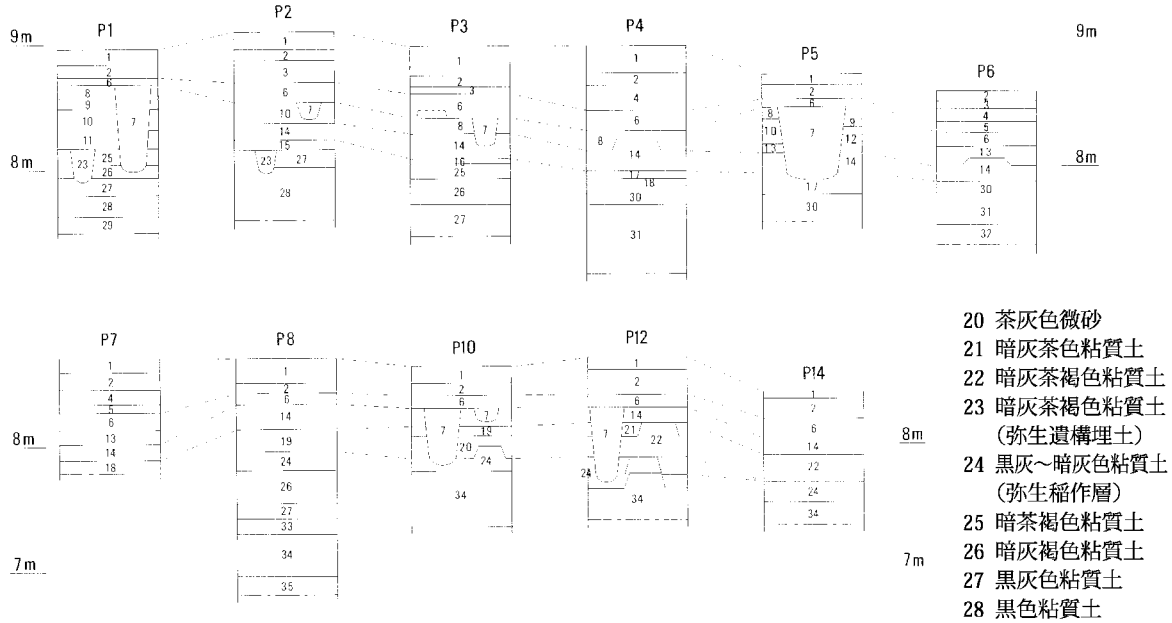
第48図　河道４（1/40）

第４章　北溝手遺跡

第１節　概　要

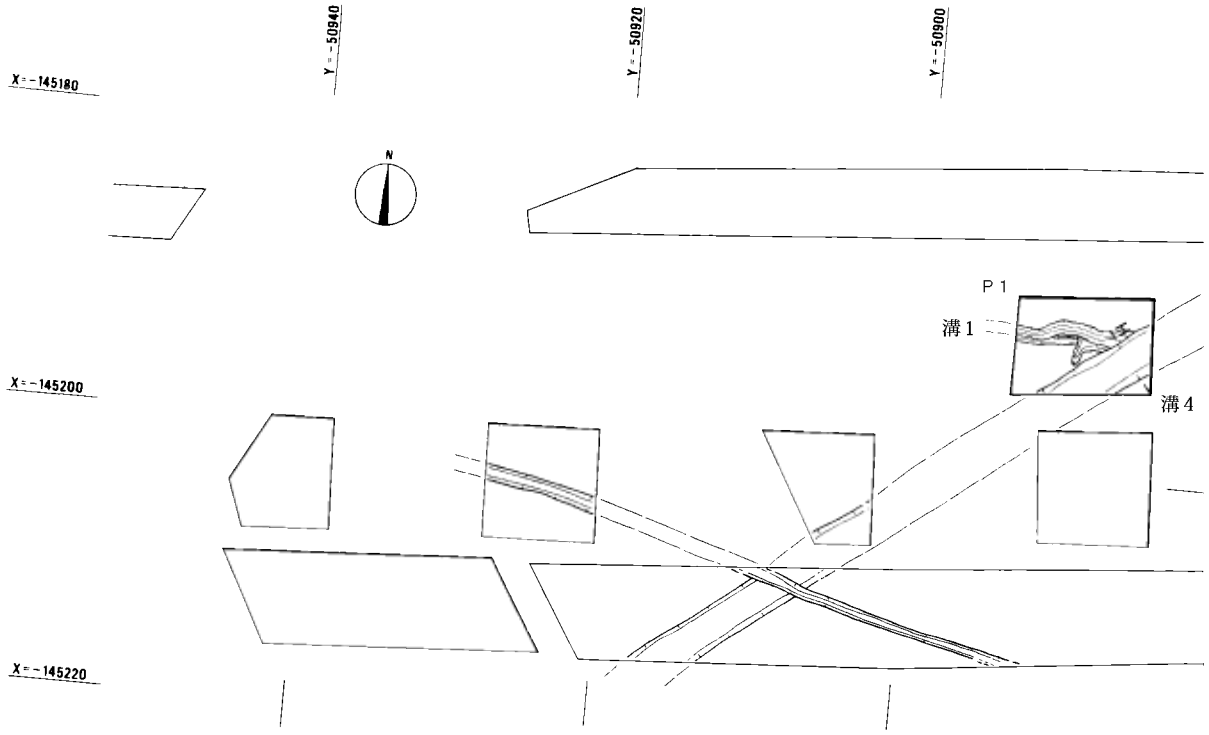
北溝手遺跡は、第３章で述べた服部遺跡の東隣に位置する。今回の調査では、県報告121の成果に基づき路線の西側14カ所の北側橋脚部分を調査対象とし、西側から順にＰ１～Ｐ14区と呼称し調査を進めた。なお、東部分は明確な遺構が検出されていなかったため調査対象から外している。自動車道建設以前の状況は水田景観が拡がり、その海抜高は約９ｍ～8.4ｍと東側にかけて徐々に低くなる。

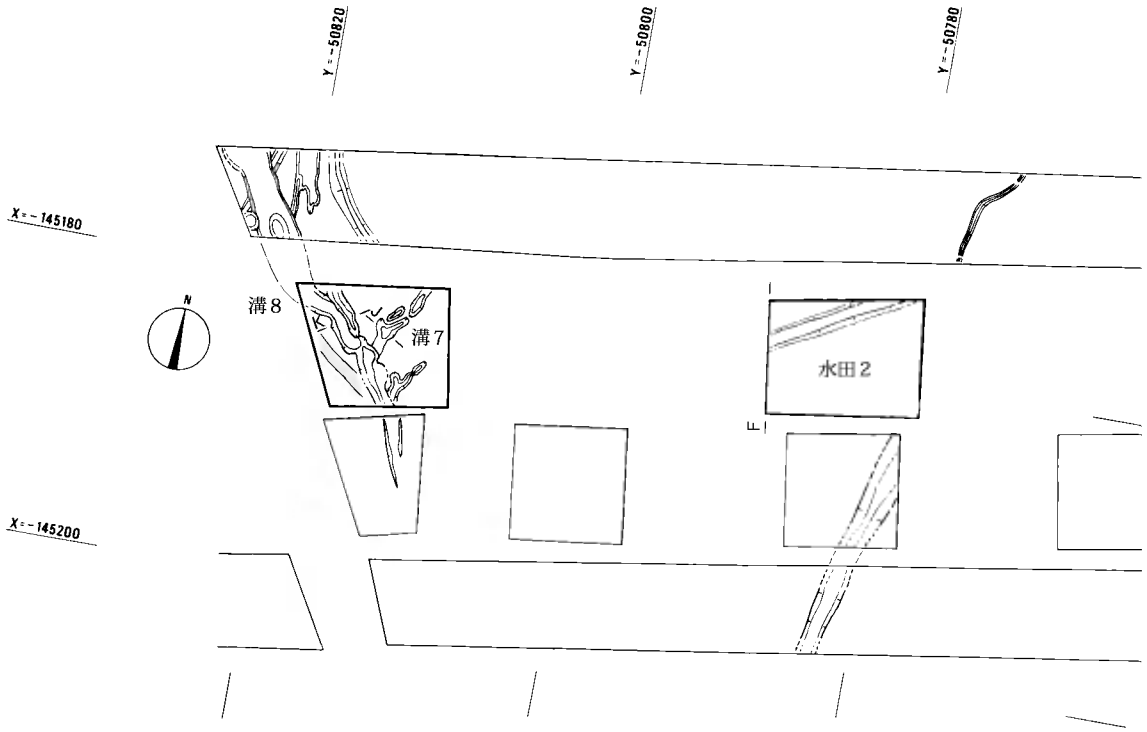
今回の調査で検出された遺構は、弥生時代の溝３条・稲作層、古代の水田、中世から近世の土壙３基・溝10条・水田である。出土遺物は最も古いものとして縄文時代晩期のものもあるが全時期を通して非常に少ない。前回の調査成果を鑑みても主にこの一帯は弥生時代以降、隣接する県立大学建設時に調査した北溝手遺跡の居住域縁辺に拡がる稲作等の生産域であったことが推測される。特に注目されるのはＰ８区以東で検出された弥生時代前期と判断した稲作層であり、基盤層を削り出した幅広の畦畔が検出されている。また、中世の溝は幅２ｍを越えるものが複数あり、幹線用水路として機能していたと考えられ、条里地割を考える上での新資料となった。　（大橋）

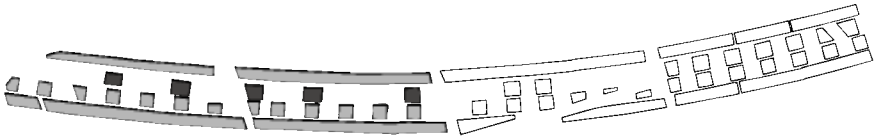


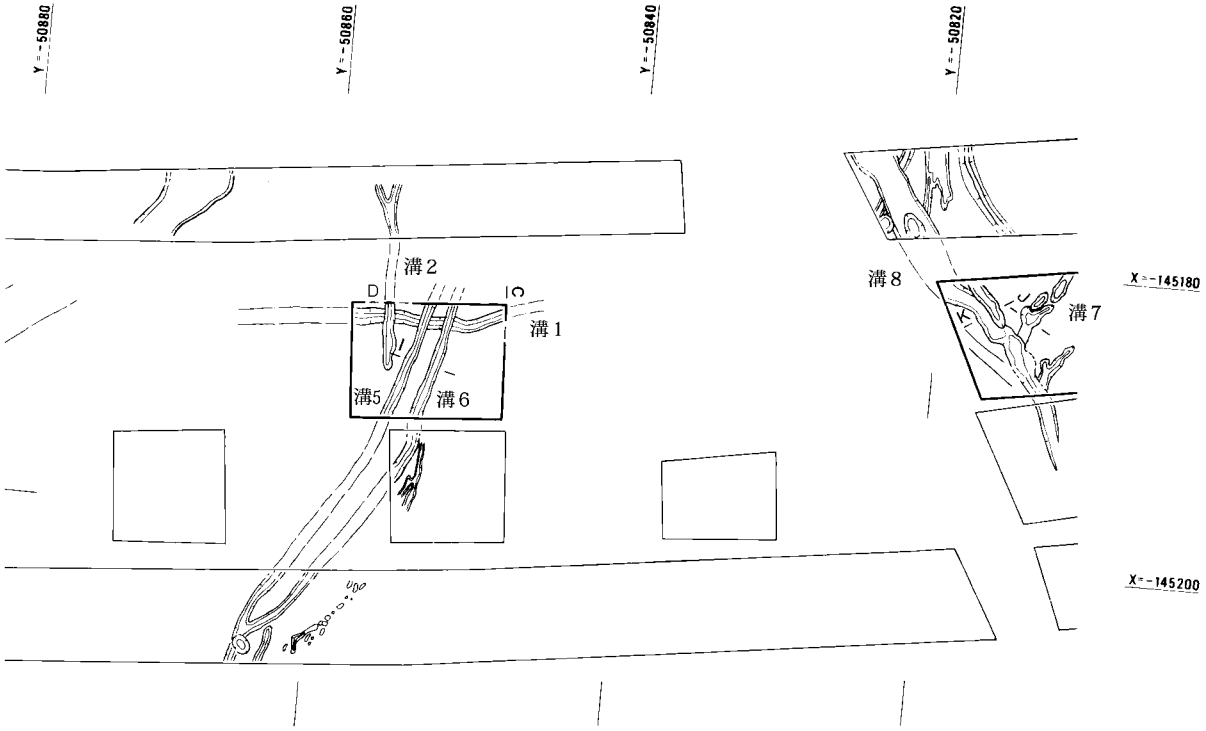
1 暗灰褐色微砂～細砂（現代水田）
2 暗灰オリーブ褐色微砂～細砂（近世～近代水田）
3 暗灰色微砂～細砂
4 鈍灰色粘質微砂
5 褐灰色粘質微砂
6 灰黄褐色粘質微砂（中世水田）
7 灰黄褐色粘質微砂（中世遺構埋土）
8 淡褐灰色粘質微砂
9 灰色微砂
10 淡灰黄色粘質微砂
11 黄褐色粘質微砂
12 淡褐灰色微砂
13 褐灰色粘質微砂
14 灰色～灰褐色粘質土（古代水田）
15 暗黄褐色粘質土
16 灰白色微砂
17 暗灰色粘質土
18 白灰色粘質土
19 暗褐色粘質土
20 茶灰色微砂
21 暗灰茶色粘質土
22 暗灰茶褐色粘質土
23 暗灰茶褐色粘質土（弥生遺構埋土）
24 黒灰～暗灰色粘質土（弥生稲作層）
25 暗茶褐色粘質土
26 暗灰褐色粘質土
27 黒灰色粘質土
28 黒色粘質土
29 明灰色粗砂
30 灰橙褐色粘質土
31 暗褐灰色粘質土
32 暗灰色粘質土
33 暗灰黄色粘質土
34 灰オリーブ色粘質土
35 暗灰色粘質土

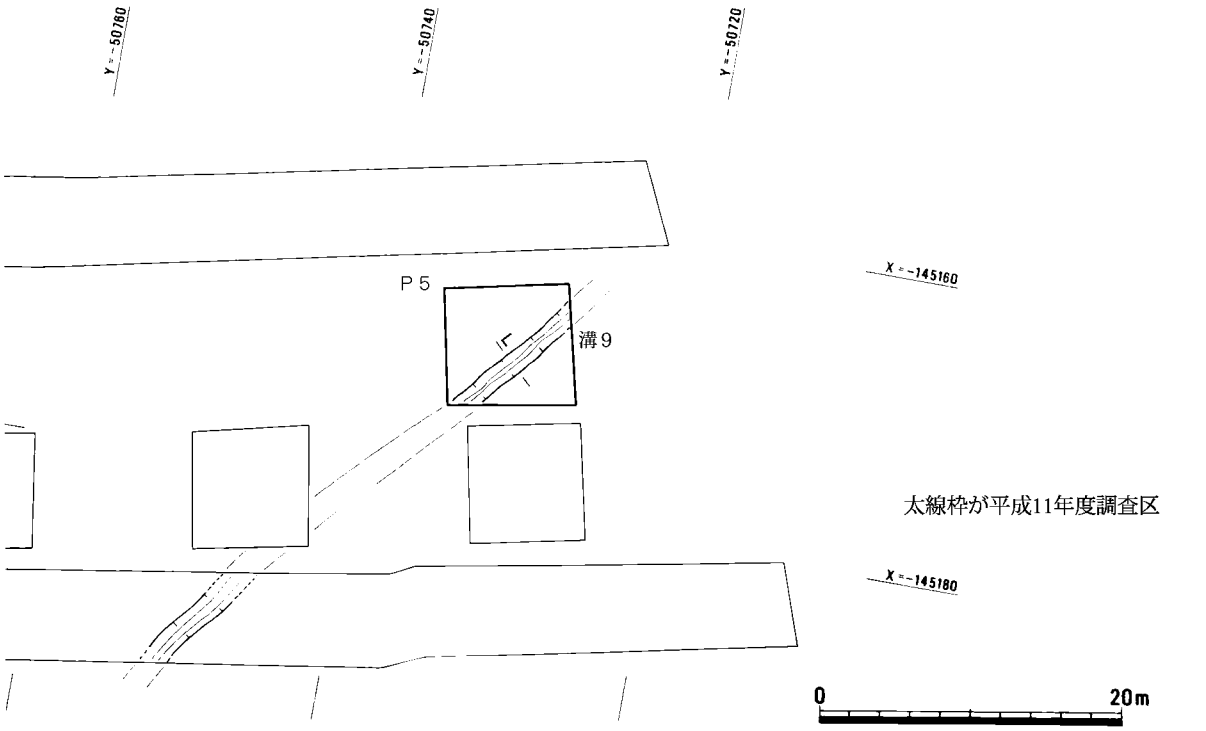
第49図　土層柱状模式図


Y＝－50940
Y＝－50920
Y＝－50900
X＝－145180
X＝－145200
X＝－145220
N
P１
溝１
溝４

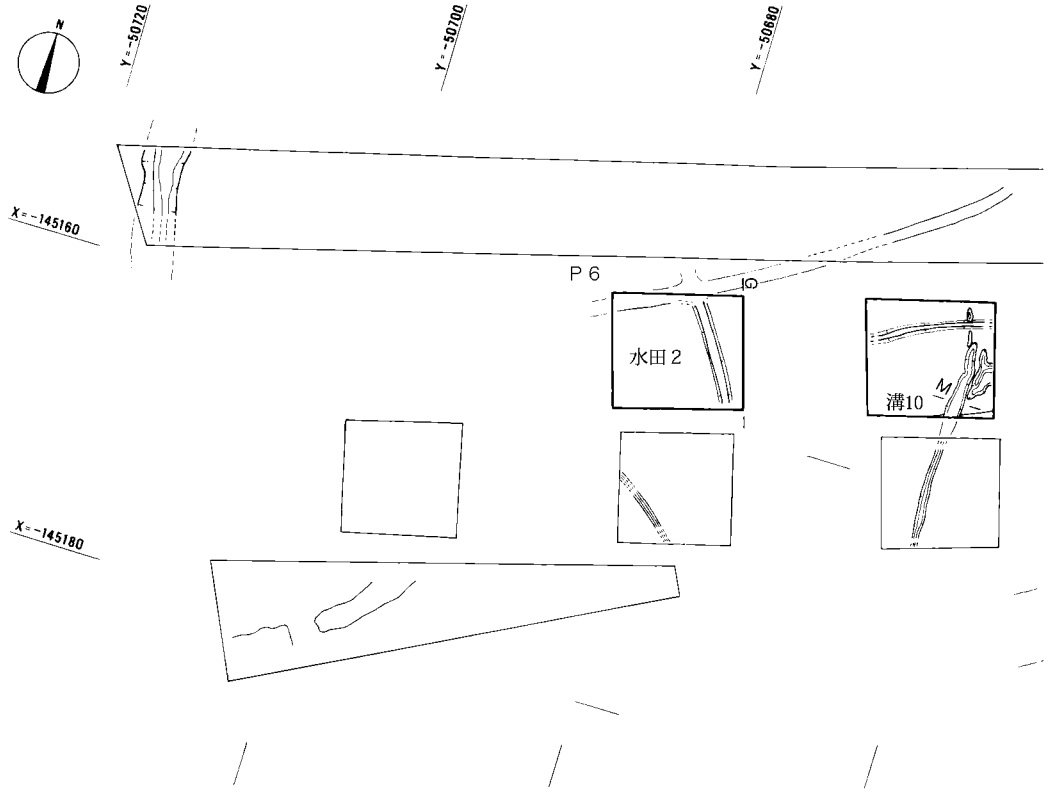

Y＝－50820
Y＝－50800
Y＝－50780
X＝－145180
X＝－145200
N
溝８
溝７
水田２
E
E

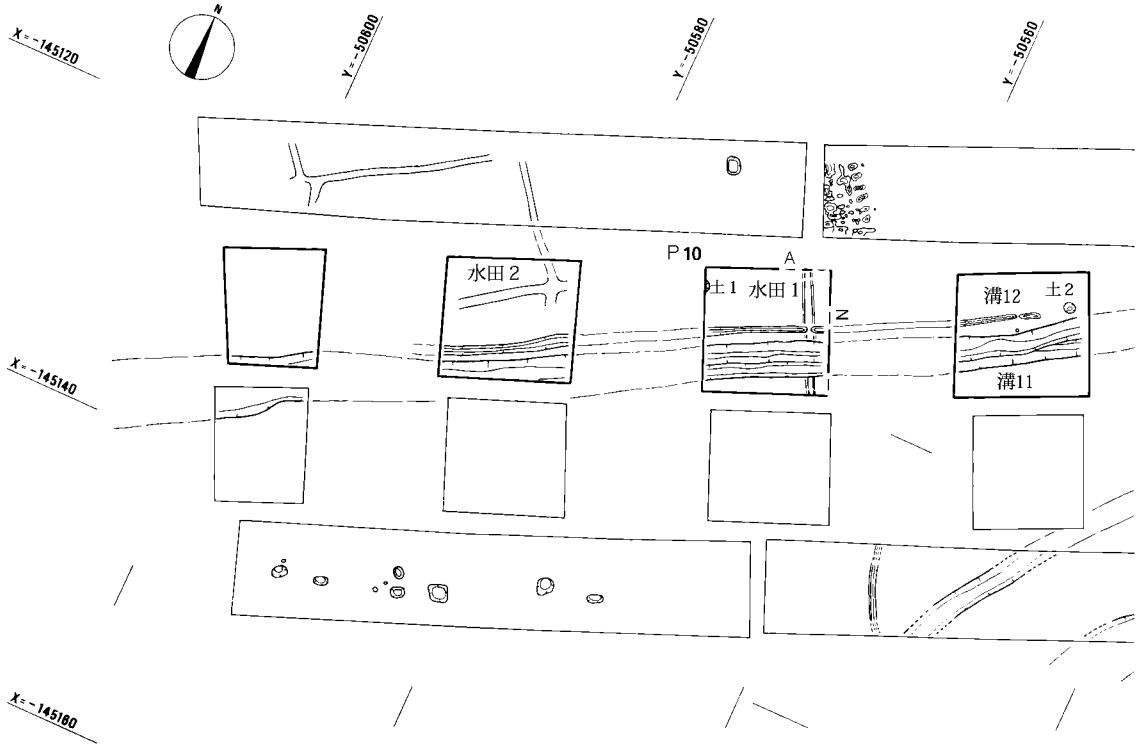


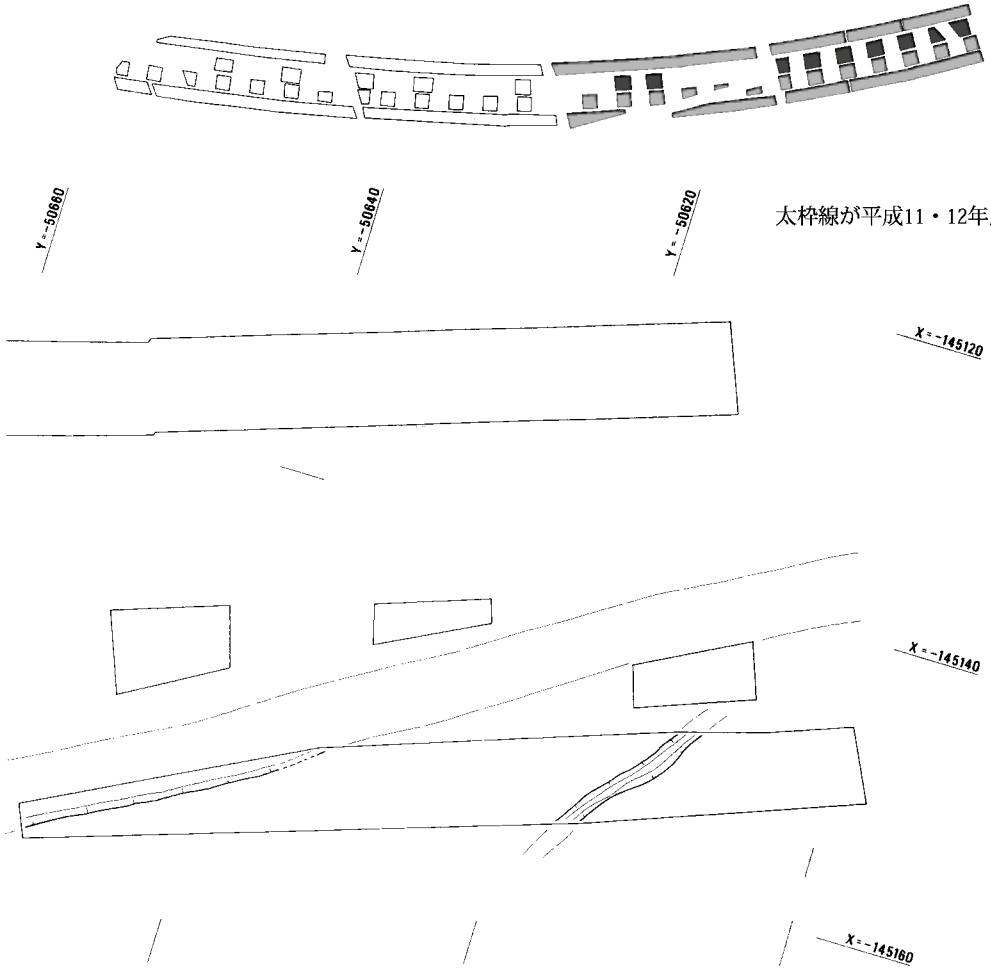


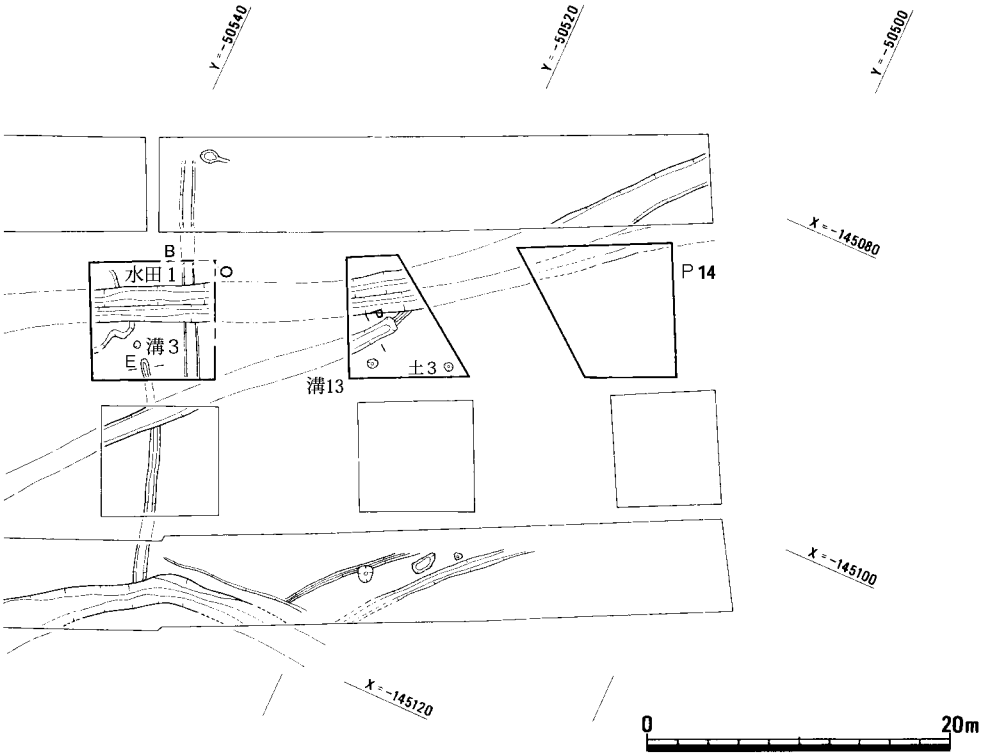


第50図　遺構配置図①（1/500）


N
Y=-50720
Y=-50700
Y=-50680
X=-145160
X=-145180
P6
水田2
溝10


N
X=-145120
X=-145140
X=-145160
Y=-50600
Y=-50580
Y=-50560
P10
A
A'
水田2
土1
水田1
溝12
土2
溝11





第51図　遺構配置図②（1/500）

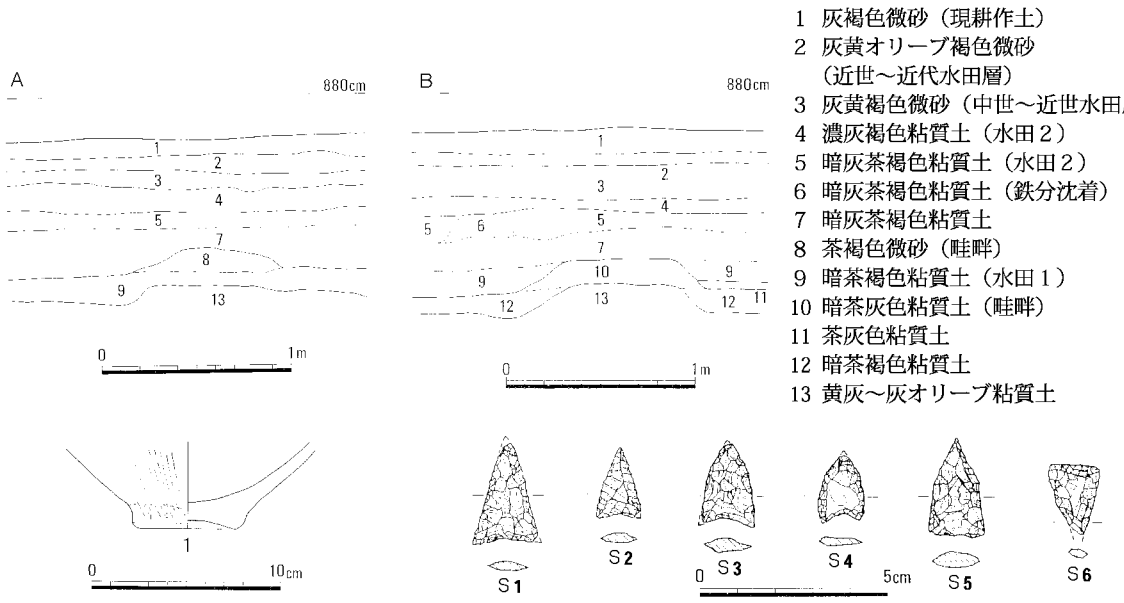
第２節　縄文時代から古墳時代の遺構と遺物

（１）　水　田

水田１（第51・52図、写真図版４・14）

Ｐ８区からＰ14区にかけて検出された。田面の標高は785～770㎝と東側のＰ14が最も低い。Ｐ８区以西では同一の層位は未確認である。畦畔はＰ10区・Ｐ12区の２カ所で検出され、Ｐ10区のものは県報告121水田２の畦畔と連続するものである。この畦畔はＰ10区では13層を削りだし上面幅60㎝、高さ10㎝を測る。なお土層断面観察から暗茶褐色粘質土の耕作層である９層の上位にさらに盛り上げられた畦畔と推測される８層が認められた。Ｐ12区でも基盤層である13層を削りだした幅60～65㎝、高さ10～15㎝の畦畔を検出し、Ｐ10区同様、上位に盛り上げた畦畔を確認した。なお、この畦畔の東側では耕作層自体も間層を挟み２層に分離できる状況が看取された。２本の畦畔間は33ｍを測る。

出土遺物は細片のみであり、１は縄文時代晩期の深鉢の底部、Ｓ１～Ｓ６はサヌカイト製の石鏃・石錐である。このほかに図示し得ていないが弥生時代前期と考えられる小片もあり、これらからこの層の時期を弥生時代前期と判断した。なお、前述した状況から前期においても複数時期の耕作層が堆積しているものと考えられる。　（大橋）



第52図　水田１土層断面（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）

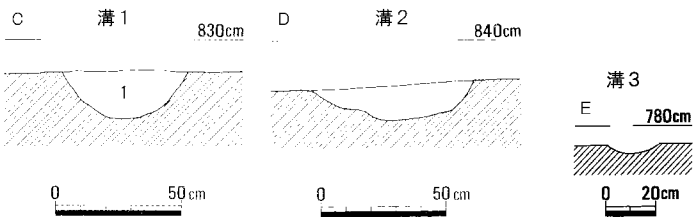
（２）溝

溝１（第50・53図）

Ｐ１区およびＰ２区で検出した、やや蛇行しながら東西方向にのびる溝である。Ｐ１区では２条が重複した状況を示していた。検出面での幅約50㎝、深さ約20㎝を測る。検出面は標高約8.2ｍで、中世と考えられる溝４の検出面より約40㎝下位であることから、出土遺物はないものの、弥生時代の遺構と想定している。　（尾上）

溝２（第50・53図）

Ｐ２区で検出した、溝１に直交する溝である。平面図では溝１との切り合い関係を示しているが明確でなく、検出面、埋土とも同一であるため、溝１と同時存在していた可能性もある。幅約60cm、深さ約15cmである。　（尾上）



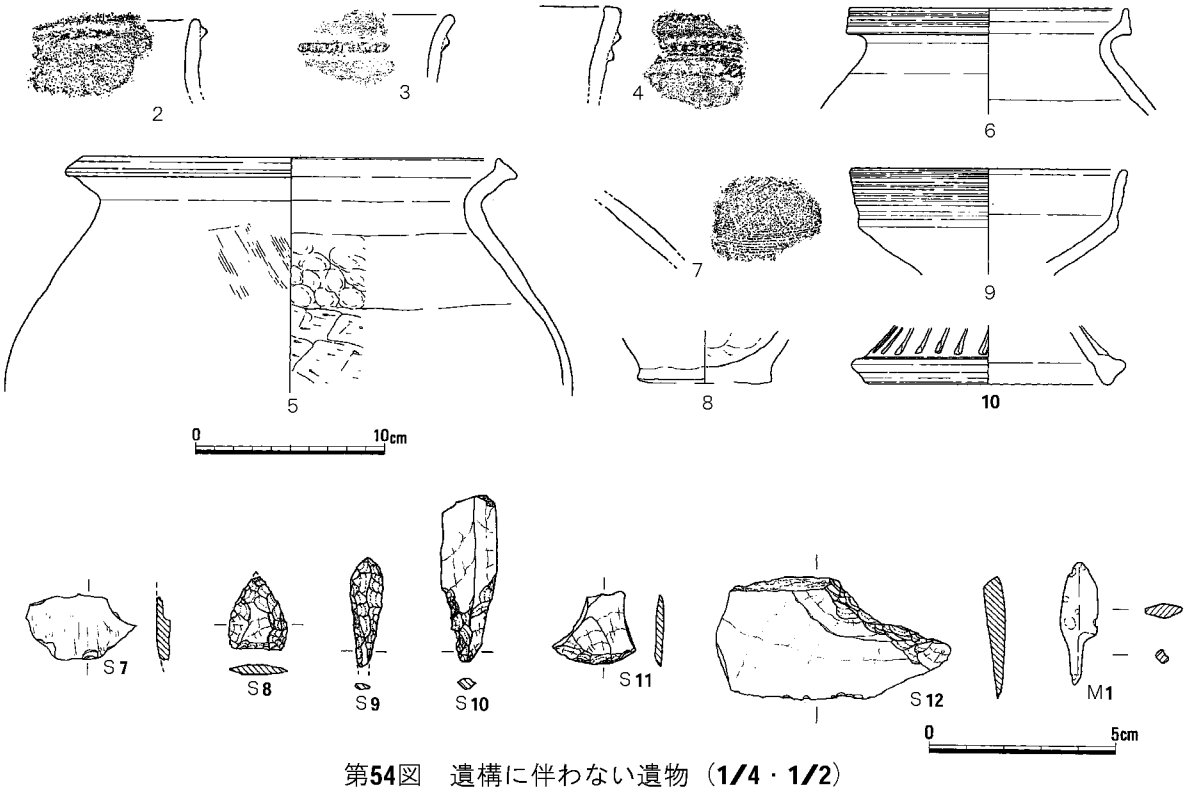
第53図　溝１～３（1/30）

溝３（第51・53図）

Ｐ12区南端部で検出された溝で、県報告121の溝９と連続し、南東から北西方向に延びる。水田１の層位を除去後に検出したが、調査区の壁面土層観察から本来これを切り込むものと推測された。検出時の幅20cm、深さ約５cmを測り、埋土は暗茶褐色を呈する。溝の北端付近では浅い窪みを確認しており有機的に結びつく可能性も考えられるが、詳細は不明である。出土遺物がなく時期決定は困難であるものの検出した状況から弥生時代のものと推測している。　（大橋）

（３）遺構に伴わない遺物（第54図、写真図版14）

図示したのは遺構検出のために掘り下げ中に出土したものである。２・３は突帯文の深鉢の口縁部である。４と７は弥生時代中期前葉～中葉の壺の口縁部と胴部であり、７は斜格子文を施している。５・６はいずれも胴部内面上半までヘラケズリを行っており、後期の甕である。９・10は後期初頭の高杯でありＰ３区からの出土で同一個体の可能性がある。Ｓ７は磨製石斧と推測した小破片である。Ｓ８が石鏃、Ｓ９・Ｓ10は石錐、Ｓ11・Ｓ12は剥片である。Ｍ１はＰ14区の水田１の上位で出土した銅鏃である。長さ3.3cmを測り、湯まわりが悪く鏃身部分に小さな凹みがある。　（大橋）



第54図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）

第３節　古代以降の遺構と遺物

（１）土　壙

土壙１（第51・55図、写真図版５）

Ｐ10区北西隅で検出した土壙である。西半は調査区外にあり、検出されたのはほぼ土壙の半分のみである。検出面では長さ75cmほどであったが、土層断面を元に長さ125cm、幅110cm、深さ38cmの隅丸方形をなす土壙に復元される。底面の海抜高は799cmであり、土壙底はやや平坦な状況である。検出面は、溝10・11と同じく中近世の黄灰色の水田層を除去した面である。土壙埋土の上層はこの水田層の土質に近く、下層は、これに褐色土が混在する。

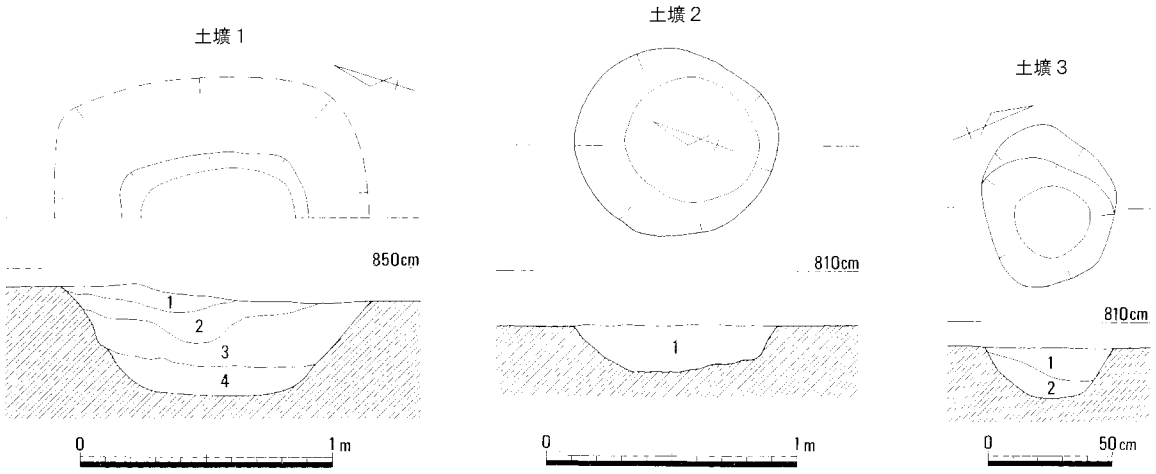
出土遺物は須恵質の小片が１片あるものの、これから時期を判断できない。しかしながら、溝11の埋土が、この土壙の埋土に近似しており、検出面も同じであることからほぼ溝11の時期に近く中世段階と推測される。なお、この土壙の他にＰ10区の北壁部分で平面的には検出できなかったが断面観察で同じような土壙の一部を確認している。（大橋）

土壙２（第51・55図）

Ｐ11区で検出されたほぼ円形をなす土壙である。長径81cm、短径74cm、検出面からの深さ約18cmを測る。底面の海抜高は770cmであり、断面形状は緩やかな弧を描く。出土遺物はないものの埋土や検出面の状況から土壙１と同じく中世段階の時期が推測される。（大橋）

土壙３（第51・55図）

Ｐ13区東隅で検出されたいびつな円形を呈する土壙である。長軸で64cm、短軸で52cm、検出面からの深さは約20cmを測る。出土遺物はないものの、土壙１・２とは異なり水田２の層位を除去後に検出しており、これに相前後する時期と考えられる。（大橋）



1　黄灰色粘質微砂
2　淡黄灰色粘質微砂
3　灰色粘質微砂（褐色土塊混）
4　灰白色粘質微砂（褐色土塊混）

1　灰褐色粘質土

1　暗灰色粘質微砂
2　淡灰色粘質微砂

第55図　土壙１～３（1/30）

（２）水　田

水田２（第49～52・56図、写真図版４）

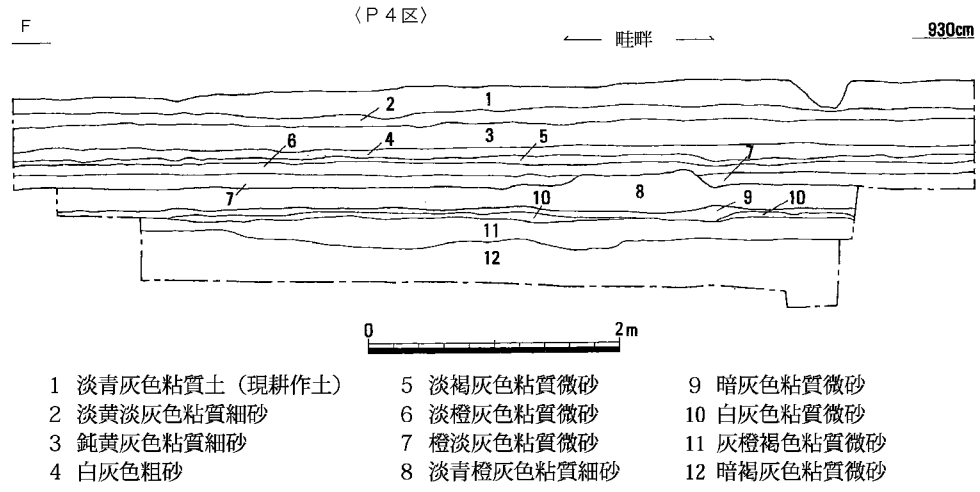
Ｐ２～Ｐ14区に大きく拡がる水田であり、県報告121の水田３と同一のものである。畦畔はＰ４区・Ｐ６区において検出された。水田面の海抜高は、Ｐ２区で835cmと最も高く、Ｐ４区で810cm、Ｐ６区で800cm、Ｐ14区で800cmを測る。なお、Ｐ９区においてはこの水田層除去中に帯状の鉄分沈着部分が確認されており、これも畦畔痕跡を示すものと捉えた。水田層の厚さは約10～15cmほどであり、部分的に２層に分離できる。Ｐ４区で検出された畦畔は上面幅70cm、高さ10cm、Ｐ６区の畦畔は上面幅60cm、高さ５cmを測り、いずれも幅広のものである。なお、Ｐ９区および北側道部分の畦畔痕跡から15×９mの１枚の田面が復元され、その方向は溝11等の幹線水路の方向に近く、関連性が示唆される。

出土遺物はすべて細片であるが、６世紀末～７世紀の須恵器も散見された。このことや層位関係などからこの水田の時期は古墳時代後半から古代にかけてのものと推測した。　（大橋）

水田３（第56図）

図示していないが、平面的にはＰ７区で畦畔の一部を検出し、水田２の畦畔よりもわずかに東に向きを振る。他の調査区では畦畔そのものは検出できていない。水田層は第56図下図の６層に相当する層位であり水田２の上位に間層を挟んで確認された。水田面の海抜高は830cmを測る。

出土遺物は細片のみであるが、層位関係とこれらから中～近世のものと考えた。　（大橋）



1 淡青灰色粘質土（現耕作土）
2 淡黄淡灰色粘質細砂
3 鈍黄灰色粘質細砂
4 白灰色粗砂
5 淡褐灰色粘質微砂
6 淡橙灰色粘質微砂
7 橙淡灰色粘質微砂
8 淡青橙灰色粘質細砂
9 暗灰色粘質微砂
10 白灰色粘質微砂
11 灰橙褐色粘質微砂
12 暗褐灰色粘質微砂

1 黄白色微砂
2 暗灰色粘質土
3 暗黄褐色微砂
4 暗黄灰色微砂
5 褐灰色粘質土
6 黄褐色粘質土
7 暗褐灰色粘質土
8 黒灰色粘質土
9 暗橙褐色粘質土
10 褐灰色粘質土
11 灰白色微砂
12 灰褐色粘質微砂
13 暗灰色粘質微砂

第56図　水田２・３土層断面（1/60）

（３）溝

溝４（第50・57図）

Ｐ１区において検出した溝で、北東から南西に向けて流走する。位置関係、遺構の特徴等から県報告121の溝１および溝15と同一遺構と考えられる。検出面での幅約2.7m、深さ約50cmを測り、直線的にのびる整った形態の溝である。断面形も整った逆台形をなし、底部には幅２m弱の平坦面をもつ。断面の土層観察からは大きく２段階に分けられるようであり（１～５層と６～８層）、溝の再掘削(改修)を行っている可能性がある。これは服部遺跡の溝39および後述する溝11のあり方と共通しており、関連がうかがえる。

また、現在の水田区画に見られる条里地割に平行しており、条里地割の変遷を考える上でも重要である。埋土や溝の形態が類似する服部遺跡溝39や北溝手遺跡溝11も、同じく条里地割に平行している。溝４からは時期を示す遺物が出土していないが、これらの溝と同時期の古代末～中世の年代が与えられよう。

なお、服部遺跡溝39との距離はおよそ70m、北溝手遺跡溝11との距離はおよそ80mであり、これら３条の溝は計画的に配置されている可能性もある。（尾上）

溝５・溝６（第50・57図）

Ｐ２区において検出した２条の併走する溝である。位置関係から、溝５が県報告121の溝５に、溝６が県報告121の溝３および溝６につながると考えられる。溝５は幅約60cm、深さ約15cm、溝６は幅約70cm、深さ約10cmを測る。埋土はいずれも灰色粗砂である。出土遺物はないが、現代の耕作土層直下で検出しており、中世以降に位置づけられる。（尾上）

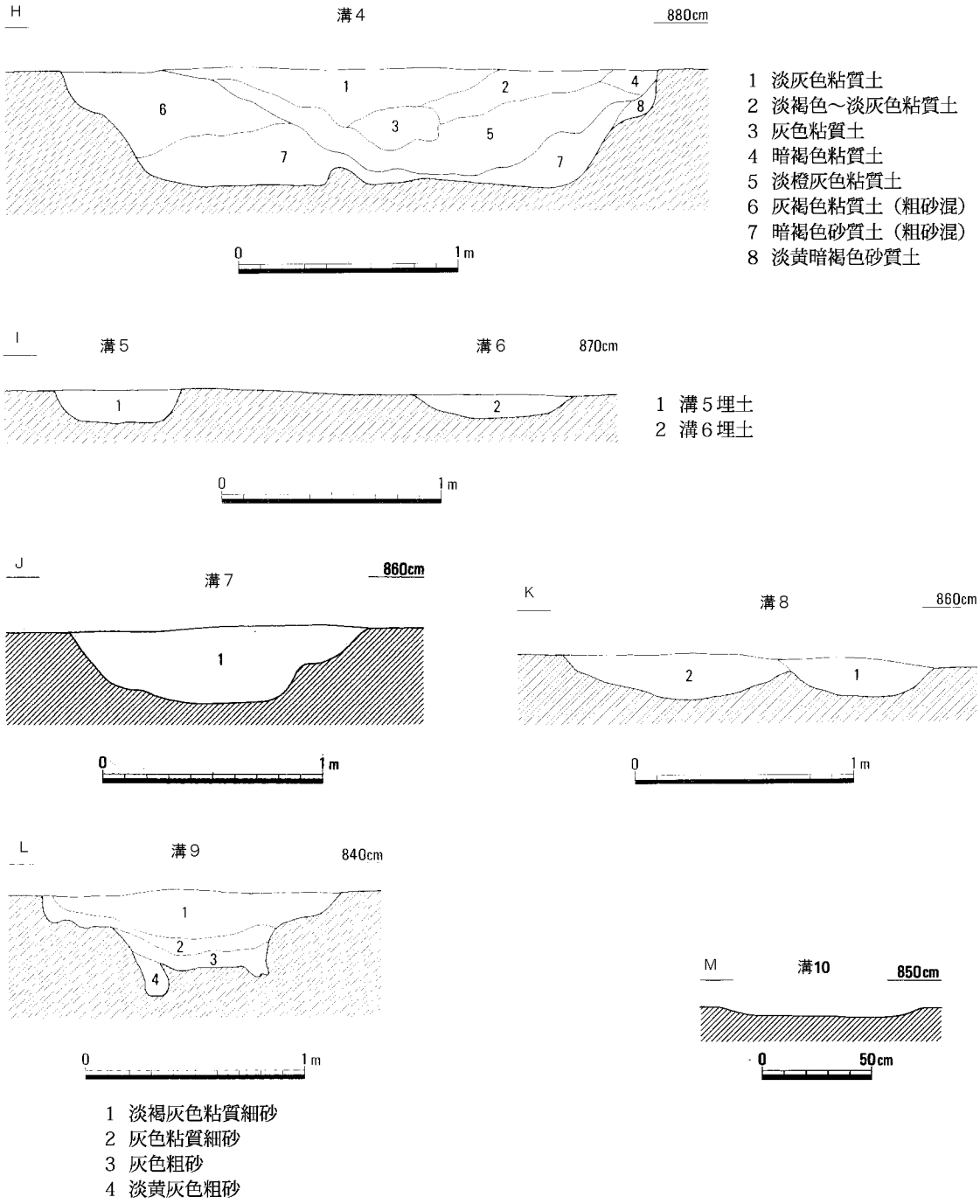
溝７・溝８（第50・57図）

Ｐ３区で検出した。北西から南東に向かって流れる溝８に溝７が注ぎ込む形である。位置関係から、溝８は県報告121の溝17につながるものと考えられる。Ｐ３区は全面が洪水砂と考えられる黄白色細砂で覆われており、溝７、溝８の埋土もこれと変わらない。また溝７、溝８の形態は安定せず、底部が水流でえぐられたような箇所も多い。これらのことから、人工の溝でなく自然の流路であるかも知れない。ただし溝８の方向は、やや蛇行するものの条里地割とおおむね平行しており、条里地割を反映する溝である可能性も否定できない。時期は、層位関係から中世の可能性が高い。溝７、溝８の埋土および洪水砂中からは弥生土器片が出土している。

なお、Ｐ３区の洪水砂を除去した段階で、溝８の西側に水田畦畔の痕跡と思われる筋状のマンガン沈着部分を確認した(第50図)。この畦畔は条里地割とはやや方向を異にする。溝７、溝８と同一面で検出されたが、時期はおそらくこれらに先行するものである。他の調査区で検出されている古代の水田畦畔とは方位が異なり、層位的にも中世と推定される。（尾上）

溝９（第50・57図）

Ｐ５区で検出した溝で、位置関係から県報告121の溝19と同一遺構と考えられる。直線的にのびる整った形態の溝である。検出面での幅約1.3m、深さ約40cmで、途中に段をもち二段堀の形状を示す。上段部分の深さは約15cmで、そこから約70cm幅でさらに掘り込み、底部での幅は約50cmとなる。底部の両端には径10cm程度の小穴が多数並んでおり、杭の痕跡かと思われる。しかしながら、杭の木材・木質等は一切残存しておらず、小穴内は溝の底部付近と同様に粗砂で埋没している。溝内からの出土



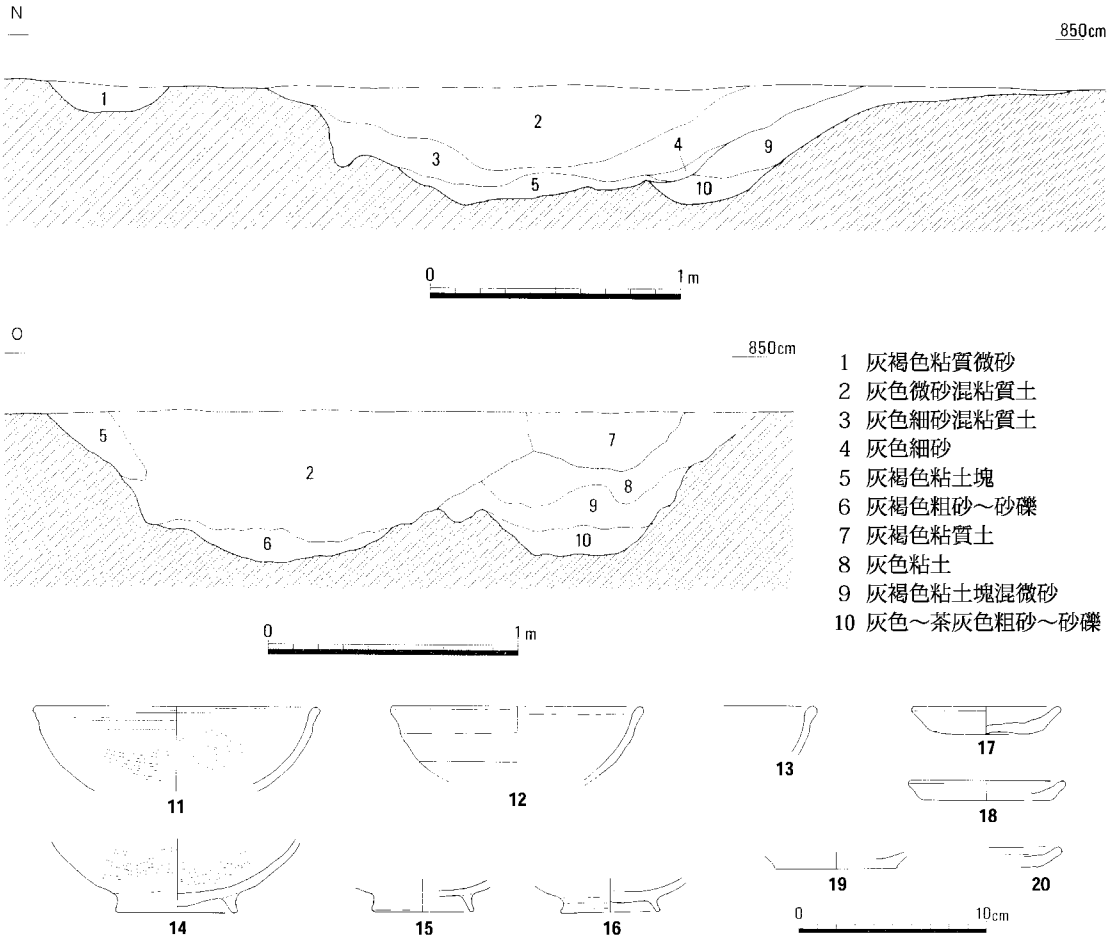
第57図　溝４～10（1/30）

遺物はないが、検出層位等から、時期は中世と考えられる。

なお、条里地割とは方位が若干異なっている。（尾上）

溝10（第51・57図）

Ｐ７区の東部で検出した南北方向に流れる溝で、位置関係から県報告121の溝22と同一遺構と考えられる。わずかに深さ５㎝程度が残存しているに過ぎず、平面形も明瞭でない。埋土は暗灰色粗砂である。東側に接するように検出されたたわみ状の遺構も埋土は共通しており、全体として明確な溝としてとらえにくい。調査区の北半では溝は自然に消滅している。検出層位等から時期は中世と推定される。（尾上）



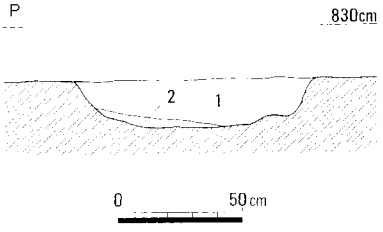
第58図　溝11・12（1/30）・溝11出土遺物（1/4）

溝11（第51・58図、写真図版５）

Ｐ８～Ｐ14区において検出された溝である。水田用水路として機能していたものと考えられる。大きくは２条の溝が重複し、北側のものが新しい。幅は最大で約320cm、検出面からの深さは47cmである。Ｐ13・Ｐ14区付近から北側のものは向きを振り、県報告121で溝24とされているものと連続する。前回の調査と併せ総長170mほどを確認している。溝底の海抜高はＰ10区で786cm、Ｐ12区で767cmを測り、箇所により凹凸があるものの北東から南西方向に流走するものと想像される。また、この方向は現在の水田地割の方向ともほぼ合致し、現在の水田地割りが、少なくともこの溝が機能した時期まで遡りうると考えられる。なお、後述する溝13はこの溝11から取水しているものである。

埋土は、基本的に灰色を基調としたもので、溝底には粗砂・砂礫が堆積し、凹凸が激しく、鉄分の沈着も見られた。埋土下半は粗砂・砂礫が多く含まれ、豊富な水流が想像される。溝の上層埋土には粘土塊がみられるなど、機能廃止後、人為的に埋められた可能性が高い。なお、Ｐ10・Ｐ11区では溝底に小木片が多く堆積していたが、加工された形状をなすものはなく詳細を明らかにはできなかった。

出土遺物は、11～20までを図示した。いずれも中世の土



第59図　溝13（1/30）

師質土器である。**11**～**16**は高台付椀、**17**～**20**は小皿である。**11**は口径14.8㎝を測り、内外面ヘラミガキが施されている。**12**はヘラミガキが施されておらず、口径も13.5㎝と小型化している。図示し得なかった小破片の高台付椀の高台形状からも、出土遺物にはやや時間幅があり、12世紀から13世紀段階の年代が想定される。このほか古代段階の須恵器の小片も出土している。

この溝の掘削時期、機能時期、廃絶時期までは、出土遺物が示すこの年代があてはまると判断され、湛井十二箇郷用水の成立を考える上で興味深い資料となった。（大橋）

溝**12**（第51・58図）

Ｐ９・Ｐ10・Ｐ11区で検出された溝11の北隣に併走する溝である。第58図１層がこの溝に当たる。幅約50㎝、深さ約12㎝を測る。埋土は灰褐色の微砂であり、出土遺物は、細片のため図示し得ないが土師質土器が数片ある。溝11との時間的関係は明らかでないが、有機的に結びついたものとも考えられ、中世段階と判断した。（大橋）

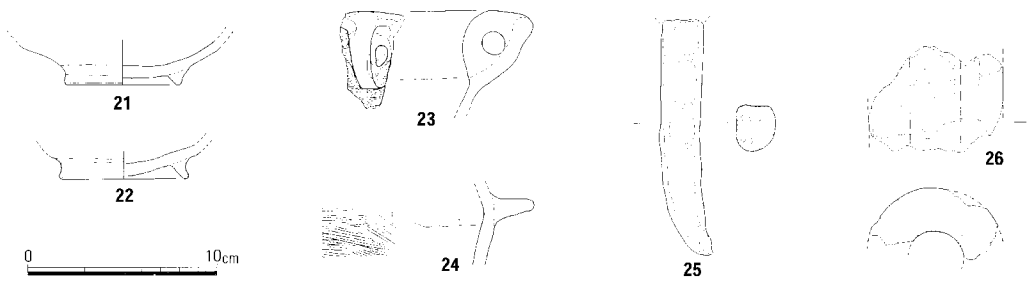
溝**13**（第51・59図）

Ｐ13区で検出された溝である。幅97㎝、深さ20㎝、溝底の海抜高789㎝を測る。溝11から取水し、南西側へ流れる小規模な用水路と考えられ、取り入れ部の幅は狭く、その底は一段浅くなっていた。県報告121において同一の溝として報告した溝24・溝26のうち、溝26が今回報告するこの溝13と同一のものであり、溝24が先に述べた溝11と同一の流路であることが判明した。出土遺物は土師質のものが細片あるのみである。

溝11と同時に機能したものと考えられ、同じ時期が想定される。（大橋）

（４）遺構に伴わない遺物（第60図）

報告した遺構に伴わず、遺構検出途中に出土した中世段階の遺物を図示した。**21**・**22**は、いわゆる早島式土器の土師質高台付椀の底部である。いずれもＰ13区からの出土であり、**21**が底径6.0㎝、22が6.8㎝を測る。**23**は内耳の鍋、**24**は羽釜の破片である。いずれもＰ14区の出土である。**25**は鍋の脚でＰ11区の出土、**26**は羽口の小破片でＰ７区の出土である。調査区全域にわたって中世以降の遺物は出土しているが出土量自体が少なく居住域であったとは考えがたく、この時期にはすでに現在のような水田景観が拡がっていたものと推測される。（大橋）



第**60**図　遺構に伴わない遺物（**1/4**）

第５章　窪木遺跡

第１節　概　要

窪木遺跡の今回の調査位置は、第４章で述べた北溝手遺跡の東方約280ｍにある。自動車道開通以前は、北溝手遺跡同様、水田景観が拡がっており、その田面の海抜高は約800㎝と北溝手遺跡と比較してやや低くなっている。

調査は県報告121の成果に基づき、遺構の存在が予測された路線の東側において５カ所の北側橋脚部についてのみ行った。調査は西側から順にＰ１区からＰ５区と呼称し進めた。この結果、現在の耕作土直下で中近世の耕作土が存在するものの、この下位は粘土・シルトの堆積があり、自然の流路が数条認められたのみであった。これらの河道は弥生時代終末まで遡るものであり、おそらく大きくは北から路線南側に存在すると思われる広い低湿地へと流れ込んでいると考えられる。この後、徐々に堆積が進み、中近世になってはじめて水田景観が整備されるものと推測される。

なお、調査前に重機による表土掘削を行い、精査した際、全域にわたって湿地の状況を呈したＰ５区については幅２ｍのトレンチを設定し、海抜650㎝までの深さにわたって状況の把握につとめたが、粘土・シルト層の堆積であり遺構・遺物も検出されなかったため、調査を終了した。

第２節　遺構と遺物

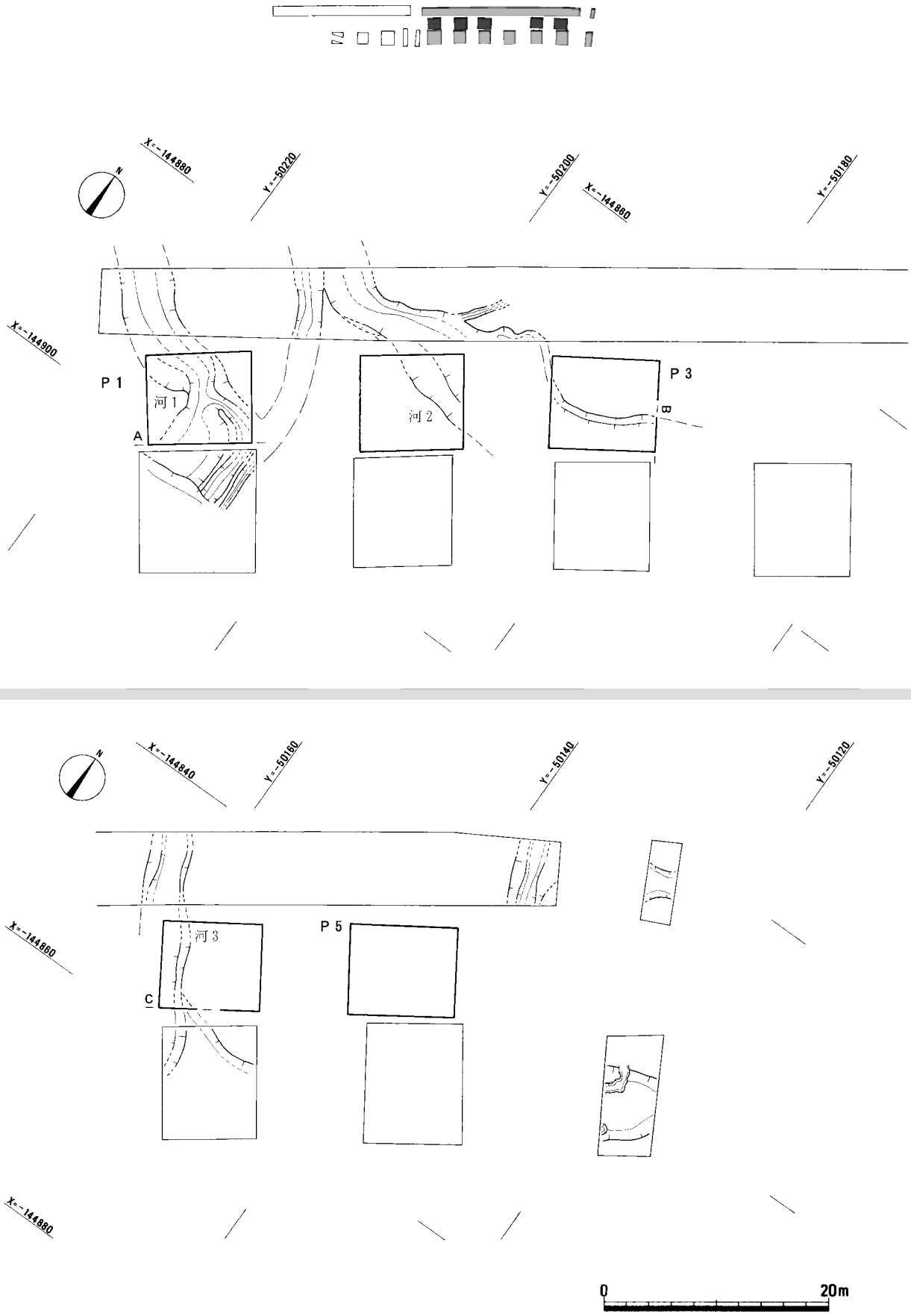
（１）河道

河道１（第61・62図、写真図版６）

Ｐ１区において検出された。県報告121の北側道部分で確認された溝１・２と南側橋脚Ｐ85区の溝６をつなぐものである。おおよそ北西から南東へと流れるもので、Ｐ１区中央で二股に分かれる。調査区南東壁面の観察では、底は海抜612㎝を測り、現在の田面から約200㎝下位にある。埋土のほとんどは粗砂を基調とし、互層状に粘質土、あるいは粘土を挟む状況である。度重なる洪水がもたらした結果と考えられ、人工手的な状況は看取できない。出土遺物はほとんどなく、図示しえたものは２点のみである。１は内面に煤を吸着させた黒色土器でヘラミガキが丁寧に施されている。２は土師質の小皿である。このほか７世紀後半～８世紀初頭と考えた須恵器甕胴部の破片がある。これらより新しい時期の遺物はなく、遅くとも中世の早い段階にこの河道は埋没したものと推測される。

河道２（第61・63図、写真図版６）

Ｐ２区・Ｐ３区で検出された流路である。県報告121の北側道で確認された溝３と同一のものであり、この溝３が大きく幅を広げ東へと開口する状況がうかがえた。埋土はシルトおよび粘土質を基調としており、不規則な形状から人工的なものとは考えられない。おそらくは河道１と同様、洪水によってもたらされた自然流路であろう。



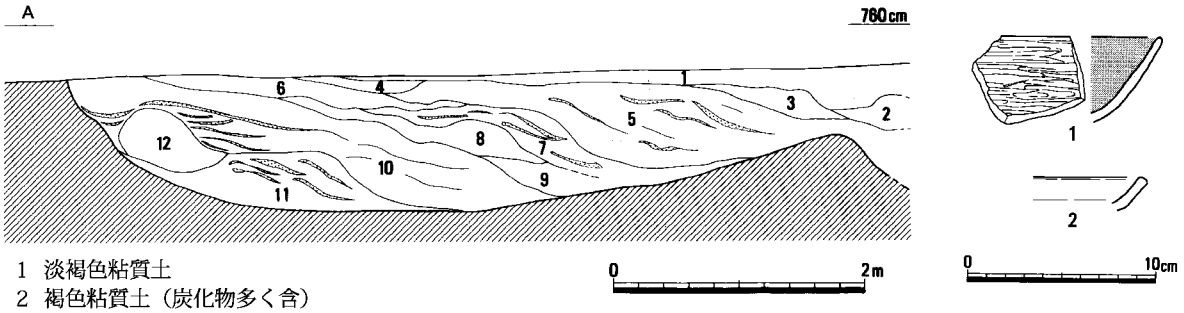
太線枠が平成12年度調査区

第61図　遺構配置図（1/500）

出土遺物は、３が甕で弥生時代終末期のものであり、ほぼ１個体が河道底から出土した。４の小皿は２層中からの出土であり、河道埋没時期の最終段階を示すものと考えられる。

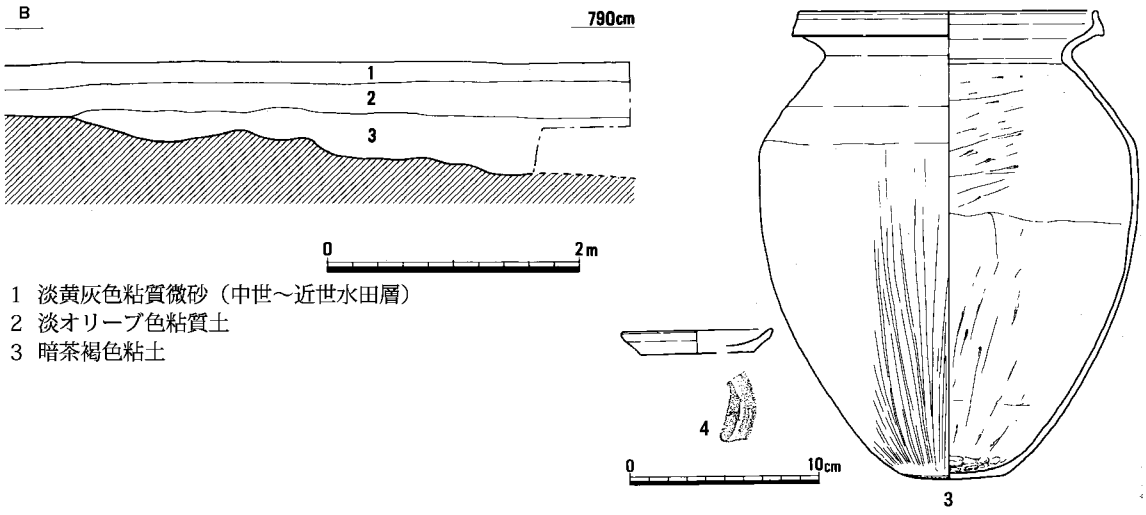
河道３（第61・64図）

Ｐ４区で検出された北西から南東方向へ流れる河道である。県報告121の溝４と溝７を結ぶような状況で確認された。Ｐ４区の南東端部で大きく開口し、南側へと流れ込む状況である。今回の調査では出土遺物はないものの、県報告121溝４の出土遺物を参考にすれば13世紀前半と考えられるが、人工的な溝かどうかは明らかにし得なかったため、河道として今回報告する。



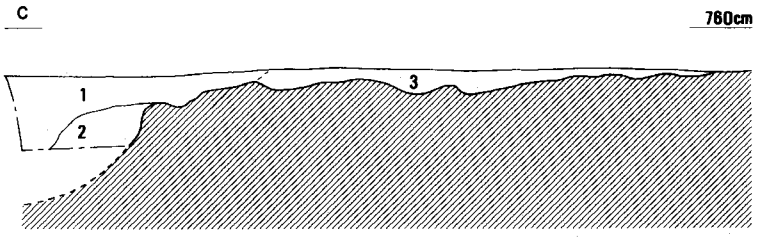
1 淡褐色粘質土
2 褐色粘質土（炭化物多く含）
3 暗褐色粘質微砂（粗砂含）
4 明褐色粘質微砂
5 淡褐～黄白色粗砂（灰色粘質土が互層状）
6 灰色粘質土（炭化物含）
7 灰～橙色粗砂（灰色粘質土が互層状）
8 灰色粘質土（炭化物多く含）
10 淡黄白色粗砂（灰色粘質土が互層状）
11 淡黄白色粗砂（灰色粘土が互層状）
12 灰色粘土塊

第62図　河道１（1/60）・出土遺物（1/40）



1 淡黄灰色粘質微砂（中世～近世水田層）
2 淡オリーブ色粘質土
3 暗茶褐色粘土

第63図　河道２（1/60）・出土遺物（1/4）



1 淡灰色粘質微砂
2 灰色粗砂（粘土が互層状）
3 灰褐色粘性微砂

第64図　河道（1/60）

第６章　高松田中遺跡

第１節　概　要

高松田中遺跡は、窪木遺跡の東方約１㎞、長良山の北東に位置する。県報告121で報告した調査結果に基づき、計19箇所の北側橋脚部分、総延長約500ｍに及ぶ範囲を調査対象とし、西端からＰ１区、Ｐ２区と順に呼称した。なお、実際の調査に当たっては最西端のＰ１区については現水路が及んでいるため、調査対象から外しており、計18箇所、1,124㎡の調査を行った。

調査の結果、Ｐ13～Ｐ15区において弥生時代前期後葉から中期前葉の微高地部分を確認し、これより東側は水田域として利用されていることが判明した。この微高地東端部には溝が複数回にわたって掘削されており、古墳時代前半まで水田域の拡大、あるいは洪水による打撃からの復旧を行いながらも水田耕作が継続していた状況を伺わせた。特に最下層のものは、弥生時代前期段階に遡る可能性があり、備中地域におけるこの時期の稲作経営の状況を示す資料となった。微高地上の遺構としては、そのほとんどが舟形土壙であり、竪穴住居は検出されず、このことから居住域の集落本体からややはずれた端部であると推測される。また、微高地の西側は自然河道によって区切られ、この河道以西は低位部が広がり、この中で洪水による複雑な流路をたどる自然河道を確認した。この低位部は徐々に埋没した後、古代段階には水田域として利用されており、水田経営に伴う溝も多数検出されている。この後、全域にわたって農地開発が進行し、現在の景観が形成されたものと推測される。

第２節　縄文時代から古墳時代の遺構と遺物

（１）舟形土壙

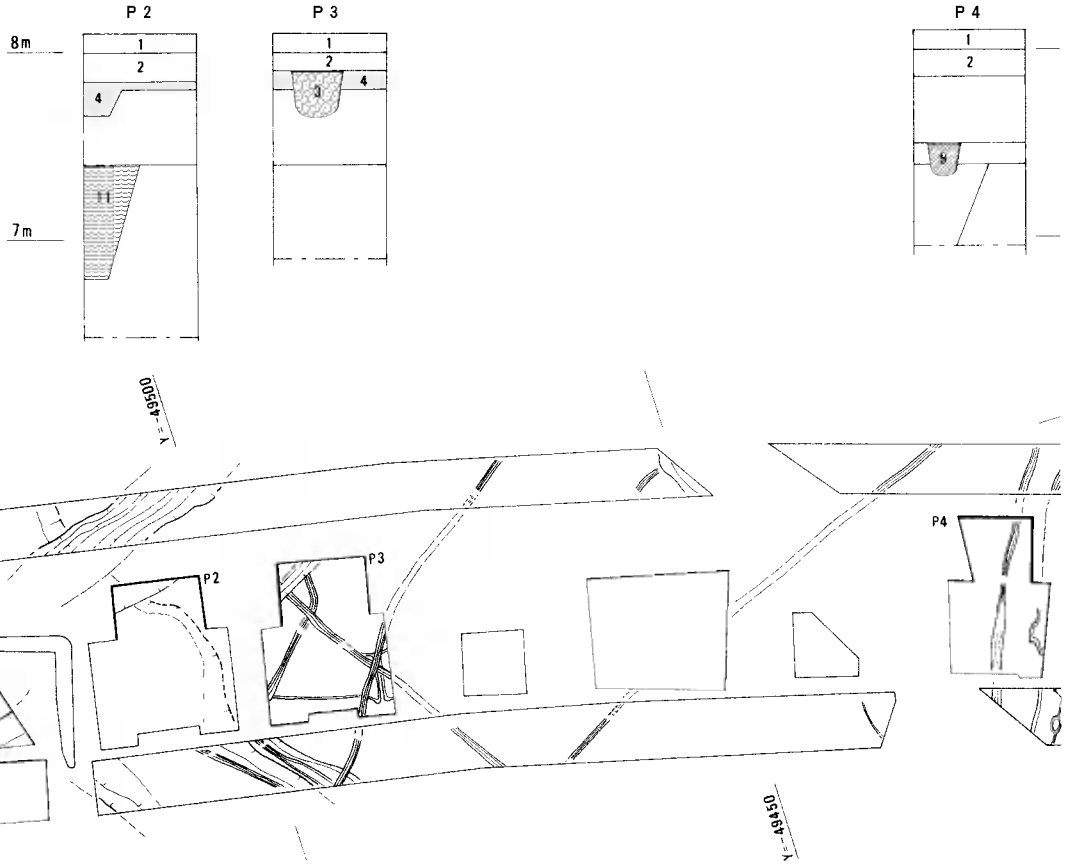
舟形土壙１（第66～68図・写真図版７）

Ｐ14区で検出された。後述する舟形土壙２に直交し、これに一部を削平されている。長さ293㎝、幅125㎝、検出面からの深さ約39㎝を測る。土壙底の海抜高は715㎝を測り、長軸方位はＮ69°Ｅを示す。掘り方はやや歪つな状況であり、土壙底も緩やかな三段を呈する。

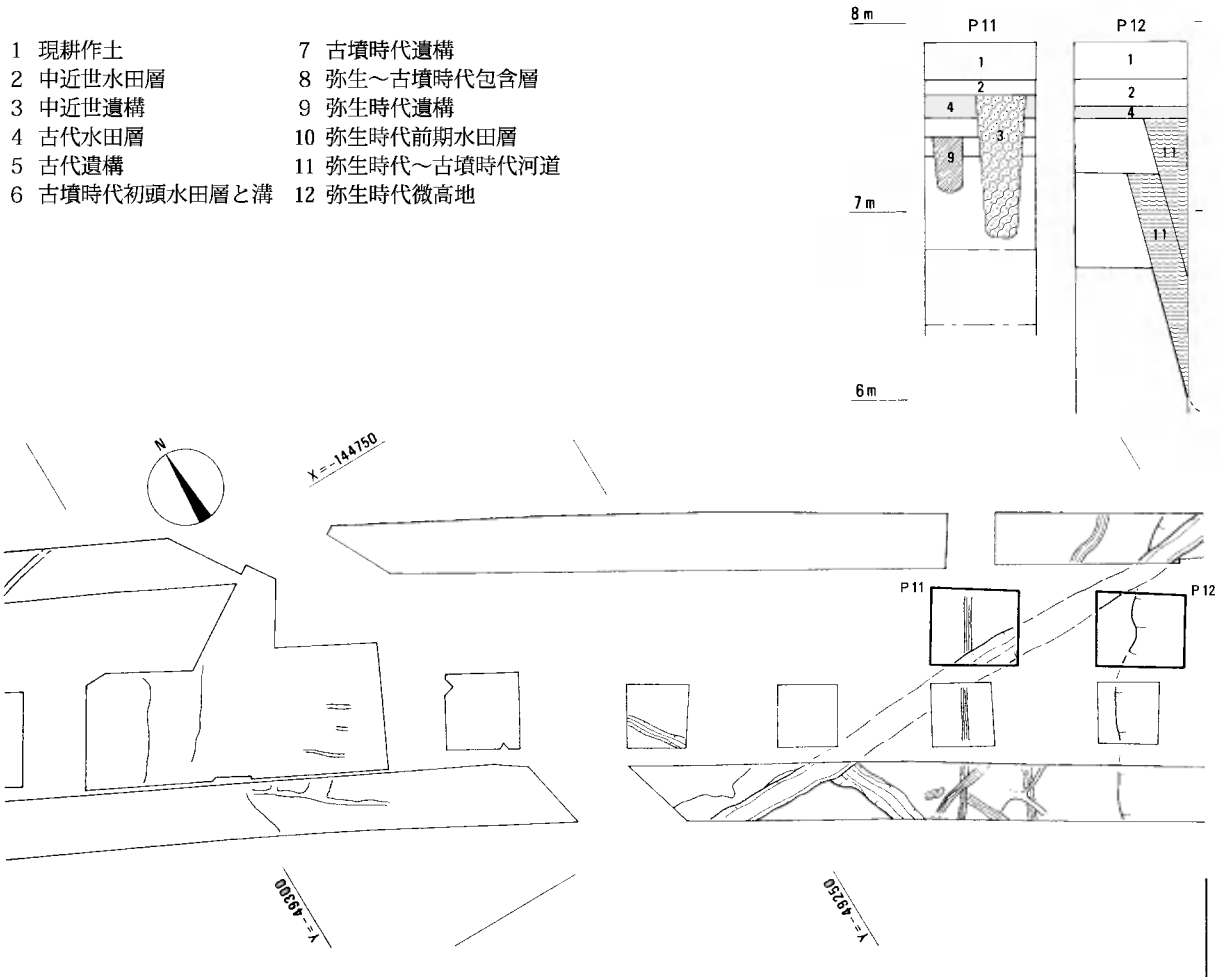
出土遺物は細片のみであり、これらからは遺構の時期は判断はできないものの、舟形土壙２との関係から、これに先行し弥生時代前期後葉～中期前葉段階になると考えられる。

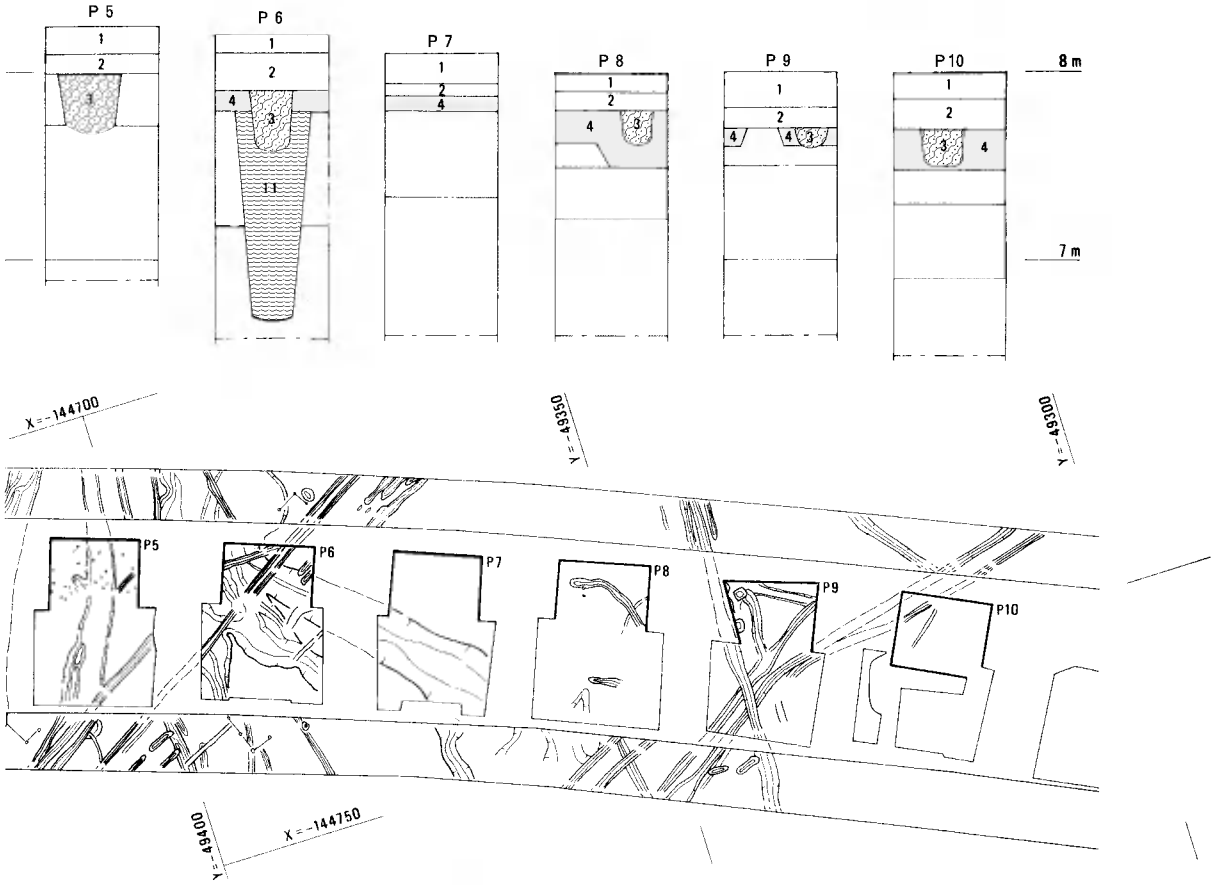
舟形土壙２（第66・67・69図・写真図版７・14～16）

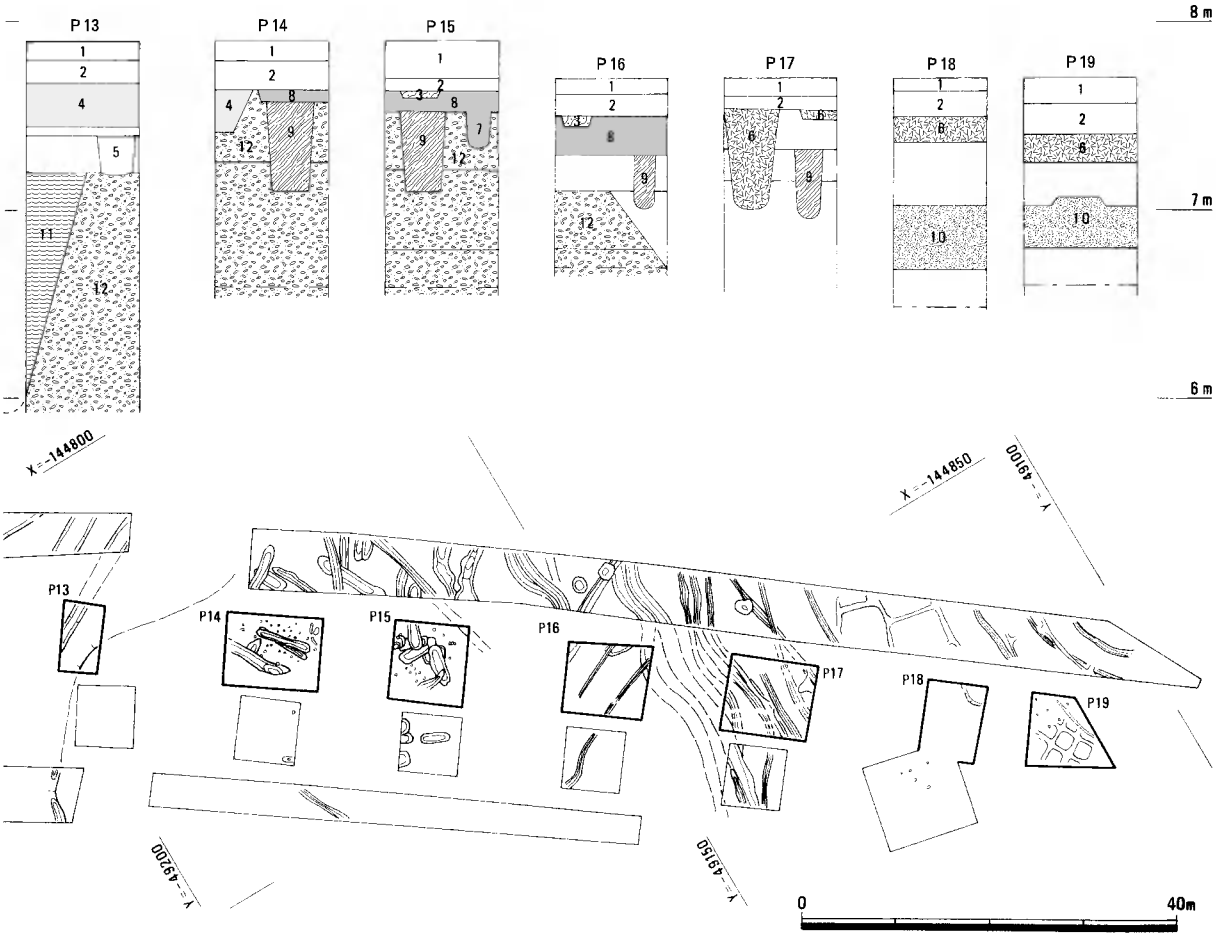
Ｐ14区で検出され、舟形土壙１とほぼ直交しこれに後出する。土壙の北端は調査区外に延び検出された範囲で長さ710㎝、幅135㎝、深さ52㎝を測る。土壙底はやや平坦であり、海抜高は703㎝を測り、長軸方位はＮ37°Ｗを指す。縦断面の埋土の堆積状況から、南端は２度にわたる掘削が観察され、特にこの箇所で多く炭や黄褐色を呈する粘土塊が混入しており、人為的に埋めた状況が看取された。平面形もこの箇所で向きが若干屈曲し、Ｎ24°Ｗを指す。



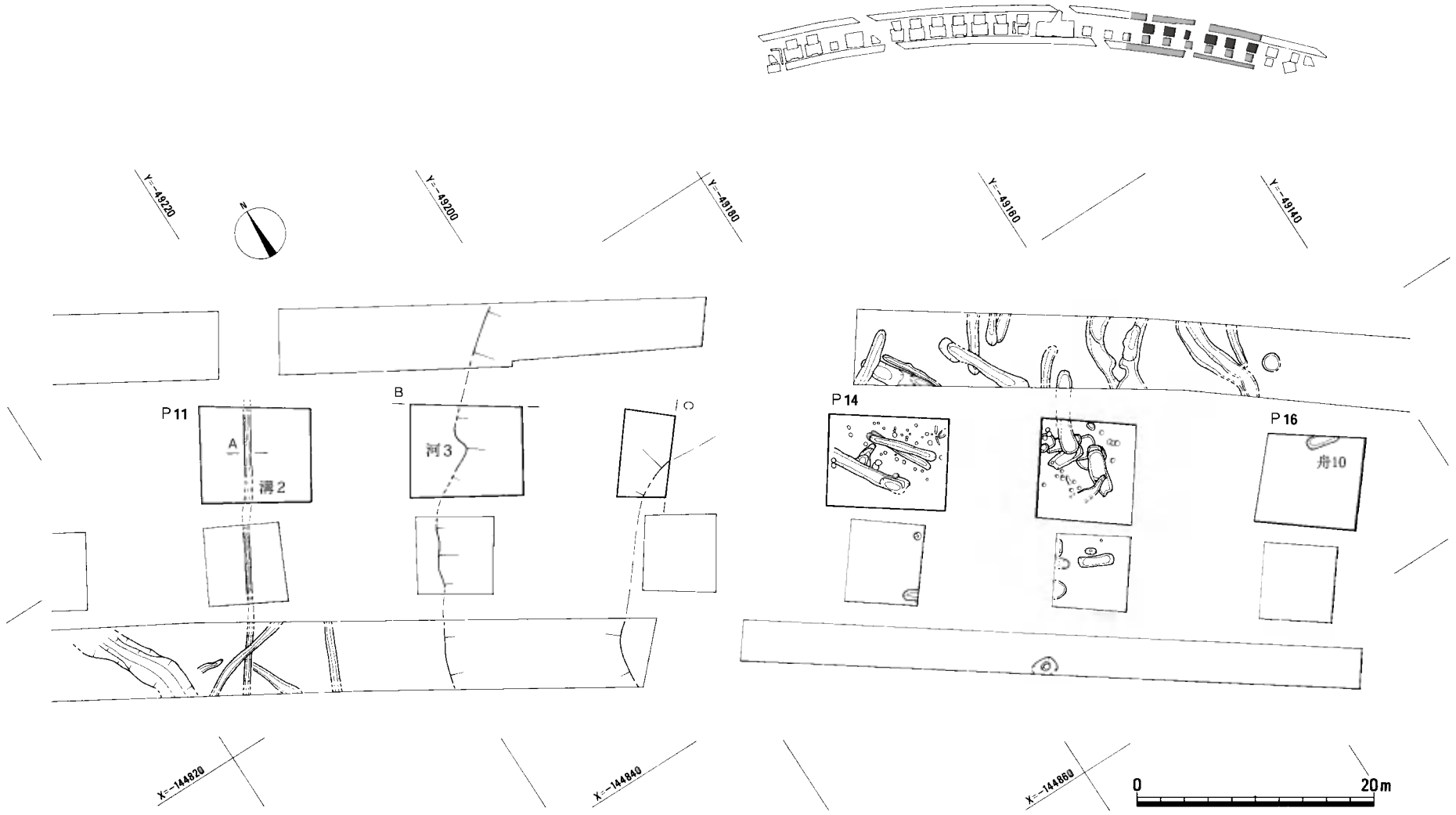
1　現耕作土
2　中近世水田層
3　中近世遺構
4　古代水田層
5　古代遺構
6　古墳時代初頭水田層と溝
7　古墳時代遺構
8　弥生～古墳時代包含層
9　弥生時代遺構
10　弥生時代前期水田層
11　弥生時代～古墳時代河道
12　弥生時代微高地





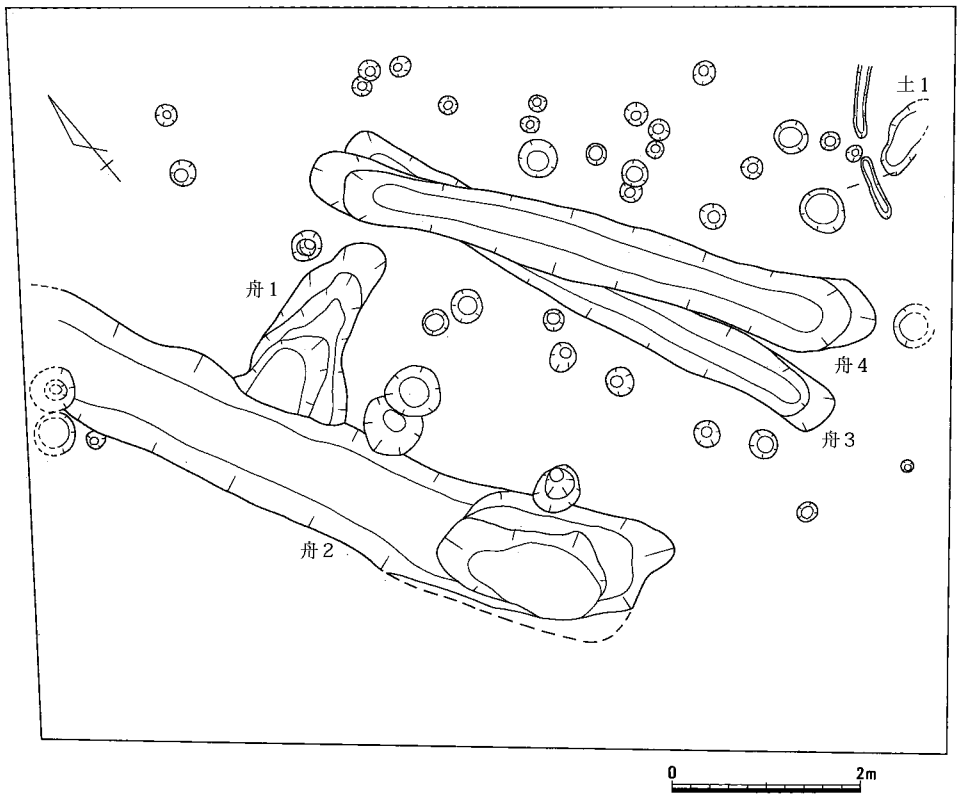


第**65**図　遺構全体図（**1/800**）・土層柱状模式図



太線枠が平成12年度調査区

第66図　弥生時代遺構配置図①（1/500）



第67図　Ｐ14区弥生時代遺構配置図（1/80）

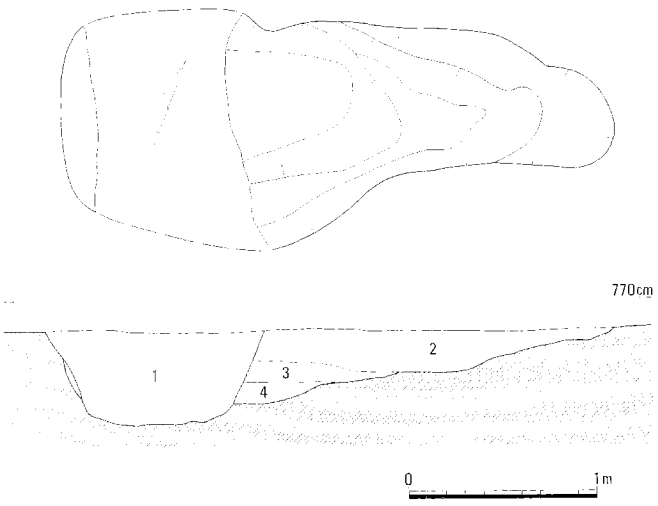
出土遺物は１～４が壺、５～６が甕である。４は櫛描沈線の下端に刺突文を施す。５・６・10の甕はいずれも倒Ｌ字の口縁であるが、５がヘラガキ沈線、６・10は櫛描沈線である。Ｓ１は石鏃の未製品と考えた。Ｓ２・Ｓ３は石錐、Ｓ４は楔、Ｓ５には二次調整がある。この舟形土壙の時期は、ヘラガキ沈線の甕など弥生時代前期後葉の様相もあるが、全体的に見れば中期前葉段階と判断している。

舟形土壙３・４（第66・67・70図、写真図版７・８・15・16）

２基のほぼ同じ規模の舟形土壙が重複しており、古いものを舟形土壙３、新しいものを舟形土壙４とした。舟形土壙３は長さ586cm、幅60cm、深さ24cmの規模を有し、断面形は緩やかなＵ字をなす。壙底の海抜高は725cmであり、長軸方位はＮ20°Ｗを指す。

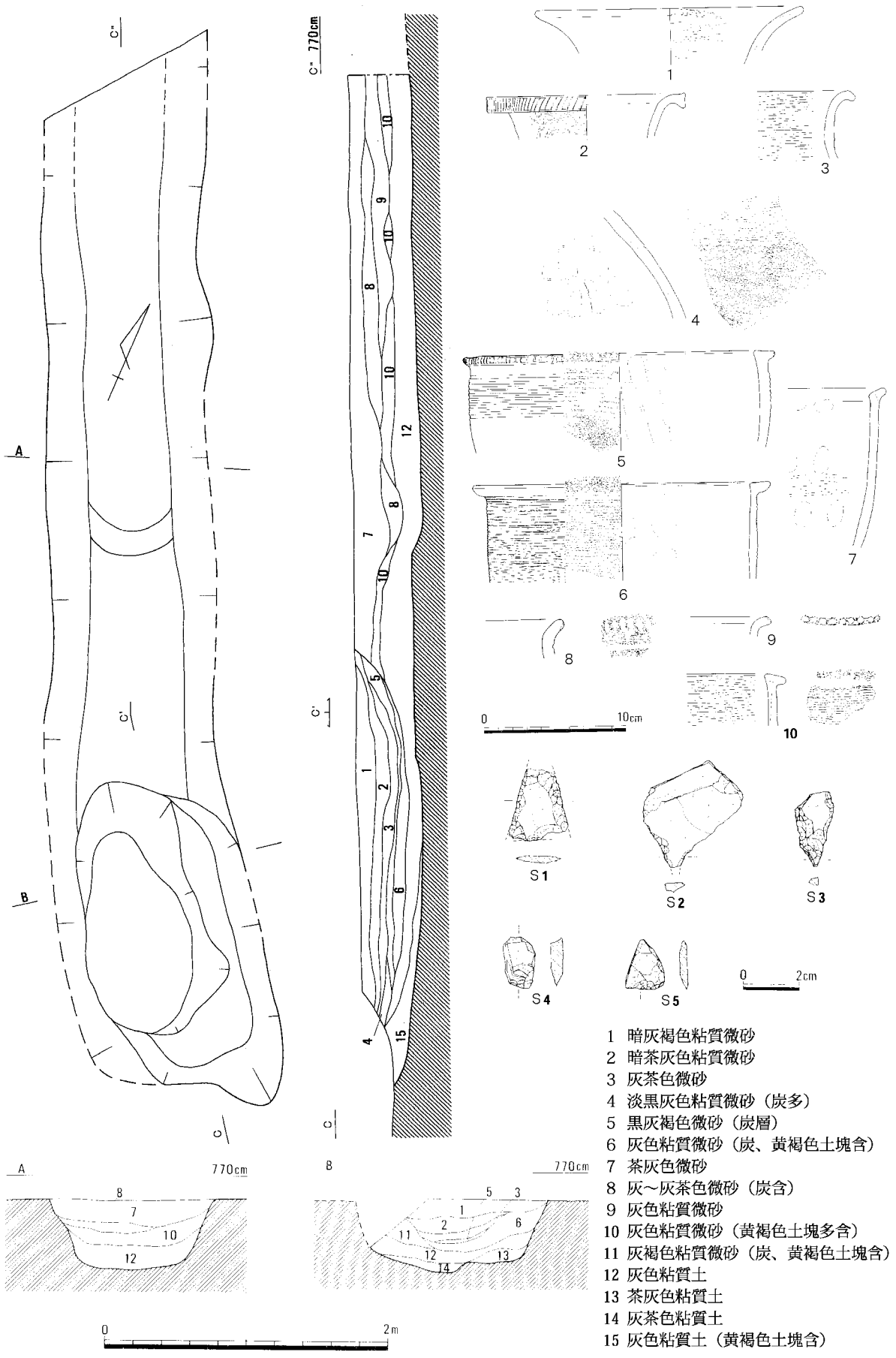
舟形土壙４は長さ619cm、幅70cm、深さ24cmの規模を持つ。断面形は舟形土壙３と同様、緩やかなＵ字をなし、土壙底の海抜高は728cmを測る。長軸の方位はＮ36°Ｗを指し、やや西に振る。

出土遺物は、11・16が舟形土壙３から、12～15・Ｓ６・Ｓ７は舟形土壙４からの出土である。11～14はいずれも甕の口縁部で、11・12は端部に刺突文、体部に多条のヘラガキ沈線を施す。15は片口の鉢

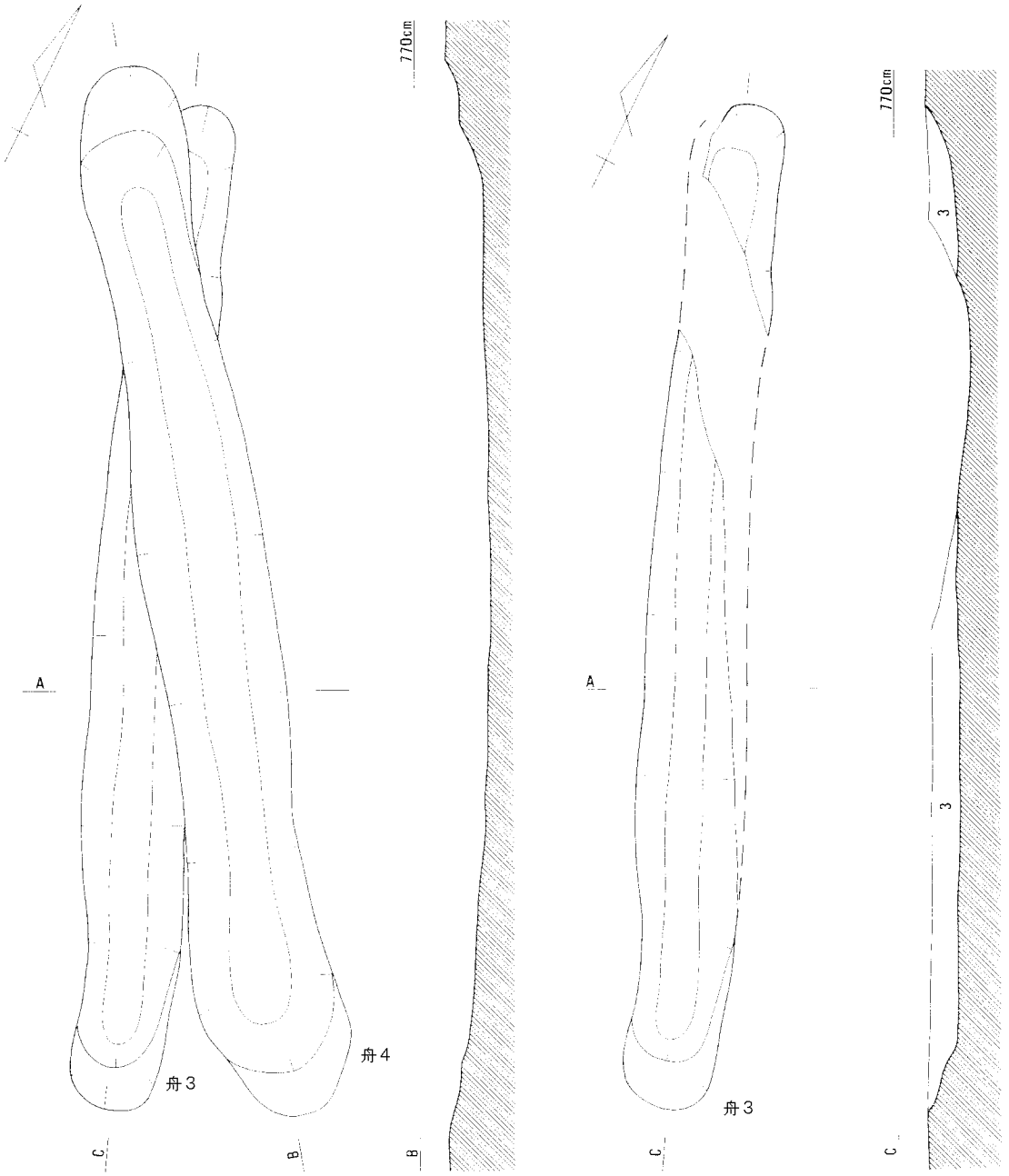


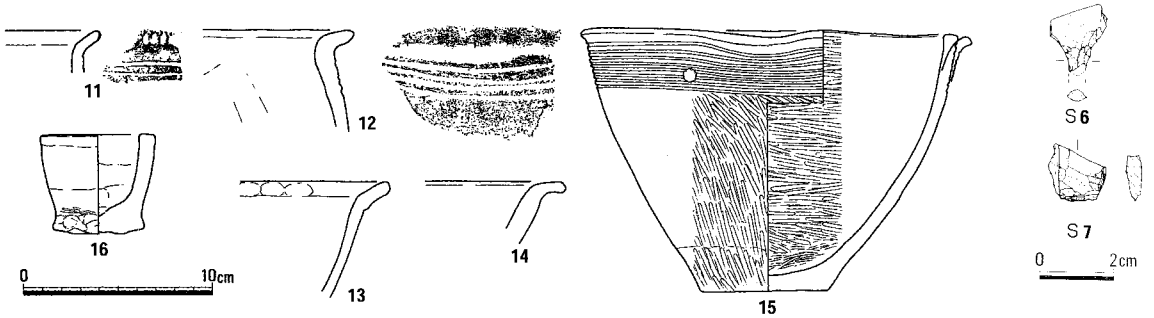
1　舟形土壙２埋土　　3　灰茶色微砂
2　茶灰色微砂　　4　灰色粘土（黄褐色土塊含）

第68図　舟形土壙１（1/40）



第69図　舟形土壙２（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）





第70図　舟形土壙３・４（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

であり、ほぼ完形に復元された。体部上半はヘラガキ沈線が施され、円形浮文状の痕跡が認められる。Ｓ６は石錐、Ｓ７には二次調整がある。この２基の舟形土壙の時期は舟形土壙２よりやや古く、弥生時代前期後葉に考えたい。なお、この２基に沿って径40cm以下の小穴が並んで検出された。両者は関連するものと考えられるが、小穴が柵状の構造あるいは建物構造をなすものかは不明である。

舟形土壙５（第66・71・72図）

Ｐ15区で検出された。後述する舟形土壙６～９に先行し、その大半が削平されている。浅いたわみ状をなし、規模は、長さ267cm、現存幅126cm、深さは５cmほど残存するのみである。出土遺物は、細片で図示していないが弥生時代中期と思われる破片もあり、遺構の時期もこの段階と考えた。

舟形土壙６（第66・71・73図、写真図版７・８・15・16）

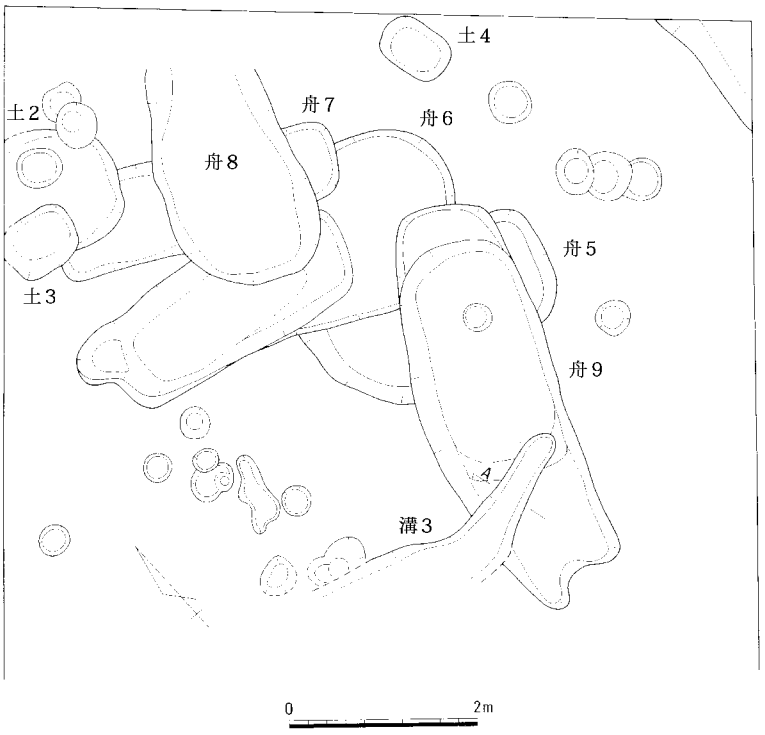
Ｐ15区で検出され、舟形土壙５より後出し、舟形土壙７～９より先行する。長軸方向で430cmを測る浅い長楕円形の掘り方の西半に、長さ約290cm、幅110cmを測る長方形の深い掘り込みを持つ。深さは約50cmを測る。底面はほぼ平坦をなし、海抜高704cmを測る。長軸方位はＮ78°Ｗを指す。なお、北西隅部は円形に突出した状況を呈する。

出土遺物はいずれも細片であり、図示し得たもののうち**17**～**19**が壺、**20**～**23**が甕である。**26**は全容は明らかではないが、片口容器状をなす形状を考えた。Ｓ８・Ｓ９は楔である。

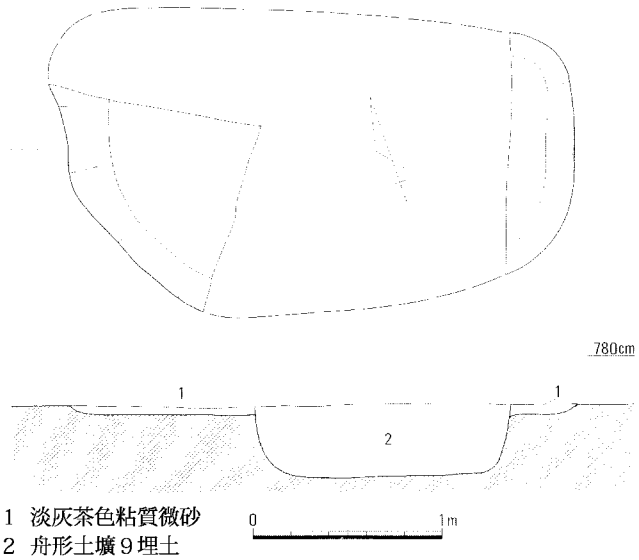
この舟形土壙の時期は、出土遺物から弥生時代中期前葉と判断した。

舟形土壙７（第66・67・74図）

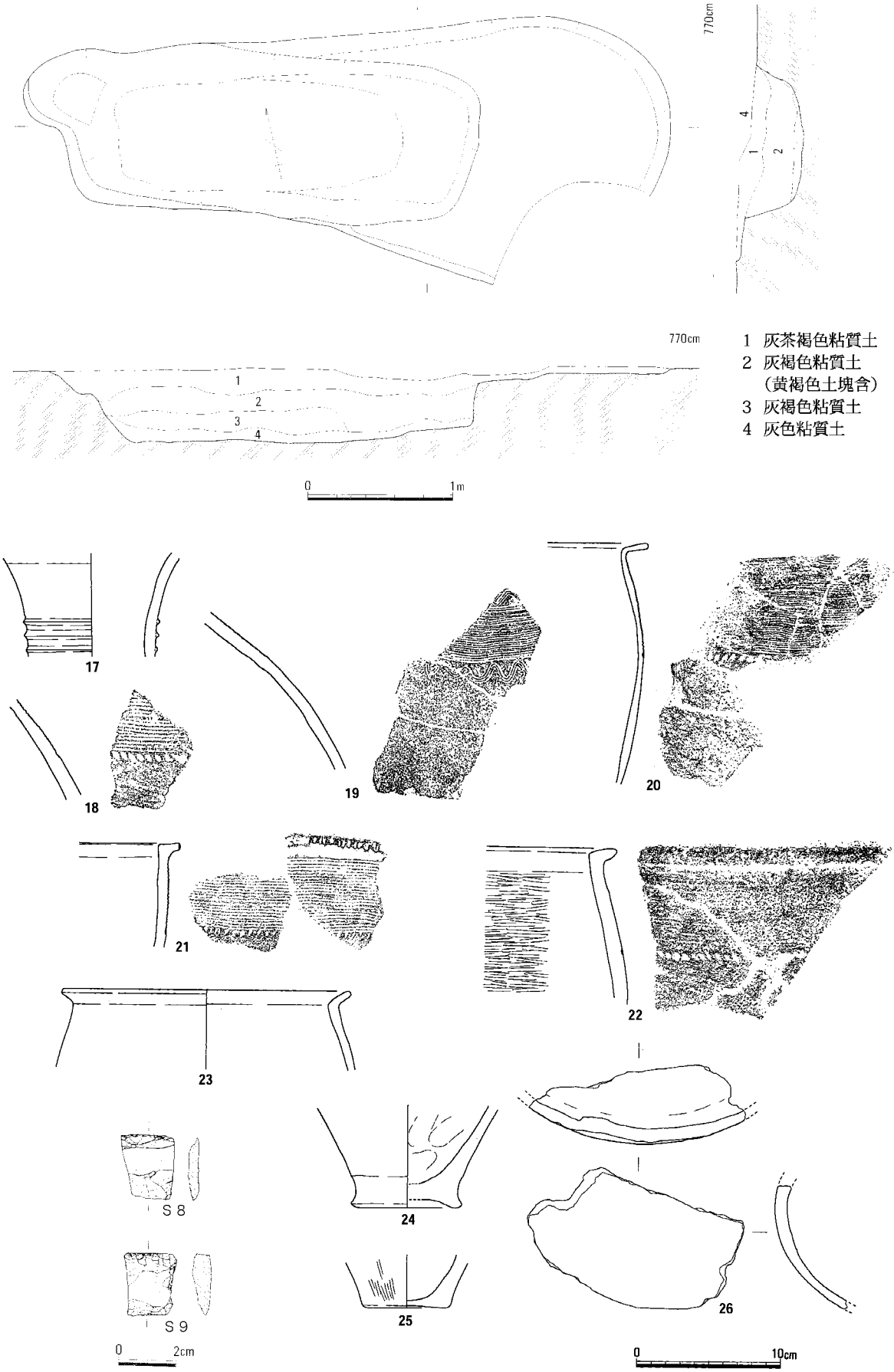
舟形土壙６の北隣で検出された長さ約320cm、幅約100cm、深さ約10cmの規模を有する長方形の浅いものである。壙底は海抜高737cmを測り、長軸方位はＮ



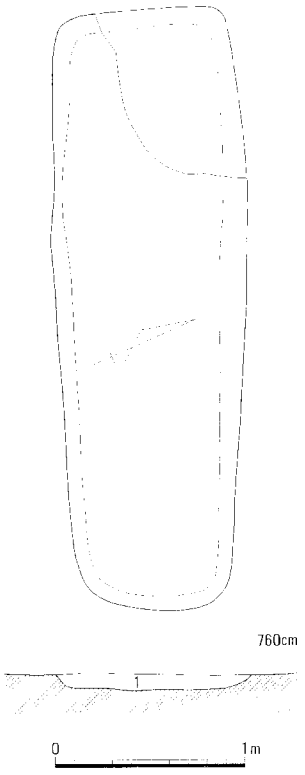
第**71**図　Ｐ**15**区弥生時代遺構配置図（**1/80**）



第**72**図　舟形土壙５（**1/40**）

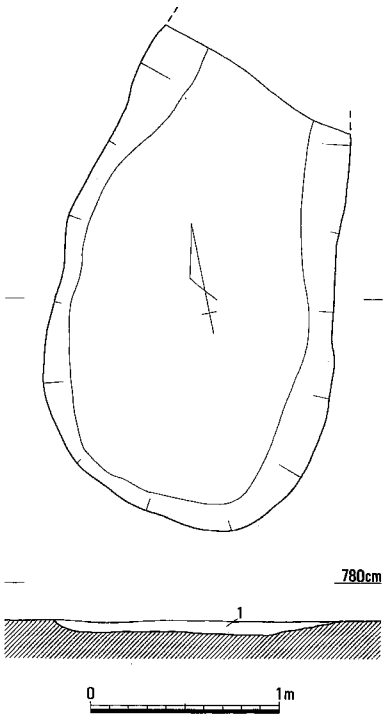


第**73**図　舟形土壙６（**1/40**）・出土遺物（**1/4**・**1/2**）

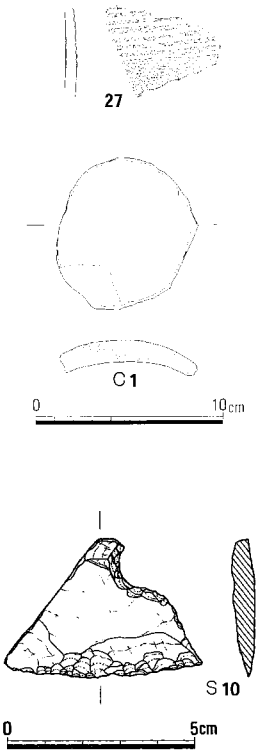


1　灰褐色粘質微砂

第74図　舟形土壙（1/40）



1　灰茶色粘質微砂



第75図　舟形土壙８（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

67°Wを指す。出土遺物は細片のみであり、周辺の状況から弥生時代中期前葉と考えた。

舟形土壙８（第66・67・75図、写真図版16）

舟形土壙６・７と交差し、その上位で検出された。北半は調査区外に延び県報告121の舟形土壙10と連続する遺構の可能性がある。検出長250cm、幅約150cmを測るが、深さは７cm残存していたにすぎない。土壙底の海抜高は750cmを測る。出土遺物は細片のみであるが図示した**27**はヘラガキ沈線を施した甕胴部、Ｃ１は転用の円板形土製品である。Ｓ**10**はサヌカイト製の石匙である。この舟形土壙の時期も周囲の状況から弥生時代中期前葉と考えたい。

舟形土壙９（第66・67・76図、写真図版７・15・16）

Ｐ15区、微高地上において検出された。舟形土壙５・６と重複し、これらより後出する。長軸方向で448cm、短軸方向で154cmを測る規模を有する長方形の掘り方であり、深さは40cm残存していた。なお、北端部の掘り方は浅い段を有する。土壙底の海抜高は715cmである。長軸方位はＮ25°Ｅを示す。土壙底は二段になっており、200cmほどのほぼ平坦な形状をつくる。また、北半に径約31cm、深さ13cmの窪みが１カ所確認されている。土壙埋土には炭、骨片等が多量に含まれ、魚骨、哺乳類の歯・骨の小破片を確認した。種同定の詳細は第７章に記載しているが、ナマズ類、鮫類、イノシシ等がある。

出土遺物はほとんどが細片である。**29**の壺は口縁部外面に矢羽根状の刻み目を施し、**30**は口縁上面部に２条の突帯と外面に１条の沈線を有する。**31**～**36**は甕の破片であり、櫛描沈線が施されている。**38**は高杯の軸部である。石器も比較的多く出土している。Ｓ**11**～Ｓ**14**は石錐、Ｓ**17**は楔、Ｓ**15**・Ｓ**16**の下端には二次調整が施されている。Ｓ**18**は粘板岩製の石包丁であり、両端と刃部を欠損している。なお、図示した他にもサヌカイト製の微細な剥片およびチップが多くある。Ｂ１は加工された骨製品

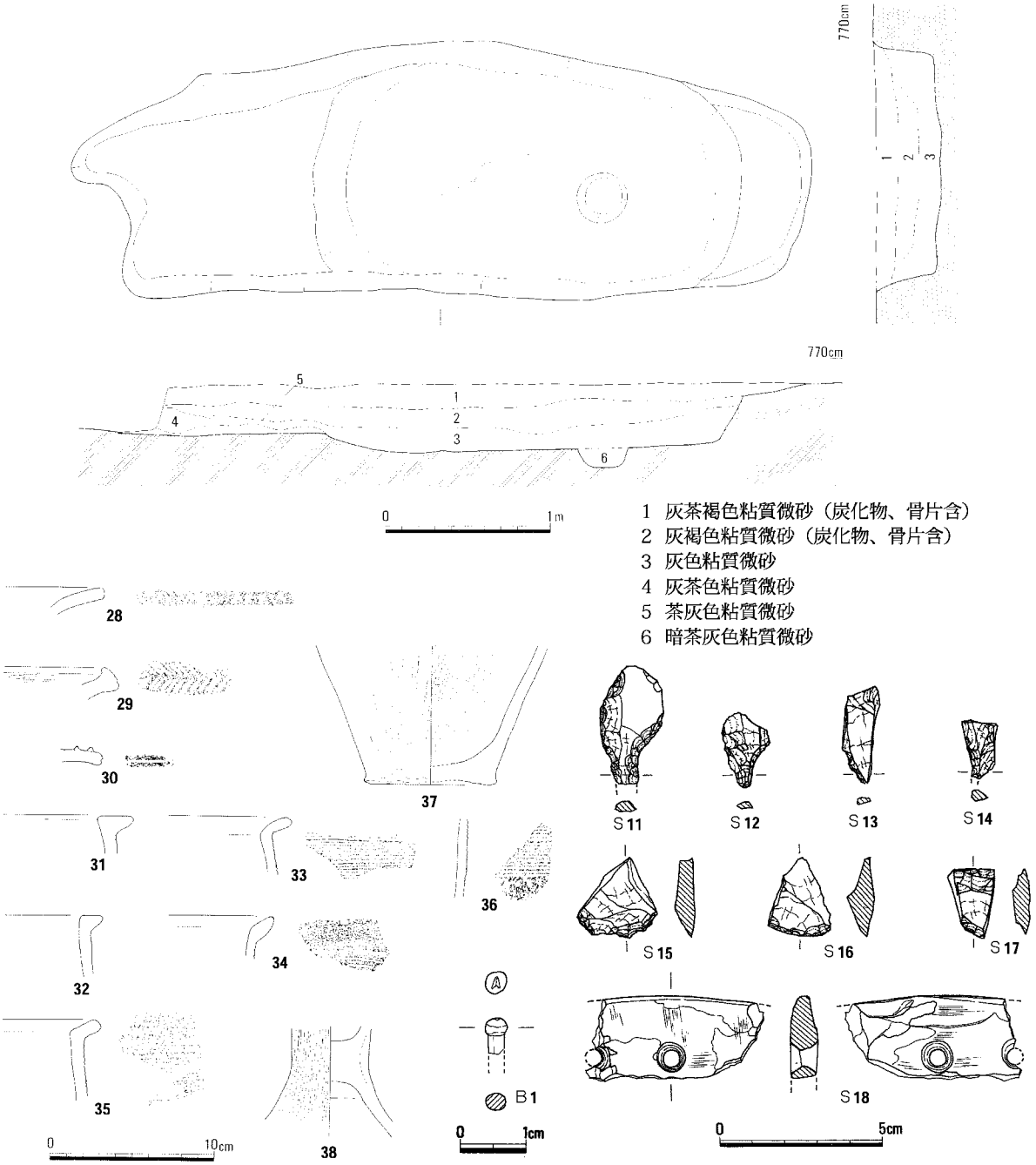
の可能性が考えられる。長さ5.5㎜を測り、頭部は丸く、頭頂に矢羽根状の刻み目が施されている。器種、用途とも不明であるが、針あるいは微小ではあるが弓筈の飾りの可能性も考えられる。これら遺物の出土状況は、どちらかといえば上層に多く見られ、廃棄状況を示すものと理解される。

この舟形土壙の時期は、出土遺物から弥生時代中期前葉段階と考えた。

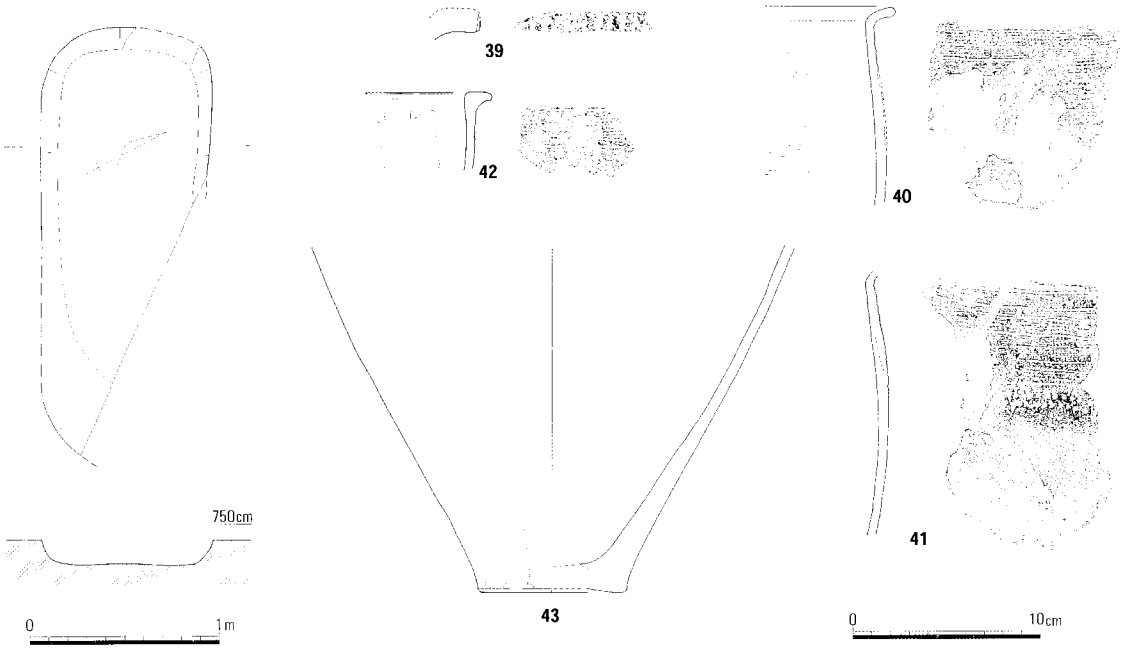
舟形土壙**10**（第66・77図）

Ｐ16区北端部で検出された。その一部は調査区外にあり、復元すると長さ約250㎝、幅約90㎝ほどの規模を持つと考えられる。深さは15㎝ほど残存しており、長軸方位はＮ63°Ｗを指す。出土遺物は**39**～**43**を図示したが、**40**と**41**の甕は櫛描沈線の下端に刺突文が施され、同一個体と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期前葉と判断している。



第**76**図　舟形土壙９（**1/40**）・出土遺物（**1/4**・**1/2**・**1/1**）

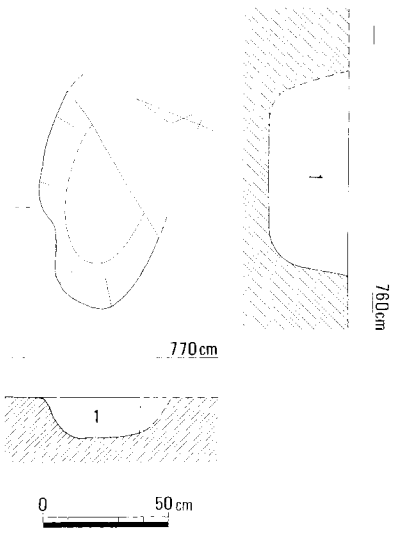


第77図　舟形土壙10（1/40）・出土遺物（1/4）

（２）土壙

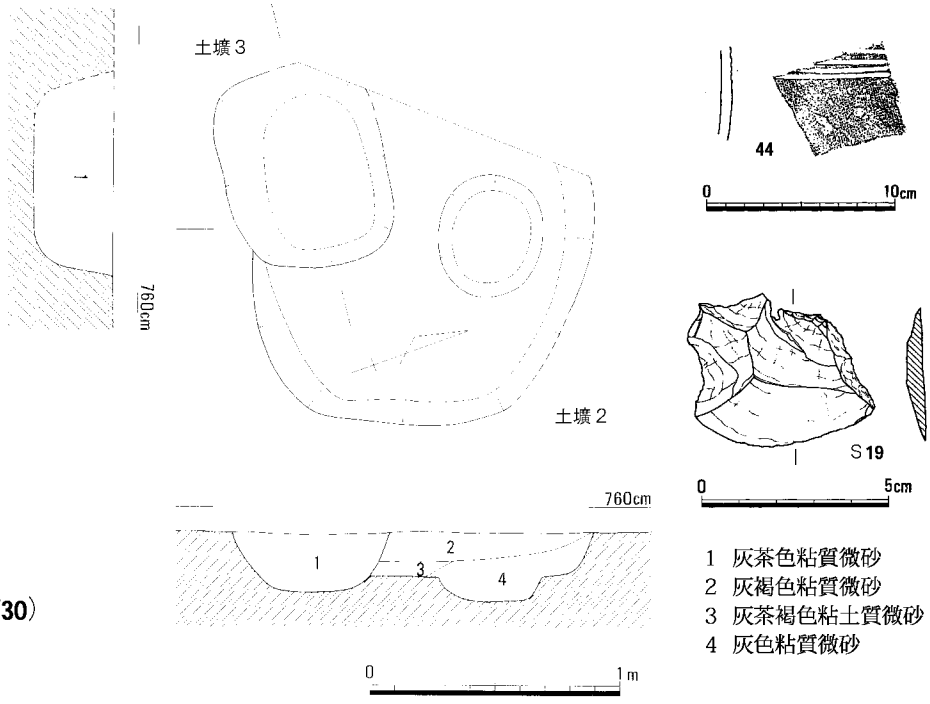
土壙１（第66・67・78図）

Ｐ14区東端で検出された歪な楕円形をなす土壙である。一部は調査区外に延びるが、約90cm×50cmの規模を持つと思われる。深さは16cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明であるが、おそらく舟形土壙と同じく弥生時代前期後葉～中期前葉段階と思われる。



1　暗茶褐色粘質土

第78図　土壙１（1/30）



1　灰茶色粘質微砂
2　灰褐色粘質微砂
3　灰茶褐色粘土質微砂
4　灰色粘質微砂

第79図　土壙２・３（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土壙２（第66・71・79図）

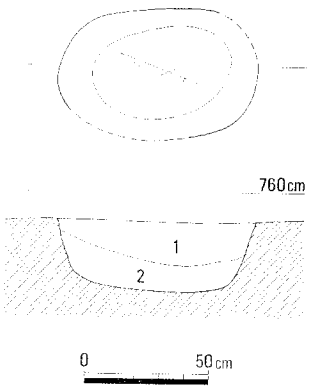
Ｐ15区北西部で検出され、検出長140cm、幅135cm、深さ20cmを測る。一部は調査区外に延びるため、本来の長さは不明であり、舟形土壙の可能性もある。底面には深さ10cmほどの円形の掘り込みが認められたが、土壙に伴うものかどうか疑問が残る。図示した出土遺物を参考にし、土壙の時期は弥生時代前期後葉段階の可能性を考えた。

土壙３（第66・71・79図、写真図版16）

土壙２と重複する82×64×23cmの規模をもつ長方形の土壙である。底面は平坦で断面は矩形をなす。出土遺物は図示していないが弥生時代中期前葉の壺の破片があり、土壙の時期もこの段階と判断した。

土壙４（第66・71・80図）

Ｐ15区北東部で検出された82×64×28cmの規模を持つ隅丸長方形の土壙である。底面はほぼ平坦であり、埋土の境界に炭面を確認した。出土遺物は細片のみであるが、この土壙の時期も周囲の状況から弥生時代前期後葉～中期前葉段階のものと考えている。



1　灰茶褐色粘質土（下面に炭）
2　茶灰色粘質土

第80図　土壙４（1/30）

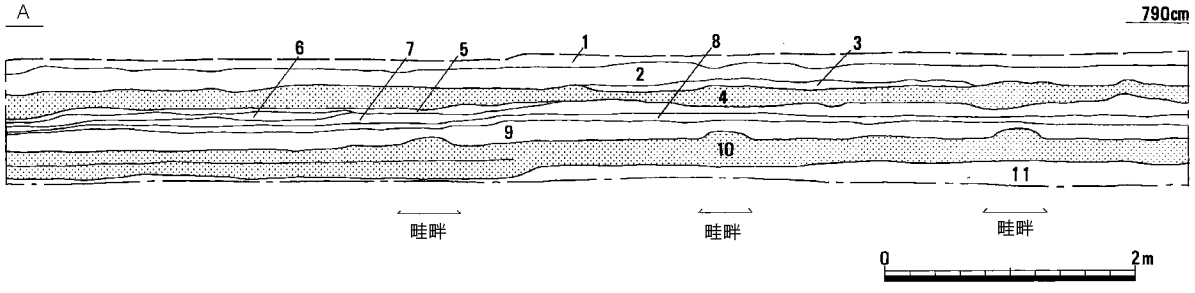
（３）水田

水田１（第81・82図、写真図版９）

調査範囲の最東端部、Ｐ18・Ｐ19区において検出された。第81図第10層がこれにあたり、微高地縁辺部を耕地化したものと考えらる。Ｐ19区においてはこの層は洪水差によって被覆されており、幅20～30cm、高さ10cmほどの畦畔による100cm四方の小規模な区画が良好に確認された。耕作層と畦畔の土層の差異は明確ではない。田面の海抜高は南西部が高く北東にかけて低くなり、685cm～700cmを測る。出土遺物が細片のみであり確実な時期は不明であるが、この稲作跡の時期は層位関係を考慮すれば弥生時代前期段階まで遡る可能性が強い。なお、層中の植物珪酸体分析を行ったが、イネ属は第10層には確認されず、被覆する第11層の洪水砂層から確認されている。このことは第11層の洪水が発生する以前に調査地点ないしその近辺でイネが存在したことを示唆するのではないかとの報告を受けた。

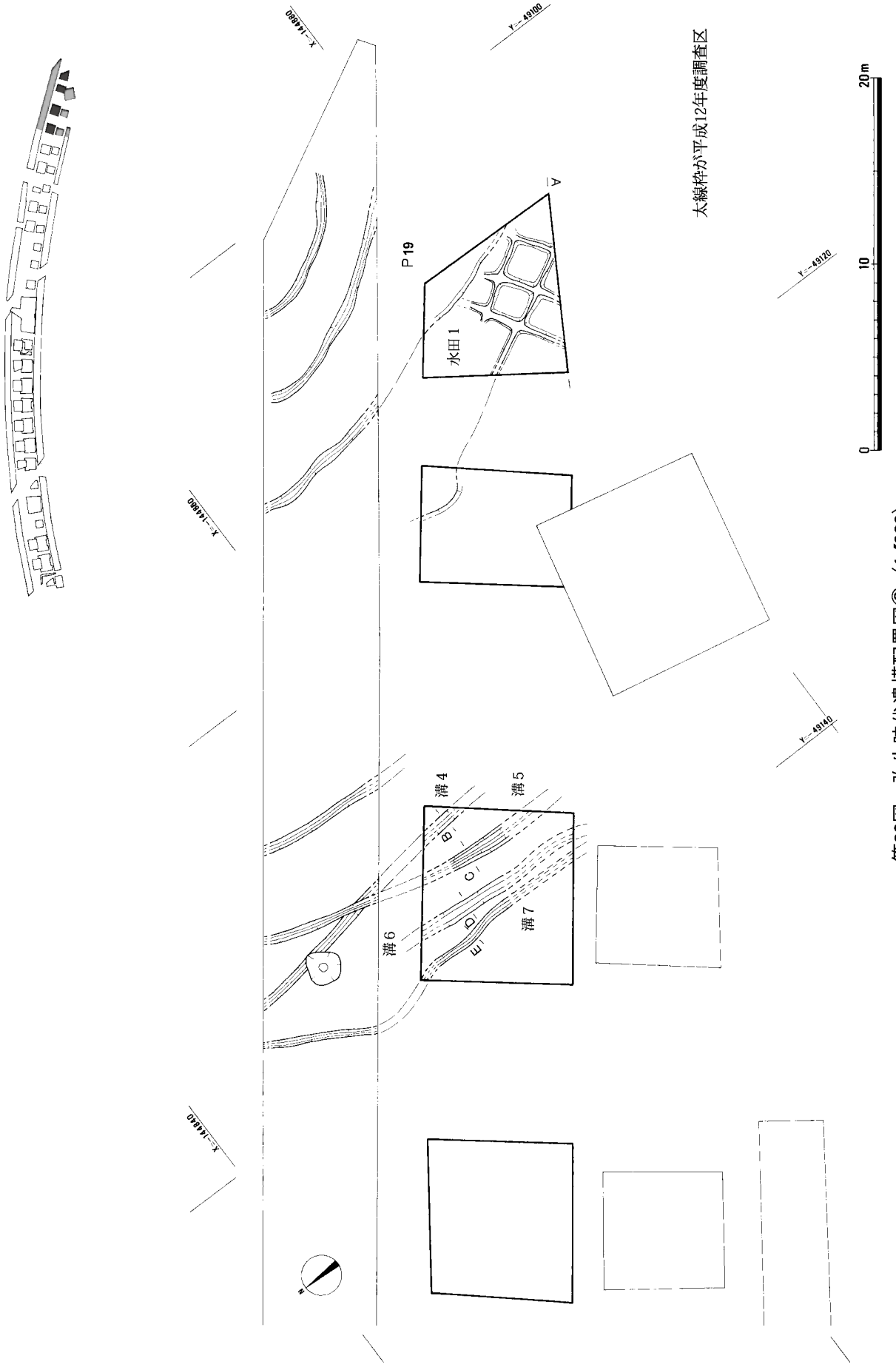
水田２（第81・83・87図、写真図版９）

水田１の上位、Ｐ17～Ｐ19区において確認された水田層である。県報告121で水田３と報告されているものと同一の水田層である。田面の海抜高は、740cmを測り、東・北へ向かって低くなる。Ｐ17区

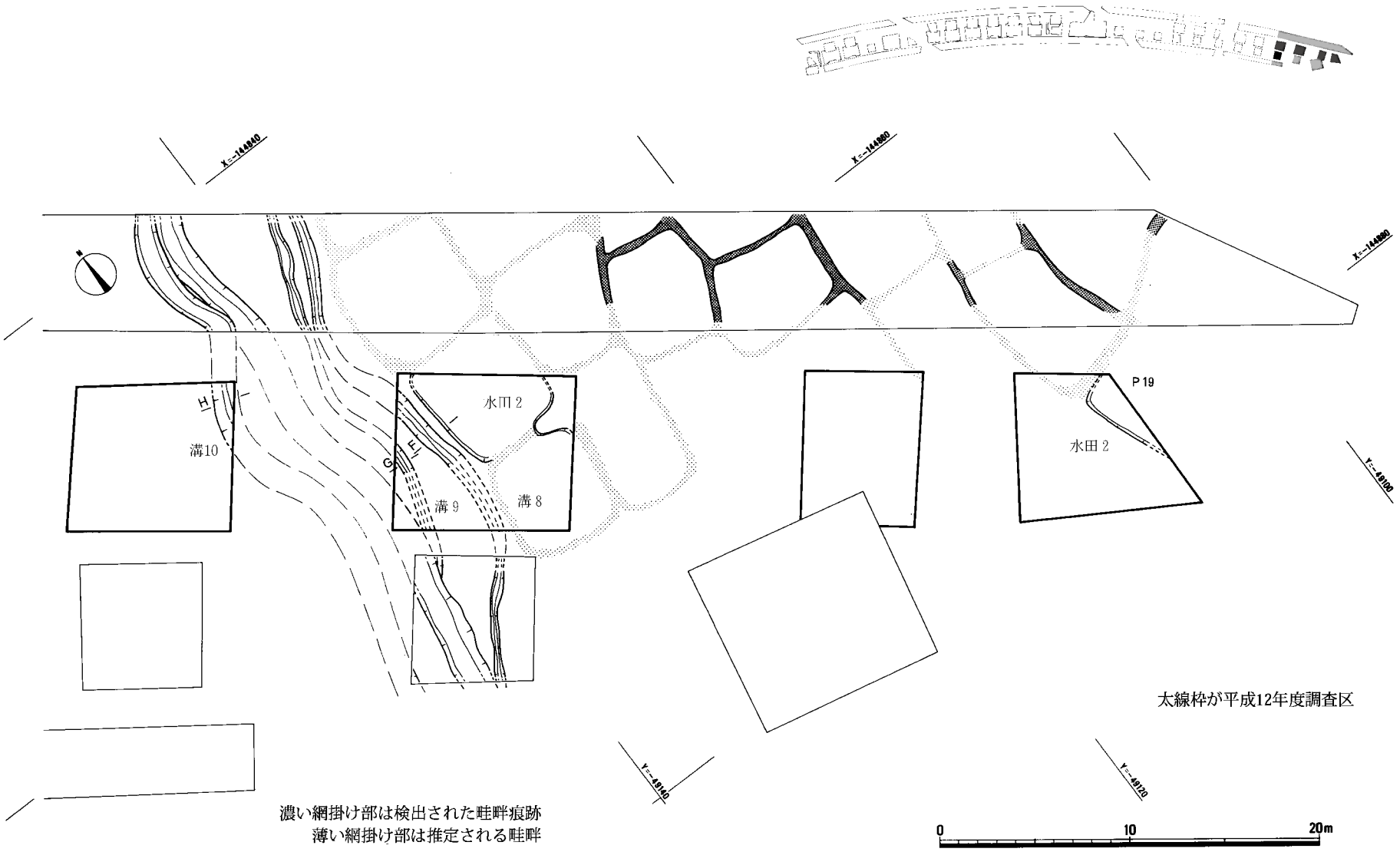


1　灰褐色粘質微砂（現代耕作土）
2　明橙黄色粘質微砂（中世～近世水田）
3　暗橙灰色粘質微砂（古代～中世水田）
4　暗灰褐色粘質微砂（水田２）
5　灰白色粘質微砂（褐色土塊混）
6　暗灰褐色粘質微砂
7　淡黄色細砂（洪水砂）
8　灰色粘質微砂
9　橙褐色細砂（洪水砂）
10　暗褐灰色粘質微砂（水田１）
11　淡黄褐色微砂（基盤層）

第81図　水田１・２（Ｐ19区）土層断面（1/60）



第82図　弥生時代遺構配置図②（1/300）



第83図　古墳時代遺構配置図②（1/300）

東端部では畦畔の一部と思われる高まりを確認しており、島状高まりの可能性を考えた。検出された畦畔の状況から田面の規模は５ｍ～10ｍ四方の小区画が推測される。後述する溝８がこの水田の排水路と考えられ、水田の時期は、その出土遺物から弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期を推定している。なお、この水田層の上位に古代以降の水田層も確認している。

（４）溝

溝１（第65・84・85図）

Ｐ４区を南北に走る幅70cm、深さ15cm、底面の海抜高781cmを測る溝である。県報告121で溝１・溝44と報告した溝と同一の溝であるが、層位と細片の出土遺物から弥生時代後期段階の可能性が強い。

溝２（第66・85図）

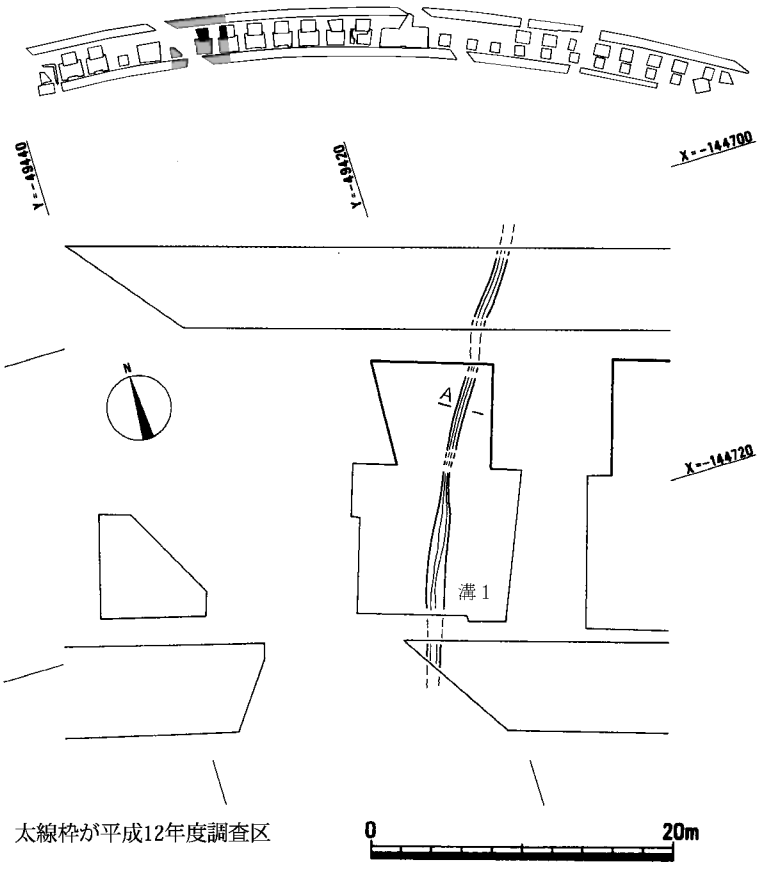
Ｐ11区で検出された北東～南西方向に延びる溝である。幅50cm、深さ20cmを測り、断面は矩形を呈する。溝底の海抜高706cmである。県報告121溝５と繋がり、出土遺物から弥生時代後期の時期を考えた。

溝３（第66・71・85図）

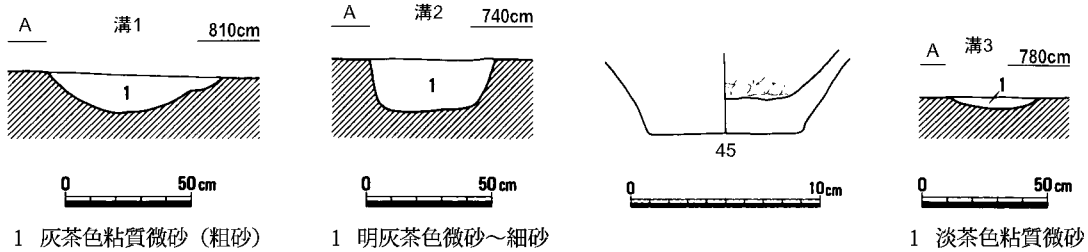
Ｐ15区、舟形土壙９の上位で検出された溝である。幅35cm、深さ５cmのみ残存しており、溝底の海抜高は762cmであった。出土遺物は細片であるが、時期はこれを参考にして弥生時代後期段階と考えたい。

溝４（第82・86図）

Ｐ17区で検出された。後述する溝５～溝10とあわせ微高地端部に巡り、水田の用水路と考えられる溝である。おそらくこれらの溝は、水田域の拡大あるいは、洪

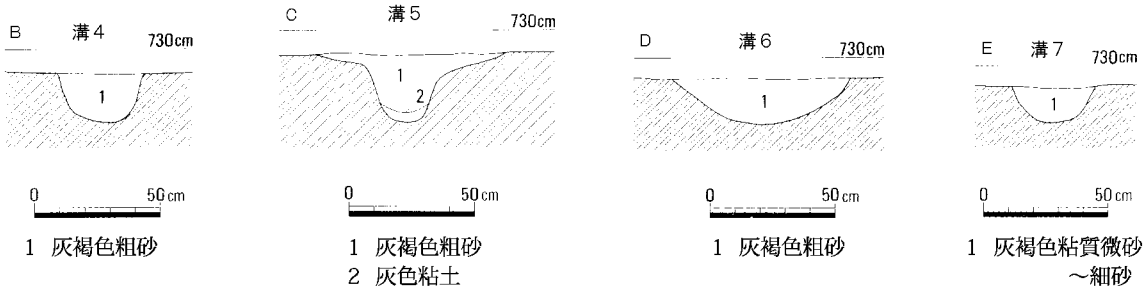


第84図　弥生時代遺構配置図③（1/500）



1　灰茶色粘質微砂（粗砂）　1　明灰茶色微砂～細砂　1　淡茶色粘質微砂

第85図　溝１～３（1/30）・溝２出土遺物（1/4）



第86図　溝４～７（1/30）

水からの復旧の折りに掘り直されたものと考えられ、粗砂によって埋没しているものがある。

溝４は南北に延び、幅34cm、深さ14cm、溝底の海抜高は701cmである。県報告121で溝25としたものに連続すると考えられる。出土遺物がなく、時期は不明であるが、弥生時代の幅に収まると考えた。

溝５（第82・86図）

Ｐ17区、溝４の西側で検出された。県報告121溝26と連続する。二段の掘り方を持ち、検出面での幅75cm、深さ25cmを測る。溝底は緩やかなＵ字をなし、海抜高は694cmである。溝底に粘土層が認められ、上層は粗砂で埋没している。出土遺物は細片のみであり、時期は弥生時代の幅を考えている。

溝６（第82図・86図）

Ｐ17区、溝５の西側で平行に検出された。県報告121では未報告である。幅71cm、深さ18cmを測る。溝底の海抜高は703cmである。この溝も粗砂で埋没している。出土遺物は細片のみであり、時期は弥生時代の幅を考えざるを得ない。

溝７（第82・86図）

Ｐ17区、溝６の西側に位置する。検出幅33cm、深さ14cmを測り、溝底の海抜高は707cmであった。この溝も弥生時代の幅に収まる。

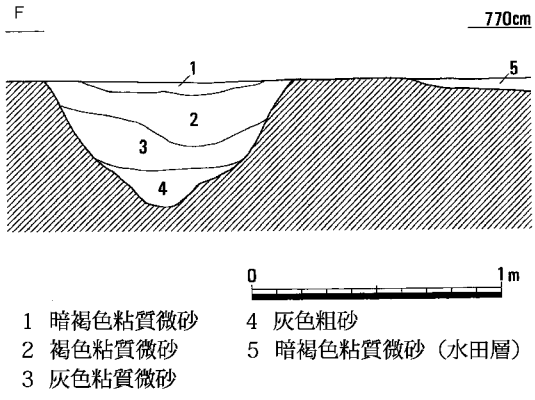
溝８（第83・87図）

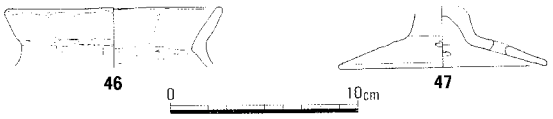
Ｐ17区、溝７の西側に位置する。南北方向に延び、県報告121の溝23と溝33を繋ぐものと判断した。検出面は他の溝より高い。幅約100cm、深さ50cmを測り、溝底には粗砂が堆積しており、その海抜高は700cmである。水田２の用水路の機能を果たすと考えられる。

出土遺物から弥生時代後期末～古墳時代初頭段階のものと判断した。

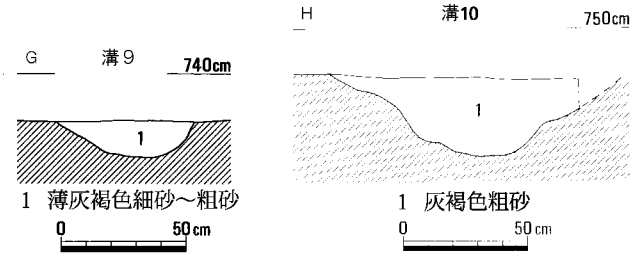
溝９（第83・88図）

Ｐ17区東端部で検出した。県報告121溝22と同一と判断した。幅55cm、深さ15cmを測り、溝底の海抜高は707cmであった。溝８より後出すると推測される。





第87図　溝８（1/30）・出土遺物（1/4）



第88図　溝９・10（1/30）

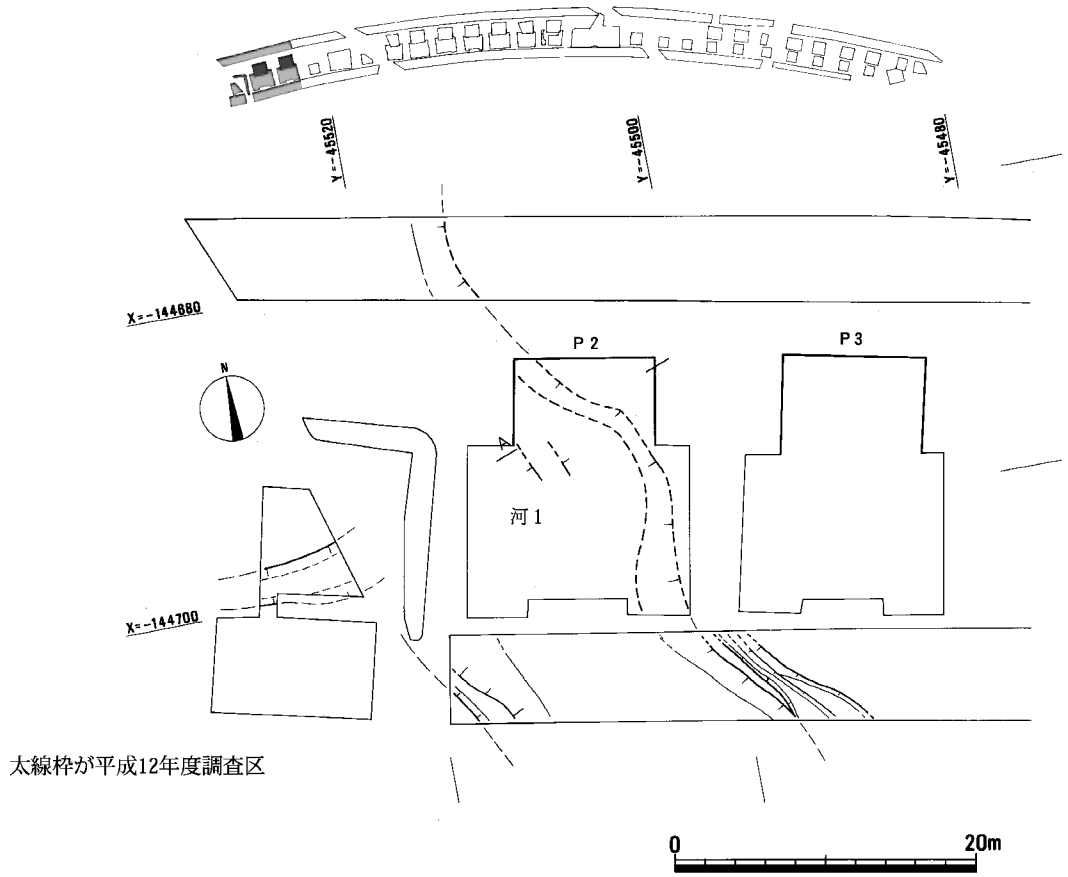
溝10（第83・88図）

Ｐ16区西端で検出した。県報告121の溝20と連続する溝であり、幅約120cm、深さ30cm、溝底の海抜高699cmを測った。複数の底浚えが認められ、粗砂で埋没している。前報告ではその出土遺物から時期を弥生時代後期初頭段階としたが、位置や重複関係を参考にすると古墳時代初頭段階まで下がる可能性があると考えた。なお、今回の調査では検出できなかったが、県報告121の溝21と溝32が同一の溝であり、この溝10の東隣に掘開されていたものと推測される。

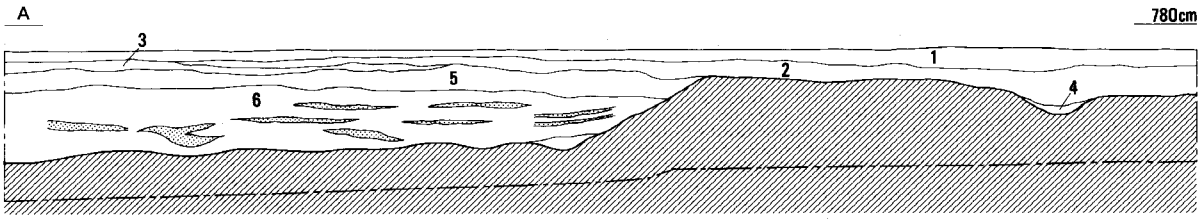
（５）河道

河道１（第89・90図）

Ｐ２区において、南西に下がる肩口部分を確認した。県報告121河道２の成果と併せ、広範囲な低位部の中を大きくは南北方向に流路をとるものと考えられる自然河道である。下半は粗砂を部分的に



第89図　弥生時代遺構配置図④（1/500）



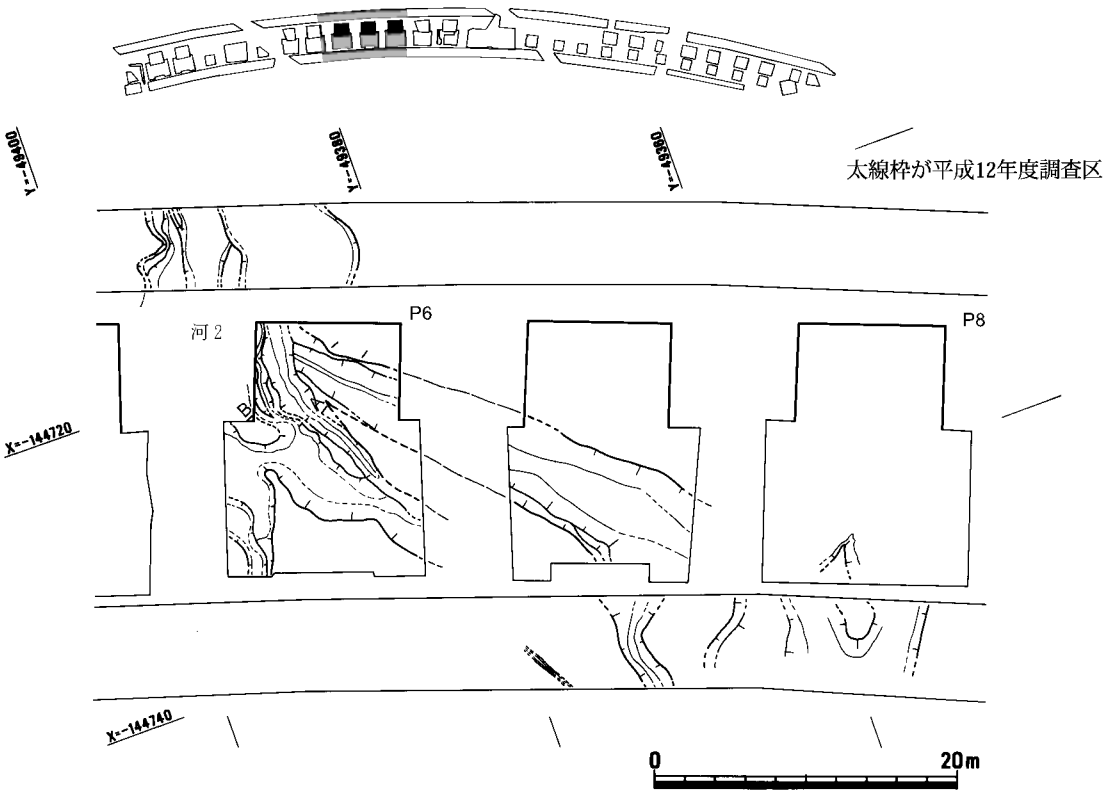
1 淡橙色細砂　3 青灰色粗砂　5 青灰色シルト
2 青灰色粘土　4 青灰色粗砂　6 灰色粘土（粗砂が互層状に堆積）

第90図　河道１（1/60）

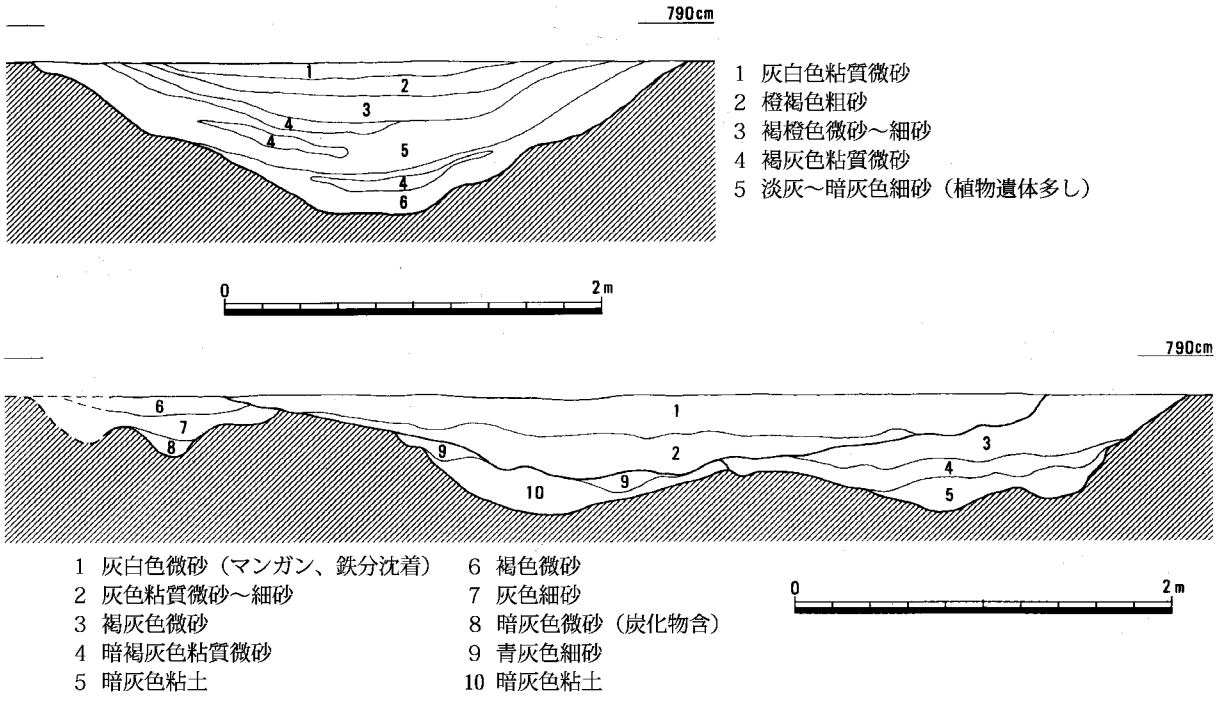
挟む粘土が堆積している。出土遺物は細片のみで明らかでないが、前回の報告を参考にすれば弥生時代の幅に収まる可能性が最も高い。

河道２（第91・92図、写真図版10）

Ｐ６区で検出された。幾本もの自然流路が洪水によってもたらされ、埋没していく状況を把握した。



第91図　弥生時代遺構配置図⑤（1/500）



第92図　河道２（1/40）

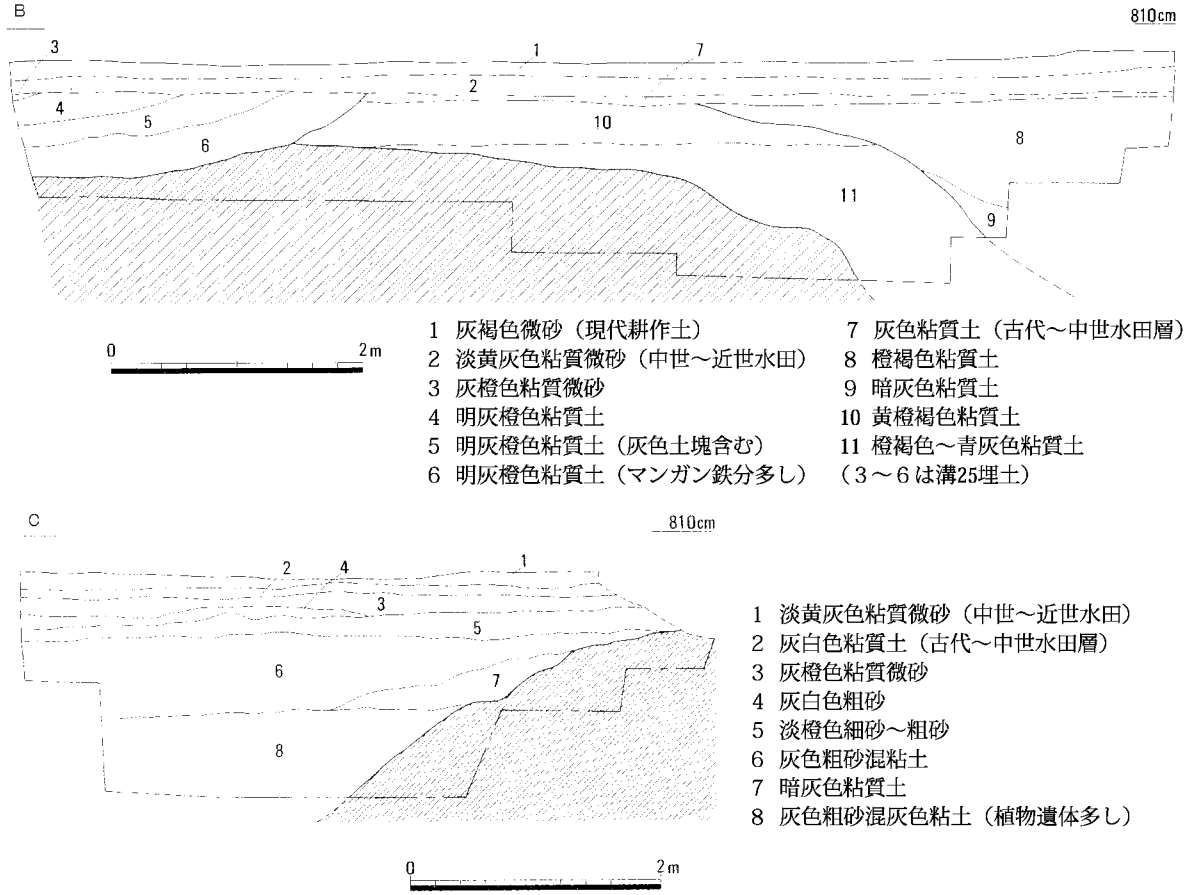
県報告121において溝２としたものが第92図Ａ断面に示すものと連続する。この流れは基本的に粗砂で埋没し、下半には木片などの植物遺体が多く含まれていた。また、この流路はＢ断面３～５層に相当し、少なくともこの上位に３回の流路が確認されている。なお、これらの流路は北側道部分では明らかではなく、急激に河道底の高さが上がっていく状況を確認している。出土遺物は図示していないが、弥生時代中期と考えられる細片がある。

河道の時期は前回の報告の成果を考慮すれば弥生時代前期後葉～中期段階と推測される。

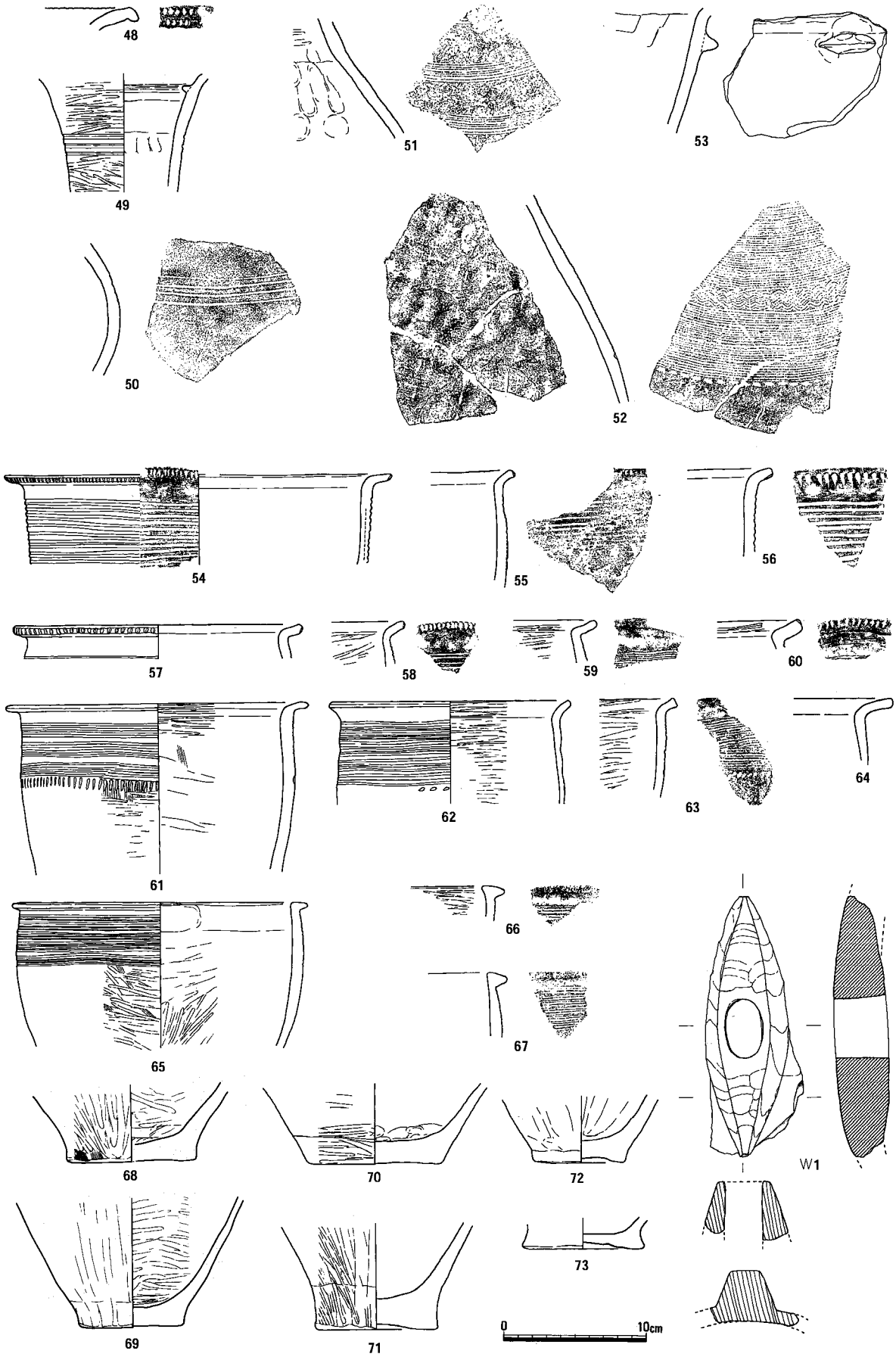
河道３（第66・93・94図、写真図版10・15・16）

Ｐ12区において北西肩口部分、Ｐ13区において南東肩口部分を確認した。県報告121河道４と同一のものである。推定河道幅17ｍを測る。海抜高600㎝まで掘り下げたが、河道底は確認できていない。河道の南東側は弥生時代前期後葉～中期の微高地が確認されており、この河道は微高地の下がり部に沿って流れていたものと推測される。また、北西側では低位部の状況を示している。北西肩口部分の観察から河道は大きく２段階に分かれ、埋没に従い、幅が狭くなっていったと考えられる。遺物はほとんどが微高地寄りの南東肩口部分に集中して出土しており、このことも居住域が河道の南東側にのみ存在したの傍証となろう。

図示した出土遺物のうち、**48**の壺は口縁部外面に２段の刺突を巡らし、**49**は内面に突帯を巡らす。**50**は胴部外面にヘラガキ沈線を施す無頸の壺であり、**51**・**52**の壺は櫛描の沈線・波状文を巡らす。**54**～**58**の甕はヘラガキ沈線、**59**～**63**・**65**～**65**の甕は櫛描沈線を施している。**53**は大形の鉢で把手がつく。Ｗ１は木製の両手鍬と考えられる。



第**93**図　河道３（**1/60**）



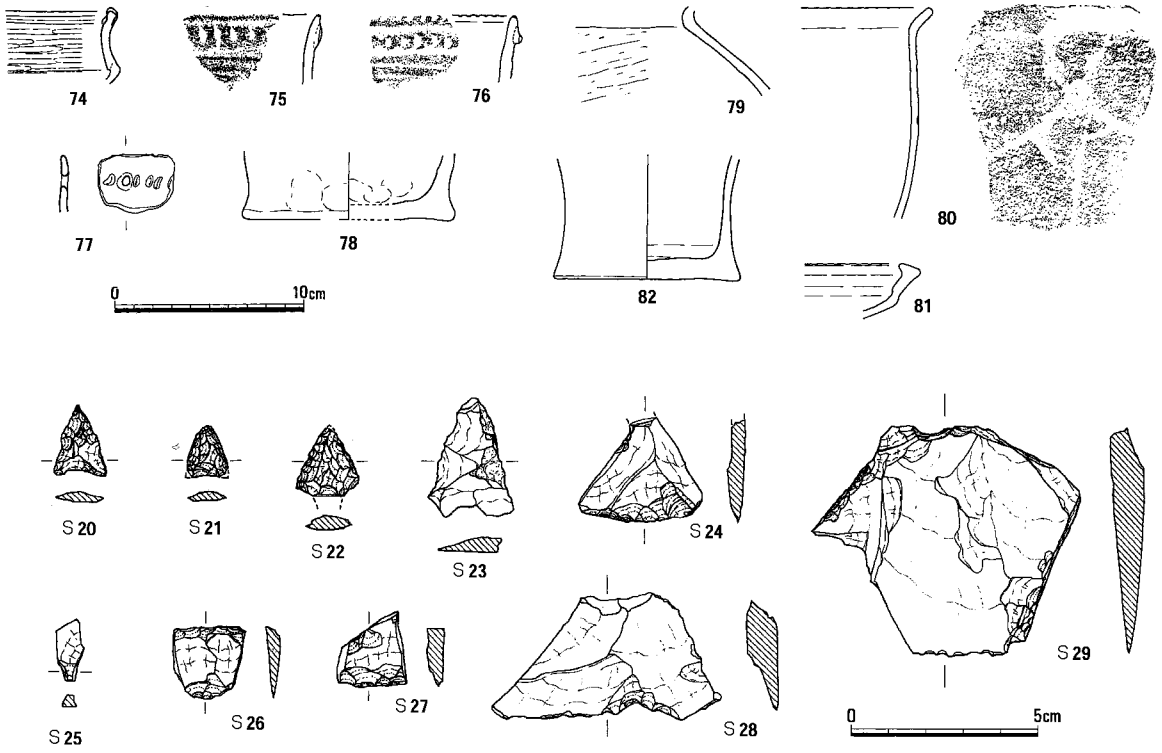
第**94**図　河道３出土遺物（**1/4**）

図示したようにこれらの出土遺物は弥生時代前期後葉～中期前葉段階のものがあり、微高地上で検出された遺構の時期とも合致し、主にこの時期に安定した流路として流れていたものと推測される。おそらくは、微高地南東から北東部に広がる水田への水の供給源として利用されていたのであろう。なお、河道上層から７～８世紀と考えられる須恵器の破片もあり、さらに河道埋没後には奈良～平安時代と推測される水田層も確認されていることから、遅くともこの段階には最終的に埋没していたものと考えられる。

（６）遺構に伴わない遺物（第95図）

ここでは、遺構検出前の掘り下げに伴って出土したものを中心に図示した。**74**～**78**の縄文時代晩期の土器はＰ５区の粗砂層中で出土したものである。この粗砂層はＰ４～Ｐ５区において確認されており、古い低位部あるいは河道の堆積を示すものと推測されたが、平面的には検出できていない。今回の調査で最も古い段階の遺物であり、近隣にこの時期の集落が存在したことが推測される。**74**は浅鉢、**75**・**76**は刻目突帯を持つ。**77**は爪形文が施されており、穿孔されている。摩耗が著しく確証はできないが、転用の土製品の可能性が高い。**79**～**81**は弥生土器である。**79**は後期の壺、**80**は摩滅しているが櫛描沈線の施された中期前葉の甕、**81**は後期初頭の高杯、**82**は中期のジョッキ形の鉢と考えられる。弥生時代後期の遺物は今回の調査では数少ないものの存在し、この時期の集落も近隣に展開していたと推測される。

Ｓ**20**～Ｓ**22**は石鏃、Ｓ**23**は石鏃の可能性はあるが未製品と思われる。Ｓ**25**は石錐、Ｓ**27**は楔。Ｓ**24**・Ｓ**26**・Ｓ**28**・Ｓ**29**は二次調整のある剥片と考えた。石器、剥片のほとんどはＰ14以東からの出土であり、河道３以西からの出土はない。この時期の居住域の限定を示す傍証となろう。



第**95**図　遺構に伴わない遺物

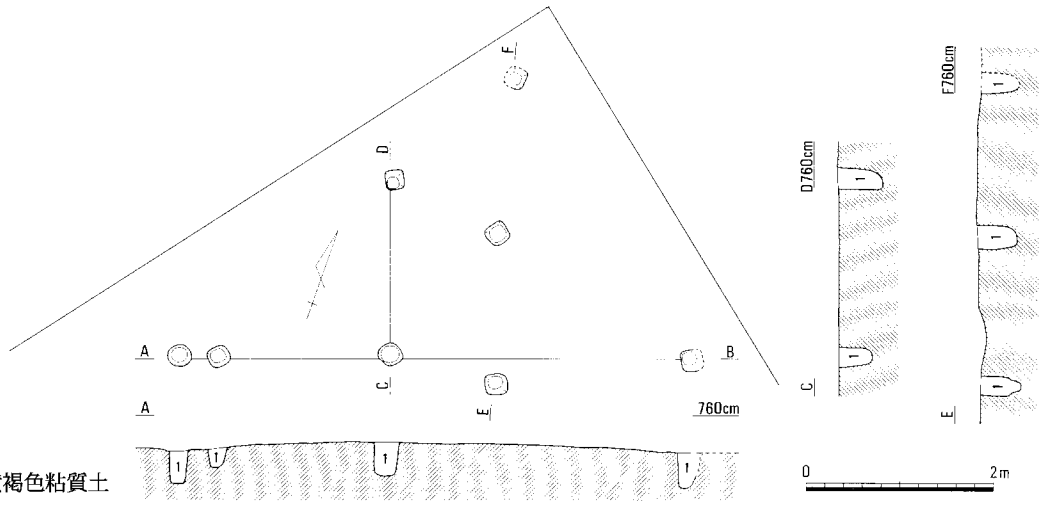
第３節　古代以降の遺構と遺物

（１）柱列

柱列１（第96・102図）

Ｐ19区で検出された。本来は建物構造をなすものと理解されるが、調査区が狭小なため、全容が把握できず、ここでは柱列として報告する。各柱穴の規模は、一辺20cm程度、深さ40～50cmのものと、これより浅い２種類のものがある。この柱列は隅丸方形をなす柱穴が第96図に示すように配列されており、おそらくは２棟の掘立柱建物の存在を示唆するものと考えられる。

出土遺物は、細片であるが中世土師質土器の高台付椀がある。この遺物と埋土の状況を勘案すればこの柱列は中世段階のものと判断される。



第96図　柱列１（1/80）

（２）土壙

土壙５（第97・98図、写真図版11）

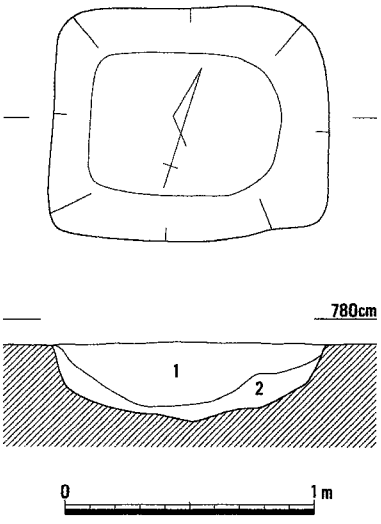
Ｐ９区において検出された。土壙６～８とあわせ計４基の土壙が集中している。土壙５は110×93×32cmの規模をもつ平面隅丸方形の土壙であり、土壙底の海抜高は739cmを測る。出土遺物に陶磁器の細片があり、この土壙の時期は近世段階である。

土壙６（第98・100図、写真図版11）

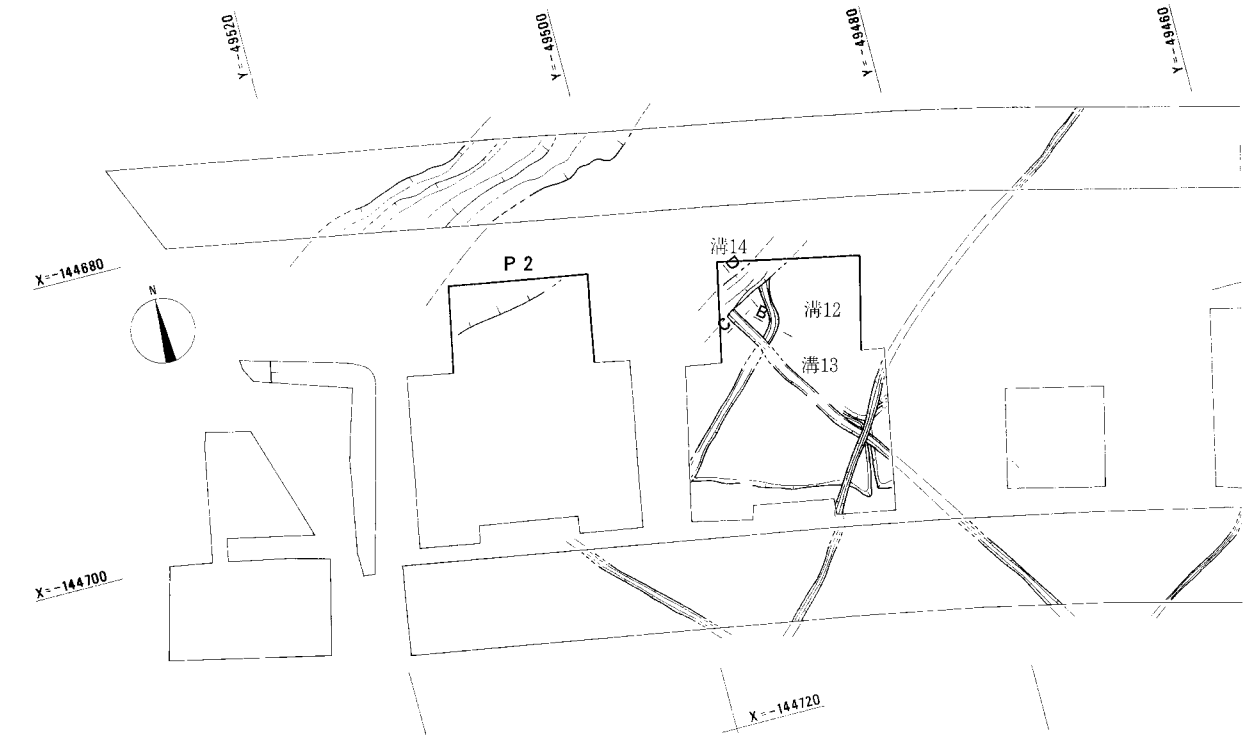
Ｐ９区西端で土壙７・９と並んで検出された。一部は調査区外にあり、全容は不明であるが幅116cm、深さ28cmを測る。平面隅丸方形をなすものか楕円形をなすかは確定できなかった。埋土の状況から近世の土壙と考えた。

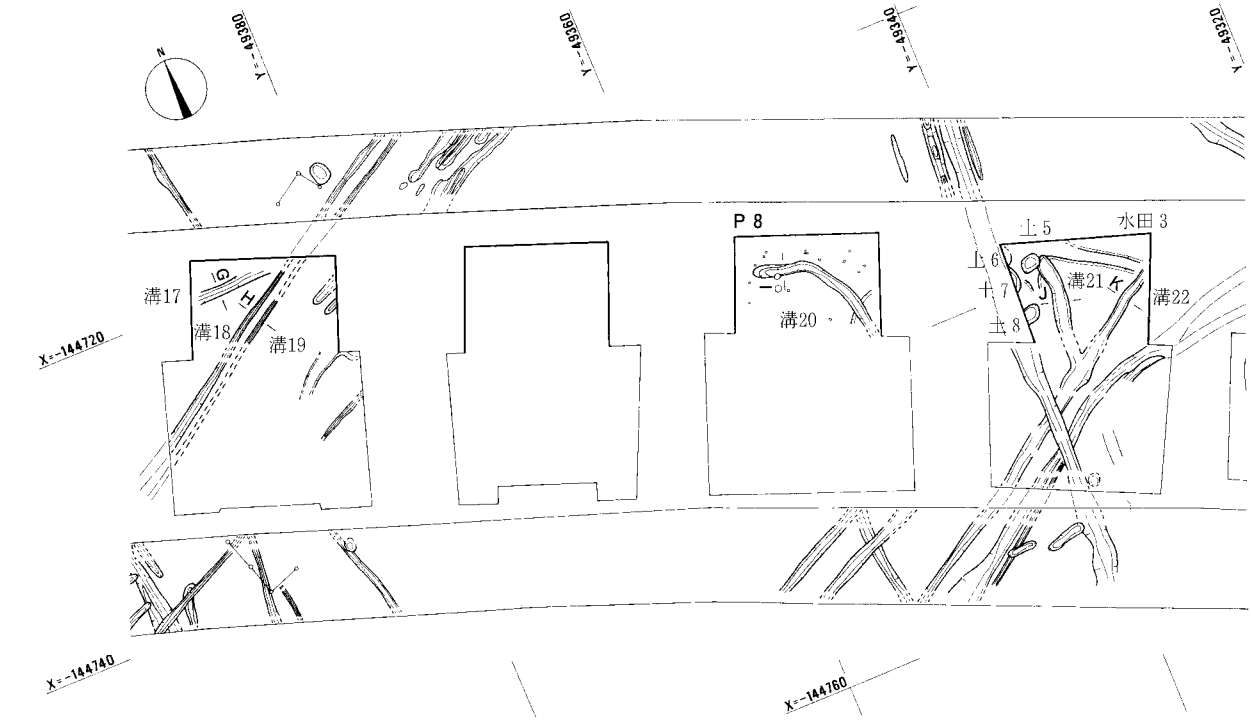
土壙７（第98・100図、写真図版11）

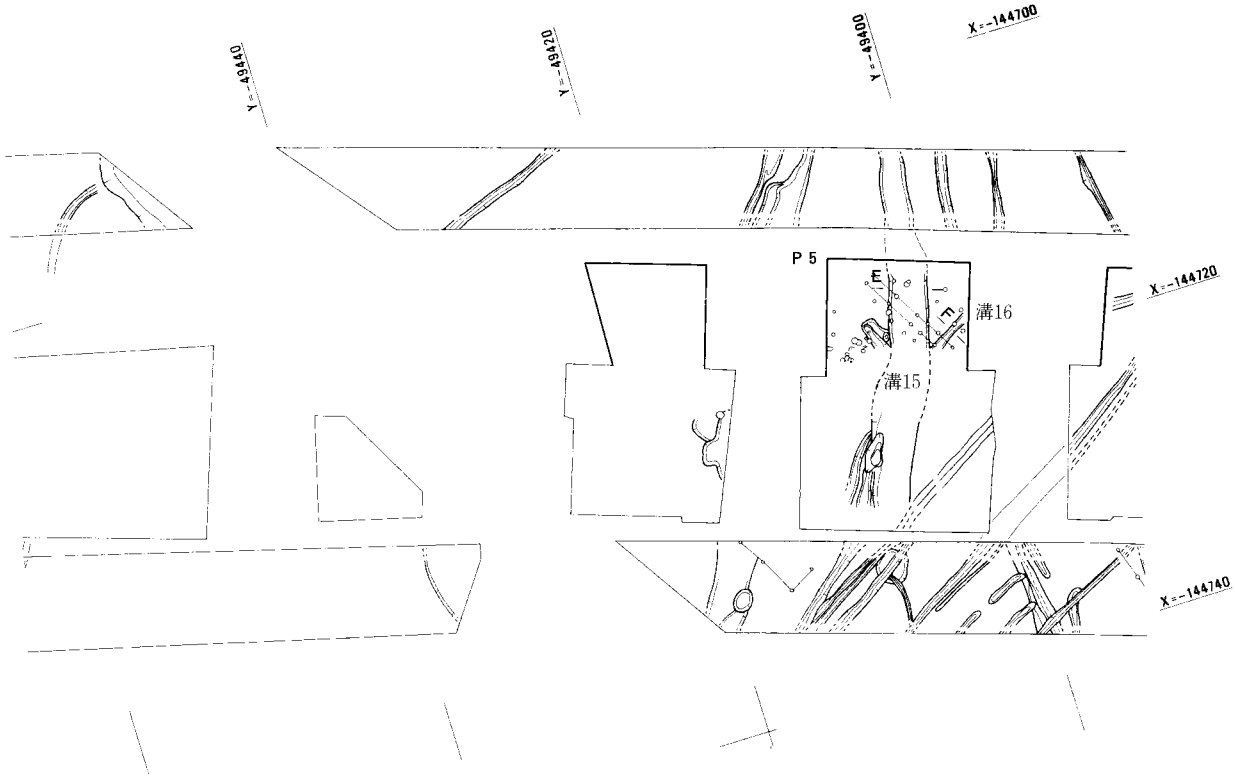
土壙６の北隣で検出された。一部は調査区外にあり、おそら



第97図　土壙５（1/30）

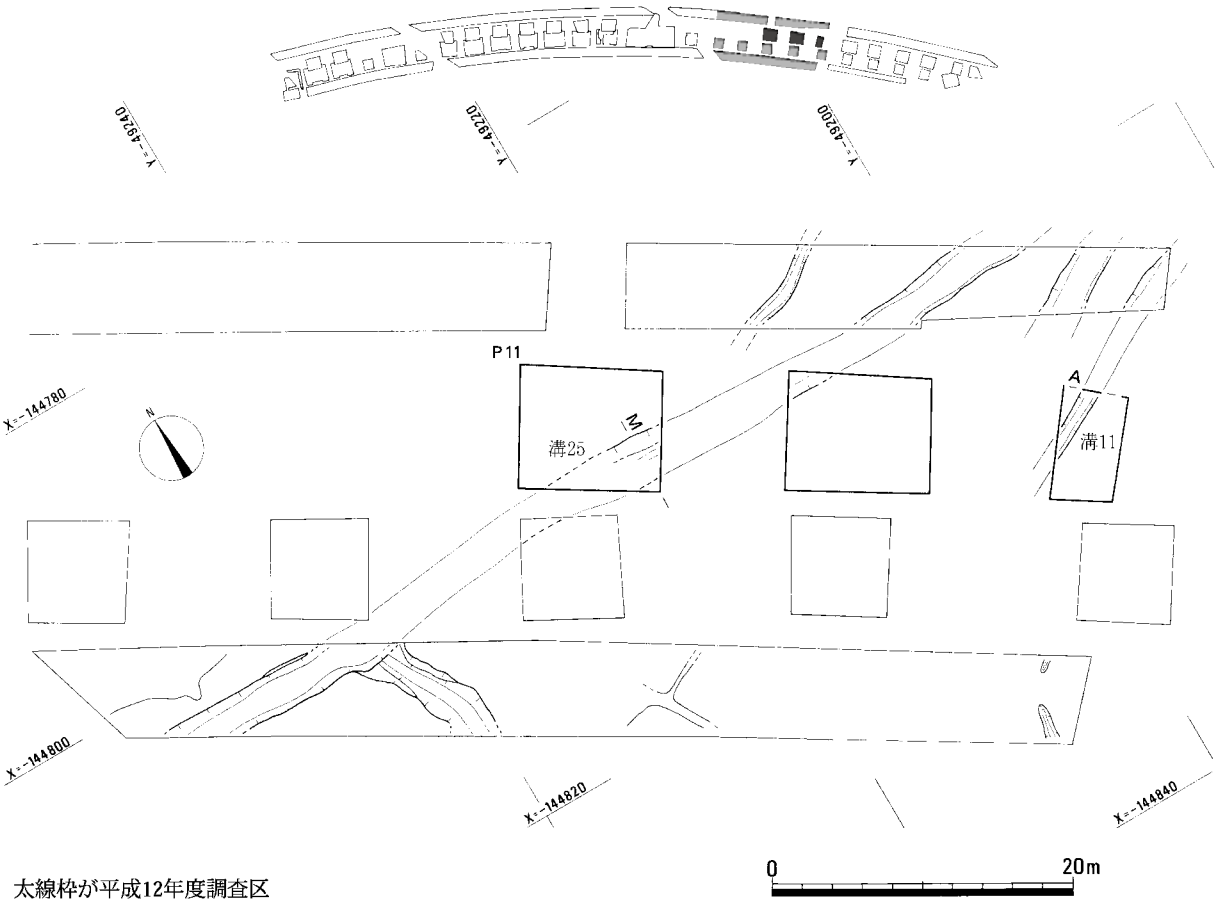

Y=-49520
Y=-49500
Y=-49480
Y=-49460
X=-144680
X=-144700
X=-144720
N
P 2
溝14
溝12
溝13


Y=-49380
Y=-49360
Y=-49340
Y=-49320
X=-144720
X=-144740
X=-144760
N
P 8
溝17
溝18
溝19
溝20
溝21
溝22
土5
土6
土7
土8
水田3



太枠線が平成12年度調査区

第98図　古代以降遺構配置図①（1/500）



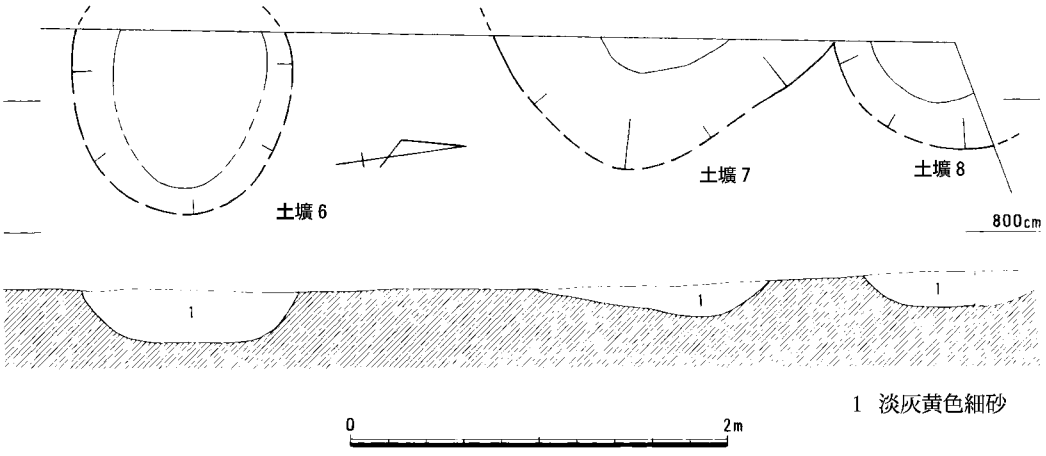
太線枠が平成12年度調査区

第99図　古代以降遺構配置図②（1/500）

く一辺150㎝程度の平面隅丸方形をなすものと推測される。深さは28㎝残存していた。出土遺物に陶磁器の細片があり土壙の時期は近世と考えられる。

土壙８（第98・100図、写真図版11）

土壙７の北隣に位置する。そのほとんどが調査区外にあり、先後関係は不明であるが土壙７と一部重複すると思われる。出土遺物に陶磁器細片がある。これら土壙５～８は近世段階に、ほぼ同時期につくられたものと考えられる。

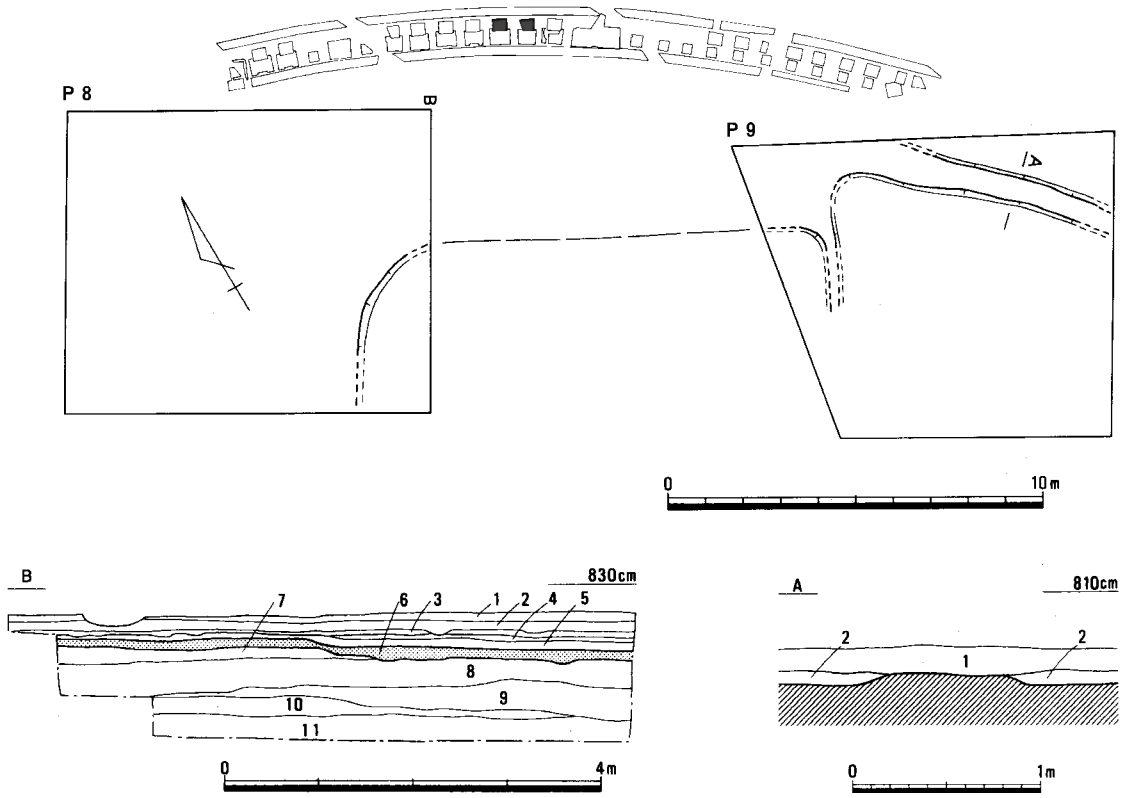


第100図　土壙６～８（1/40）

（３）水田

水田３（第65・101図）

Ｐ８・Ｐ９区において、畦畔等を検出した灰色～灰橙色の水田層である。この水田層は第65図４層に相当すると判断しており、その広がりはＰ２・Ｐ３、Ｐ６～Ｐ14区において確認した。河道３埋没後に形成された水田であり、層位関係などから奈良～平安時代の水田と考えた。Ｐ８区で区画を示す段、Ｐ９区で畦畔を検出しており、畦畔は北西－南東方向に延びる幅70cmのものとこれにほぼ直交する幅が狭いものとがある。１枚の田面の規模は推定で１辺10mほどである。田面の海抜高は、760～770cm付近にある。なお、北溝手遺跡で検出された水田２もほぼ同時期の水田と思われる。



1 灰褐色微砂（現代耕作土）
2 黄橙色微砂（中世～近世水田）
3 灰白色粘質微砂（中世？水田）
4 暗黄色粘質微砂
5 橙灰色粘質微砂
6 灰色粘質土（水田３）
7 灰橙色粘質土
8 黄灰色粘質土
9 青灰色粗砂
10 青灰色粘質土
11 暗灰色粘土

1 淡黄色微砂
2 灰橙色粘質微砂（水田層）

第101図　水田３（1/200・1/80・1/40）

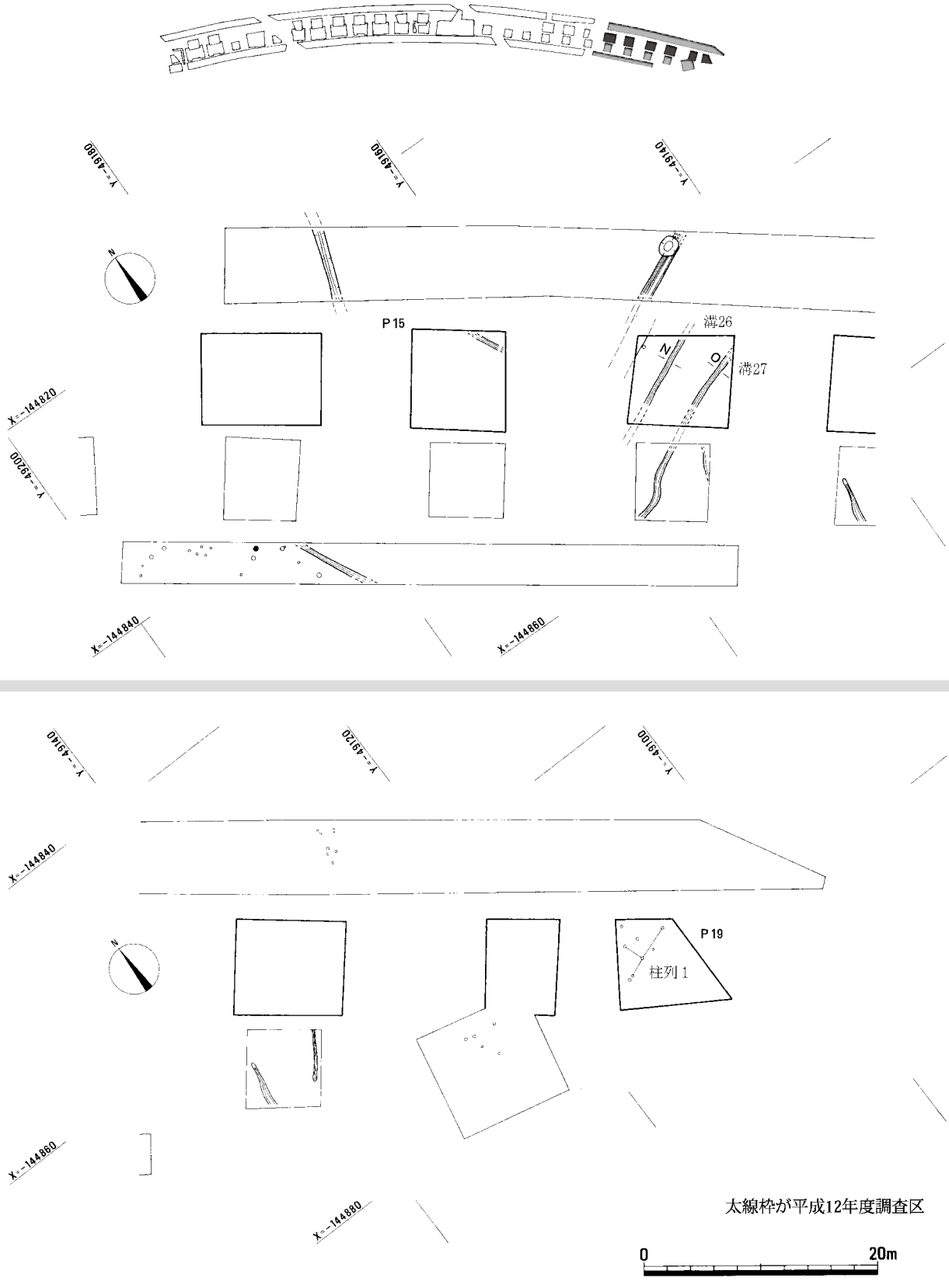
（４）溝

溝11（第99・103図）

Ｐ13区、河道３の上位で検出された。幅127cm、深さ16cmを測り、県報告121溝95に続くものである。溝底には炭化物が堆積しており、埋土や層位関係から古代の溝と推測している。

溝12・溝13（第98・103図）

Ｐ２区で検出された。直交する２条の溝である。溝12は、溝13・溝14に先行し、調査区内で東西方向から南北方向に屈曲する。幅60cm、深さ10cmを測り、県報告121溝38に続くものである。溝13は幅



第102図　古代以降遺構配置図③（1/500）

64cm、深さ11cmを測り、県報告121溝39と同一の溝である。いずれも中世段階の時期の溝と思われる。

溝14（第98・103図）

溝13と直交し、これに後出する。幅150cm、深さ15cmを測り、埋土は粘土であった。出土遺物はないものの中世から近世の溝と推測した。

溝15・16（第98・103図）

溝15は、Ｐ５区中央、南北方向に検出した。幅247cm、深さ14cmを測り、粘土塊を含む砂で埋没している。県報告121溝47・溝60を繋ぐものと理解した。前回の調査成果から古代末～中世の時期が想定される。溝16は、溝15と交差し、県報告121溝62・溝72・溝73と平行する溝である。幅46cm、深さ11cmを測る。高台付椀破片が出土しており、これから溝の時期は中世後半と思われる。

溝17（第98・103図）

Ｐ６区で検出された幅60cm、深さ28cmを測る溝である。東西方向に流走するが、他の調査区では連続するものは未検出である。出土遺物に須恵質の破片があり、古代まで遡る時期が想定される。

溝18・溝19（第98・103図）

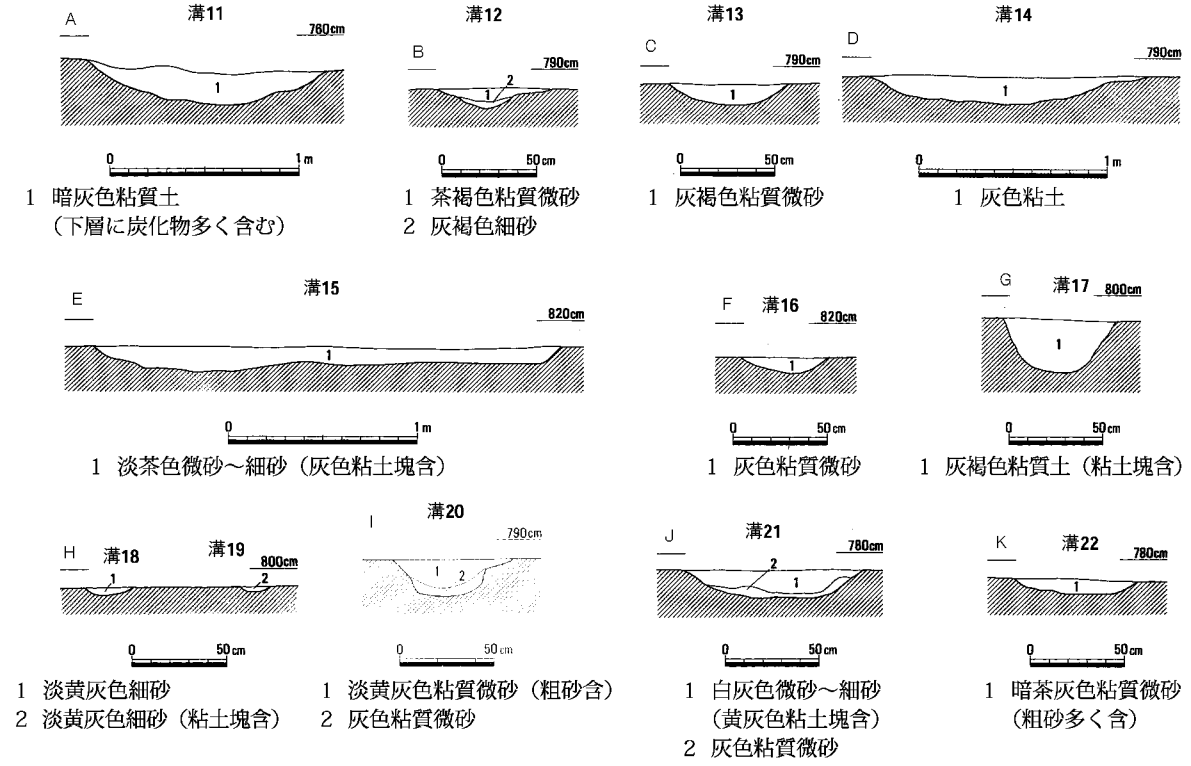
Ｐ６区、溝17の南で検出された。２条の溝が平行して流走しており、北側のものを溝18、南側のものを溝19とした。両溝とも幅25cm程度、深さ４cmを測る。溝18は県報告121溝51と溝62を結び、溝19は県報告121溝52と溝72を結び、それぞれ同一の流路である。溝の時期は中世以降と思われる。

溝20（第98・103図）

Ｐ８区で検出された。南北から東西方向へ屈曲し、収束する溝である。幅64cm、深さ20cmを測る。水田３の水田層を掘り込んでいる。層位関係から中世～近世段階の時期が想定される。

溝21・溝22（第98・103図、写真図版11）

Ｐ９区において検出された。県報告121溝67が二股に分かれ、南北方向に流走するものを溝21、北



第103図　溝11～22（1/40）

東方向へ流れるものを溝22とした。溝21は、幅96cm、深さ15cmを測り、土壙５に近接して収束している。溝22は幅65cm、深さ８cmを測る。いずれも灰色を基調とした砂で埋没しており、水田３の田面で確認した。出土遺物は細片のみであり詳細な時期を判断できないが、層位関係から中世と考えた。

溝**23**（第98・104図）

Ｐ10区で確認された県報告121溝69に連続するものである。幅60cm、深さ20cmを測る。出土遺物はないが、埋土と層位関係から中世段階の溝と考えた。

溝**24**（第98・104図）

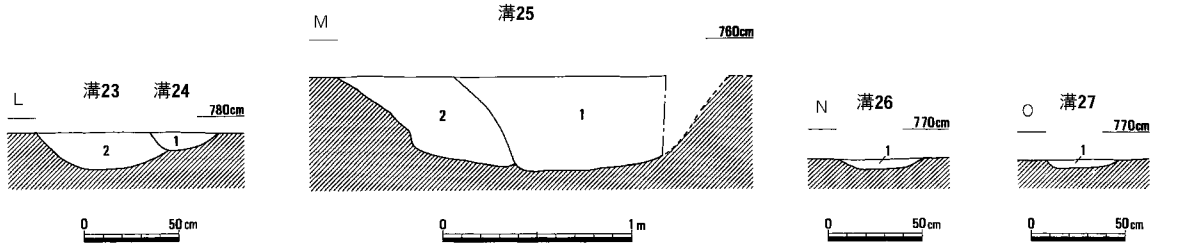
Ｐ10区北東端で溝23と交差し、これを切る。幅36cm、深さ９cmを測る。出土遺物はなく層位関係から近世段階の時期が考えられる。

溝**25**（第99・104図、写真図版11）

Ｐ11・Ｐ12区において検出された。幅約200cm、深さ50cmを測るが、２条の溝が重複している。ほぼ南北方向に流走し、県報告121溝59と溝69を繋ぐ。その規模から主要幹線水路と考えられる。出土遺物に中世土師質土器の高台付椀の細片があり、これを参考にすれば、少なくとも中世段階には用排水路として機能したと理解される。

溝**26**・溝**27**（第102・104図）

Ｐ16区で検出された平行する２条の溝である。北側の溝を溝26、南側の溝を溝27とした。それぞれ幅40cm、深さ５cmほどの浅いものである。層位関係から中世～近世の溝と考えられる。



1　灰色粗砂～細砂
2　淡灰色粘質微砂

1　橙褐色粘質土（灰白色粘土含）
2　橙白色粘質土（灰白色粘土含）

1　淡灰白色粘質微砂

1　淡灰白色粘質微砂

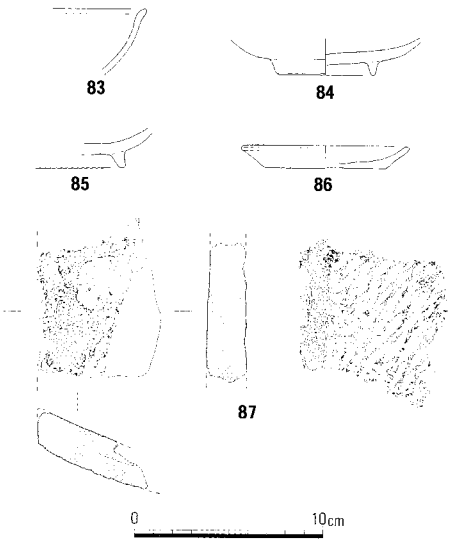
第**104**図　溝**23**～**27**（**1**／**40**）

（５）遺構に伴わない遺物（第105図）

遺構検出のための掘り下げ途中に出土し、帰属が判明しない遺物を図示する。

83～**85**は中世土師質土器の高台付椀であり、いわゆる早島式土器である。**86**は、小皿であり、これらは13世紀前半段階と思われ、検出された溝群や中世の水田もこの時期を中心とした年代と想定させる傍証になろう。

87は布目叩きの平瓦であり、古代の遺構は水田以外検出されておらず、近隣からもたらされたものであろう。



第**105**図　遺構に伴わない遺物（**1**／**4**）

第７章　自然科学的分野の分析

高松田中遺跡出土動物遺存体の分析
－岡山県岡山市高松田中遺跡出土動物遺存体資料の調査－

富岡　直人

第１節　分析資料

岡山県岡山市高松田中遺跡は、岡山市の西北に南流する足守川西側の沖積地に形成された縄文時代晩期から中近世にかけての複合遺跡である。

2000年度に岡山県古代吉備文化財センターによって調査・発掘が実施され、河道３と土壙２、舟形土壙２、舟形土壙４、舟形土壙６、舟形土壙９から弥生時代前期後半から中期前半に属する動物遺存体が出土した。本報告は、この資料群(45点)について実施した分析結果を記すものである。

遺構名称は、1993～94年度調査(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121)と2000年度調査では別に通し番号が付されている。土壌中の動物遺存体検出が意識された2000年度調査で発掘された10基の舟形土壙のうち４基と、土壙１基から動物遺存体が検出された。機能について不明な点の多い舟形土壙の約半数に、動物遺存体が含まれていたことになる。遺構との供伴関係については第２節で詳述する。

多くの資料は火を受けて白色に変化しているが、3点の哺乳類は低湿地性の埋存環境に影響され茶褐色に変化し、ビビアナイト(藍鉄鋼(Vivianite: $Fe_3P_2O_8 \cdot 8H_2O$))を析出し、脆弱化している。

第２節　出土動物遺存体の特徴

検出された動物遺存体のうち綱目科属種の分類名が明らかになったものについて、標準和名と学名を第１表に掲げる。

資料には整理時に付された「整理番号」と、発掘時に付された「資料番号」を記している。資料のネーミング(注記)は、「資料番号」によっている。

出土資料の属性は、表２に示す。これらのうち残存状況が良好なものを写真撮影し、第１図版に示した。

以下に、主な出土資料について、生物分類の階級「門、綱、目、科」に従って記載を行う。

第１表　高松田中遺跡出土動物遺存体種名表
List of the animal remains from Takamatsu-tanaka site

脊椎動物門	Vertebrata
魚上綱	Pisces
軟骨魚綱	Chondrichthyes
板鰓亜綱	Elasmobranchii
硬骨魚綱	Osteichthyes
ナマズ属	Siluriformes
ナマズ科	Siluridae
ナマズ	*Silurus asotus* Linnaeus
スズキ目	Perciformes
フエフキダイ科	Lethrinidae　gen.et sp. indent
哺乳綱	Mammalia
ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla
イノシシ科	Suidae
イノシシ類	*Sus scrofa*　subsp. indet.
シカ科	Cervidae
ニホンジカ	*Cervus nippon* Temminck
ネコ目（食肉目）	Carnivora
イヌ科	Canidae
イヌ	*Canis familiaris* Temminck

１　魚上綱　　Pisces

舟形土壙２南半・４・６・９から22点の魚上綱が検出され、そのうち1点が軟骨魚綱、21点が硬骨魚綱であった。

軟骨魚綱　　Chondrichthyes　　板鰓亜綱　　Elasmobranchii

海水に生息するサメやエイ類の可能性のある小型の個体の椎骨（整理番号1資料番号６）が舟形土壙９より検出された。前位関節横径は3.80㎜であった。弥生遺跡からは椎骨の中央に穿孔した骨製品が検出されることがあるが、本例の場合加工は確認されず、骨製品とは考えられない。

硬骨魚綱　　Osteichthyes

ナマズ科　　Siluridae、　ナマズ　*Silurus asotus* Linnaeus

淡水に広く生息する種である。総数で7点が舟形土壙６・９より検出された。内訳は、左擬鎖骨１点、左胸鰭棘が４点、右胸鰭棘が２点で、最小個体数では３点と換算された。計測ができたのは整理番号３,６,７（資料番号40,18,12）の個体で、近位端最大関節幅がそれぞれ4.60㎜，6.30㎜，3.80㎜と中型から大型の体格であったことが推定された。

フエフキダイ科　　Lethrinidae　gen.et　sp　indent

比較的南方に多い科の魚類である。第１椎骨（整理番号９、資料番号５）と腹椎（整理番号10、資料番号４）の合わせて２点が舟形土壙９より検出された。

第１椎骨の後位関節部最大径で8.70㎜であることから、フエフキダイとしてはそれほど大きくない個体で、ほぼ中型程度である。

2　哺乳綱　　Mammalia

イノシシ科　*Suidae*　イノシシ類　*Sus scrofa* subsp. indet.

イノシシは亜種として本州、四国、九州に生息するニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax* 、南西諸島に生息するリュウキュウイノシシ *S. scrofa riukiuanus* が設定されているが、日本各地でブタと交配し一部は野生化している通称イノブタがかなり広くみられる。岡山県内では近世のブタが岡山城二の丸跡と岡山市天瀬遺跡から検出されている。これらの近世ブタは比較的小型で、下顎骨のプロファイルは細いことが判明している。

高松田中遺跡から出土したイノシシ類の資料は、破片が多く、形質的にブタ *S. scrofa domesticus* と断言できる資料はなかった。しかし、本来はブタがイノシシと分別できない可能性があることより、本報告では野生イノシシと家畜ブタあるいはそれらの交雑したものをも含むカテゴリーとしてイノシシ類 *S. s.* subsp. indet を設定し報告する。

イノシシ類は５点が舟形土壙２北半・舟形土壙９・河道３より検出され、うち舟形土壙９より検出された２点が接合し同一個体であることが判明した。

整理番号23,24(資料番号１,２)の下顎第３後臼歯は残存長23.74㎜、歯冠最大幅15.97㎜でやや小ぶりであることから、雌か小型の弥生ブタの可能性がある。しかし、ブタの形質的特徴が咬頭に確認できず、弥生ブタとは断言できない。

整理番号25(資料番号34)の左距骨は最大全長(Greatest Length of lateral harf)44.75㎜、近位端最大幅(Greatest breadth of the proximal end)21.45㎜、遠位端最大幅(Greatest breadth of the distal end)27.35㎜であった。全体に茶褐色の鉄分が強く付着している。

整理番号26(資料番号41)の左第２切歯は萌出途次の若齢の個体のもので、脆弱であったため、計測点を残さず破損している。

整理番号27(資料番号３)は、第２あるいは５の末節骨で、先端が損壊している。近位端最大幅(Greatest breadth)が6.90㎜であった。

最も特徴が明確であった下顎第３後臼歯をはじめ、全ての骨格からブタかイノシシかの峻別は極めて困難であった。

イヌ科　Canidae、　イヌ　*Canis familiaris* Temminck

飼育イヌの可能性が高い。整理番号22(資料番号35)の右上腕骨近位端が河道３より１点出土したのみであり、断定的な鑑定は困難である。ただし、⑴化骨化が未了なこと．⑵近位端（上腕骨頭）関節部最大幅が27.20㎜、近位端最大幅（Greatest breadth of proximal end）が33.25㎜であること．の２点が確認され、比較的若齢の小型から中型程度の体格の個体であると推定される。表面に傷が見られるものの埋存以前の破損は確認されず、食用となったのか埋葬個体が混入したのかは不明である。

第３節　各遺構の供伴動物遺存体の特徴と生業

水漬けで茶褐色に変色した動物遺存体はいずれも河道３から出土している。土壌pHのデータ等がないことから確定的ではないが、水漬けになったことで堆積層中に埋存し、保存されたものであろう。この河道からは火を受けて白色に変化した骨格は検出されていない。本来、白色に変化した骨格も水漬の環境下で十分保存される筈であることから、河道中にこれらが廃棄されなかったものと考える方が自然であろう。河道からの出土動物遺存体は、イヌ、イノシシ類、ニホンジカであった。いずれも部分的で、鉄分の沈着やビビアナイトの析出が著しく、人為的損壊や水流等による摩耗は確認できなかった。これらは二次的堆積によって埋存した可能性があるものの、激しい切創や直火による受熱等の著しいダメージは受けていない。しかし、自然に遺物群とともにこの地点に散布したと考えることも不自然なことから、散漫な廃棄物の集合であった可能性が高いものと考えられる。

河道以外からの出土動物遺存体は全て火を受け、白色に変化した状態で土壙や舟形土壙から検出されている。土壙２では哺乳綱、舟形土壙２北半部ではイノシシ類、舟形土壙２南半部では硬骨魚綱目不明、舟形土壙４では綱不明の動物遺存体、舟形土壙６では硬骨魚綱目不明、哺乳綱目不明、ナマズ、舟形土壙９では板鰓亜綱、硬骨魚綱目不明、ナマズ、フエフキダイ科、イノシシ類、綱不明、骨製品、が検出された。Ｐ15調査区で検出された舟形土壙群に多くの種類の動物遺存体が検出されているといえる。中でも特に舟形土壙９からの出土量が多いことが注目される。

微高地上の土壙では、低湿地性の埋存環境は得られないことから、受熱して白色に変化した骨格のみが残存した可能性が高いと考えられる。全ての出土資料に切創が検出されず、解体処理されたものかは不明であった。出土資料のまとまりは河道の場合と同様低く、同一個体のまとまりなども確認されていない。

以上の結果から、舟形土壙出土動物遺存体についても、散漫な廃棄物の集合であった可能性が高いものと考えられる。つまり、舟形土壙には動物遺存体の残滓類が廃棄あるいは遺棄、混入することがあった可能性があったと言えよう。

これらの出土動物遺存体から高松田中遺跡における生業を推定する。

魚類においては足守川とその支流や近接する湖沼および水田から得ることのできた淡水性魚類であるナマズが利用されたのみならず、約３㎞以上離れた海水域で捕獲された板鰓亜綱やフエフキダイ科が利用された。これらの海水域に生息する魚類が自給的活動によってもたらされたものか、交易などによって入手されたものかは不明であるが、殊にフエフキダイ科は岩礁域に生息し、内陸の高松田中遺跡に生活した弥生人に容易に捕獲できた魚種とは考えにくく、海浜部からの交易の可能性が高いと考えられよう。ナマズは、今回の出土動物遺存体中最も多い最小個体数３を示しており、最もまとまって利用された食料資源である可能性が考えられる。

哺乳類においては、飼育されていた可能性のあるイノシシ類とともにニホンジカとイヌがわずか１点ずつだが出土している。イノシシ類、ニホンジカ、イヌが供伴する内容は、岡山県内の弥生遺跡である矢掛町清水谷遺跡（前期:富岡2001a）や倉敷市上東遺跡（後期～古墳時代前期:富岡2001b）等で確認された様相と一致するものの、出土量はイノシシ類が卓越することから、清水谷遺跡の様相に似るが、ニホンジカの出土量が多かった上東遺跡の様相とは異なっている。このことから、哺乳類の中でイノ

シシ類が卓越する様相は、岡山の内陸部の弥生時代遺跡の特徴である可能性が考えられるが、資料数が限定的なことから断言は不可能である。

以上の結果から、断片的な資料ながら高松田中遺跡に生活した弥生人は、主な食料はナマズに代表されるように近接する淡水系の環境から調達したが、一方で板鰓亜綱やフエフキダイ科のように３㎞以上の領域から調達することもあった。また、哺乳類ではイノシシ類やニホンジカを利用していたものと考えられる。貝類や鳥類については利用の度合いが低かったのか廃棄場所が異なっていたのかは、不明である。

謝辞

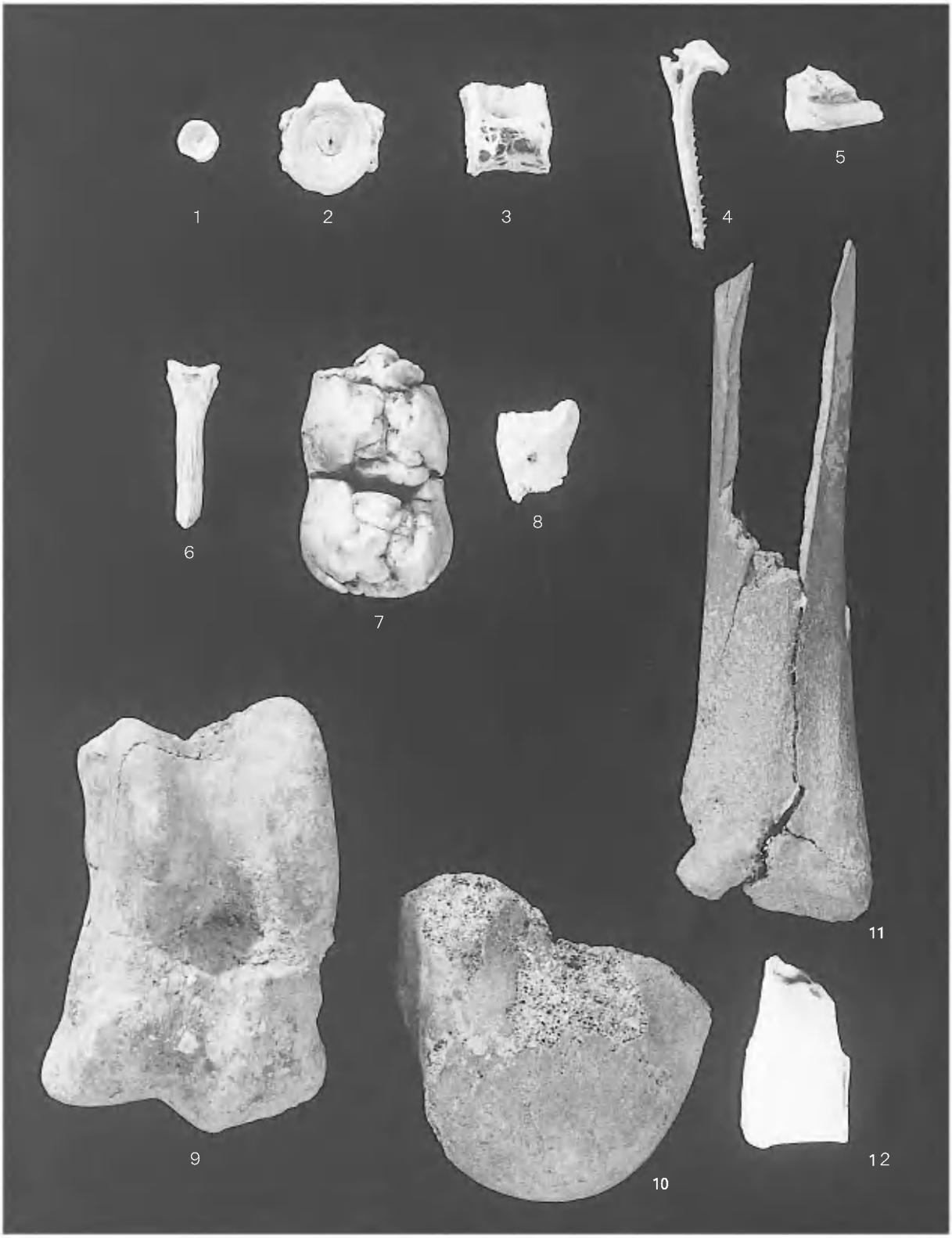
岡山県立古代吉備文化財センター山磨康平氏、大橋雅也氏、奥野光廣氏をはじめとする各位には資料の提供とともに様々な御教示御援助を頂いた。東北大学文学部須藤隆先生には、終始様々な御指導、御教示を頂いた。さらに、奈良国立文化財研究所松井章先生、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生、岡山理科大学基礎理学科名取真人氏に比較標本の提供と御助言、御教示を頂いた。また、分析にあたっては、岡山理科大学大学学生塩谷勇一郎君、太田謙君、藤原圭子さん、宮本葵さんの多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表します。

参考文献

阿部　永他　1994　『日本の哺乳類』（東海大学出版局）
阿部宗明　1987　『原色魚類大図鑑』（北隆館）
今泉吉典、岡田弥一郎　1983　『学研生物図鑑　動物』（学研）
内田　亨　1979　『新編日本動物図鑑』（北隆館）
内田　亨他　1972　『谷津・内田　動物分類名辞典』（中山書店）
内田　亨　1979　『新編日本動物図鑑』（北隆館）
大泰司紀之　1980　「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13 pp.51-74
大泰司紀之　1983　「シカ」　『縄文文化の研究 2 生業』pp.122-135
大泰司紀之　1984　「ニホンジカの比較骨学および地理的時代的変異」
『古文化財の自然科学的研究』　pp.555-558
岡田　要（校閲）　今泉吉典（著）　1960　『原色日本哺乳類図鑑』（保育社）
岡田　要　内田清之助　内田　亨　1965　『新日本動物図鑑』下（北隆館）
蒲原稔治　1966　『標準原色図鑑全集　第４巻　魚』（保育社）
小池裕子、林　良博　1984　「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』　pp.519-524
後藤仁敏、大泰司紀之編　1986　『歯の比較解剖学』（医師薬出版株式会社）
千葉徳爾　1964　「日本列島における猪・鹿の生息状況とその変動」『地理学評論』37 pp.575-592
富岡直人　1998　「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」
『中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告　岡山城二の丸跡』pp.136-163
富岡直人　2001a　「矢掛町清水谷遺跡出土の動物遺存体」
『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告1　清水谷＜一本木地区＞』（矢掛町教育委員会）pp.228-236
富岡直人　2001b　「上東遺跡出土動物遺存体と骨角製品」
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157 下庄遺跡　上東遺跡』（岡山県教育委員会）pp.24-39
林　良博　1983　「イノシシ」『縄文文化の研究 2 生業』pp.136-147
林　壽郎　1968　『標準図鑑全集　動物Ⅰ』（保育社）
林　壽郎　1968　『標準図鑑全集　動物Ⅱ』（保育社）
Angela von den Driesch 1976 〝A Guide to the Mesurement of Animal Bones from Archaeological Sites〞 Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University

第２表　高松田中遺跡出土動物遺存体属性表

整理番号	資料番号	大分類	小分類	部位	LR	部分	色調	重量（g）	調査区名	出土遺構名	備考（計測値単位:mm）
1	6	魚上綱	軟骨魚綱　板鰓亜綱	椎骨	M	完形	白	0.02	P15区	舟形土壙９	前位関節横径:3.80
2	19	魚上綱	ナマズ	擬鎖骨	L	関節部破片	白	0.10	P15区	舟形土壙９	
3	40	魚上綱	ナマズ	胸鰭棘	L	近位端＋骨幹部	白	0.09	P15区	舟形土壙６	近位端最大関節径:4.60
4	16	魚上綱	ナマズ	胸鰭棘	L	骨幹部	白	0.07	P15区	舟形土壙９	
5	23	魚上綱	ナマズ	胸鰭棘	L	骨幹部	白	0.02	P15区	舟形土壙９	
6	18	魚上綱	ナマズ	胸鰭棘	L	骨幹部+近位端	白	0.16	P15区	舟形土壙９	近位端最大関節径:6.30
7	12	魚上綱	ナマズ	胸鰭棘	R	近位端+骨幹部	白	0.18	P15区	舟形土壙９	近位端最大関節径:3.80
8	15	魚上綱	ナマズ	胸鰭棘	R	遠位端+骨幹部	白	0.07	P15区	舟形土壙９	
9	5	魚上綱	フエフキダイ科	第１椎骨	M	完形	白	0.33	P15区	舟形土壙９	
10	4	魚上綱	フエフキダイ科	腹椎	M	椎体	白	0.38	P15区	舟形土壙９	
11	17	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	背・臀鰭棘	M	近位形+骨幹部	白	0.16	P15区	舟形土壙９	
12	8	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	椎骨	M	椎体	白	0.01	P15区	舟形土壙９	
13	10	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	椎骨	M	椎体	白	0.01	P15区	舟形土壙９	
14	11	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	椎骨	M	椎体	白	0.02	P15区	舟形土壙９	
15	37	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	椎骨	M	関節部破片	白	0.02	P15区	舟形土壙６	
16	43	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	椎骨	M	椎体破片	白	0.31	P14区	舟形土壙４	
17	14	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	角骨	R	関節部破片	白	0.28	P15区	舟形土壙９	
18	7	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	尾椎	M	椎体破片	白	0.36	P15区	舟形土壙９	
19	9	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	腹椎	M	椎体	白	0.01	P15区	舟形土壙９	
20	21	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	不明	?	骨端部+骨幹部	白	0.01	P15区	舟形土壙９	
21	42	魚上綱	硬骨魚綱　目不明	不明	?	骨幹部	白	0.05	P14区	舟形土壙２南半	
22	35	哺乳綱	イヌ	上腕骨	R	近位端	茶褐色	6.00	P13区	河道３	成長度:未化骨化、関節横径:27.20
23	1	哺乳綱	イノシシ類	下顎第３後臼歯	L	hypoconid, entoconid	白	2.65	P15区	舟形土壙９	成長度:萌出途次、No.24と同一個体
24	2	哺乳綱	イノシシ類	下顎第３後臼歯	L	protoconid, metaconid	白	2.75	P15区	舟形土壙９	成長度:萌出途次、No.23と同一個体
25	34	哺乳綱	イノシシ類	距骨	L	完形	茶褐色	18.44	P13区	河道３	最大長:44.25
26	41	哺乳綱	イノシシ類	第２切歯	L	破片	白	0.78	P14区	舟形土壙２北半	萌出途次
27	3	哺乳綱	イノシシ類	第ⅡorⅤ末節骨	r	骨幹部+近位端	白	0.38	P15区	舟形土壙９	
28	33	哺乳綱	ニホンジカ	頚骨	L	近位端+骨幹部	茶褐色	0.05	P13区	舟形土壙６	成長度:化骨化
29	32	哺乳綱	骨製品	不明	?	骨幹部	白	0.05	P15区	舟形土壙９	骨製品の被熱破片、骨針などの基部?
30	38	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.42	P15区	舟形土壙６	
31	24	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.92	P15区	舟形土壙９	
32	25	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.39	P15区	舟形土壙９	
33	26	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.30	P15区	舟形土壙９	
34	30	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.64	P15区	舟形土壙９	
35	31	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.92	P15区	舟形土壙９	
36	36	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.10	P15区	土壙２	
37	39	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.34	P15区	舟形土壙６	
38	29	哺乳綱	目不明(小～中型)	不明	?	骨幹部	白	0.27	P15区	舟形土壙９	
39	28	哺乳綱	目不明(中型)	不明	?	骨幹部	白	0.40	P15区	舟形土壙９	
40	27	哺乳綱	目不明(中型)	不明	?	骨幹部	白	0.80	P15区	舟形土壙９	
41	13	綱不明	目不明	不明	?	骨端部+骨幹部	白	0.32	P15区	舟形土壙９	
42	20	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.07	P15区	舟形土壙９	
43	22	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.03	P15区	舟形土壙９	
44	44	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.07	P14区	舟形土壙４	
45	45	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	白	0.07	P14区	舟形土壙４	



第１図版　高松田中遺跡出土動物遺存体**[scale 140%] Animal remains from Takamatsu-tanaka site**

１～６．魚上綱 Pisces 【１．板鰓亜綱 Elasmobranchii(椎骨 Vertebra)、２．３．フエフキダイ科 Lethrinidae(２．第1椎骨 Atlas、３.腹椎 Abdominal vert.)、 4. 5. ナマズ *Silurus asotus* (４.胸鰭棘L Pectoral fin spine、５．擬鎖骨R Cleithrum)、６．硬骨魚綱 Osteichthyes(背臀鰭棘 dorsal/anal fin spine)】、７～12. 哺乳綱 Mammalia 【７～９．イノシシ類 *Sus scrofa* subsp. indet.（７．第3後臼歯L Molar３、８．末節骨r 3rd Phalanx、９．距骨L Talus)、10. イヌ *Canis familiaris* (上腕骨R Humerus)、11. ニホンジカ *Cervus nippon* (脛骨L Tibia)、12. 目不明 ordo indet. (部位不明 indet.　骨幹部 diaphysis)】

第8章　結　語

本書で報告した服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡の各調査箇所は、県報告121[1)]で報告した調査箇所のいずれも北隣に接し、今回の調査はこの成果を追認、補足、修正する形となった。県報告121と重複することも多いが、各遺跡の成果と問題点をまとめ、結語とする。

第1節　各遺跡の概要

1．服部遺跡

服部遺跡では、縄文時代の河道、弥生時代の粘土採掘坑、溝、古代の水田、中世の溝・土壙を検出した。縄文時代の河道1からは、全体量としては少ないもののの、ほぼ器形の全容が復元される晩期の深鉢が出土している。後期以前の遺物はなく、この周囲に生活を営み始めたのは晩期段階と推測される。なお、P17区のこの河道部分では斜面部に人為的加工と思われる平坦面が観察されており、洗い場などを想定する意見もあるが、調査範囲が狭く詳細は不明であった。遺跡南西に位置する県立大学の南溝手遺跡など周辺遺跡の調査成果もあわせこの沖積平野における縄文時代晩期の集落変遷の解明の一端となった。また、粘土採掘坑は弥生時代中期後葉～古墳時代初頭にかけてのもので、最近類例が増えており、土器生産の様相の一端を示唆している。このほか注目される遺構は古代および中世の水田と溝であり、条里地割および湛井十二ヶ郷用水成立[2)]との関連を考える興味深い資料となった。

2．北溝手遺跡

北溝手遺跡は、服部遺跡の東接しており、弥生時代の溝・稲作跡、古代の水田、中近世の土壙・溝を検出している。全時期を通じて調査範囲全域が集落域ではなく、生産域として利用されていたことがうかがえる状況である。なお、前回の調査範囲であるが、弥生時代前期の環濠の一部と推測される弧状を描く溝が検出されており、この外側に当たる箇所で稲作跡の広がりを認めたことも注目される。また、服部遺跡同様、古代～中世の溝は条里地割との関連性が高いものであろう。

3．窪木遺跡

窪木遺跡は、今回の調査域では人工的な遺構は認められず、自然河道を検出したのみである。これら自然の河道が埋没し、中近世段階になって水田利用が始まったものと推測される。

4．高松田中遺跡

高松田中遺跡では、弥生時代前期後葉～中期前葉の微高地の一端を検出した。この微高地の西方は自然河道で分断され、河道以西は低位部が広がっていたものと思われる。この低位部は徐々に埋没し

た後、古代段階に開田されており、以降人為的営みがなされていたようである。弥生時代の微高地では舟形土壙を中心に遺構が検出されたが、竪穴住居、建物自体は認められず、居住域縁辺部であったと判断された。なお、微高地東方では弥生時代前期に遡る可能性が高い稲作跡を検出した。

第２節　弥生時代前期の稲作跡について

今回の調査では北溝手遺跡、高松田中遺跡の両遺跡において弥生時代前期に遡ると推測される「稲作跡」を検出した。この遺構は、いずれも畦畔状の高まりを検出したことから稲作跡と判断したものであるが、従来、「水田」と呼称されていたものである。県報告121においても「水田」とされていることから本報告でも「水田」と呼称している。しかしながらこれらを水田耕作とするには高橋護がすでに指摘している[3)]ように、高松田中遺跡における次の事象の観察から躊躇を覚えるため、以下「稲作跡」とする。

①稲作面がかなりの傾斜を持つこと。
②畦畔で区切られた区画が100㎝四方と著しく狭小であること。
③耕作土層が明確でなく、20㎝以上の土層幅を有する箇所もあり、下位の層位と漸移的に移行する状況であること。
④層下面に酸化鉄の沈着が認められないこと。
⑤常時溜水することによって起こる還元作用による土色の脱色が認められず、黒褐色を呈する土層であること。

対して、この「稲作跡」の上位で検出された弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えた「水田」跡は、①緩やかな傾斜はあるものの、②畦畔での区画は５～10ｍ四方の小区画であり、③10㎝ほどの厚さの層位であり、④わずかながら酸化鉄の沈着が認められ、④弥生時代前期のものと比較し、土色が黒褐色から灰褐色にやや脱色気味であることが認められる。これらの事象の差違を同一の現象結果と考えるよりは、異なる稲作技術を想定する方が理解しやすいであろう。今回の調査の弥生時代前期における稲作跡は「天水田」あるいは「陸稲」と評価すべきものでなかろうか。傾斜地における耕作は軽易な労働力の投下で済み、天水を主に利用するためにこれを逃がさない小区画の畦畔を作り、常時溜水していないため、酸化鉄の沈着、また土色の脱色作用も受けないと指摘されているところである。さらにまた、県南部を中心に検出されている弥生時代前期の黒褐色土層の「水田」は、今後の調査の進展を待って、再評価が必要になってくるものと考えられる。現代の稲作はそのほとんどが「水稲耕作」であり、稲作を経験したことのない大部分の人間は稲作＝水田と理解しやすいが、まずは考古学的に識別できる差違にどのような異なった評価を与えるのかに目を向ける時期になってきていると思われる。

第３節　舟形土壙について

高松田中遺跡では、前回の調査と併せ、計23基の舟形土壙が検出されている。これら舟形土壙は、土壙の形状が丸木舟状を呈することから呼称されているものである。主に弥生時代前期から中期前葉にかけてこの形態の土壙が認められているが、県内ではこの時期の遺跡自体の調査例自体が少ないた

め、類例少ない。現在のところ備前市船山遺跡[4]、岡山市百間川原尾島遺跡[5]、同津島遺跡[6]、総社市南溝手遺跡[7]、矢掛町清水谷遺跡[8]とこの高松田中遺跡での調査例が知られている。県報告121では、この舟形土壙に対して「この時期に限定された特異な埋葬方法の一つ」との評価を行っているが、他遺跡の類例や今回の調査例を見ると一元的なこの考えには首肯しがたい。現在「舟形土壙」と呼称されているこれらのうち何基かは墓の可能性が残されるもののすべてが一つの墓制として抽出できるものではないと考えている。詳細は今後の調査例の増加を待って再考したく、ここでは見通しを述べておくに止める。

現在「舟形土壙」と報告されているのは、先に触れたように弥生時代前期～中期前葉段階の丸木舟状の形態を呈するものであるが、詳細に見ると断面形の形態、規模等から分類が可能である。これらの分類はおそらく機能用途あるいは時期の差違を示すものと推測される。また、その配置にも注目すべき点がある。津島遺跡・南溝手遺跡・清水谷遺跡では、複数のものが平行あるいは直交関係にあり、方形を意識するように配置されているものが認められる[9]。高松田中遺跡でも調査範囲が狭く、方形の区画そのものは不明であったが、平行あるいは直交の関係にあるものが指摘できる。さらには、舟形土壙３・４のように周囲に小穴が並ぶ状況も確認されている。

次に高松田中遺跡の遺物出土状況を見ると、特に副葬されている遺物と推測されるものはない。また、そのほとんどが破片であり、完形に復元できるものは少なく、かつ多量に集積している状況も看取できない。なお、土壙埋土の水漉を行い、獣骨・魚骨を採集した。これらの種同定については前章に詳しいが、ほとんどの資料が火を受けたと推測され白色化している。このことは、基本的に食用にされた残滓が土器片とともに散漫に廃棄された結果を示すものと理解される。なお、高松田中遺跡での土壙内の埋積状況は、基盤層である黄褐色土が土塊として混入し、人為的に埋め戻した様子も看取された。舟形土壙２では、一度埋め戻した後に再度掘り直している箇所が観察されている。この箇所では、炭・焼土が多量に含まれる層が認められ、一時期の片づけ等で埋積した結果と推測される。これらの状況は、あくまでも二次的用途を示しているにすぎないとの見解も肯定できるものの、一次的用途としての墓制を積極的に推測することも困難であろう。さらには、また舟形土壙同士で重複関係にあるものが認められ、継続期間を考えると墓制とは認めがたいと思われる。

舟形土壙の一次用途そのものについて言及できる資料は持ち得ないが、一括りに現在「舟形土壙」と呼称されているものは、分類が可能であり、それぞれ異なった目的を持っていたとすることは想像に難くない。また、規則正しい配置を持つものがあることから、それらについては単なる廃棄物の集積場とも考えがたく、弥生時代前期から中期前葉の集落を構成する重要な要素として抽出できるであろう。

第４節　粘土採掘坑について

服部遺跡で注目されるのは、弥生時代から古墳時代にかけての粘土採掘坑である。この粘土採掘坑は、服部遺跡の西半部に東西約300ｍの広範囲に及ぶものである。採掘坑からは弥生時代中期後葉～古墳時代初頭までの遺物が出土しており、採掘はこの時間幅が考えられるが、量的には特に弥生時代後期前葉を中心とし、古墳時代初頭の遺物は今回の調査では明らかではない。採掘にも隆盛と衰退を伺わせる。遺物の出土状況としては、細片が多いものの図示したように比較的大きな破片も存在する。

本来作業場である粘土採掘坑自体からこれらの遺物が出土することの意味は今のところ見いだせない。集落が近隣に位置していたとしてもそこから廃棄するために持ち込んだとも考えがたい出土状況であり、今後の検討課題である。なお、今回ほぼ完形の土器が出土しており、何らかの祭祀行為を推測する向きもあるが、積極的根拠にかける。

県報告121で触れているように、これらの採掘坑はその検出状況から採掘者が固有の採掘地を認識し、継続して作業を進めていた可能性が指摘される。また、１回の採掘量を考慮すると個々の「家」単位の採掘作業と土器製作の傍証になるとの見解も推測されている。粘土採取の問題については岡山市津寺遺跡を中心に弥生時代中期後葉の白色系の胎土を分析し、異なる集落間でほぼ同一のプロット内に収まる結果を得ている[10]。これは複数の集落間で共通の粘土採掘地の利用を想像させるものと評価した。服部遺跡の場合、長い時間幅ではあるもののその規模から、単一集落の独占とは考えがたく、同様に異集落間で共有していたものと思われる[11]。しかしながらその共有管理体制の有無については想像の域を越えられず、今後の資料の増加を待ちたい。

註

１）「服部遺跡」「北溝手遺跡」「窪木遺跡」「高松田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121』岡山県教育委員会　1997
２）『備中湛井十二箇郷用水史』湛井十二箇郷組合　1976
３）高橋護　「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』1997
４）「船山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１』岡山県教育委員会　1972年
５）「百間川原尾島遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会　1980年
６）「津島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151』岡山県教育委員会　2000年
７）「南溝手遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』岡山県教育委員会　1995年
　「南溝手遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107』岡山県教育委員会　1996年
８）「清水谷遺跡〈一本木地区〉」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告１』矢掛町教育委員会　2001年
９）清水谷遺跡では、環濠集落内に舟形土壙が検出されており、柵列との関連性が指摘されている。また、これらによって区画された空間が何らかの祭祀的要素を持つものであり、一般集落とは区別されるのではないだろうかという意見も提出されている。
10）白石純「津寺遺跡出土土器の胎土分析」「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会　1995
11）粘土自体はほぼ採掘され尽くされており、資料サンプルを採取できず、採掘坑出土土器、近隣遺跡出土土器およびこの分析との比較はできなかった。

遺構名対照表

服部遺跡

掲載遺構名	調査時遺構名	県報告121遺構名
河道１	Ｐ16～Ｐ21河道(1)	
河道２	Ｐ24～Ｐ25河道(2)	河道２
河道３	Ｐ27～Ｐ28河道、Ｐ30河道	
河道４	Ｐ35溝１・２	溝26、河道３
くぼみ１	Ｐ36溝１	
水田１	Ｐ38～Ｐ40水田	
土壙１	Ｐ９土壙２	
土壙２	Ｐ９土壙１	
土壙３	Ｐ15土壙	
土壙４	Ｐ27土壙	
土壙５	Ｐ28土壙	
土壙６	Ｐ35土壙１	
土壙７	Ｐ35土壙２	
溝１	Ｐ１溝	
溝２	Ｐ４溝	溝１
溝３	Ｐ17溝	溝５、溝６
溝４	Ｐ18溝、Ｐ19溝、Ｐ21溝１、Ｐ22溝３	溝９、溝８
溝５	Ｐ22溝１	溝10
溝６	Ｐ22溝２	溝13
溝７	Ｐ24溝１、Ｐ23溝	溝11、溝15
溝８	Ｐ32溝２、Ｐ33溝２	溝21
溝９	Ｐ33溝３	溝18、溝23
溝10	Ｐ34溝１、Ｐ35溝４	溝19、溝27
溝11	Ｐ36溝３	溝68
溝12	Ｐ37溝、Ｐ38溝２、Ｐ36溝２	
溝13	Ｐ38溝３	
溝14	Ｐ３溝	
溝15	Ｐ５溝	溝40
溝16	Ｐ７溝１	
溝17	Ｐ７溝２	
溝18	Ｐ６溝、Ｐ７溝３	溝36、溝41
溝19	Ｐ９溝	溝37、溝42
溝20	Ｐ11溝４	
溝21	Ｐ11溝３	
溝22	Ｐ11溝２	
溝23	Ｐ11溝１	溝43
溝24	Ｐ12溝	溝45
溝25	Ｐ14溝、Ｐ15溝２	
溝26	Ｐ15溝１	
溝27	Ｐ25溝１	溝49
溝28	Ｐ27溝１	
溝29	Ｐ28溝１、Ｐ27溝(3)	溝52、溝51
溝30	Ｐ28溝２	溝57
溝31	Ｐ30溝１	
溝32	Ｐ30溝３	溝53、溝60
溝33	Ｐ30溝２	溝54、溝59
溝34	Ｐ31溝１	溝16、溝20
溝35	Ｐ31溝２	溝17
溝36	Ｐ32溝１	溝65
溝37	Ｐ33溝１	溝55、溝66
溝38	Ｐ35溝３	溝67
溝39	Ｐ38溝１	溝73
溝40	Ｐ39溝１	
溝41	Ｐ39溝２	

北溝手遺跡

掲載遺構名	調査時遺構名	県報告121遺構名
水田１	№７水田	水田２
水田２	№５水田、Ｐ４・Ｐ６水田	水田３
水田３	Ｐ７水田	
土壙１	№２土壙	
土壙２	№10土壙	
土壙３	Ｐ13土壙	
溝１	Ｐ１溝２、Ｐ２溝４	
溝２	Ｐ２溝３	溝２
溝３	Ｐ12溝	溝９
溝４	Ｐ１溝１	溝１、溝15
溝５	Ｐ２溝１	溝５
溝６	Ｐ２溝２	溝３、溝６
溝７	Ｐ３溝２	
溝８	Ｐ３溝１	溝17
溝９	Ｐ５溝	溝19
溝10	Ｐ７溝	溝22
溝11	№１溝	溝24
溝12	№３溝	
溝13	№９溝	溝26

窪木遺跡

掲載遺構名	調査時遺構名	県報告121遺構名
河道１	№２溝	溝２、溝６、溝１
河道２	№１溝	溝３
河道３	№３溝	溝４、溝７

高松田中遺跡

掲載遺構名	調査時遺構名	県報告121遺構名
河道１	№132旧河道	河道２
河道２	№117・118溝	河道３
河道３	№18・23旧河道	河道４
水田２	№２水田	水田３
水田３	№109・127水田	
土壙１	№46土壙	
土壙２	№27土壙	
土壙３	№48土壙	
土壙４	№49土壙	
土壙５	№121土壙	
土壙６	№124土壙	
土壙７	№125土壙	
土壙８	№126土壙	
柱列１	№１柱列群	
舟形土壙１	№45舟形土壙	
舟形土壙２	№36・37舟形土壙	
舟形土壙３	№39舟形土壙	
舟形土壙４	№38舟形土壙	
舟形土壙５	№31舟形土壙	
舟形土壙６	№29舟形土壙	
舟形土壙７	№28舟形土壙	
舟形土壙８	№17舟形土壙	
舟形土壙９	№30舟形土壙	
舟形土壙10	№44舟形土壙	
溝１	№119溝	溝１、溝44
溝２	№43溝	溝５
溝３	№19溝	
溝４	№10溝	溝25
溝５	№11溝	溝26
溝６	№12溝	
溝７	№13溝	溝24
溝８	№14溝	溝23
溝９	№15溝	溝22
溝10	№42溝	溝20
溝11	№35溝	溝95
溝12	№131溝	溝38
溝13	№130溝	溝39
溝14	№125溝	
溝15	№105溝	溝60、溝47
溝16	№104溝	
溝17	№113溝	
溝18	№110溝	溝51、溝62
溝19	№111溝	溝52、溝76
溝20	№103溝	
溝21	№122溝	溝67
溝22	№123溝	溝67
溝23	№101溝	
溝24	№102溝	溝59、溝69
溝25	№４溝	溝93
溝26	№25溝	
溝27	№24溝	溝99

遺物観察表

1．服部遺跡土器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	焼成	特徴
					口径	最大径	底径	器高				
11	1	河道1	縄文土器	深鉢	—	—	—	(6.4)	10ＹＲ5/2灰黄褐色	粗砂	良好	煤、刻目突帯、ヘラ描文
11	2	河道1	縄文土器	深鉢	31.0	—	—	(10.1)	10ＹＲ6/2灰黄褐色	礫	良好	貝殻条痕
11	3	河道1	縄文土器	深鉢	37.9	27.0	9.3	32.7	2.5Ｙ6/2灰黄色	細砂	良好	刻目突帯、ヘラ描文
16	4	P3区粘土採掘坑	弥生土器	甕	12.0	18.0	—	(13.9)	10ＹＲ7/3鈍黄橙色	砂礫	良好	ハケメ
17	5	P4区粘土採掘坑	弥生土器	長頸壺	—	21.8	—	(17.8)	10ＹＲ8/2.5浅黄橙色	砂礫	良好	ヘラミガキ、列点文
17	6	P4区粘土採掘坑	弥生土器	甕	13.3	—	—	(4.5)	N3.5/1暗灰色	砂礫	良好	磨滅
17	7	P4区粘土採掘坑	弥生土器	甕	14.0	18.4	—	(8.6)	10ＹＲ7/3鈍黄橙色	砂礫	良好	ヘラミガキ
17	8	P4区粘土採掘坑	弥生土器	甕	14.6	21.5	—	(23.8)	7.5ＹＲ8/2灰白色	砂礫	良好	ヘラミガキ
18	9	P5区粘土採掘坑	弥生土器	壺	23.0	—	—	(4.8)	2.5Ｙ8/2灰白色	粗砂	良好	ハケメ、摩滅
18	10	P5区粘土採掘坑	弥生土器	壺	15.0	23.4	—	(14.1)	5Ｙ6/6橙色	砂礫	良好	ハケメ
18	11	P5区粘土採掘坑	弥生土器	甕	16.8	—	—	(3.5)	2.5Ｙ7/3浅黄色	粗砂	良好	摩滅
18	12	P5区粘土採掘坑	弥生土器	甕	13.9	—	—	(5.8)	10ＹＲ7/3鈍黄橙色	細砂	良好	ハケメ
18	13	P5区粘土採掘坑	弥生土器	甕	15.2	21.5	—	(19.7)	7.5ＹＲ6/4鈍橙色	砂礫	良好	煤、黒斑、磨滅
18	14	P5区粘土採掘坑	弥生土器	(底部)	—	—	10.0	(3.0)	2.5Ｙ6/1浅黄色	粗砂	良好	黒斑、壺？
18	15	P5区粘土採掘坑	弥生土器	高杯	20.0	—	—	(4.3)	7.5ＹＲ6/6橙色	粗砂	良好	磨滅
18	16	P5区粘土採掘坑	弥生土器	高杯	16.3	—	—	(5.0)	5ＹＲ6/4鈍黄色	細砂	良好	ヘラミガキ
19	17	P6区粘土採掘坑	弥生土器	甕	—	—	—	(8.0)	10ＹＲ3/1黒褐色	粗砂	良好	ハケメ、口縁部沈線
19	18	P6区粘土採掘坑	弥生土器	甕	—	—	6.6	(3.1)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	粗砂	良好	17と同一個体？
20	19	P7区粘土採掘坑	弥生土器	甕	16.2	—	—	(3.9)	10ＹＲ8/2灰白色	精良	良好	摩滅
20	20	P7区粘土採掘坑	弥生土器	甕	16.4	—	—	(3.2)	10ＹＲ8/3浅黄橙色	精良	良好	磨滅
20	21	P7区粘土採掘坑	弥生土器	甕	18.3	—	—	(5.7)	10ＹＲ7/4鈍黄橙色	砂礫	良好	磨滅
20	22	P7区粘土採掘坑	弥生土器	(底部)	—	—	5.4	3.7	7.5ＹＲ6/4鈍橙色	粗砂	良好	甕？
21	23	P8区粘土採掘坑	弥生土器	壺	21.0	32.0	—	(27.7)	7.5ＹＲ8/3浅黄橙色	砂礫	良好	磨滅
21	24	P8区粘土採掘坑	弥生土器	甕	15.0	—	—	(6.5)	5Ｙ4/2灰オリーブ色	粗砂	良好	内面工具ナデ、磨滅
21	25	P8区粘土採掘坑	弥生土器	甕	19.6	—	—	(7.0)	2.5Ｙ7/　灰白色	粗砂	良好	ハケメ
21	26	P8区粘土採掘坑	弥生土器	甕	17.0	—	—	(6.8)	2.5Y7/3浅黄色	細砂	良好	凹線２条、磨滅
21	27	P8区粘土採掘坑	弥生土器	甕	17.6	—	6.7	—	2.5Y6/3鈍黄色	粗砂	良好	黒斑、磨滅
22	28	P9区粘土採掘坑	弥生土器	壺	16.0	—	—	(8.3)	2.5Y8/1灰白色	細砂	良好	凹線３条、ハケメ
22	29	P9区粘土採掘坑	弥生土器	壺	15.5	—	—	(8.0)	2.5Ｙ8/2灰白色	砂礫	良好	ヘラミガキ、磨滅
22	30	P9区粘土採掘坑	弥生土器	(底部)	—	24.0	7.0	(24.3)	2.5Ｙ8/1灰白色	細砂	良好	黒斑、磨滅、壺？
22	31	P9区粘土採掘坑	弥生土器	甕	15.0	—	—	(6.5)	2.5Ｙ7/1灰白色	砂礫	良好	ハケメ
22	32	P9区粘土採掘坑	弥生土器	甕	19.7	—	23.1	22.3	2.5Ｙ8/2灰白色	砂礫	良好	工具ナデ
22	33	P9区粘土採掘坑	弥生土器	高杯	23.7	—	—	(6.1)	2.5Y8/2灰白色	細砂	良好	
22	34	P9区粘土採掘坑	弥生土器	高杯	24.1	—	—	(5.8)	2.5Ｙ7/2灰黄色	細砂	良好	ヘラミガキ、摩滅
22	35	P9区粘土採掘坑	弥生土器	高杯	22.9	—	—	(6.6)	１０ＹＲ7/2鈍黄橙色	細砂	良好	ヘラミガキ、摩滅
22	36	P9区粘土採掘坑	弥生土器	鉢	35.0	33.4	—	(9.3)	7.5ＹＲ6/4鈍橙色	砂礫	良好	磨滅
23	37	P10区粘土採掘坑	弥生土器	甕	20.2	—	—		10ＹＲ8/3浅黄橙色	細砂	良好	凹線４条、磨滅
24	38	P11区粘土採掘坑	弥生土器	甕	15.6	23.0	—	(10.2)	7.5YR7/4鈍橙色	粗砂	良好	磨滅
24	39	P11区粘土採掘坑	弥生土器	甕	—	—	—	(4.8)	2.5Y8/1灰白色	粗砂	良好	磨滅
24	40	P11区粘土採掘坑	弥生土器	(底部)	—	—	7.5	(4.7)	10YR8/1灰白色	粗砂	良好	工具ナデ。甕？
24	41	P11区粘土採掘坑	弥生土器	高杯	23.3	—	—	(5.8)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	粗砂	不良	磨滅
24	42	P11区粘土採掘坑	弥生土器	高杯	—	—	—	(2.8)	7.5YR6/6橙色	粗砂	良好	磨滅
25	43	P12区粘土採掘坑	弥生土器	壺	—	—	—	(7.7)	2.5Ｙ6/2灰黄色	細砂	良好	磨滅
25	44	P12区粘土採掘坑	弥生土器	壺	—	26.0	—	(12.4)	7.5YR5/6明褐色	砂礫	良好	スリップ痕跡
25	45	P12区粘土採掘坑	弥生土器	甕	14.2	20.0	—	(22.5)	2.5Y7/　灰黄色	砂礫	良好	煤、タタキメ
25	46	P12区粘土採掘坑	弥生土器	甕	—	26.1	5.0	(15.3)	2.5Ｙ3/1黒褐色	砂礫	良好	煤
25	47	P12区粘土採掘坑	弥生土器	鉢	—	15.0	5.0	(6.5)	2.5Y7/4浅黄色	砂礫	良好	ハケメ
26	48	P13区粘土採掘坑	弥生土器	壺	15.8	—	—	(3.0)	2.5ＹＲ8/2灰白色	細砂	良好	凹線３条
26	49	P13区粘土採掘坑	弥生土器	甕	14.3	—	—	(8.0)	10YR8/1灰白色	砂礫	良好	磨滅
26	50	P13区粘土採掘坑	弥生土器	高杯	18.0	—	—	(3.0)	2.5ＹＲ5/6明赤褐色	細砂	良好	磨滅
27	51	P14区粘土採掘坑	弥生土器	(底部)	—	—	7.0	(4.0)	7.5YR6/2灰褐色	砂礫	良好	黒斑、甕？
28	52	P15区粘土採掘坑	弥生土器	甕	14.0	—	—	(3.5)	10YR8/2灰白色	細砂	良好	櫛描沈線、煤
28	53	P15区粘土採掘坑	弥生土器	甕	16.6	—	—	(7.8)	10ＹＲ8/2灰白色	砂礫	良好	磨滅
28	54	P15区粘土採掘坑	弥生土器	甕	16.5	17.7	5.4	15.0	10YR8/2灰白色	砂礫	良好	煤、黒斑、完形
30	55	溝2	弥生土器	長頸壺	—	—	—	(19.7)	10ＹＲ8/3浅黄橙色	砂礫	良好	頸部沈線、列点文
33	56	溝4	弥生土器	壺	14.2	43.2	—	(29.9)	5ＹＲ6/4鈍黄色	細砂	良好	煤、櫛描沈線、浮文
33	57	溝4	弥生土器	壺	32.0	—	—	(1.8)	2.5Y7/2灰黄色	細砂	良好	口縁上面貼付突帯
33	58	溝4	弥生土器	壺	29.0	—	—	(1.7)	2.5Y7/3浅黄色	細砂	良好	口縁上面貼付突帯
33	59	溝4	弥生土器	壺	16.0	—	—	(1.6)	2.5Y7/1灰白色	細砂	良好	凹２条、磨滅
33	60	溝4	弥生土器	直口壺	7.8	—	—	(7.9)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	細砂	良好	櫛描文、透かし穴２、黒斑
33	61	溝4	弥生土器	壺	—	—	—	(4.6)	2.5Y7/3浅黄色	細砂	良好	黒斑、貼付突帯
33	62	溝4	弥生土器	壺	—	—	—	(6.5)	2.5Ｙ6/2灰黄色	細砂	良好	櫛描波状文、煤
33	63	溝4	弥生土器	甕	—	—	—	(6.5)	7.5YR6/3鈍褐色	砂礫	良好	櫛描沈線、煤
33	64	溝4	弥生土器	甕	15.5	—	—	(4.6)	2.5Y6/2灰黄色	粗砂	良好	
33	65	溝4	弥生土器	(底部)	—	—	9.0	(5.9)	2.5Y5/2暗灰黄色	細砂	良好	煤、壺？
33	66	溝4	弥生土器	(底部)	—	—	8.0	(6.2)	2.5Y7/3浅黄色	粗砂	良好	磨滅。壺？
33	67	溝4	弥生土器	(底部)	—	—	10.9	(13.1)	7.5Y6/2灰褐色	細砂	良好	煤。壺？
33	68	溝4	弥生土器	(底部)	—	—	5.5	(8.5)	2.5Y7/2灰黄色	細砂	良好	煤。壺？
33	69	溝4	弥生土器	(底部)	—	—	5.5	(2.9)	2.5Y6/2灰黄色	細砂	良好	黒斑。甕？
35	70	溝7	弥生土器	壺	16.2	—	—	(5.6)	2.5ＹＲ5/6明赤褐色	砂礫	良好	刻目突帯、磨滅
35	71	溝7	弥生土器	甕	—	—	—	(5.2)	2.5Ｙ7/2灰黄色	粗砂	良好	櫛描沈線、煤
37	72	くぼみ	弥生土器	鉢	17.8	23.5	5.1	15.2	10ＹＲ8/3浅黄橙色	砂礫	良好	磨滅。完形

遺物観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	焼成	特徴
					口径	最大径	底径	器高				
38	73	遺構に伴わない	弥生土器	壺	19.1	—	—	(6.4)	2.5Y8/2灰白色	粗砂	良好	口縁部凹線３条、磨滅
38	74	遺構に伴わない	弥生土器	甕	—	—	—	(3.9)	2.5Y6/2灰黄色	細砂	良好	磨滅
38	75	遺構に伴わない	弥生土器	甕	—	21.2	4.2	(20.3)	10YR5/3鈍黄褐色	砂礫	良好	タタキメ、ハケメ、煤
38	76	遺構に伴わない	弥生土器	高杯	—	—	10.0	(3.4)	10YR7/3鈍黄橙色	細砂	良好	
38	77	遺構に伴わない	弥生土器	高杯	—	—	13.1	(7.3)	10YR8/2灰白色	砂礫	良好	透かし穴
38	78	遺構に伴わない	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	(5.2)	7.5YR6/8橙色	礫	良好	磨滅
38	79	遺構に伴わない	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	(4.1)	7.5YR6/8橙色	礫	良好	磨滅
46	80	溝39	土師質土器	高台付椀	14.9	—	—	(4.1)	2.5Y8/2灰白色	細砂	良好	早島式土器
46	81	溝39	土師質土器	高台付椀	—	—	5.0	(1.7)	2.5Y8/1灰白色	細砂	良好	早島式土器

２．服部遺跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	器種	石材	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	備考
13	S1	河道3	スクレイパー	サヌカイト	81.5	34.0	8.5	23.9	
38	S2	遺構に伴わない	石鏃	サヌカイト	23.5	17.5	3.3	1.04	
38	S3	遺構に伴わない	石鏃	サヌカイト	21.0	12.5	3.3	0.64	

３．服部遺跡金属器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	器種	材質	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	備考
25	M１	P12区粘土採掘坑	斧	鉄	35.0	46.0	14.0	49.9	

４．北溝手遺跡土器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	焼成	特徴
					口径	最大径	底径	器高				
52	1	水田１	縄文土器	深鉢	—	—	5.0	(4.6)	10YR7/2鈍黄橙色	粗砂	良好	貝殻条痕
54	2	遺構に伴わない	縄文土器	深鉢	—	—	—	(3.9)	2.5Y7/3浅黄色	粗砂	良好	刻目突帯
54	3	遺構に伴わない	縄文土器	深鉢	—	—	—	(3.6)	10YR7/2鈍黄橙色	砂礫	良好	刻目突帯
54	4	遺構に伴わない	弥生土器	甕	—	—	—	(5.0)	10YR5/4鈍黄褐色	粗砂	良好	貼付突帯
54	5	遺構に伴わない	弥生土器	甕	22.0	30.0	9.0	(12.5)	10YR7/3鈍黄橙色	砂礫	良好	黒斑
54	6	遺構に伴わない	弥生土器	甕	14.6		—	(5.6)	10YR7/3鈍浅黄橙色	砂礫	良好	凹線２条
54	7	遺構に伴わない	弥生土器	壺	—	—	—	(3.3)	2.5Y4/2暗灰黄色	粗砂	良好	斜格子文
54	8	遺構に伴わない	弥生土器	(底部)	—	—	7.0	(2.4)	5YR6/4鈍橙色	砂礫	良好	
54	9	遺構に伴わない	弥生土器	高杯	14.5	—	—	(5.6)	10YR8/4浅黄橙色	砂礫	良好	凹線４条
54	10	遺構に伴わない	弥生土器	高杯	—	—	12.6	(3.2)	10YR8/3浅黄橙色	粗砂	良好	矢羽根透かし孔
58	11	溝11	土師質土器	高台付椀	14.8	—	—	(4.5)	2.5Y8/2灰白色	粗砂	良好	早島式土器。ヘラミガキ
58	12	溝11	土師質土器	高台付椀	13.5	—	—	(3.6)	2.5Y8/2灰白色	砂礫	良好	早島式土器
58	13	溝11	土師質土器	高台付椀	—	—	—	(2.6)	10YR8/2灰白色	細砂	良好	早島式土器
58	14	溝11	土師質土器	高台付椀	—	—	6.2	(3.9)	2.5Y8/2灰白色	砂礫	良好	早島式土器。ヘラミガキ
58	15	溝11	土師質土器	高台付椀	—	—	5.1	(1.7)	10YR8/2灰白色	細砂	良好	早島式土器
58	16	溝11	土師質土器	高台付椀	—	—	5.2	(1.8)	2.5Y6/2灰黄色	砂礫	良好	早島式土器
58	17	溝11	土師質土器	小皿	7.8	—	5.8	1.5	10YR8/1灰白色	細砂	良好	
58	18	溝11	土師質土器	小皿	8.2	—	6.9	1.1	2.5Y8/2灰白色	細砂	良好	
58	19	溝11	土師質土器	小皿	—	—	6.4	(0.9)	2.5Y8/2灰白色	細砂	良好	
58	20	溝11	土師質土器	小皿	—	—	—	1.1	10YR8/1灰白色	細砂	良好	
60	21	遺構に伴わない	土師質土器	高台付椀	—	—	6.0	(2.4)	10YR8/3浅黄橙色	粗砂	良好	早島式土器
60	22	遺構に伴わない	土師質土器	高台付椀	—	—	6.8	(1.8)	2.5Y8/2灰白色	細砂	良好	早島式土器
60	23	遺構に伴わない	土師質土器	鍋	—	—	—	(5.1)	10YR5/2灰黄褐色	細砂	良好	内耳、煤
60	24	遺構に伴わない	土師質土器	羽釜	—	—	—	(3.9)	2.5Y5/3黄褐色	粗砂	良好	煤
60	25	遺構に伴わない	土師質土器	鍋	—	—	—	(12.5)	2.5Y6/3鈍黄色	細砂	良好	煤
60	26	遺構に伴わない		羽口	—	7.7	—	(5.5)	2.5Y7/2灰黄色	砂礫	良好	

５．北溝手遺跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	器種	石材	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	備考
52	S1	水田1	石鏃	サヌカイト	26.0	17.0	3.0	1.02	
52	S2	水田1	石鏃	サヌカイト	18.5	12.0	3.0	0.52	
52	S3	水田1	石鏃	サヌカイト	22.0	14.0	4.0	9.9	
52	S4	水田1	石鏃	サヌカイト	17.5	12.5	2.5	0.58	
52	S5	水田1	石鏃	サヌカイト	26.0	15.0	4.3	1.44	未製品？
52	S6	水田1	石錐	サヌカイト	18.5	14.0	3.0	0.85	石鏃転用
54	S7	遺構に伴わない	磨製石斧	サヌカイト	29.0	17.5	4.7	1.69	小破片
54	S8	遺構に伴わない	石鏃	サヌカイト	19.5	15.5	2.8	0.85	
54	S9	遺構に伴わない	石錐	サヌカイト	29.0	9.0	3.5	0.81	
54	S10	遺構に伴わない	石錐	サヌカイト	44.5	15.0	8.0	5.08	
54	S11	遺構に伴わない	R・F	サヌカイト	19.5	22.0	2.3	0.97	
54	S12	遺構に伴わない	U・F	サヌカイト	62.5	33.0	6.0	8.81	

-6．北溝手遺跡金属器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	器種	材質	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	備考
54	M１	遺構に伴わない	銅鏃	銅	33.0	10.0	3.5	2.7	

遺物観察表

7．窪木遺跡土器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	焼成	特徴
					口径	最大径	底径	器高				
62	1	河道1	黒色土器	椀	—	—	—	(4.5)	10ＹＲ6/4明黄褐色	粗砂	良好	内黒、ヘラミガキ
62	2	河道1	土師器	皿	—	—	—	(1.8)	10ＹＲ7/3鈍黄橙色	細砂	良好	内外丹塗り
63	3	河道2	弥生土器	甕	15.6	20.0	5.4	(24.9)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	粗砂	良好	煤
63	4	河道2	土師器	小皿	7.8	—	6.0	1.3	10ＹＲ7.5/2灰白色	細砂	良好	

8．高松田中遺跡土器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	焼成	特徴
					口径	最大径	底径	器高				
69	1	舟形土壙2	弥生土器	壷	18.6	—	—	(4.1)	10ＹＲ6/1褐灰色	細砂	良好	摩滅
69	2	舟形土壙2	弥生土器	壷	13.9	—	—	(3.0)	7.5ＹＲ6/3鈍褐色	細砂	良好	刻目、磨滅
69	3	舟形土壙2	弥生土器	壷	—	—	—	(4.8)	7.5YR5/3鈍褐色	粗砂	良好	ハケメ
69	4	舟形土壙2	弥生土器	壷	—	—	—	(7.7)	10YR2/1黒褐色	粗砂	良好	櫛描沈線、刺突文
69	5	舟形土壙2	弥生土器	甕	21.9	—	—	(6.9)	10YR7/2黄橙色	礫	良好	ヘラ描沈線、刻目
69	6	舟形土壙2	弥生土器	甕	20.7	—	—	(6.9)	5ＹＲ6/6橙色	砂礫	良好	櫛描沈線
69	7	舟形土壙2	弥生土器	甕	—	—	—	(11.3)	10ＹＲ8/2灰白色	礫	良好	磨滅
69	8	舟形土壙2	弥生土器	甕	—	—	—	(2.5)	10ＹＲ8/1灰褐色	粗砂	良好	ヘラ描沈線、刻目
69	9	舟形土壙2	弥生土器	甕	—	—	—	(1.4)	10YR7/2鈍黄橙色	粗砂	良好	刻目
69	10	舟形土壙2	弥生土器	甕	—	—	—	(3.7)	10YR7/3鈍黄橙色	礫	良好	櫛描沈線
70	11	舟形土壙3	弥生土器	甕	—	—	—	(2.2)	7.5YR6/2黄褐色	粗砂	良好	ヘラ描沈線、刻目
70	12	舟形土壙4	弥生土器	甕	—	—	—	(5.4)	10ＹＲ5/2灰黄褐色	粗砂	良好	ヘラ描沈線
70	13	舟形土壙4	弥生土器	甕	—	—	—	(6.1)	7.5ＹＲ5/4鈍褐色	礫	良好	沈線１条
70	14	舟形土壙4	弥生土器	甕	—	—	—	(3.3)	2.5Ｙ6/1黄灰色	砂礫	良好	
70	15	舟形土壙4	弥生土器	片口鉢	18.6	—	6.7	19.0	2.5Ｙ7/2灰黄色	細砂	良好	完形、黒斑、ヘラ描沈線、浮文？
70	16	舟形土壙3	弥生土器	でづくね	6.0	—	5.0	(5.2)	10YR7/2黄橙色	礫	良好	
73	17	舟形土壙6	弥生土器	壷	—	—	—	(7.2)	5ＹＲ6/6橙色	砂礫	良好	突帯
73	18	舟形土壙6	弥生土器	壷	—	—	—	(6.8)	2.5Y3/1黒褐色	粗砂	良好	煤、刺突文
73	19	舟形土壙6	弥生土器	壷	—	—	—	(10.1)	2ＹＲ3/1黒褐色	粗砂	良好	櫛描波状文
73	20	舟形土壙6	弥生土器	甕	—	—	—	(16.7)	7.5ＹＲ6/6橙色	砂礫	良好	櫛描沈線、刺突、磨滅
73	21	舟形土壙6	弥生土器	甕	—	—	—	(7.2)	10ＹＲ4/2灰黄褐色	砂礫	良好	櫛描沈線、刻目
73	22	舟形土壙6	弥生土器	甕	—	—	—	(10.7)	10ＹＲ7/3鈍黄橙色	礫	良好	櫛描沈線、刺突文
73	23	舟形土壙6	弥生土器	甕	19.6	—	—	(5.5)	5ＹＲ5/6明赤褐色	砂礫	良好	磨滅
73	24	舟形土壙6	弥生土器	甕？	—	—	7.7	(7.1)	5ＹＲ6/4鈍橙色	粗砂	良好	磨滅
73	25	舟形土壙6	弥生土器	甕？	—	—	6.0	(3.7)	10ＹＲ6/2灰黄褐色	礫	良好	磨滅
73	26	舟形土壙6	弥生土器	（底部）	—	—	—	(8.5)	2.5Y7/3浅黄色	砂礫	良好	黒斑、片口用器か？
75	27	舟形土壙8	弥生土器	甕	—	—	—	(4.8)	10YR4/2灰黄褐色	粗砂	良好	ヘラ描沈線、煤
76	28	舟形土壙9	弥生土器	壷	—	—	—	(1.7)	5ＹＲ5/4鈍赤褐色	粗砂	良好	刻目
76	29	舟形土壙9	弥生土器	壷	—	—	—	(2.0)	7.5YR5/4鈍褐色	粗砂	良好	刻目
76	30	舟形土壙9	弥生土器	壷	—	—	—	(1.2)	7.5ＹＲ6/4鈍橙色	礫	良好	口縁上面貼付突帯
76	31	舟形土壙9	弥生土器	甕	—	—	—	(2.3)	7.5ＹＲ7/4鈍橙色	粗砂	良好	櫛描沈線？
76	32	舟形土壙9	弥生土器	甕	—	—	—	(3.8)	5YR6/6橙色	礫	良好	櫛描沈線
76	33	舟形土壙9	弥生土器	甕	—	—	—	(3.5)	2.5YR6/6橙色	礫	良好	櫛描沈線
76	34	舟形土壙9	弥生土器	甕	—	—	—	(2.7)	7.5Y7/4鈍橙色	粗砂	良好	沈線、刻目
76	35	舟形土壙9	弥生土器	甕	—	—	—	(4.9)	10ＹＲ7/3鈍黄橙色	粗砂	良好	櫛描沈線
76	36	舟形土壙9	弥生土器	甕	—	—	—	(4.9)	7.5ＹＲ5/3鈍褐色	細砂	良好	櫛描沈線
76	37	舟形土壙9	弥生土器	（底部）	—	—	7.3	(8.4)	7.5YR6/3鈍褐色	礫	良好	壷？
76	38	舟形土壙9	弥生土器	高杯	—	—	—	(6.8)	10YR7/3鈍黄橙色	細砂	良好	ヘラミガキ
77	39	舟形土壙10	弥生土器	壷	—	—	—	(1.6)	5ＹＲ6/6橙色	粗砂	良好	刻目、磨滅
77	40	舟形土壙10	弥生土器	甕	—	—	—	(10.6)	7.5ＹＲ5/3鈍褐色	粗砂	良好	櫛描沈線、41と同一
77	41	舟形土壙10	弥生土器	甕	—	—	—	(13.8)	10ＹＲ7/3鈍黄橙色	粗砂	良好	櫛描沈線、刺突文２列
77	42	舟形土壙10	弥生土器	甕	—	—	—	(4.2)	5ＹＲ4/3鈍赤褐色	粗砂	良好	櫛描沈線
77	43	舟形土壙10	弥生土器	（底部）	—	—	7.6	(18.5)	5ＹＲ6/6橙色	粗砂	良好	煤。壷？
79	44	土壙2	弥生土器	甕	—	—	—	(5.0)	10YR3/1黒褐色	粗砂	良好	ヘラ描沈線、煤
85	45	溝2	弥生土器	（底部）	—	—	8.0	(4.4)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	礫	良好	磨滅。壷？
87	46	溝8	土師器	甕	11.2	—	—	(2.2)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	精良	良好	
87	47	溝8	弥生土器	高杯	—	—	6.0	(2.9)	10YR7/2鈍黄橙色	水漉	良好	透かし孔４個
94	48	河道3	弥生土器	壷	—	—	—	(1.6)	7.5YR6/3鈍褐色	粗砂	良好	刻目
94	49	河道3	弥生土器	壷	—	11.8	—	(8.3)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	細砂	良好	貼付突帯
94	50	河道3	弥生土器	壷	—	—	—	(8.3)	5YR6/4鈍橙色	礫	良好	ヘラ描沈線、黒斑
94	51	河道3	弥生土器	壷	—	—	—	(8.5)	10YR5/2灰黄褐色	礫	良好	櫛描沈線３段
94	52	河道3	弥生土器	壷	—	—	—	(14.2)	10ＹＲ6/3鈍黄橙色	礫	良好	櫛描波状文、刺突文、煤
94	53	河道3	弥生土器	鉢？	—	—	—	(8.8)	7.5ＹＲ6/3鈍褐色	粗砂	良好	把手
94	54	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(6.4)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	粗砂	良好	ヘラ描沈線、煤
94	55	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(8.2)	2.5Y6/1黄灰色	粗砂	良好	ヘラ描沈線、刻目、煤
94	56	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(6.1)	10YR7/2鈍黄橙色	粗砂	良好	ヘラ描沈線、刻目
94	57	河道3	弥生土器	甕	19.8	—	—	(2.4)	N2/1黒色	細砂	良好	ヘラ描沈線、刻目
94	58	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(3.2)	10YR7/3鈍黄橙色	粗砂	良好	ヘラ描沈線、刻目
94	59	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(3.1)	7.5ＹＲ5/2灰褐色	粗砂	良好	櫛描沈線、煤
94	60	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(2.0)	5ＹＲ6/4鈍橙色	細砂	良好	櫛描沈線、煤
94	61	河道3	弥生土器	甕	20.0	—	—	(12.0)	7.5ＹＲ4/2灰褐色	礫	良好	櫛描沈線、煤
94	62	河道3	弥生土器	甕	16.6	—	—	7.2	N2/1黒色	細砂	良好	櫛描沈線、刺突文、煤
94	63	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(6.9)	7.5YR6/3鈍褐色	礫	良好	櫛描沈線

遺物観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	焼成	特徴
					口径	最大径	底径	器高				
94	64	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(4.9)	N2/1黒色	細砂	良好	煤
94	65	河道3	弥生土器	甕	18.4	—	—	(10.2)	7.5ＹＲ6/3鈍褐色	粗砂	良好	櫛描沈線、煤
94	66	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(3.0)	10ＹＲ7.5/2鈍黄橙色	粗砂	良好	櫛描沈線
94	67	河道3	弥生土器	甕	—	—	—	(4.5)	7.5ＹＲ7/3鈍橙色	粗砂	良好	櫛描沈線、煤
94	68	河道3	弥生土器	(底部)	—	—	9.0	(5.4)	7.5YR6/2灰褐色	砂礫	良好	煤（外）
94	69	河道3	弥生土器	(底部)	—	—	7.0	(9.1)	10YR6/2灰黄褐色	砂礫	良好	煤、黒斑
94	70	河道3	弥生土器	(底部)	—	—	8.5	(5.6)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	礫	良好	煤
94	71	河道3	弥生土器	(底部)	—	—	8.4	(7.5)	10ＹＲ7/3鈍黄橙色	礫	良好	黒斑、炭化物付着
94	72	河道3	弥生土器	(底部)	—	—	6.2	(4.8)	7.5ＹＲ6/3鈍褐色	砂礫	良好	煤、黒斑
94	73	河道3	弥生土器	(底部)	—	—	7.2	(2.2)	10ＹＲ7/2.5鈍黄橙色	礫	良好	磨滅
95	74	遺構に伴わない	縄文土器	浅鉢	—	—	—	(4.0)	2.5Y3/1黒褐色	細砂	良好	ヘラミガキ
95	75	遺構に伴わない	縄文土器	深鉢	—	—	—	(3.7)	10YR7/2鈍黄橙色	粗砂	良好	刻目突帯
95	76	遺構に伴わない	縄文土器	深鉢	—	—	—	(3.5)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	細砂	良好	刻目突帯
95	77	遺構に伴わない	縄文土器	深鉢	—	—	—	(3.0)	10ＹＲ5/2灰黄褐色	細砂	良好	転用ペンダント？
95	78	遺構に伴わない	縄文土器	(底部)	—	—	10.4	(3.6)	10ＹＲ7/2鈍黄橙色	粗砂	良好	
95	79	遺構に伴わない	弥生土器	壺	—	—	—	(4.8)	2.5Y7/1灰白色	細砂	良好	
95	80	遺構に伴わない	弥生土器	甕	—	—	—	(11.2)	7.5ＹＲ6/4鈍橙色	砂粒	良好	櫛描沈線、摩滅
95	81	遺構に伴わない	弥生土器	高杯	—	—	—	(2.9)	2.5Ｙ8/1灰白色	細砂	良好	磨滅
95	82	遺構に伴わない	弥生土器	(底部)	—	—	9.8	(6.7)	5ＹＲ6/8橙色	粗砂	良好	磨滅
105	83	遺構に伴わない	土師質土器	高台付椀	—	—	—	(4.5)	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	早島式土器
105	84	遺構に伴わない	土師質土器	高台付椀	—	—	5.0	(2.0)	10ＹＲ8/2灰白色	精良	良好	早島式土器
105	85	遺構に伴わない	土師質土器	高台付椀	—	—	—	(2.1)	10ＹＲ8/1.5灰白色	精良	良好	早島式土器、磨滅
105	86	遺構に伴わない	土師質土器	小皿	8.6	—	6.2	(1.2)	2.5YR6/8橙色	精良	良好	
105	87	遺構に伴わない	瓦	平瓦	—	—	—	—	10YR7/4鈍黄橙色	粗砂	良好	縄タタキメ

９．高松田中遺跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	器種	石材	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（ｇ）	備考
69	S1	舟形土壙2	石鏃	サヌカイト	25.5	21.0	4.8	1.82	未製品
69	S2	舟形土壙2	石錐	サヌカイト	38.0	36.0	6.0	6.60	
69	S3	舟形土壙2	石錐	サヌカイト	26.5	14.0	5.5	1.93	
69	S4	舟形土壙2	楔	サヌカイト	18.0	11.5	4.3	1.22	
69	S5	舟形土壙2	Ｒ．Ｆ	サヌカイト	14.0	17.3	4.0	0.93	
70	S6	舟形土壙4	石錐	サヌカイト	19.0	15.0	4.0	1.36	欠損
70	S7	舟形土壙4	Ｒ．Ｆ	サヌカイト	15.5	15.0	4.5	1.12	
73	S8	舟形土壙6	楔	サヌカイト	18.5	22.0	4.0	2.55	
73	S9	舟形土壙6	楔	サヌカイト	18.5	22.0	8.0	3.70	
75	S10	舟形土壙8	石匙	サヌカイト	52.0	36.5	9.0	10.20	
76	S11	舟形土壙9	石錐	サヌカイト	35.7	19.0	4.5	2.78	
76	S12	舟形土壙9	石錐	サヌカイト	23.0	15.0	3.5	0.92	
76	S13	舟形土壙9	石錐	サヌカイト	29.5	11.5	5.6	1.94	
76	S14	舟形土壙9	石錐	サヌカイト	18.3	10.8	4.5	1.07	
76	S15	舟形土壙9	Ｒ．Ｆ	サヌカイト	24.5	24.5	6.0	3.26	
76	S16	舟形土壙9	Ｒ．Ｆ	サヌカイト	24.0	19.0	9.0	3.03	
76	S17	舟形土壙9	楔	サヌカイト	14.0	21.0	5.5	1.96	
76	S18	舟形土壙9	磨製石包丁	粘板岩	54.0	25.0	7.8	16.98	
79	S19	土壙2	Ｒ．Ｆ	サヌカイト	49.0	40.5	4.8	8.57	
95	S20	遺構に伴わない	石鏃	サヌカイト	18.5	13.7	3.0	0.59	
95	S21	遺構に伴わない	石鏃	サヌカイト	13.5	10.5	2.5	0.39	
95	S22	遺構に伴わない	石鏃	サヌカイト	18.0	16.5	4.0	1.19	
95	S23	遺構に伴わない	石鏃？	サヌカイト	31.5	22.5	4.5	2.35	未製品
95	S24	遺構に伴わない	Ｒ．Ｆ	サヌカイト	33.0	27.5	5.7	3.89	
95	S25	遺構に伴わない	石錐	サヌカイト	16.5	7.0	3.7	0.52	
95	S26	遺構に伴わない	Ｒ．Ｆ	サヌカイト	19.0	19.0	4.0	1.80	
95	S27	遺構に伴わない	楔？	サヌカイト	18.0	20.0	5.0	2.00	Ｒ．Ｆ？
95	S28	遺構に伴わない	Ｒ．Ｆ？	サヌカイト	61.0	33.5	9.0	13.70	スクレイパー？

10．高松田中遺跡土製品観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	器種	材質	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（ｇ）	備考
75	Ｃ１	舟形土壙８	円盤	土師質	80.0	74.0	11.5		

11．高松田中遺跡木器観察表

挿図番号	掲載番号	掲載遺構名	器種	材質	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（ｇ）	備考
94	Ｗ１	河道３	鍬	木	18.2	5.9	4.1	—	両手鍬か？

１．調査前の状況
（東から）

２．河道１　－P**17**区－
（南から）

３．河道２　－P**24**区－
（南から）

１．溝１・粘土採掘坑
－Ｐ１区－
（南から）

２．粘土採掘坑
－Ｐ５区－
（南西から）

３．粘土採掘坑内
土器出土状況
－Ｐ**15**区－
（北から）

１．溝４　－Ｐ**21**区－
（南東から）

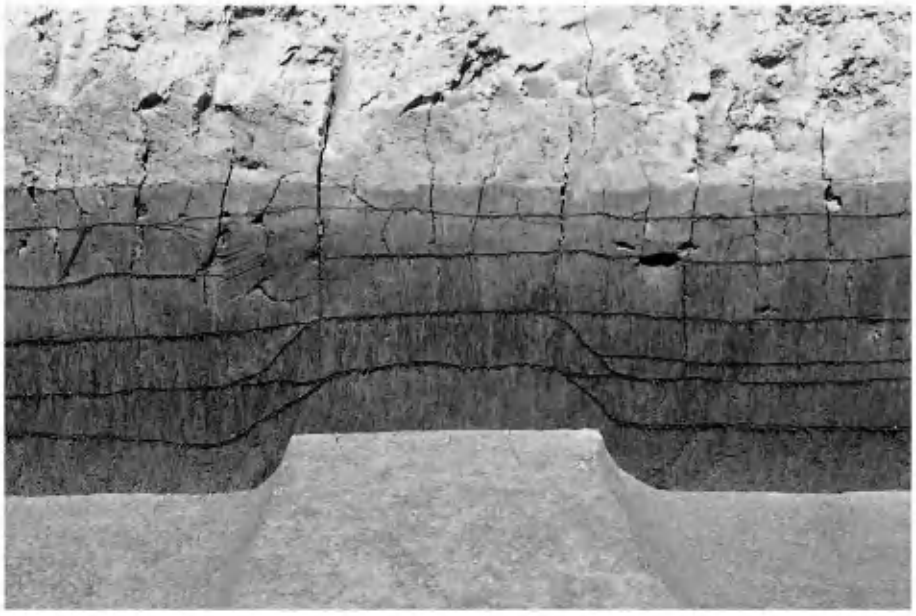
２．溝４土層断面
－Ｐ**21**区－
（南東から）

３．土壙１・２
－Ｐ９区－
（南東から）

写真図版４

北　溝　手　遺　跡

1．水田１　－Ｐ**10**区－
（東から）



2．水田１畦畔断面
－Ｐ**12**区－
（南東から）

3．水田２　－Ｐ６区－
（南から）

1．溝５・６
－Ｐ２区－
（南西から）

2．溝**11** －Ｐ**10**区－
（南西から）

3．土壙１ －Ｐ**10**区－
（北東から）

写真図版６

窪　木　遺　跡

1．河道１　－Ｐ１区－
（北西から）

2．河道２　－Ｐ２区－
（南西から）

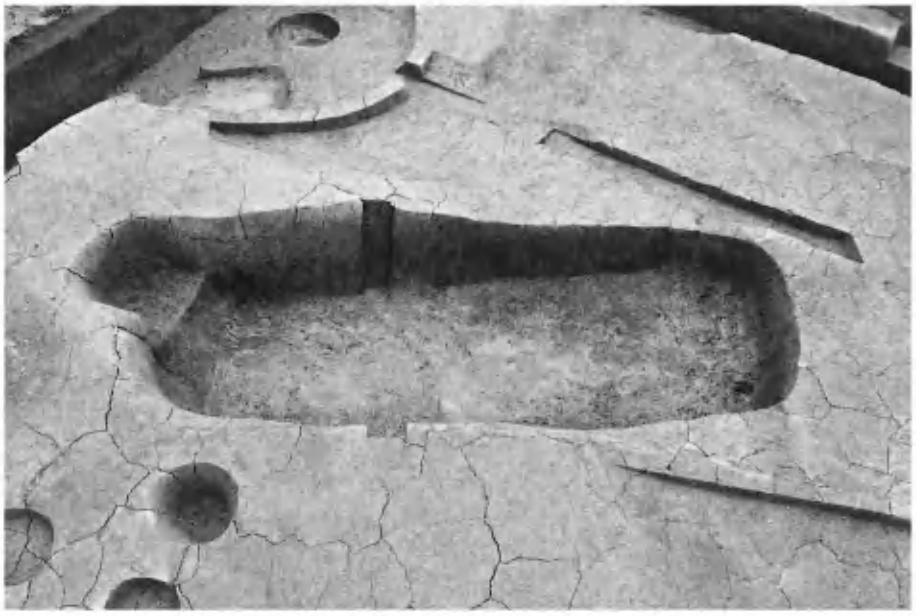
3．河道２
土器出土状況
－Ｐ２区－
（西から）

1．調査前の状況
（南東から）

2．舟形土壙群
－Ｐ**14**区－
（南西から）

3．舟形土壙群
－Ｐ**15**区－
（南東から）

１．舟形土壙３・４
－Ｐ**14**区－
（南東から）



２．舟形土壙６
－Ｐ**15**区－
（南から）

３．舟形土壙６
土層断面
－Ｐ**15**区－
（南西から）

1．水田１ －P**19**区－
（南東から）

2．水田１ －P**19**区－
（東から）

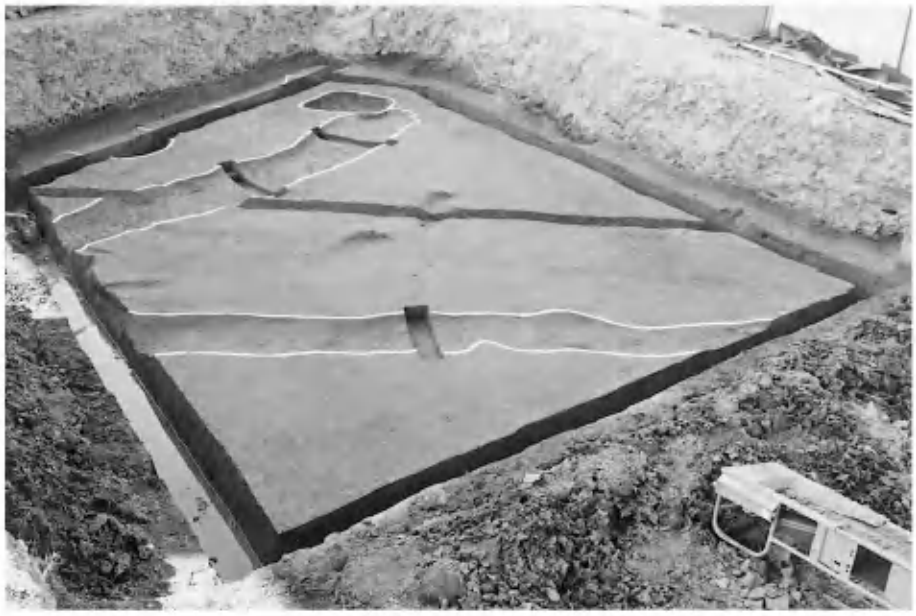
3．水田２ －P**17**区－
（南から）

1．河道２　－Ｐ６区－
（南から）

2．河道２土層断面
－Ｐ６区－
（南から）

3．河道３　－Ｐ**12**区－
（南西から）

1．土壙5 －P9区－
（南から）



2．土壙5～8
溝21・22
－P9区－
（南東から）

3．溝25土層断面
－P11区－
（北東から）

3

3

10

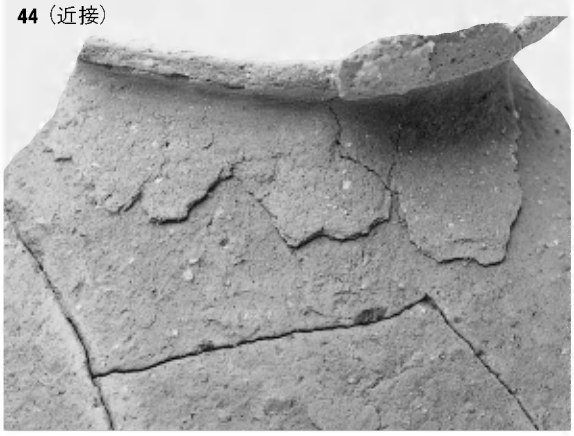
32

33

28

35

44（近接）



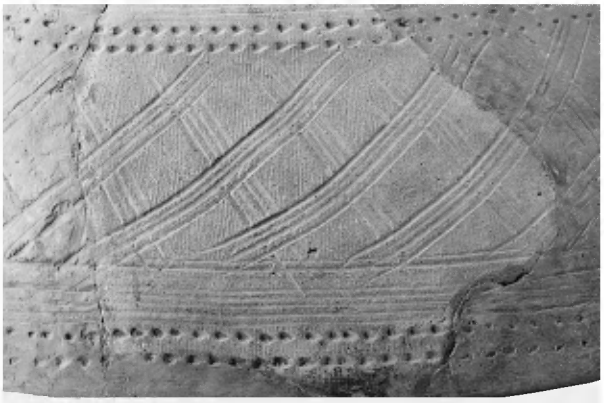
41

1．服部遺跡出土遺物 1

54

72

56


56（近接）

57

60

62

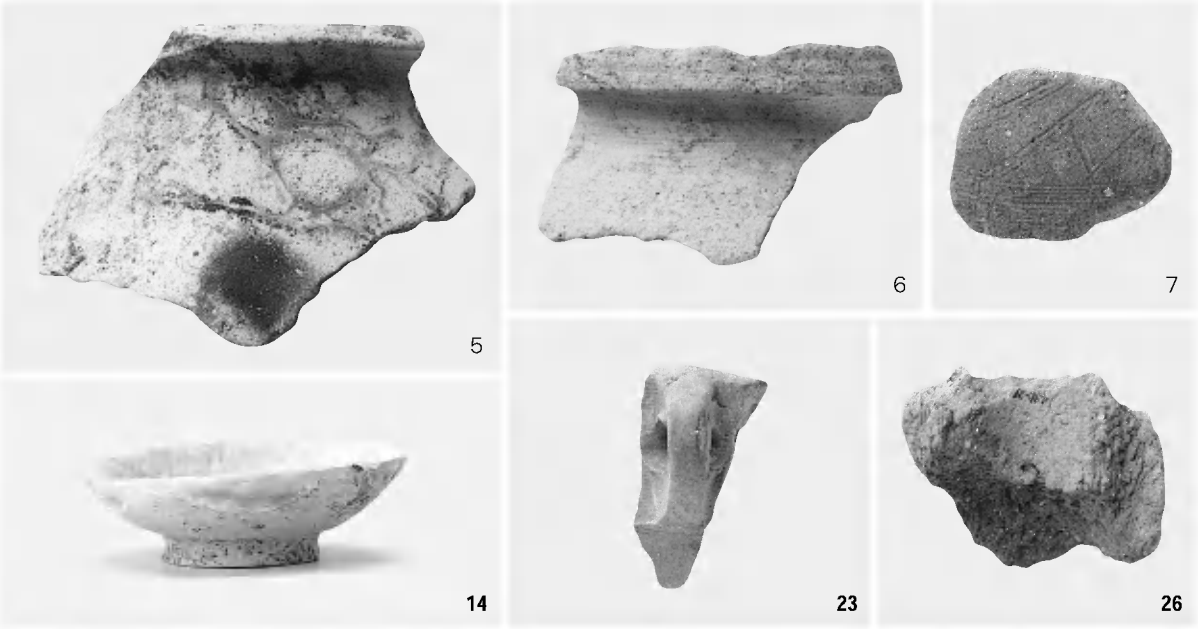
63

70

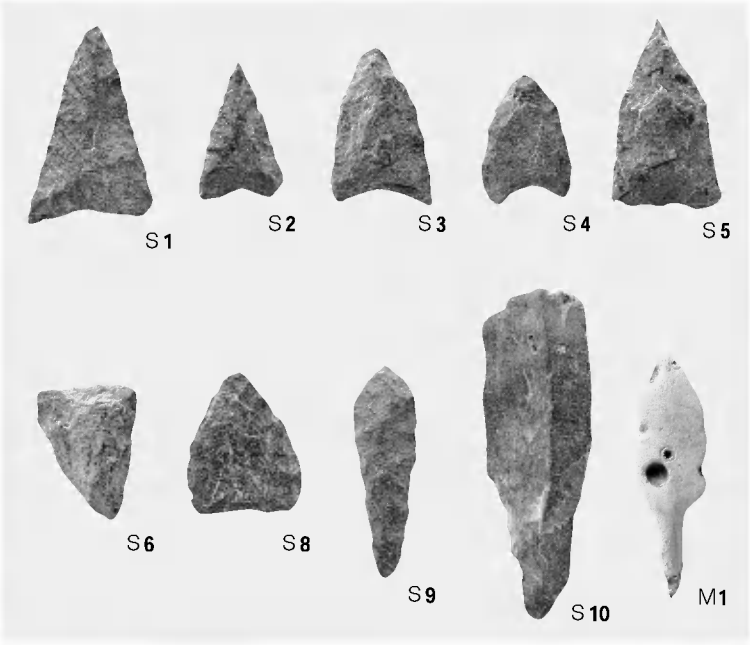
78

M1　S1　S2　S3

1．服部遺跡出土遺物２



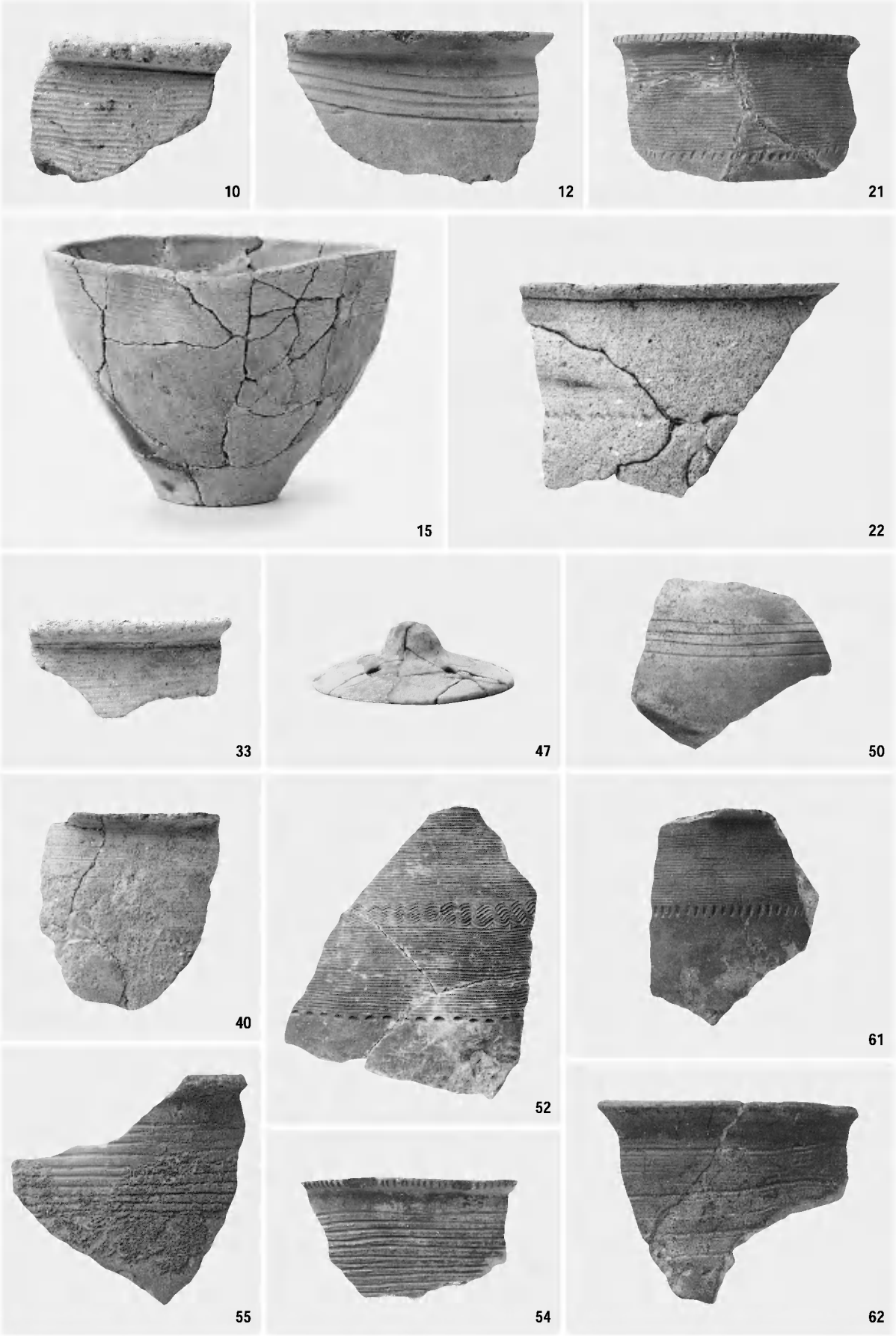
1．北溝手遺跡出土土器



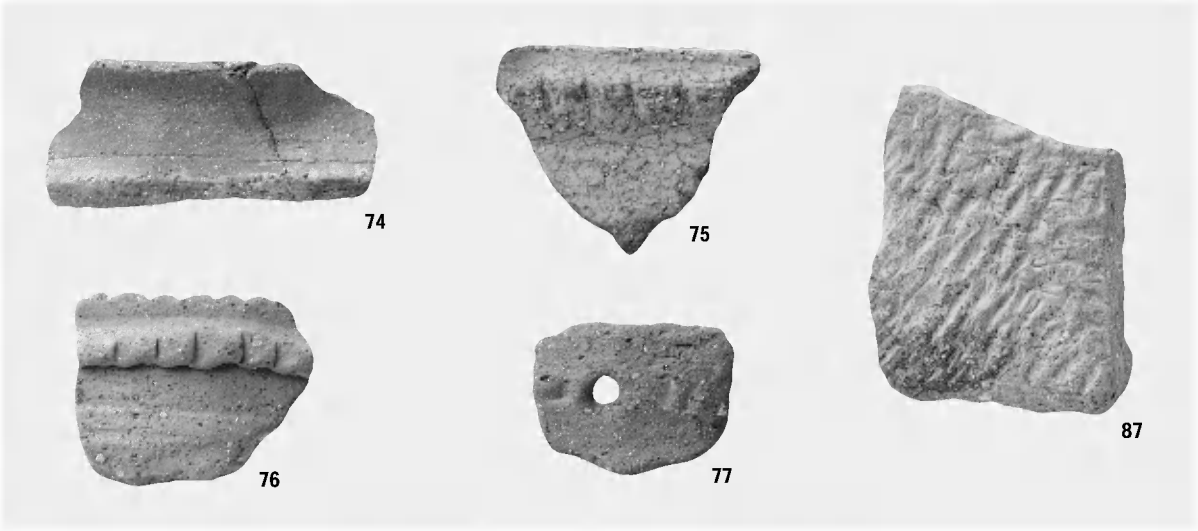
2．北溝手遺跡出土石器

3．窪木遺跡出土土器

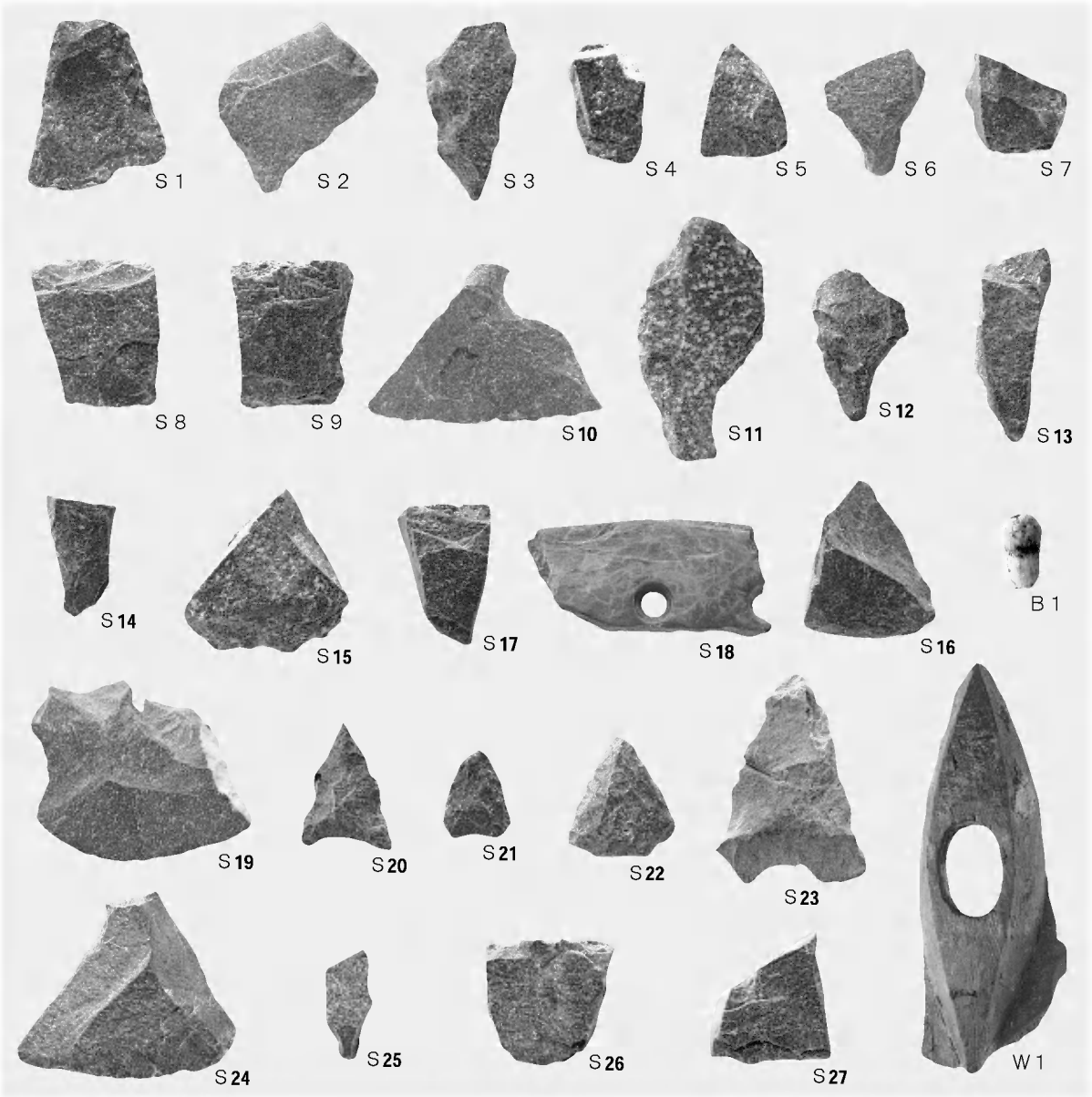
4．高松田中遺跡出土土器１



1．高松田中遺跡出土土器２



1．高松田中遺跡出土土器３



2．高松田中遺跡出土石器・木製品・骨製品

報告書抄録

ふりがな	はっとりいせき　きたみぞていせき　くぼきいせき　たかまつたなかいせき
書名	服部遺跡　北溝手遺跡　窪木遺跡　高松田中遺跡
副書名	岡山自動車道４車線化に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	162
編著書者名	大橋雅也・尾上元規・富岡直人
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325－3　TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒701-8570 岡山県岡山市内山下2－4－6　TEL 086-224-1111
発行年月日	2002年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
服部遺跡 (はっとりいせき)	岡山県総社市 黒尾 (おかやまけんそうじゃし くろお)	33208		34°41’20”	133°46’27”	H11.10.1～ H12.2.25	2,610	岡山自動車道４車線化工事
北溝手遺跡 (きたみぞていせき)	岡山県総社市 北溝手 (おかやまけんそうじゃし きたみぞて)	33208		34°41’27”	133°46’52”	H12.2.17～ H12.5.23	826	
窪木遺跡 (くぼきいせき)	岡山県総社市 窪木 (おかやまけんそうじゃし くぼき)	33208		34°41’35”	133°47’07”	H12.5.22～ H12.6.6	340	
高松田中遺跡 (たかまつたなかいせき)	岡山県岡山市 高松田中 (おかやまけんおかやまし たかまつたなか)	33201		34°41’37”	133°47’45”	H12.6.5～ H12.9.30	1,124	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
服部遺跡	河道	縄文晩期	河道	土器・石器	広範囲な粘土採掘坑群
	集落・生産跡	弥生時代 中期～後期	粘土採掘坑、溝	土器・石器	
	生産跡	中世	水田、溝	土器	
北溝手遺跡	集落・生産跡	弥生時代	水田、溝	土器・石器・銅鏃	弥生時代前期の稲作跡
	生産跡	古代～中世	水田、溝	土器	
窪木遺跡	河道	弥生時代～ 古墳時代	河道	土器	
高松田中遺跡	集落・生産跡	弥生時代 前期～中期	舟形土壙、水田、 河道	土器・石器・木器(鍬)	弥生時代前期の小区画稲作跡 舟形土壙群
	生産跡	弥生時代後期 ～ 古墳時代前期	水田、溝	土器	
	集落・生産跡	古代～中世	柱穴、土壙、水田、溝	土器	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 162

服部遺跡
北溝手遺跡
窪木遺跡
高松田中遺跡

岡山自動車道４車線化に伴う発掘調査

平成14年２月28日　印刷
平成14年２月28日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発　行　岡山県教育委員会
日本道路公団中国支社津山工事事務所

印　刷　株式会社 三門印刷所
岡山市高屋116-7